

新書太閤記

第八分冊

吉川英治

青空文庫

天機刻々てんきこつこく

依然。——秀吉はさつきの所に坐つたままであつた。

燭しよくの下に、灰となつた薄いものが散つていた。長谷川宗仁からの飛脚状を焼いたものと思われる。

飛脚の者を始末しおえた彦右衛門と久太郎秀政が、座にもどつて来ると、間もなく、

「お見えなされました」

と、石田佐吉が、歸りを告げ、その佐吉が小姓部屋へ退さがると、入れ代りに、黒田官兵衛孝高がびツこを曳きながら入つて来た。

「やあ」

と、眼で迎える秀吉も、不自由な脚を折つて、どかと坐る人も、いつもながらの風であつた。

殊に官兵衛は、伊丹城中いたみじょうちゆうの遭難そうなん以来、不治の隻脚せつきやくとなつて

なつているので、君前でも、そのための横坐りはゆるされていた。なおついでにいえば、あのとときの獄中生活でできた皮膚病も痼疾こしつとなつたかたちで、今なお頭の毛の根はそれが治りきつていない。

——だから余り燈火あかりに近くすわると、そのうすい髪かみの根までが透すいて見えて、この体軀矮短わいたんにして胆斗たんとのごとき奇男児の風貌、いやが上にも魁偉かゐいに見せ過ぎる嫌いがある。

「この夜更よふけに、何事なにことでございますか。……お召めいしとは」

いつまで、ものいわぬ秀吉へ、官兵衛からそういった。秀吉は傍らを向いて、

「彦右衛門から話せ」

と云い放したまま、腕うでぐ拱みして、首を埋めてしまった。こういう間にも、むだなく思考をめぐらしているように見えるし、また、ともすれば嘆息となる意志の崩れを如何いかんともし難いような姿とも眺められる。

「官兵衛どの。驚かれるなよ」

こう厳粛な悲痛味を予告しながら、彦右衛門は手短に事実を告げた。長谷川宗仁からの飛脚もそのまま語った。豪気をもって鳴る官兵衛孝高の顔いろも、それを聞かされた一瞬は凡人以外のも

のではなかつた。

「……………」

何もいわず官兵衛もまた、大きな息と共にその胸へ腕を拱くんでしまつた。

そして時を措おいて、じろと額ひたいごしに同じ姿でいる秀吉を見た。

と、堀秀政はすすと膝をすりよせて、秀吉へ云つた。

「はや過ぎたるを思うてみても致し方ござりますまい。世風せふうは今日から吹き変りました。しかも風は順風と覚えられます。お船出の帆をお揚げなさるべき時節こそ到来。ふたつか一つかの御分別いまこそ肝腎かんじんかなめかとぞんじまする」

それに応じて幽古も云つた。

「秀政どのの御意ぎよい、まことに至言。世間の様態、ものに喩たとえて申すならば、吉野の桜、雪とけて、東風こちの訪れに会いたるごとく、人もみな、やがてお花見を待つ心地やらんと思わるる。早々、お花見のおしたく、遊ばされますように」

「よういわれたぞ、御両所——」

と、官兵衛孝高も膝をたたいた。

「天地あめつちと永劫とこしえ、万象も春秋に、そのすがたをかえてこそ、生

命も久し。——そのあめつちの心をもて大きく申さば、このたびのこととて、めでたしといえぬこともない。吉野のさくら、時来らでは見られぬものよ。雨情はらを孕み、風の陽気に、おのずから咲き出るに、何の御分別いや要り申さん。——秀政、幽古などの申す

とおり、この上は花見始めの御一戦。しかと御決意あそばして然るべきかと存じまする」

左右の者のすすめは秀吉をして、いうまでもないことよ、と会いしん心の笑みを抱かせたにちがいない。

実に秀吉の本意もそこにあるのだ。——が、ただ、秀吉は人々がそれを云い出すのを待っていたに過ぎない。彼としては、信長の死をもつて、

——天地の慶けいしゆく祝しゆくなり。

とはいえなかつた。

その痛つうあい哀あいをして、天下の悲愁たらしめず、天下の慶祝とさせなければならぬ、とする小義や私情を乗り超えた信念が、よし

いかほど自己のうちに固くあつてもである——不用意にあらわしては誤解されやすい。総帥そうすいの死はやはり三軍の喪もであり、しかも彼の臣だった。

臣なるがゆえに、信長の死を犬死にとさせてはならないのである。その生命を不朽に継ぎ生かすこそ遺のこされた家臣の道と彼はかたく思う。けれど臣道なるものを、誰も口には説き、誰も行うに劣らずとしているが、その信行にはおのずから人まちまちな深さの差がある。

彼は彼の信念と深度を以てつらぬくしかない。その肚の底には持つものを確しかと持つての秀吉であつた。

彼は、うなずきうなずき、面おもてをあげて、左右の者へ答えた。

「官兵衛も、秀政も、また幽古までが、よくぞ励ましてくれた。実、秀吉の思うところもそれよ。それ一つでしかない。——ついてはだが」

充分、肚の底ができていた証拠といえよう。そこで一語を切ると、彼のことばはすぐ実際問題へ入つて来た。要するに、対毛利とのこの戦場をいかに処し、いかに打開し転進するかであつた。

「ここで、できるだけ迅速じんそくに、かつ機密に、毛利との和睦わぼくを取りきめねばならぬが。……彦右衛門、御辺はきようも、恵瓊えけいと会つていたろうが、どうだな、先の肚はらは」

「和議のことは、こなたからの申し出いではなく、安国寺恵瓊あんこくじえけいを使いとして、両三日前から、内々毛利方より申し入れて来たこ

とゆえ、彼の示して来た条件ならば、すぐにも取結ばれましょうが……」

「いかん、いかん」

——秀吉は、たとえこの際でもと、つよく首を振って見せながら、

「断じて、あのままではいかん」

と、ことばを重ねた。

「されば。——もとよりこの前から、ここは毛利で何と云って来ても、耳をかたむけぬ、との御意でありましたから、今日も惠瓊あつせが来て、そつと、よそで会談していましたが、頭からそのあつせ幹あつせ旋あつせを突あつせツあつせ刎あつせねて別れたわけでございまする」

「そこだな。……そのまま手切れとなつては困ることになつたのだ」

官兵衛の方へ眼を向けて、

「安国寺恵瓊は初めて、往年の知縁をたよつて、彦右衛門を訪れて参り、二度目には、その方の陣屋へも行ったのではなかつたか」

「左様でした」

「その方のところまでは、どのように云つていたか」

官兵衛は、秀吉の問いに答えて、

「やはり彦右衛門殿を介して、申し入れて来た条件とひとつに過ぎませぬ」

「——と、いふと？」

「つまり……毛利方から提示して来た条件というのは、この際、
 媾和こうわするならば、備中びっちゅう、備後びんご、美作みまさか、因幡いなば、伯耆ほうぎの五カ国
 を割譲かつじようしよう。そのかわりに高松城の囲みを解いて、清水しみずむ
ねはる宗治以下の城兵五千の生命は保証して欲しいと申すのでありま
 した」

「ウム。それだな。五カ国を割いて献じるといえば大譲歩してい
 るようだが、備後一国をのぞくほかは、今なお争奪そうだつの地で、必
 ずしも、毛利方の領下として治められている地ではない」

「仰せのとおりです」

「さるを唯々いとして宗治の一命をも助け、和議に応じるわけには
 ゆかない。これは信長公の御意を俟まつまでもないことだった。勝

敗の決はすでにわが手にあるのだから。——しかし今となると、この機会は、だいぶちがつて参つた。この和を逸いづつしてはならぬことになつた」

「まことに、ここは間髪かんはつ、伸のるか反そるかの大機と存ぜられます」
「敵の毛利が、京都の変を知るがさいご、到底、和議はむずかしい。戦いの主導しゅどうは彼の手にうつり、必然、大勢すべてわれの不利となる。……が、毛利はなお気づいてはおるまい。おそらくはまだ」

と、秀吉は語尾に力をこめて、もういちど、

「おそらくはまだ何事も知つていまい。——天のわれにかし給える数刻の時は——敵がそれを知るまでの違いとまでしかない。大機をつ

かみ、大策を施すも、そのわずかな間にのみ限られておるのだ。

一刻一刻が、いまほど尊いときもない」

「まだ今夜は、三日の真夜半、ようやく子の刻ね（十二時）頃と思われます。あす四日中に和議をおすすめあるとも、両三日中には纏まとめられましよう」

これは蜂須賀彦右衛門のことばだった。

秀吉は、その彦右衛門や秀政おもてへ面を向け直して、

「いや遅い。夜明けを待つまでもなく、すぐその運びにかかれ、幸い彦右衛門はきよう惠瓊えけいに会っておる。そのはなしの縊よりを戻して、もういちど、惠瓊がこちらの陣地へ出向いて来るように取計らえ」

「では、すぐ惠瓊のところへ、使者など立てましようか」

「待て待て。過日来から彼のあつせん斡旋をいっしゅう一蹴して来たものが、

にわかには夜中、此方からただ使いを立てては、敵も、はて？ と不審をさし挟はさもう。——使いを遣やるには、遣る口上も熟慮せねばなるまい」

それからしばしは、ここの声も洩れないほど密ひそかだった。

間もなく蜂須賀彦右衛門がいそぎ足に出て行った。

小姓部屋のうちでは、幽古から眠気ざましの菓子を賜わったので、おでこ押しや腕相撲に興じ、更ふけるのもわすれて折々高い笑い声をあげていた。

電捉でんそく

秀吉の命をうけるとすぐ諸所の往来口へ早馬を打って、通行のけんさつ検察にかかっていた浅野弥兵衛の手の者は、同夜間もなく、その迅速な網の目に、一名の怪しげな男を捕えていた。

場所は首部ことうべという山村の、部落からも離れている間道だった。

「どこへ行く」

一小隊で取り囲むと、男は杖を止めて、

「備中の身寄りへまいます」

と、至極神妙である。

「備中のどこへ」

たたみかけると、

「はい、庭瀬にわせで」

と、そら嘯うそぶく。

「庭瀬へ行く者が何でこのような山道を好んで歩くか。しかもこの真夜半まよなか」

「ほんに、仰つしやるとおりで、黄昏たそがれに旅籠はたごを求めそこね、一

里先へ行つたらあるか、二里歩いたら泊まれるかと、ついつい盲めくら人の勘くらと強情ごうじょうから、こう参つたのがまちがいの因もとでした。：

：どう参つたら旅籠のある人里へ出られましようか、どうぞお教え下さいまし」

と、竹の杖に両手をのせて、さもさも慩あわれを乞うようにうなず

いた。

じつと、様子を見ていた部将は、いきなり指さして、

「こいつ、にせめくら偽盲だ」

と、一喝いっかつをあびせ、部下へむかつて、縛りあげると命じたのである。

すると、盲の男は、眼があいたような驚き方をして、ぱつとうしろへ跳びのきながら、

「と、と、とんでもない」

むしよう無性に地を叩いては言い訳した。

自分は都の者で、けんぎよう検校のいんか允可も持っている。年久しくびわ琵琶

など教えて生活していたが、庭瀬にある老年の叔母が危篤という

ので、身の不自由も顧みず、取るものも取りあえず、こうして西へ下つて来たもの。……あわれ、この目のきかない者を、そのようにおからかい下さいますな。と、手を合わせて拝まんばかり顫ふるえていう。

「うそをつけッ」

部将は一步つめて、

「目だけは、ふさいでいるが、貴様のからだのどこにも隙すきがない。かような物は要らないはずだ」

いきなり男のついている竹の杖をひッ奪たくつた。そして短刀の抜く手も見せず、杖を二つにぱんと割つた。

すると竹の中から一通の書簡が落ちた。盲人の眼はいつの間に

か鏡の如くまわりの兵を睨んでいた。いまはこれまでと決意した
 ものか、突然、一方の囲みを蹴つて逃げ出そうと試みた。

約二十名ほどの人数であつたので、辛くもこの曲者くせものは取り逃
 がさずに組みしくことができた。

がんじ縛めがらとなつて、馬の上へ荷物のように括くくし上げられた後
 も、曲者は、

「残念だツ。今に見ている」

と、歯ぎしり鳴らして、何を期してか、やがてこの報復を思い
 知らせるぞ、というような意味を喚わめきつづけた。

「やかましいツ」

部将はその口へ土を喰わせた。そして馬腹へ一鞭いちべんを加え、部

下二、三騎と共に西へいそいだ。

——これも同夜。

場所は、首部の間道で、偽盲の捕まつたときよりも、時刻

はだいぶ後であつたが。

岡山の東方一里ばかり乙多見村附近で、一修験者が、檢察隊

に誰何された。

さきの偽盲があわれなふりを装つたのと反対に、この山伏は傲

岸な態度に出て、

「それがしは聖護院印可の優婆塞で、京都因幡堂に住す金

井坊というものである」

と、云い、訊問にたいしても、尊大にかまえ、

「真夜半まよなかあるくは、山伏のならいだ。修行となれば、道なき道も行き、眠らずにも歩く。——なに、行く先はどこだと。つまらぬことを問い給うな。行雲流水の身、あてなど持って歩いたことはない」

と、飽くまでひとを煙に巻いて逸いちはや早く去ろうとする気振りだったが、隙を見て、檢察の一兵が、槍の柄えでいきなり向う脛すねを払うと、口ほどもなく、

「痛いッ」

悲鳴をあげてぶツ倒れた。

半裸にして調べてみると、果たせるかな、本来の山伏ではない。石山本願寺系の僧らしく、本能寺の変と共に、毛利方へ密報すべ

く昼夜をかけて急いで来た者とわかつた。

で——これも直ちに、秀吉の本陣へ、荷駄同様に急送された。

同夜の獲物は、この二人限りだったが、うち一名でも、警戒網を洩れて、その目的が成功していたら、信長の死は、即日毛利方へ知れていたわけである。僥倖ぎようこうといえは僥倖だが、秀吉の応急策も、確かによろしきを得ていたものといえる。驚くよりも哭なくよりも前に、真ツ先に浅野弥兵衛を派して、この往来檢察をさせたことが奏功そうこうしたのである。

この山伏は、光秀の発した密使ではないが、さきの偽にせめくら盲は、いうまでもなく明智の土雜賀弥八郎さいがや ちゅうろうであった。光秀から毛利輝元へあてた一書を受け、二日の早朝、京都から立って来た者だ。

光秀の使者は、同日の早朝、二人立っている。もう一名の原平内は、大坂から海路備中へ入る経路を取っていた。

ところが、その原平内も武運つたなく、海上で風浪に遭い、そのため日数も費つて、彼が毛利家へ着いたときは、中国の大機すでに決した後だったのである。

——こう観て来ると、

本能寺以後、光秀の画策は事ごとかくさくにうまく運んでいなかったことがわかる。またそれは人智人力を越えた微妙のものであることもうなずく領ける。そしてかかる蹉跌や後の敗因は一体何から来ているかといえ、それは一に天意なりというしかない。人は人をあいてとして戦い、飽くまで人と人との戦場を描いているが、偉大な

る宇宙の指揮も加わっているのである。陣上に天意をいただかず、人力を尽して神意に通ぜざる三軍であつては、いかに誇るも「人間の陣」にすぎない。「神人の陣」には打ち克てない。

あんこくじえけい
安国寺恵瓊

和議の内交渉について、その日の昼、何度目かの会見を試みたが、やはり何の緒も見られずに、空しく別れたばかりの蜂須賀彦右衛門から、急にかさねて、

(——さつそくに会いたい。できるだけ早いがい)

という簡単な書面である。

時は、真夜中であつたが、安国寺惠瓊^{えけい}は、

(これは、まとまるな)

という直感を信じて、すぐ身支度にかかつた。そして使いに來た彦右衛門の子家政といつしよに、約一里ばかりの石井山へ急いで來た。

もちろん彦右衛門は寢もやらず自己の陣所で返辭を待つていた。

惠瓊は彼の顔を見ると、

「明朝とも存じたが、何かは知らず、早いほどよいとの仰せに、すぐ罷^{まか}り越^こした」

と、いった。

彦右衛門は、さり気なく、

「それは恐縮でござった。明朝でもよろしかつたのに、文意の不備、お寝やすみもさせぬことに相成つたか。しかし早いに越したことはないのだから」

と直ちに、相あいともな伴なつて、石井山の中腹まで上つてゆき、途中からすこし曲つて、俗かえるに蛙はなヶ鼻なとよぶ所の一軒家まで導いた。

人のいない農家であつた。彦右衛門は子の家政にいいつけて、あかり燈火ともを点させた。毛利側を代表する惠瓊と、羽柴方の彼との会見は、いつもこの人目のない所で行われていた。

「貴僧とそれがしとは、思えば不思議な宿しゆくえん縁えんだな」

対坐すると、彦右衛門は何思ひ出したか、沁しみ々じみいった。

「まことに……」

と、恵瓊もふかくうなずいた。

ふたりの胸には、二十余年前の蜂須賀村の小六のやしきが思い出されていた。わけて彦右衛門正勝には、その頃、僧侶としてはまだ多分に若気わかげであつた一旅僧の恵瓊の姿が追憶された。そして感無量おもてな面おもてでながめ入るのであつた。

織田信長の清洲きよすという小城のうちにも、木下藤吉郎という出しゅつ色しよくな人物がひとりいる——ということを恵瓊が親しく知つたのも、旅の修行中、その蜂須賀村に一宿した機縁によるものであつたのだ。

以来、年は経ても恵瓊えけいは、織田麾下きかに藤吉郎という一青年将校のあることを久しく忘れることができなかつた。天正元年といえ

ば、まだ今日の秀吉が、その頭角とうかくすら認められず、柴田、丹羽、滝川などの諸将から見ればずっと末輩まっばいに置かれていた頃なのに、当時、恵瓊が都から中国へ報じた吉川元春宛あての書状のうちには、偶然か、炯眼けいがんかこういうことすら認めしたたてあつた。

——信長の代、五年三年は持たせらるべく候。来年あたりは公家くげなどにも成らるべく見および候。左候ふて後、高ころびに、あふのけに転ばれ候ずると見申し候。藤吉、さりとはの者にて候。

恵瓊の予言は驚くべきものであつたのだ。十年後の今日、まさにそのとおりになつて来たのである。

——けれど、その夜の彼はまだ十年前に自分が云つたことが、

かくまでの中していようとは夢にも知らない。ただ心ひそかに秀吉の人物に、敵ながらふかく傾倒しているにとどまっていた。

二十年も前に、秀吉の大器たいきをすでに観みぬき、十年も前に、信長の運命を云いあてていた恵瓊もまた決して決して世のつねほんその凡僧うとはいえない。

まだ彼が幼少の頃、安芸あきの安国寺を訪れた毛利元就もとなりが、ひと目見て、

(あの小坊主を予にくれぬか)

と、求めたというはなしは、彼のひとつの名誉となつてよく語られている。元就の在世中には、戦陣にも伴ともなわれて、小僧小僧と、つねに愛めでられていたものだという。

中年に郷を出て、諸州を遊歴し、帰国したのちは、安国寺の西いどう堂とあがめられ、小早川隆景や吉川元春の歸依きえもあつく、戦いのある日は、軍事顧問、いわゆる陣僧として従いもしていた。

(ここは御和睦ごわぼくあるが善策です)

と、小早川、吉川の両将へたいして切にすすめていたのも彼である。秀吉をよく識しる彼には、秀吉を敵として中国の存立は考えられなかった。

またふたつには往年の知己蜂須賀彦右衛門というよい手づるもある。で、内々毛利側の媾和こうわ条件を提示してみたが、何度折せつしよ衝こうを重ねても、こちらから折れて出た五カ国讓渡じょうとと、清水宗治を助命してほしいという交換的条件とは、秀吉の容いれるところ

とはならない——といふのできようも立別れたわけだったのである。

「いや、急におてがみを上げた次第は、きよう貴僧とお目にかかつての次第を、黒田官兵衛どのにはなしたところ、何、わが殿は、至つてお氣持の寛闊かんかつなお方なのだから、もう一步毛利方において譲歩を示すならば、きつと和談のととのわぬはずはない。今夕もふとそんなおはなしにふれた時、無造作にほかの条件はともかく、宗治の助命はいかん、守将まで助けて城の囲みを解いたとあつては、よくよくわが織田軍の戦力も精いっぱいとなつてやむなく微々たる条件で和に応じたという印象を世上に与える。殊には、信長公にたいしてお執とりなしも相成らん。宗治だけは宗治だけは

と重ねて仰せられたということでおぎった。……で、そこまでの和意をおいだしあるものゆえ、えけい恵瓊どののもう一と骨折りによつては調ととのわぬ筈はない。きつとこれは調う和談じやと官兵衛どのは、かたい信念をもつてそれがしを励ますのでござった。……どうあろうか、貴僧のお考えにある真底のものは」

彦右衛門のことばは昼間と変りのないものだったが、その人は恵瓊が昼見たようなものではない。

何事かこの間に大きな方針の推移があつたものと、けいが恵瓊の炯眼けんはそれを見のがしていなかつたが、彼もあくまで平調な口吻くちぶりで、

「さ。その真底はもう申しあげ尽しておる。毛利領十カ国のうち

五カ国を献しても、清水宗治の助命を得ずば、天下にむかつて、武門が立たぬとしておる毛利家の心中もお察しねがいたい」

「あれから後、今夕にでも、小早川殿か吉川殿きつかわに、御内意なりと質ただされてみられたかの」

「伺つてみるまでもないことゆえ、伺つてみませぬ。たとえ中国全土を失うとも、毛利家にとつて忠義無比の宗治はころすには忍びぬと固く臍ほぞをきめておられます。輝元様以下、小早川殿にせよ、吉川殿にせよ、毛利家の鉄則は百万一心、こうと定められたことに異存をいなくお方はひとりもない」

夜は白み、鶏の声が遠くする。いつか四日の朝となつていた。

恵瓊も応じない。彦右衛門も譲らない。

時はいたずらに経つのみで、和談はすこしも進んでいかなかったのみならず行詰まると、

「では、ぜひもない儀」

と、まま物別れになりそうな危^{きぎよく}局にさえ度々落ちかけた。

恵瓊も毛利側の君命をふくんでいる者だし、彦右衛門ももとより秀吉の肚^{はら}を肚としての交渉であつた。しかもこんどは、めつたにこの交渉を物別れにさせてはならないのである。その容子^{ようす}を、恵瓊は僧侶特有な眼でじいつと見つめては、根氣のよい口調でぼそぼそと果てしなく同じことを繰り返していた。

「それがしの器量ではもう貴僧との折合いは見出し得ぬ。ここはひとつ黒田どのに代つてもらおう。貴僧もよく御承知のある黒田

官兵衛どのともう一応、じっくりと、はなし合うてみるおつもりはないか」

「だれとでも熟談いたそう。野衾やのうのねがう和議に、すこしでも目鼻のつくものならば」

「家政——」

と、夜半から次にひかえたままにいる子息を呼んで、

「もうお目ざめの頃、黒田どのを迎えに行ってくれいと、いいつけた。

家政はまもなく官兵衛を伴ともなつて来た。官兵衛は四名の家臣が支ささえ上げている手輿てごしの上に乗ってやって来た。降りるやいな、大きく体の一方を動かす歩みを曳いて、無造作にそれへ来るなり二名

の側へ坐つた。

そしてすぐ惠瓊にむかい、

「実はもういちど西堂さいどう（惠瓊のこと）を煩わずらわして、和睦するか手切れか、さいごの談判をなさいと彦右衛門どのへすすめたのは、かくいう官兵衛なんじゃ。どうなすつた、やはりだめか。半夜中かかつても、折合のめどはおつきにならなかつたのか」

煮え詰まつたような二人のあいだに、官兵衛の磊落らいらくな語調はよほど気分を前へもどすのに効果があつた。惠瓊も朝の光に面おもてを少しあらためて、

「せつかくでしたが、どうも依然たるものでした」と、笑つた。

彦右衛門はそれを機しおに、

「今朝、信長公の御着陣について、堀どのと、なにかと打合わせをひかえておるので、失礼なれどちよつと中座をおゆるし下さい」と、席はずを外してしまった。

官兵衛は呟つぶやくように、

「右大臣家のお着きも両三日と相成つておるので、和議のことも、きよう一日を除いてはもう二度と会見もなり難い。……ところで、どうです。よい程に取極めませんか」

彼の外交は単刀直入だった。またひどく高飛車たかびしやだった。到底、勝目のない戦局に立ちながら条件についてとやかくいうならば、もう一戦のほかはないというような極言まで敢えてした。そして

また、

「ここで一つ東軍にお骨折りを示しておけば、貴僧としても将来の大を約しておかれるものではないか」

などという彼一箇の利にわたることをも露骨にほのめかした。相手がちがつてからの惠瓊は前ほどの雄弁を失っていた。しかしその顔つきは彦右衛門と粘り合^{ねば}つているときよりは大へん氣がるそうに見えた。

笑^{しょう}歌^か

「城主^{むねはる}宗治^{むねはる}の切腹さえ確約あるならば、五カ国移^{いじ}讓^{じょう}の条件の

ほうは、いささかなりとも、殿へおねがい申して、こちら也讓歩をお示しいたそう。ともあれ今朝もう一度、吉川、小早川の両将へ、貴僧より切にお扱いを励まれてみぬか。和戦、その上でいずれとも一決いたそう」

官兵衛にこう説かれると、恵瓊えけいは何となく腰をすえていられなくなつた。吉川元春の陣地岩崎山までは僅か一里。小早川隆景の陣地日差山ひさしやままで行つても二里弱にすぎない。彼は急に意をうごかされたらしく、

「お馬を拝借したい」

と、云いい出いで、この陣僧はやがて、馬をとばして駈けて行つた。

「さて。何と返事があるか」

見送つてから官兵衛は、持宝院じほういんへ上がったて行つた。そして秀吉の昨夜の室をうかがうと、秀吉は衾ふすまも被かがず手枕で眠つていた。油の尽きた燭しよくはすでに消えている。官兵衛は側へ寄つてゆり起した。

「殿。夜が明けておりまする」

秀吉はいびき躰をやめた。

「……明けたか」

と、むくむく起きて、すぐえけい恵瓊との会見のもようを聞き取り、ちよつと難しい顔つきをしたが、すぐ起ち上がつて、

「飯のしたく」

と、いいつけ、一目散に廊下へ出て行つた。

かわや
 廁であつた。小姓たちは湯殿口のわきに、洗顔の水をたたえて待っていた。

「飯をくうとすぐ陣廻りに出るぞ。平常のとおり馬を曳き出し、供の者を揃えておけ」

顔を拭きながらの命令である。朝飯は忽ちにすました。桜若葉の山門から彼はもう金瓢きんびょうの馬じるしと朱の大傘をかざさせて、ゆらゆら麓へ馬を打たせている。

彼の日課である陣廻りには、もとより規定の時刻はない。しかし常になく早朝だったことは珍しい。彼は日頃よりも機嫌もうるわしく、折々、剽ひょうげ気たわむた戯れなど云いながら悠々各陣地を視みてあ
 るいた。

やがて帰り途にかかると、

「筆を持って」

と、ゆうひつ祐筆をそばへ呼び、

「——狂歌を一首思いうかべた。したた認めて毛利の陣所へ持たせてつかわせ」

と、いった。

そして馬上から自作のきょうえい狂詠を供の人々に聞えるような声で誦ずした。祐筆はそれを懐紙に書いた。

りやうせん両川が一つになつて流るれば

毛利高松藻屑もくづにぞなる

「どうじゃ」

と、秀吉は左右を顧かえりみた。人々は笑い興じた。ひどくお下へ手たな歌ではあるが、味方の氣概きがいを示すには足りるし、あわせて一笑を放つには充分だ。

使いはすぐ敵方の陣へ出かけた。誰かよくこの機微きびを感知し得よう。

この余裕を誇示している人の胸に「信長の死」が秘せられていようとは。

為に、今朝なお味方の内にすら京都の変の洩れている気はいはなかつた。秀吉はそれを見届けて緩々かんかんと石井山の本陣へもどつた。すると山門の前に、官兵衛孝高よしたかが待ちうけていて、何か、眼でものを云いながら寺内へ従ついて行つた。秀吉は彼の顔色で、

惠瓊の返事が不調に終つたことをすぐ覺つていた。秀吉のもどる少し前に、惠瓊も毛利の陣から帰っていたが、結果は予想どおりだった。最後の努力も何の効なく、毛利輝元を始め吉川、小早川の両川は依然、

(宗治を殺しては、毛利家の武門が立たぬ。宗治の助命を容れぬこうわ媾和には断じて応じない)

という絶望的な返辞にきまつたという——惠瓊の答えなのである。

「ともあれ、惠瓊をここへ召し連れて来い。わしが会おう」

秀吉はまだ絶望を絶望としていない。熱意を昂たかめている程だった。

待つ間、傍らのいこまうたのすけ生駒雅樂助や蜂須賀彦右衛門に、何事か耳打ちしていた。

「安国寺どのが見えられました」

程なく官兵衛から披露すると、秀吉は朝陽あさひのこぼれている書院へ彼を引いて打ち寛くつろいだ。むかし話やら、都の噂などの末に、

「さて、御僧には、清僧せいそうか、妻帯さいたいか」と不意にたずねた。

恵瓊はうろたえ気味に、

「清僧にござりまする」

と、答えた。妻は持っていないということである。

「やれ、やれ。それは」

秀吉はもつたいないような顔をして、しかし、祝酒ならよかる
 うと、小姓に銚子ちようしを命じ、三宝に盛つて出された昆布こんぶ、勝栗かちぐり、
 美濃みのの干柿ほしがきなどのうちから、柿一つ取つて自分も喰べ、惠瓊に
 も、

「取れ、取れ」

と、すすめ、

「さて」

——と、本題にはいつて、こう説いた。

「宗治の命一つが、双方の面目問題にかかつて、和議もさッぱり
 埒らちあかぬようだが、顧みるに、天正六年播州ばんしゅうの序戦で、わが
 軍は作戦上ぜひなく、尼子勝久あまこかつひさ、山中鹿之介やまなかしかのすけたちの上こうづき月じよ

城^うを打ち捨てた。その折にも面目を失したし、次いで去年、伯^ほ耆^{うき}の馬^{うま}之^の山^{やま}においても、吉川元春と対陣の末、われはわれから陣を払って引き退^のいた。——かく両度まで、われは天下に面目を欠き、毛利は武門を立てて来たことゆえ、このたびは高松の守将清水宗治に死を与えるとも、決して両川^{りようせん}（吉川・小早川）の恥にはなるまいと思う。筑前はそう思うのだが御僧の分別はどうか」

「ごもつともにはござりまするが」

「——と真底、御僧もうなずくならば、なぜ御僧個人として宗治に会い、宗治に事態を告げ、自決をすすめるのか。——忠義な彼へ対して、主家より切腹は命じ難いである。しかし御僧からその主家の苦^{くちゆう}衷^うをよく伝えたら、宗治とても、己れの一死が、城中

五千のいのちに代り、かつ毛利家の滅亡を救うものとなして、よろこんで自決するに違いないと思われるが」

それだけいうと、秀吉は軍務にかこつけて席を去った。生駒雅楽助や官兵衛はなおあとに残って、恵瓊をかこみ、さらにひとつの秘密を打ち明けた。

それは毛利方の上うえはらもとすけ原元祐から秀吉へ宛てた幾通かの書簡である。元もとなり就むこの智むこたるこの人さえ内通しているという事実を見せるために恵瓊へ特に示したのだった。恵瓊はついに決意した。自己をふるい起して高松城へ出向いた。もちろんそれは濁水さぶに棹さおさして蛙かえるヶ鼻はなから舟で渡るのであった。

水の城、孤立の城、高松のうちには将士や農民をあわせて五千のいのちが扱よつていた。

「この水をのみ、壁を喰つても」

と、彼らは降伏を知らず、戦いにかたまつていた。

寄手よせての浅野、小西などの軍は、遠く海から山越えで運送して来た大船三隻を泛うかべ、それに砲を載せて城じょう楼ろうへ弾丸をうちこんだりした。

櫓やぐらは半崩れとなり、死傷者もだいぶ出た。それにこの梅雨どきである。病人はふえるし、食糧も濡れびたしとなり、廓内かくないの惨

状は目もあてられない。

西曲輪にしぐるわと東曲輪ひがしぐるわとの往来さえ舟いかだや筏いかだでするほどだった。城

兵は、染戸そめどの染板数百枚をあつめて、輕舸はしけを作った。水上戦のと

き、それに載つて寄手の大船へ攻めかかった勇者もある。そのと

き二、三の輕舸はしけは沈没されたが、泳ぎ帰つて、ふたたびこの中で

指揮している者もあり、何しろ農民までが、今は兵にも劣らない

決死のすがたを持つていた。

「他郷へ逃げれば逃げてもよいお前たちなのに、われらと運命をともにさせたのは不愆ふびんであつた」

と、守将の清水宗治が見廻つていたわると、彼らやその家族たちは声をあげてな哭きながらも、

「殿さまと御一緒なればうれしゆうございまする」

と、みな答えた。

宗治の日頃の民望が今この声となったものである。

吉川、小早川の援軍が、かなた彼方の山々に到着して、その旗はたのぼり幟

をここから望んだときは、全城の士民はみな蘇生そせいの思いを抱いて、

「もう大丈夫」

と、一日中、歡呼したものだ。しかし、それも遂に、自分たちを救うことの出来ないものであつたと、彼我ひがの地勢や作戦上の理解に知って、一時は落胆したものの、決して戦意を捨てはしなかつた。むしろその後のほうが、誰の顔にも「死ぬもの」と思ひ極めた明るささえ見えた。そこから沸たぎり立つ強味には底知れな

い不屈があつた。

だから味方の援軍から、密使をもつて、しよせん所詮、救い難い実情を城中につたえ、

(——この上は、羽柴へ降伏して、城中五千のいのちを保つがよい)

と、元春や隆景の名をもつてそれをゆるしても、宗治以下すべての者は、

(われはまだ、降伏ということ、習つてもおりませぬ。こんな時のために、日頃からわきまえていることは、一死あるのみです)と、がいぜん慨然、恩を謝して、しかもそれには従わなかつた。

こうして二十日余りを頑張り通して来た或る日の朝——六月四

日の朝——はるか敵地の岸边から漕ぎよせて来る一つの小舟が城兵の眼にとまった。

武士に櫓ろをあやつらせ、その舟の中には、僧そうぎよう形の者がひとり乗っていた。これなん安国寺恵瓊えけいであつたことはいうまでもない。

恵瓊は、宗治に会つた。

——切腹をすすめた。

もとよりそれはさいごの言で、それをいうまでには、

「先頃から両軍のあいだに、和睦わぼくの内談がすすめられ、愚衲ぐのうがその折せつしよう衝しょうに当つて、数次、羽柴方と会見しておりましたが」

と、そのいきさつを語り、またこの城の守将の一命を助けん、

助け難し、とする両軍の面目問題が暗礁あんしやうとなつて、ついに行き悩んでしまつた実情をも、事こまかに話した末、

「ここは其許そこもとのお心一つで、毛利家の安泰も確約され、ふたつには、多くの城兵や無辜むこの民も、つつがなく助け出されることになるのでな……」

と、縷々るる、真心と熱弁をかけて、彼にそれを説いたものであつた。

宗治は始終だまつて聞いていたが、恵瓊が、これ以上はいうべき言葉もなしと、総身そうみを汗にぬらして、俯向うつむいてしまつたのを見ると、初めて穏やかに口をひらいた。

「……やれ今日は何たる吉日きちにち。ありがたい仰せうけたまわを承つた。おこ

とばに違いなきことは、御僧の面おもてを拝見してもわかりました」

承知とも、不承知ともいわないのである。——宗治の心はすでにたくひ諾否の先へ超えているのであった。

「さきには、数ならぬ身を、小早川殿、吉川殿にも、いたく御心配くだされて、城を開いて降れよとまで仰せ越しあつたが、たとえ五千のいじらしき子どもを共に死なしても、宗治としては、降伏して命を助かるなどというは思いもよらぬことゆえ、お断り申しあげたが、御僧のおことばに任せれば、主家も安泰を約され、城中の士民も無事を得るとのこと。……さもあれば毛頭もうとう否いなむすじはない。むしろ大きな歡びでござる。宗治として歡びでござる」

語尾を強くかさねて云った。

恵瓊はからだがふるえた。これほど易々と——というよりは歡びをもつて相手に容いれられようとは思ひもしていなかつたからである。感激にふるえたのである。

と同時に、ひそかに恥じた。自分は僧侶であるが何かの場合、よくこの人のように死生に超然としていられるだろうか。死を受くるのに、顔いろもうごかさず、それを歡びとして迎えることができるだろうか——と。

「では、御承知下さいますな」

「御念には及びませぬ」

「御一族たちと御談合なくともよろしゆうおぎるか」

「あとで告げます。みな共に歡んでくれましょう」

「それと。……甚だ申しあげ難いが、事は急を要します。信長の西下も一兩日と沙汰されておりますゆえ」

「おそくも早くも、それがしにとつては同じこと。して、期日は」
「今日。……しかも午の刻うまこくまでにせよとの筑前のことばでおざるが。午の刻までといつても、もう二刻半ほどのいとましかありませんが」

「それだけあれば」

と宗治はうつすら笑つて、

「死ぬには悠ゆつたりと支度もできましょう。御僧には疾とく立ち歸られて、宗治異存なき旨を、両軍へおつたえありたい。わけて長々び微び身しんをお目にかけられ下された主君輝元様。また小早川殿にも。吉

川殿へも。……よしなに」

恵瓊えけいの小舟は矢のように帰って行つた。彼はすぐに秀吉に会つて、宗治のいちだく一諾を報告し、また馬をとばして西軍の岩崎山へ急いだ。

吉川元春も小早川隆景も、いまや重大な関心を彼の復命一つに寄せていたことはいうまでもない。

「破談か」

てツきりそれであろうと予想していたもののように、彼のすがたを見るとすぐ隆景は云つたが、恵瓊は、

「否」

と、答え、

「——ようやく曙光しよこうを見ることができました」

と、次の息でつけ加えた。

元春も隆景も、

「では、秀吉が譲ったか」

と、やや意外な顔したが、恵瓊はそれにも否と面を横おもてに振って、

「この和議のため、身一つ捨てんと、誰よりも御和睦を祈っている者の力でござりまする」

「はて、それは誰をさすのか」

「宗治どのが申されました。かくまで微臣びしんを庇かほうて給わる御主君に報むくわでやあるべき。このうえは、われだに切腹なせば、御和談も成り、かたがた、主家の御名にも傷つくことはあるまいと」

「西堂さいどう。御辺ごへんはその宗治に会ったのか」

「たった今、会うて参りました。今こんじょう生のしょうの拝顔も成り難けれど、

輝元様以下、元春様にも、隆景様にも、くれぐれよしなにとのお

言ことづ伝てにござりました」

「秀吉のすすめによつて会いに行つたのか」

「もとより羽柴方のはからいなくては舟もやれませぬ」

「そして宗治には、御辺から仔細を聞くに及んで、腹を切ると云

い出たのであるか」

「午うまの刻こくを期して、一いっしゅう舟ゆうを泛うかべ、敵味方てきみかたの見る中で腹切らん。

そのときをもつて、和議を結ばん、毛利家を万代の安きにおすえ下されよ。また、城中五千のいじらしき者をお救い給われと、入に

ゆうねん

念のごあいさつでありました」

「ううむ」

と、隆景もうめき、元春もうめいた。そして熱い眼と眼を見あわせていたが、その感動の波をふかい息として吐ききると、

「して、秀吉の意嚮いこうは？」

と、隆景が再度たずねた。

「城将の首を見ねば断じて和せず——とされていた筑前どのも、やのう野柄からそれを聞くといたく感じられた態で、さすがは大国の毛利、よい家臣を養いおられる。さてさて、清水長左衛門宗治は、毛利無二の忠臣かななる哉——と、幾たびも長嘆して左右に語られておりました」

惠瓊はさらに云った。

「なお筑前どののいわるるには、それ程の忠臣を殉じさせ、彼の忠魂に報いぬは、敵たりとも、心なきわざ、かつは中国の名族毛利に、全土の半ばを割かしむるのも気のどくの至り、五カ国の移讓の約束であるが、われは三カ国を取り、残り二カ国は宗治の忠節に免じておもどし申さん。……かく両川にも申し伝え、異存なくば、宗治の切腹を見とどけた後、直ちに誓紙を取りかわすであらうとの明言にござりました」

間もなく、惠瓊をのこして、両川は毛利輝元の前にこれを伝えていた。元より異議を立てる理由はもうどこにもなかつた。

男をつくりて

わたくしもお供に。

それがしも何とぞお供に。

高松城の士たちは、次々に主人宗治むねはるの前へ出て死を願った。

「成らん。相成らん。いけない」

宗治は、それを叱つたり、諭さとしたり、なだめるのに、口を酸すくした。

一時は当惑につつまれた程だった。しかしすべての者に一様にゆるさなかつた。

恵瓊えけいの舟が城を辞して離れるとすぐその後で、彼は自己の決意

を全城の者に告げたのだった。

あわせて、また、

「きよう午うまの刻こくに、この濁水の湖上に舟をすすめ、敵味方見る中において腹切る所存」

と、その舟支度を士たちにいいつけていた。

号泣ごうきゆうの聲が城に満ちた。いたずらに彼の屠腹とくふくをかなしむのではない。人の死は日々眼にも見、耳にも聞き、おのれの死もそれと変らぬものと常に観みている人たちである。

宗治の犠牲によつて、はからずも自分たちのその命が救われたことを狂喜した哀号あいごうでもなかつた。彼らはそれほど利己でもない無情でもない。

全城にみちた一瞬の号泣は、実に、人の真美が人の真美を衝つたのである。宗治の無私大愛のあたたかさに触れて、先頃からみな鬼の如く防戦に凝り固まっていた一心が、突然、雪解の如く溶けて誰も彼もの嗚咽となつたものだった。

ようやく、諸士の願いを退けて、すこし座右に暇を見出したと思つていると、こんどは宗治の兄の月清入道が来て、彼に説いた。

「長左衛門（宗治のこと）。いま仔細は聞いたが、お前が死ぬには及ばぬことだ。この兄が代つてあげる。死装束はわしに譲れ」

「兄上は桑門のおん身、宗治はこの守将でござる。せつかく

ですが、代役はおねがいできません」

「いやいや、元々、わしは兄の身だから、家督かどくを継ぐべきであつたのを、生来、仏道になずみ、武門にはうとい身ゆえ、強たつて、弟のお前に家名を継いでもうたのだ。為に今日、この事に当つて、お前が切腹するような立場になつたのを、この兄のみ、余命を長らえているわけにはゆかない」

「僧門のお方は、世事死生の上に高くあるべきです。俗の古事など、何の今日の事とかかわりありませんようや」

「そうでない。僧たる者は、人の範はんともならなければ、その道も行われぬ。さるを、世人から見て、月清入道こそは、弟にも似ぬ命惜しみの人かなと嘲わらわれては、わしはともかく、桑門の道も教

えも^{すた}靡りになる」

「いかに仰せられても、宗治が切腹は、決してかえるわけに参りません」

「それも、もつともじや。しからば舟までのお供いたそう。それならよろしかろう」

月^{げっしょう}清は去った。

すずやかな姿である。それを見ると長左衛門宗治も気安くなつた。小姓どもにいいつけて、水^{みづがみしも}袴^{はかま}や水いろの袴^{はかま}など、死に就くべき^{はれ}曠^{はれ}のものを揃えさせていた。

「そのまに一と筆」

と思いついて、三原にのこしてある妻と子の源三郎へてがみを

書いた。源三郎には、武士の一生のための処^{しよせい}生の歌三首を書き遺^{のこ}した。

城中には目付^{めつけ}として、また督戦のためもあつて、味方の吉川、小早川の両家から来ている検使の将、数名がいた。

そのうちの一人末近左衛門は、宗治の部屋を窺^{うかが}つて、

「すこしの間、お邪魔してもよろしゅうござるか」

と、常のような容態で話しに入つて来た。

ふと見ると末近もいつの間にか垢^{あか}の見えぬ夏小袖に死装束を重ねているので、

「御辺のお支度は何のためか」

と、宗治はわざと、いぶかつて訊ねた。

末近左衛門は事もなげに、

「御一緒にまいるつもりで」

と、答え、

「——幸いに、天気も快くして、舟の中での切腹は、さだめし爽やかなことでござろう」

などと、もう同行を独りぎめに行っている口吻くちぶりだった。

宗治は固く断った。

「貴公には、ここの次第をよく見られて、隆景様や元春様へお伝えあれば、それでお役目は、尽されておる。お立場上、誰も卑怯とは云いますまい。——それがしの相伴しよばんはむしろ迷惑。おやめ下されたい」

「いや、御報告には、いくらも他に人がある。てまえはどうしても、其許そこもとと共に死ぬことに思いきめ申した」

「それはまた、どういうわけです」

「されば。——すでに当城へ臨むときに、もし貴公がいささかの異心でもさしはさみ、敵に通ずるときちよう兆あらば、直ちに貴公と刺しちがえる覚悟でござった。しかるに、志もお変えあらず、この城を守り通して、しかも今、主家の安きを祈り、城中一同の命に代つて御切腹あるとは、何たるここちよき、御辞世じせいであろう。義に感じててまえも共に自刃いたしたい。それは、隆景様より嚴命をうけてこれへ参つたとき、すでに、貴公とは死生一つなり、二度と郷地に帰らんとするべからずと、独りかたく職分に誓つて

いたことをござれば、当然な勤めの一つと、笑つて、お目に入れず、おゆるしおき下さい」

宗治は黙つてそれをうけた。左衛門の辞色じしよくには少しも騒がしいものは見えなかつたが、たとえ説いても説き伏せ難い程のものがその姿を巖いわおのように見せていた。声の裡うちにこもつていた。

ところへ、大手の矢倉の上に在る部将白井与三左衛門から、一武士を使いとして、主人宗治の許へ口上こうじょうで、

(甚だ、はばか 憚り多いことですが、自分ははなお、お矢倉の守りについておる身なので、たとえ和談の議があるうと、誓紙の調印あるまでは寸時もこの部署を離れることはできません。御足労、痛み入りますが、こんじょう 今生一期ごのごあいさつを兼ね、ちと申しあげたい

儀もございますので、お矢倉の上までお運び願ひとう存ずる)

と、伝えてよこした。

何事か知れないが、白井与三左衛門は多年仕えてくれた家の子のうちでも年としがしら頭としがしらの方である。宗治はすぐ矢倉へ上つて行つた。与三左衛門はうれしげに、主人の姿を、その不断の戦いの場所に迎えた。

与三左衛門は負傷していた。

まだこの城が水攻めをうけない卯月うづき二十七日の大寄せに、敵の鉄砲に中あたつて、片脚にかなり痛そうな怪我けがをしていたが、この矢倉を預けられた以上、仆たおれてもここは降りない。眼のあいている限り死守してみせると頑張つて、昼夜、物の具も解かず、きょう

までなお、満々たる城外の濁水を睨みまわして、弓を懸けつらね、銃口を並べ、手に陣刀の柄を放さずにいる老部将であつた。

「おう、ようお越し、ようお越しを」

彼は、喘ぐあえような声をして、主人の足もとにひざまずいた。

そして武士に、

「御床しようぎ几をあげてくれい」

と、いいつけ、自分は、さらに片脚を寝かせて、どすと、武者坐りに腰を落した。

「与三左衛門。仔細は、月げつしやう清からも聞いたであろう。間もな

く、自害おもむに赴くこの宗治ぞ。相見るも今のみ。年来のそちの奉公、

あらためて礼をいうぞ」

「おめでとうござりまする」

与三左衛門は片手を落した。どうしたのか、急に首の根が折れたようにがくと前へ下がったからである。肩で大きく呼吸をして後、また宗治を振り仰いだ。

「さてさて、またなき御武運にお会いなされましたもの哉。人の一生も生涯の土道も、その仕上げは、よくも悪くも死によつて定まるとか申しますが、今日の御生害ごしようがいは現うつし身みの人をも数多あまた生かし、また御自身の一命をも末代に生かす曠はれの一期いちご。およろこび申さずにいられますぬ」

「よういうてくれた。与三左衛門。悲しんでおくりやるよりは、ずんとうれしいぞ」

「左様にお心も確しかとおすわり遊ばしているわが殿のこと。無用の憂いとは存じましたが、何せいきようのお場所は、敵味方の両大將はもちろん、中国勢も上方勢も眼をこらして見まもっている真つただ中での御生害。万が一のことでもあつてはと、年寄の取りこし苦勞から、切腹とはいかなる味のいたすものかを、お先に試みてみましたところ、案外、軽いものでござりまする。——致さぬ前に思うほどのた打つものでもござりませぬ。……まずまず、左様に思し召して、おこころ悠ゆるやかに遊ばしますように」

与三左衛門はそう云いながら、よろいの胴を外し、腹帯を解きはじめた。そしてことば静かに、

「——御覽候え」

宗治は眼をみはつた。——見事に老腹おいばらを搔ツ切つていないか。くれない紅の腹巻を解くとともに、さすがに氣丈な与三左衛門もびんしよく鬢色はばかに死をあらわして、

「憚りながら……」

と、首をさしのべ、眸ひとみで介錯かいしやくを求めた。

その耳元へ口をつけて、

「与三左衛門、案じるな。やがて見ておれよ。彼方かなたの水の上を」

一颯いっさつの光は戛然かつぜんと鳴つた。宗治は、自分に先立つ道づれを、

涙とつるぎの下に見た。

午うまの刻は近づいていた。

宗治はすっかり身支度ととのも調え終つた。

きようまでは、一滴たりと、城中の者の生命をつなぐ大事な物としていた飲み水も、今はよかろうと、手桶に一杯持てと命じ、その水で、籠城四十日以来の身の垢あかを浄きよめ、髪すも梳すいた。
あさ麻こそでのみずがみしも小袖みずがみしもに、水みずがみしも袴みずがみしもの姿もすずやかに見直された。小姓に、舟の支度を問わせると、

「まだ羽柴勢の堤に合図の小旗が見えませぬ。合図が見えたらお知らせ申し上げます」と、

と、ある。

何という休戦の静けさだろう。陽ひは無心に似て、刻々、中天にかかってゆく。

この日、風もなく、城外四方、百八十八町歩にみなぎる濁水の

色は、依然として赤く濁ったままであるが、梅雨の霽れ間のさざ波は、そよそよ陽を射返して、折々、白鷺しろさぎの羽音のするほか、敵味方の陣営も、ここの一城も、実にしいんとひそまり返つていた。

そのとき、十数名の直臣じきしんたちは、やがて間もなく城を出る主人のおすがたに、さいごの名残を惜しもうものと、目顔で語らい合いながら、打ち揃つて、そつと宗治のいる居室の外に居並んだ。見ると、その宗治は。

時刻の来るのを待ち遠しげに、部屋の中で伸々のびのびと身を横たえ、ふたりの小姓に毛抜きで小鬢こびんの白髪や耳の毛を抜かせていた。

縁の端からその態ていをながめた老臣のひとりには、じんと瞼まぶたに衝き

あげてくるものを、わぎと軽い戯れにして、宗治へ云った。

「これは、これは。殿には、時節がら不相応な男振りをお作りでござりますが、いかなる思し召しでございますか」

すると宗治は、片かたひじ肱起して、むくと面おもてをもたげながら、一同の者へ、

「さればよ。この首は、今日まで男競べいたした秀吉の見参にも入り、信長の前にも供えらるべきもの。——余りに窶やつれていては、
一 旦いったんの籠城にかばかり老いさらばいつるかと、中国武士の荒あらか胆もを軽んぜられも致そうか。——さもありては口惜しきゆえ、
かくは男をつくりて候ぞや。嗤わらうな。嗤わらうな」

と、いつて笑った。

迎えが来た。——時刻とみえ、対岸の蛙かえるヶ鼻はなに赤い小旗が見え出したという。

「さらば、参ろうか」

宗治はつと立つた。

不覚と思いながらも抑えきれずに、この時、衆臣の中から嗚咽おえつがながれた。宗治は耳なき人のように、さつさと、城壁の方へ歩いた。小舟は、新しき藁わらの莖むしろを敷き、白き死の座を備え、あくまで清浄に、舷ふなべりを洗つて彼を待つていた。

宗治の兄月清入道と、末近左衛門のふたりがさきに乗つていた。ほかに宗治の郎党難波七郎次郎なんばしちろじろうが櫓ろを把とつて控え、介錯かいしやく人にんを命ぜられた幸市之丞が端にいた。

くんぶういつせん
薫風一扇

舟は城を離れた。

難波七郎次郎の漕ぐ櫓のあとに、ゆるい波紋が残されてゆく。

「あれよ、殿さまのお舟が」

「真つ白なおすがたで」

「わしらの命にお代りくださるのじゃ」

「勿もつたい体なや。勿体なや」

城中五千人のうちの三分の一は領下の百姓老幼であつた。それらの者がみな水漬みずついた城壁の破れ目や、屋根の上や、狭間はざまや小高

い所などから、声こそ揚げないが手をあわせ、眼を拭ぬぐいつつ、見送おくつていた。

長年その人に仕えて来た家中の将士にいたつてはいうまでもない。みな断腸だんちようの思いを嘸のみ、眼には悲涙を沸たぎらせていた。為に、彼方かなたへ遠ざかる舟の影すら、涙にかすんで熟視じくししていられなかつた。

——しかし、舟と人とは、うらうらと、さも長閑のどけき途みちのように、雲の影の映うつつている静かな水面を漕こぎすすんでいた。

振り向くと、高松の城は、かなり後になつた。ちようど、蛙かえるヶ鼻はなと城との中間あたりと覺しき所まで来ると、

「七郎。この辺でよかろう」

と、宗治の兄の月清入道がいった。難波七郎次郎は黙って櫂を上げた。

待つ程もなく。

この舟が城を離れたとき、同時に対岸の蛙ヶ鼻からも、一艘の舟が湖心へむかつて漕ぎ出していたのである。それは秀吉の陣から派せられた検使舟であることはいうまでもない。目印には舳先に赤い小旗を立て、舟にも緋の毛氈が布かれ、中央に武者三名ほど坐っていた。

検使の将は堀尾茂助吉晴ほりおもすけよしはるであった。吉晴のみ陣羽織を着ていた。

白い死装束しにしようぞくの人を乗せて漂い待つ小舟と、紅あかの小旗をひる

がえした検使舟とは、ようやくいま、この満々たる水上の中心で相会おうとしていた。

水も静か。四山しざんも静か。——漕こぎよせてくる検使舟の櫓ろの音の
みが耳につく。

はるか西の岩崎山から、今日はこの辺りまで手にとるように望まれているだろう。そしてそこには毛利輝元、吉川元春、小早川隆景などが座をつらね、味方三万の将士も鳴りをひそめて、この一点に眸こを凝らしているにちがいない。

さらに。——羽柴筑前守秀吉の本陣石井山は、もつと近々ここを俯瞰ふかんする位置にあつた。その麓ふもとから堤上数十町にわたる陣々も馬印と旗で埋められていた。

宗治は遠く岩崎山のほうへ向つて、心のうちでは多年の恩顧おんこを謝し、なつかしの主家の旗を見ては、ひとみに惜別せきべつをこめていた。

「それへお渡りありしは、高松城の守将、清水宗治むねはるどのでございますか」

検使の舟は、すぐ側へ来た。こう呼びかけたのは、使者の堀尾茂助である。

宗治は、こなたの舟から、

「おことばの如く、長左衛門宗治であります。御和睦ごわぼくの一条を相果すべく腹を切りに参つてござる。御検使の役、御苦勞にぞんずる」

と、一礼した。

「なお、申しあげたいお言伝ことづてもござれば、少々、お待ち候え」

茂助は、そういつてから、扇子を上げて、宗治のうしろにいる難波七郎次郎へ、

「もすこしお舟を寄せ候え。こなたよりも寄せ申さんと、云つた。」

相互の舷ふなべりと舷とが近づきあつて、軽くどんとゆれた。

茂助は、威儀を正した。

「——さて。余の儀でもありませんが、それがしの主人秀吉様の申さるるには、この度の和議も、其許そこもとの御一諾なくば、到底、調ととのがたい難がたきはずのところを、忠義のためには、一身もお顧みなき御

返辞に、ほとほと感じ入つて候との儀でござつた。——今日はまた、時刻もおたがいなくお立ち越え、まことに殊勝しゆしやうのいたりに存じ申す」

と、まず慇懃いんぎんなる挨拶を呈ていして、次に、

「——ついでには、永々の籠城ろうじやう、さだめし御辛苦の事もおわしつらんと、主人秀吉様より心ばかりの品お慰めにと、これへ持参いたしてござる。……まだなかなか陽も高うござれば、われらの役儀にお心づかいなく、悠々ゆるゆると名残をお尽しあるように」

一樽ひとたるの美酒と、幾重ねの佳肴かこうなどが、舟から舟へ手渡された。宗治はよろこびを顔に湛たたえて、

「これは思いがけない好物のお贈り物。わけて秀吉どののお志と

あれば風味喫すべしと存ずる。遠慮なく頂戴いたそう」

と、杯をとりあげた。

そして、兄の月げつしやう清入道に、

「兄者人も、おひとつ」
あにじやひと

と、すすめ、末近左衛門にも、難波七郎次郎にも、杯をまわして、順に酌くみ交かわした。

「久しゆう、かような美酒もただかなんだせい、はやちと微ほ酔ろようてござる。——無骨者の余芸、おかしゆうお眺めあらんも、一ひとさし舞うて堀尾どのへお目かけん。——兄者人。左衛門。鼓つづみはなけれど、手拍子てびやうし、膝拍子ひざ。いつもの曲舞くせまいの一節、共々ともどもに謡うたわれよ」

宗治は、小舟の上に起たつて、さつと白扇をひらいた。そして日頃の一つ芸、誓願寺せいがんじの曲を舞った。

舟がやや揺れる。波がやや立ちさわぐ。——高松の城中にある五千の人のこれは涙か。はるか彼方かなたの山々や岸にある三万将士のこれは感動の波か。——眼まのあたり近々といた堀尾茂助吉晴は、正視するを得ず思わず頭を垂れていた……。

と。——謡声がやんだと思うとすぐであった。

「堀尾どの。確しかとお見届けおかれよ」

先方からいわれて、はつと顔を上げると、宗治はもう坐り直して、腹一文字に切っていた。

「市いちのじょう之丞ちやう。介かいしやく錯さく」

うなが
促す声は凄愴せいそうを呼んだ。凜々りんりん、血は舟中を紅にしている。

「弟よ。わしもゆくぞ」

すぐ、兄の月清も屠腹とくふくした。さらばと、末近左衛門もつづいて自刃した。

また、検使に首桶を渡して帰ると、郎党の七郎次郎も、介錯人の市之丞も、主人に殉じてともに後を追った。

清水宗治はときに、四十六歳であつた。

持宝院では、秀吉以下、堀尾茂助の帰りを待ちかねていた。

小舟から上がるやいな、茂助は首桶をかかえて、息せわしく登つて来た。そして、宗治の切腹を復命し、その首を、秀吉の床しょうじう几ぎの前に供えた。

「あわれ、よい侍を」

秀吉は惜しんだ。きようほど深く心を打たれたことはないような容子ようすだった。——が、すぐ、

「惠瓊えけいを迎えにやれ」

と、急せぎ立て、やがてその惠瓊が来るまでの間にと、風呂所にはいつて、水を浴び、清衣に着かえ、潔けっさい斎して待つていた。

惠瓊が来た。

秀吉はすぐ別間に出て、

「宗治の切腹も相すんだ。この上は誓紙の取り交わしが残されておるのみ。いま潔斎して、起請きしょうの一文は約束のごとく認したためておいたが、予の筆元を御僧が見とどけ、また、毛利の筆元を見届け

るために、こちらからも一名の陣僧をさしつかわすであろう。――
 「まず一読いたすがよい」

と、惠瓊にそれを示した。

読み下してみると、

起請文きしやうもんのこと

一、公儀こうぎ（信長を称いう）に対せられ御身上ごしんじやう御理おんことわりの儀、
 われら請取しやうしゆ申し候条でう、いささか以て疎略そりやくに存ぞんずべから
 ず候事。

一、申すに及いばず候いへどと雖も、輝元、元春、隆景、深重しんちようじよ如
 在さいを存ぞんぜず、われら進退しんたいにかけて見放し申すまじき事。

一、かくのごとく申し談じ候上は、表裏へうり抜け公事くじこれあるべ

からざる事。

右の条々、もし偽りこれあるにおいては、日本国大小の神祇じんぎ、殊に八幡まん大菩薩だいぼさつ、愛宕白山摩利支尊天あたごはくさんまりしそんてん、べつして氏神うぢがみの御罰、深しんちよう重まか罷りかうむるべきもの也。
 よ仍つて起請文 如くだんのごとし件。

羽柴筑前守秀吉

まうりうまのかみどの
 毛利右馬頭殿

きつかはするがのかみどの

吉川駿河守殿

こばやかはさゑものすけどの
 小早川左衛門佐殿

えけい
 惠瓊が謹んでそれを秀吉の前へもどすと、秀吉はうしろの侍臣

たちへ向つて、

「白い小皿を持って来い」

と、命じ、さらにすずりばこ硯すずりばこ 筥すずりばこをこれへと求めて、惠瓊の眼のまえで書判かきはんを誌しるした。そして白い小皿のうえに左手の小指をかざし、刃をあてて血しおを出し、書判のわきへさらに血判を加えた。

「かたじけのう存じまする」

うやうや恭しく押しいただいて惠瓊が納めると、秀吉はさらりと打ちくだけて、めでたいめでたいと繰り返し、侍臣へむかつて、

「さらば、すいもの吸物を」

と、酒、どき土器を促して、いっこんく一献酌み、使者にも酌しやくして、また受けた後、

「土器は手前にて納めておく」

と、祝の寸儀をすませた。

安国寺恵瓊は、すぐ辞して、毛利の本陣へいそいだ。毛利の筆元拝見の使いとしては、大知房だいちぼうという陣僧が彼に従ついて行つた。

大知房も程なく毛利三家連名の起請文をうけ取つて歸つて来た。和議調印はここに成つたのである。だが、それから幾いく刻も経たないうちに、毛利方の陣營は旋風せんふうのごとき驚きと茫然ぼうぜんたる自失に見舞われていた。——初めて信長の死をその日の夕方に知つたのであつた。

喪もを討うたず

「出し抜かれた」

「秀吉めに、まんまと、乗せられたものだ」

「和睦わぼくの誓紙は破棄すべしだ」

この声は、そのせつなの、毛利の帷幕いぼく全体のものだったといつてもさしつかえあるまい。

信長の死を、彼らが知ったのは、その日の七刻ななつさ下がり（午後四時）の頃だったから、宗治の切腹直後、誓書の交換が行われてから、わずか一刻いっとき（二時間）ぐらいな後でしかない。

知らせて来たのは、当時上方方面に配してある課報ちようほうかた方の一
名で、これが全軍に知れ渡ると、毛利方のうちでも今度の和議を

心から迎えていなかつた強硬組の面々は、

「それ見たことか」

と云い、

「秀吉を討て」

と、さけび、

「討つは今だ。絶ぜつごう好こうなときだ」

と、たつたいま調印交換をすましたばかりの和睦わぼくなどは、頭の
うちから消し飛ばして、陣々の諸士も、囂ごうごう々と私議しぎふん紛説ふんせつを放ち
あい、天下一変の予想される昂奮るつぽの坩堝るつぽのなかに各 その感情を
極端に揺すぶられていた。

輝元の帷幕いばくにも一時はあわただしい動きが見えたが、間もなく

厳きびしい守兵を立てて一切の出入を断ち、ここは反対にひっそりとしてしまった。

「決して、お味方が欺あざむかれたものではない。和議のことは、元々、あとげつ後月の末頃から、御当家よりはなしを進めさせたもので、秀吉から云つて来たものではない、その秀吉も、神ならぬ身の、何で京都の兇きょう変へんを、事前に知つて計ることができよう」

これは小早川隆景の言であり、それに同意していないのは、この際、秀吉を討たずにおいてどうするものかと、熱心に輝元へ説といている吉川元春であつた。

元春は耳じ朶だを熱している。

「信長の死は、即ち、織田勢力の分解といい得られる。同時に、

わが毛利家に比肩ひけんする強大はどこにも見られなくなったのだ。いま当面としている秀吉のごときは、織田氏の後継者としては、第一に指を屈しられる者だが、それすら今、ここにおいて一撃を加えるならば、その背後に持つ大きな弱点からいっても、易々いたることであろうと思う。さすれば、天下はいやおうなく毛利の掌しょう握あくに帰するほかない。——また和睦のことは今暁以来、秀吉の方から急速に運びすすめて来たもので、すでに昨夜あたりは、京都の兇変を、秀吉としては知っていたものに違いなく、それを秘して取り結ばれた調印である以上、たとえ当方で破棄しても、決して毛利家の不信義とは相成らぬ」

「いやいや。ここは大きな考えどころでしょう」

隆景はあくまで理性である。澄明ちやうめいな頭脳はそのいうことばの適切と冷静がよく証拠だてていた。

「馬之山の対陣の後も、あなたは秀吉の人物を絶讚ぜっさんしておられた。正直それがしも彼の弓の取りようを見、その大志と智略を知るにつけ、敵ながら推服すいふくしている。おそらく信長の後、天下の仕置しおきをなす者は彼ではないでしょうか。……武門には、敵の喪もを討たず、という古言もある。いま誓約を捨てて悲境の彼を攻めても、もしなお、彼がよくここを生き抜くときは、骨髓こつずいのうらみをもって、将来長くわれを仇あだするに至ろう。——一山中鹿之介の敵対すら、あれほど年久しく禍わざわいとなつたことを思うと、ここはうかつには御方針も変えられますまい」

じゅんじゅんと説く隆景の常道論も、容易には元春を説得できなかつた。元春は、飽くまで兵機を主眼として、

「時は今をはずせぬ」

であつた。理論でなく熱情だつた。兵家として、かかるまたなき機を逸す法はない。弓取の冥加みょうがにつきるといふのである。

隆景は兄の主張だけに、説きつけるのに一倍も二倍も骨が折れた。遂に元就もととなりの遺訓まで持ち出して、

「先主の垂訓すいくんにも、わが家は分を守るを一義いちぎとし、天下をのぞむ勿れなと戒められておられる。いかに富強でも中国は辺土に過ぎず、中央を占むる利は持たない。先君もそこに遠いおもんばかりをなされていたものではあるまいか」

家憲かけんは絶対である。元春もこれには口を噤つぐむほかなかつた。また輝元も家の遺訓に照らして、

「隆景のことばは尤もつともと思う。この際、破約はやくして、ふたたび秀吉を敵とすることは避けたい」

と、云い断きつた。

密議の終つたのはもう四日の夜であつた。ふたりは輝元の前を辞して各の陣所へ歸つたが、途々みちみちも元春が悄しおれている体ていなので、隆景は弟として、すまない気がしてならなかつた。

途中味方の物見の一隊に出会つた。その一部将すら甚だしく昂奮している眼をもつて、遠くの闇を指さして告げた。

「——羽柴方では、すでに撤兵てつぺいを開始し始めました。五つ刻どき

(八時) 頃から続々と岡山方面へ引き揚げてゆく隊伍が見られ、それは多分、宇喜多勢でないかと思われます」

「そうか」

聞き流してすれ交ちがったが、元春は舌打ち鳴らしていた。

——ついに機は逸したかと、心中齒がみしているのであろう。

隆景はその気もちを読むが如く云った。

「まだ、残念に思し召しておられるのですか」

「そうだ」

問うまでもないことだと、鬱うっほつ勃ぼつを色にあらわして元春は答えた。

隆景はそれへまたいった。

「——では、かりに毛利家が天下に臨むと致して、その場合、あなたも天下を取る思し召しか」

「……………」

「御返答がないところを見れば、それまでの御所存はないものと思われる。——ではこの隆景は如何いかにといえ、われらとても同様、輝元公をさし措おいて、天下を掌しようあく握するなどは思いも寄らぬこと。……しかるに輝元公の器量きりようはどうか。果たして天下人てんかびとたる器うつわを備えておられるでしょうか」

「……………」

「その器うつわならざる者が天下をうごかすの座にあるときは、天下の乱れはいうまでもなく、天下をも失い、家をも亡ほろぼし、宇内うだいの不

幸は一毛利家の滅亡には止まりますまい」

「隆景。……もういな。分つたよ」

元春は面をそむけた。

悵然

と中国の夜空を仰いで、落涙し

かける臉を抑えた。一毛利家の家憲の下に在らざるを得ない遣り

場なき武魂は声なく哭いていた。しかも彼は齡はすでに晩節近

き五十三であつた。

堰を切つて

即時撤兵は両軍媾和の原則だつた。

羽柴方では、もうその日の夜から実行にかかつていた。

が、それは高松城の北方を抑えていた八幡山の宇喜多忠家ただいえと、龍王山さんろく麓の羽柴秀勝の二軍が陣払いしたに過ぎない。

兵略上、毛利方と遠く隔てたこの二陣は、すでにそこに在る必要を持たないものであった。高松の城にはもはや抗戦すべき守将もなければ精神もない。——なお万一の不測にそなえて依然うかとは動かし難いものは、毛利方の直前にある石井山の本陣と、足あ守川しもりがわの線に沿う抑えあるのみであった。

夜をとおして宇喜多勢は岡山へ撤退していた。けれど秀吉の本軍はまだ一兵も退いていない。もちろん秀吉自身もじつとその持宝院にいた。

かくて四日の夜は明け、五日の朝となったが、なお彼はうごか

なかつた。心はすでに上方かみがたの空へ駈けていたろうが、滅多めつたに陣を払う気色すら見せていない。

一昨日もごろ寝、ゆうべもごろ寝。用事があらば時を選ばず起せといいつけては手枕で横になつた。そして今朝、起きぬけに、蜂須賀彦右衛門から受けた報告のひとつは、

「お約やくじょう定じょうによつて、今朝、毛利方から二名の人質を送つて参りました」

という件であつた。

これも彼の気がかりとしていたことだつた。まず毛利ひょうへに豹ひょう変んはないとほつとした容子ようすに見える。しかしなお油断はできなかつた。なぜならば、京都の兇変を、今朝もまだ彼が知らないも

のとすれば、たとえ質子ちしを送つて来たにせよ、それを知つた彼の
 変心はかは測り難がたいからである。

何もかも、ここは秀吉の肚はら一つにかかつている。秀吉はその肚は
らげい芸を意識していた。和議が成立したからといって、余りに慌あわた
 だしく退のくことは、毛利をしてわが虚を覚さとらしめるものと考えら
 れた。東へ逸はやる心を西へ向けて、無策むさくな顔をしていたのも一いっに毛
 利の虚実を測るためだった。

「彦右衛門。水はいくらか減じ始めたか」

「一尺程退ひいたようです」

「急には流すな」

秀吉は持宝院の庭へ出た。きのう宗治が切腹した一舟の跡も小

波のみ見るだけだった。一部の堰せきを切らしたため、わずかずつの水量は減じ始めたといえ、まだ彼方の高松の城は水の中だった。秀吉の麾下きか杉原七郎左衛門は、昨夕すでにそこへ入って、城受取りを完了していた。——今そこから渡船や小舟で続々陸上へ運ばれているのは、宗治の死によって救われた無数の領民である。籠城の将士は、それらの老幼を先にあげて、自分たちはいちばん最後に上陸した。

事なく一日は暮れた。

夜に入ると秀吉は、森勘八高政に毛利方の監視を命じ、また黒田官兵衛その他と何事か凝議ぎようぎし、終ると、小姓一同にも引き揚げを伝え、急速に陣払いを準備し出した。

夜はまだ深いが、正しくは六日の朝といつてよい。それは夜半をすぎた丑うしの正刻であつたから。

総軍引きあげ準備を命じておいた秀吉は、いよいよ持宝院を出て、

「直ちに発足ほつそく」

を伝えさせ、念のため、もういちど伝令をもつて、

「毛利方に何の異状も見えないか」

をしんがり殿軍の森勘八に問い合わせた。なお、その間にも官兵衛よしたか孝高を招いて、

「すぐ、諸所の堰せきを一斉に切れ」

と、命じた。

孝高はこれを家臣の吉田六郎太夫に託し、六郎太夫は駈けて山つづきの蛙ヶ鼻へいそいだ。

六郎太夫は水攻めの築堤工事に当つた奉行人のひとりだつた。去月十九日にそれが成つてからちようど半月目である。満々百八十八町歩にみなぎらした水は、思えば偉大なる歴史を劃かくした時代の分水嶺ぶんすいれいでもあつた。

その水は、四日の和議締結とともに、一部の堰せきを落して少しづつ減水を示していたが、今や十数カ所にわたる大堰を一時に切り落して、もとの高松盆地に回かえそうとするのである。彼は蛙ヶ鼻の岩頭に立って、部下の兵が灯ともしてさし出した松明たいまつを両手に持つた。

ふたつの松明は。

颯、颯、颯——

と三度ほど、六郎太夫の手に振られて、美しい焰の線を闇に描いた。

それは鮮やかに、はらこさい原古才から福崎までの長堤一里に待機していた味方の見張小屋から見とどけられたに違いない。間もなく、眠れる湖沼の水面にはむくむくと諸所に活動が起りはじめた。無数の大きな渦とそれにともな伴う水と地殻ちかくの咆哮ほうこうであつた。ぐわうツと闇を鳴る異様な音響でもあつた。

「よしッ」

六郎太夫は松たいまつ明を踏み消してもとの方へ駆けもどつた。——

時すでに、秀吉と秀吉をかこむ近衆小姓、将士たちの一群は、金きん瓢ひょうの馬簾ばれんを中心に、槍の光を並べ、弓をつらね、鉄砲をそろえ、青葉の露の頻りに降る暗い坂道を、一糸の紊みだれもなく、肅しゆくしゆく々と麓へむかつて降りかけていた。

進撃はなおやすく退軍はより難しいという。

和睦わぼく成つての引き揚げとはいえ、秘中の秘はなおつつまれている。ひとたび彼に豹ひょう変へんがあろうと、その責めは秘を包んでなした秀吉に帰さねばならない。

「おう。あの声は……」

彼は馬を止めて、虚空に耳をすました。嵐か海嘯つなみかとも疑われる水の唸りが夜空を翔かけまわってゆく。——一時に十数カ所の堰せき

を切つて、はば阻めるものを知らず流れ狂う濁水は、またた瞬く間に、毛利方のいる岩崎、天神、くろずみ黒住などの高地を余す以外の地をことごとく水と泥とに化してしまふであらう。秀吉は想像した。

その水みずあし脚がはや迅いか、一いちべん鞭東へさす彼が迅いか。石井山はあとなつた。全軍またほんが奔河のごとく急ぎに急いでいる。

急行軍二里余。道はもう備中から備前に入つていた。

からかわむら辛川村である。秀吉は、

「ここから先、本軍は別れて、べつの進路をとれ」

と、しばし馬をと駐めて、その行軍路を各隊の將に指示した。

すなわち一軍は、西大川、まかがみ真可上、わけ和氣、かなや金谷を経てみついし三石に

至る旧道をすすむ。また一軍は、国府市場、沼、おさふね長船を通つて

西片上に出、三石に合する。そしてふたたび全軍一つになって舟坂峠をこえ、有年うねから姫路に入る。

この命令に、どの隊は旧道へ、どの隊は新道へと、一村に溢あふる軍馬が一時に混み合っているところへ、おくれ走せに追いついて来た官兵衛孝高よしたかが、その率ひきいている黒田隊をひかえさせて、自身一騎だけ秀吉の所へ来た。

歩行に甚だしい跛行びっこをひくが、馬に乗るにはさして不自由を覚えないらしい。彼は駒をひとの手にあずけて秀吉の前にひざまずき、あたりの騒音を幸いにそつと囁ささやいた。

「高松城の周囲一時に干潟ひがたと変りました。その代りに低地はすべて河と化し泥田となり、もはや毛利勢がお味方へ追いつか

といたしても、ここ兩三日中は急に踏み渉わたることも相成りますまいか」

「そうか。それでまず一方はよし、というわけだな」

「——が、ここで毛利方の人質は、きれいにお返しあつては如何ですか」

「人質を返せと」

「そうです。留めておいても効かいない人質などは、御返還あるこそ、良策かと思われませんが」

「……ム。いかにもな」

孝高の説明をまつまでもなく、孝高の考えは、すぐ秀吉うなずに領うなずかされた。

帰するところ、これから羽柴の征かんとする一戦は、光秀を撃つか、光秀に撃たれるかにある。もし光秀に敗るるほどなら、毛利家の人質を抑えていたところで何の益にもならないであろう。

もしまた、光秀を誅戮ちゆうりくして信長のとむらい合戦を果し、義

を天下に唱えんか、天下はおのずから秀吉の手に傾いて来ないわけにゆかない。そうでもなれば、たとえ人質を取っておかなくても、毛利氏一族がふたび反抗を示そうとは考えられない。むしろこの際、彼に対して恩を施し、彼の歡心を求めておくことの方が、いかにその効果が確実に後でものをいうことになるか知れないとなすことが、官兵衛孝高の意中であり、秀吉の察したところだった。

「たれを添えて返しにやるか」

「てまえの家臣を遣りましよう。返還するについては、先方から借用して置きたいものもございますから」

「まかせる。よいように計ろうておけ」

秀吉は直ちに、陣後に伴っていた毛利方の人質、吉川きつかわ経言つねことと毛利もつり元総もとむらのふたりを、彼の手にゆだねて、先へ立った。

いまや彼の心は、矢のように急がれていた。一日遅れれば一日味方の不利である。それだけ明智の軍容は強化され、光秀の横おうだ奪うばした天下を天下にゆるしておくことにもなる。

本軍と別れた秀吉は、ここから馬をすてて輿こしへ移った。なるべく疲労を少なくするためである。そして、麾下きかの将士と共に矢坂、

野殿、野田を経、半田山はんだやままでくると、さきに引き揚げていた宇喜多主従が、岡山から迎えに出ていた。

秀吉は陣じんごし輿ごしを停めさせた。

そして、宇喜多忠家以下、出迎えに来ていた岡山衆へたいして、「やあ。大儀大儀」

と、洩れなく愛想をこぼし、またふと、諸士の中に囲まれている一少年の姿に目をとめて、

「お出いで。お出いで」

と、さしまねいた。

忠家は少年の手をひいて、陣じんごし輿ごしの側へひざまずき、

「ごあいさつ遊ばせ」

と、教えた。

少年は礼をした。蘭らんの新芽の如く素直である。まだ童髪で、武者人形のように化粧されていた。

「忠家、これか。——亡き直家どのの孤みなしご子は」

「はい。直家同様に、行く末とも、お引き立て下しおられますように」

「案じるな、故人へもここで誓うておく。かならず筑前が育ててみよう。以後は秀吉の養子ともなして」

「ありがとうございます」

一族の忠家は涙をこぼした。岡山城主の直家はすでにこの一月頃病死していたので、幼い遺孤いこを守り立てて高松へ参陣していた

岡山衆の心境は、いとど多感であつたのである。

そうした遺臣たちの心をとらえて、この急ぐ途上でありながら秀吉が「養子にする——」と約したこの宇喜多家の幼主こそ、後の宇喜多 だいなごんひでいえ 大納言秀家であつた。

このとき秀家はまだ十歳で、現下の旋風 せんふう にも父の死にもほとんど何らの感傷もうけていないふうだつた。秀吉は可愛らしくて たま 堪らないように、

「これへ乗れ」

と、手ずから抱いて陣輿 じんごし の中へ入れ、自分の膝のあいだに置いて、

「幾歳 いくつ になるか」

と訊ねたり、

「何が好きか」

と、問うてみたり、また、

「きょうから和子は、この小父おじさんの養子になったのだぞ。……

どうだ、欣うれしいか。欣しくないか。この小父さんは嫌いか」

などと戯れたりしていた。

その間にも彼はすぐ輿の者へ急げと命じていたのである。だから陣輿は舟のように揺れていた。かくて岡山の城下まで来るうちに、秀吉と少年とはすっかり仲よしになっていた。

城下には着いたが、城中には入らない予定なので、秀家を輿から降ろし、忠家以下の岡山衆にも別れを告げた。

「ぜひと、お先手について、御加勢申したいと望む者も少なくございませぬ。二千でも三千でもお召しつれ下さいませ」

忠家の好意にたいして、秀吉はあきらかに断つた。

「かたじけないが後も大事だ。万一、毛利家に豹変あるときは、お汝らの力に俟まつものが多い。ここの一罫は、毛利への抑えとして、筑前が恃たのみおくもの。呉々々、抜からぬように」

種々策は授けたが、兵力は借らずに、ただ宇喜多家の旗だけを借りて去つた。その後から、東へ東へと急ぐ軍馬は、ひつきりなしに城下を通過した。半日以上たつても、騎馬のいななきはなお断続していた。

いちよく
一浴

六日夜は、沼城ぬましろに泊まった。夜半ごろから暴風雨となつた。

すさまじい風雨の声をよそに、秀吉は深更まで、ここを守る宇喜多家の諸将へ、万一の場合の計を授けていた。

眠るも束の間つかましかない。秀吉は未明の頃から出立を発令して、残る人々へ、

「さらば」

と告げ、きのうは陣輿じんごしだったが、今朝は馬上で、風雨の中をもう真ツ先に急いでいた。

この日は七日、福岡の渡しまで来ると、河は出水に激している。

沼城の者が、

（この大雨では、とても御無理でしょう。一日程も御休息あつて減水をお待ち遊ばしては）

と引止めたのを、何のと、無碍むげに急いで来たことなので、秀吉はもとより難儀も覚悟であつた。

荷駄にだと荷駄とを繋ぎつな合わせて馬うま 囲がこいを作り、人と人とは手をつなぎ、或いは槍の柄を握り合いなどして、一陣一陣濁流を渡るのだった。

さきに越えた秀吉は、彼方かなたの水際みずぎわに床しょうぎ 几ぎをすえて、
「急ぐな、あわてるな。心しずかに河越がわしいたせよ」

と風雨もよそに落着きを見せていた。

「こういう時に、人ひとり取り落すと、五百も三百も損じたようにいわれるものだ。荷物一つ流しても、百荷も二百荷も捨て去りたりと沙汰されよう。かたがた、戦場とちがいで、不覚といわれては、いのちも軍器も捨てがいがいぞ。悠々ゆうゆう渉れ、悠々と」

高松のあとへしんがり殿軍として残して来た森勘八の一軍も、この頃、追いついて来たし、そのほか遅れた部隊も、続々見えて兩岸にむらがつた。

森勘八は秀吉の前に来て、あとの模様を報告していた。——味方の引き揚げは六日の未ひつじの刻（午後二時）までに全部終了したということ。また、その後も、毛利方の陣営には、追撃に出て来る気配はなく、ぼつぼつ兵力の後退にかかっているらしく思われる、

ということなどであつた。

秀吉はほつと一ひと安堵あんどしたような眉を見せた。これで初めて全力を一方へ注ぐことができると確信を得たような面持おももちでもある。強行軍は続けられた。人馬も旗も濡れて、みな雑巾ぞうきんのような姿となつてゆく。雨は折々小やみにもなつたが疾風しつぷうは終日やまない。

西片上にしかたがみまで来て、さきに別れた本軍と合し、一方は船坂越えから姫路へ急行したが、秀吉はその嶮けんを避けて船で赤穂あこうへ上陸した。

船問屋の灘屋なだや七郎右衛門の家で小憩こやすみして、またすぐ陸路を姫路へ急いだ。この途中でも秀吉は、度々陣輿と馬とを乗り換えた

が、輿こしの内では正体もなく、いびき麩をかき、馬上でも居眠りをし、幾度か落馬したということである。

こうして彼がわが城たる姫路に帰り着いたのは、八日の朝であった。全軍は、昨夜のうちに着いたのもあり、この朝、前後して着いたのもあつて、ほとんど揃つた。泥土を浴び、大雨疾風を冒し、一日二十里も歩いた軍馬は、ここへ来ると皆もう綿のようになつていて、思い思いの場所を選び、ともあれ一睡をとるに急であつた。

姫路の居城は、沸わき返すような騒ぎである。手の舞い、足の踏むところも知らずという有様だ。留守居の面々は、城門、玄関、その他へ走り出て、主の秀吉を、歡呼のうちに迎え入れると、そ

こにも此処にも、

「先ずまず、おつつがもなく——」

「真ツ黒にはおなりなされたが、お元氣はいちばいのようにお見
うけ申された」

「なんと、御武運のめでたさ」

と、ほつとしたような声が全城に聞かれた。

留守居の衆の心では、この城へ無事に主人を迎える日があるか
否かすら、今朝まで確信もなく案じていたところである。

——で、今、秀吉の泥まみれな姿を見ると、その眼は、熱くな
らずにいられなかつた。余りの歡びに度を外して、大廊下を往来
するにもつい駈け足になり、互いに告げる用事も声を弾はずませ合う

ので、秀吉が本丸へ入った後も、城内は物音でいっぱいだった。いや城下もまた馬のいななきや兵の声で沸わいていた。

秀吉は本丸に坐るとすぐ、

「何よりは、一風呂浴びたい、湯殿のしたくを」

と、小姓にいつけ、さて、

「骨折り骨折り」

と、自分の苦労は忘れて、他の者をねぎらっていた。

留守居の将、こいではりまのかみ小出播磨守みよしむさしのかみと三吉武蔵守も、彼の前に平伏し

ていた。

ふたりは、主人の帰着を祝してから、長浜からの使いが別室に待っていること。またほかにも一名の客がひかえている旨を告げ

た。

「御用意がととのいました。御入浴、いつでも」

小姓が伝えて来ると、秀吉はとたんに起ち上がって、

「まず一浴してその後のことといたそう。あの大雨に、
よろいしたぎ 鎧下着

まで濡れひたったせい、湯が恋しさよ」

つぶやきながら室を出たが、ふと、侍たちを顧みて、

「堀どのは、どこに休息しておるか」

と、訊ねた。

「桐の間におられます」

と告げると、秀吉はつかつか立ち寄って、そこを覗のぞいた。堀秀

政は濡ぬれぐそく具足を側に置いて、寛くつろいでいた。

「久太郎どの。どうだな。きつかったであろう」

「何の。それがしは、あなたより十も若い。あなたこそ、随分お眠そうであつた」

「ははは。正直、まだ眠たい。——いま風呂の湯が沸いたところだが、実は、長浜の母の許から使いが見えておつて至急会いたいと申すゆえ、先へ御免蒙るごうむ。お許は後で秀勝（信長の子。秀吉の養子）とでも一緒にお入りあれ」

「御会釈ごえしやくでおそれ入る。さあ、どうぞお先へ」

秀吉の大股な歩みを追つてゆく家臣たちの登あしおと音も忙しげである。湯殿の窓には雨後の朝陽が美しく匆はねていた。このとき時刻は八日朝の巳みの刻こく（午前十時）頃であつた。

ここのは蒸風呂でなく、中国風の浴槽よくそうだった。秀吉は、湯へ肩まで沈めて、

「あ。あ」

と、大きく肺を呼吸させた。

湯気の中なる彼の顔へ、高い櫛子れんじから日光が降りそそいで来る。見るまに、彼の顔は赤黒く茄ゆだつて、その額から玉の汗がにじみ出し、無数の小さい湯気の虹が立った。

早湯、早飯は、習性である。ざぶツと、滝のような音をさせて出ると、

「おいよ。誰か、背を流せ」

と、外へ命じた。

揚り屋にひかえていた小姓の石田佐吉と大谷平馬のふたりは、はいつと、待ちうけていたように、すぐ秀吉のうしろに廻つて、ごしごしと襟えりくびから手のさきまで、力にまかせてこすつた。

秀吉は突然笑い出して、

「おもしろいほど、出るなあ」

と、自分の足もとを見まわした。小鳥の糞ふんを撒まいたような垢あかである。

「痛い痛い。もうよい」

後はざつと自身で洗つて、もう一度湯ぶねにざぶと沈むとすぐ揚つて来た。

戦陣で見られるこの人の威容いようというものは、いったいどこに備

わっているものなのか。こんなとき、一糸まとわぬ彼の肉体を熟視すると、それはまことに貧弱なものだった。ここ五年越しの打続く戦陣生活にもずいぶん無理はして来たに違いないが、それにしても四十七歳という体にしては余りに脂肪がなすぎる。――

この頃になつてもなお依然として、尾張中村の貧農の子であつた發育不足な面影がどこかにある。深刻な苦勞を経て来たその筋骨は、たとえば岩礁がんしょうに生はえている瘦せ松まっか、風雪に痛めつけられて来た矮梅わいばいの如き感じで、強くはあるがもう人間の老成ろうせいを呈ていしていた。

しかし彼の場合は、尋常よのつねの人の年齢や肉体と較くらべては考え得られないものがある。それはそうした皮膚や筋肉とはまったく別

箇のものみたいにある絶倫ぜつりんな精力だった。また音声、動作、眼まなざし、笑うこと怒ることなどを見ては、到底まだ老成の影もない若々しさである。いや時には、幼稚ですらある場合も見ることがある。

「市松」

秀吉は、浴後の身をへ揚り屋の腰掛にかけると、まだ乾かぬ汗を拭き拭き、小姓の古参福島市松を前に呼んで、こう軍令を口こうじ授ゆした。

「すぐ天守から一番貝を吹かせて、全軍に兵糧をつかわせること。二番貝の鳴るときは、人夫荷駄などを先に出立させること。次に、三番貝は、城外に総揃そうぞろいの合図ぞと、表方へ触れておけ」

「はいッ」

市松が駈け去ると、また直ちに、

「彦右衛門を呼んで来い」

と、べつの小姓を走らせ、その蜂須賀彦右衛門の姿もまだ見えないうちに、さらに、ほかの小姓たちを派して、姫路城のかねぶぎ金奉行、くらぶぎ蔵奉行などを、みなここへと、呼びにやった。

「彦右衛門にござりますが」

「見えたか。そこにいてくれ」

「はッ。何ぞ?」

「待て。いま金奉行を呼びにやってある。その上で、用事を申そう」

秀吉はまた汗を拭く。湯上がりの体は拭いても拭いてもすぐ汗になる。が、それは一浴したためというよりも、彼の五体を駆けめぐっている血行と頭脳の活動から垂るる滴々てきてきのものだといったほうがあたっていよう。

湯殿の揚り屋といつてもかなり広い。彦右衛門は板敷の一方にひかえていた。そこへ金奉行と蔵奉行が一緒に来た。

腰打掛けたまま、秀吉はすぐ訊ね出した。第一に、

「いま当城の金蔵には、いかほどの金銀があるか」
であつた。

金奉行は、言下に、

「銀子ぎんす七百五十貫、金子きんす八百枚余りありまする」

と、答えた。

「彦右衛門——」

と、向き直つて、こんどは彼に向つて命じた。

「ある限りの金銀すべて、その方の手にうけ取つて、番頭ばんがしら、

鉄砲頭、弓槍頭などへも、洩れなきよう、知行ちぎように應じて分配せ

い」

「かしこまりました」

「速すみやかにせい」

「はいッ」

打連れて、二人が退座すると、

「蔵には米がどれほどあるか」

と、蔵奉行へ在^{ありだか}高を問うた。

「八万五千石ほどは」

と、答えると、秀吉は、

「よしよし、今日から大晦^{おおみそか}日まで、日頃、扶持^{ふち}取りの者の家族へ、五倍加増してつかわすがいい。ここに籠城する気はないゆえ、城米を蓄えて置くは無用である。——弓、鉄砲の組下や足輕小者などの残る妻子に、せめては煎^{せん}じ茶のひとつもゆるゆる飲ませてやりと思う。——その心もちをうしなわずに計^{はか}らえよ」

「ありがとうございます」

「そちの退^さがるついでに、小西弥九郎に、すぐこれへと言^{ことづ}伝^つけせ
い」

蔵奉行が立去ると、彼はその間に、鎧下着に着かえ、忽ち具足を身につけ始めた。

弥九郎行長は走つて来た。

秀吉は、具足の緒を結びながら、陣中の所持金を彼にただした。高松陣の經理は弥九郎の任だったからである。費つかい余してあるかねは、銀子のわずか十貫目、金子四百六十枚に過ぎなかつた。弥九郎がその旨を答えると、

「それだけは持つて行け。使者や飛脚に与え、また何かの褒美につかう必要もあろう。よろしい、それだけを聞きおくのみだ」

彼は、浴室を出た。

そしてすぐ、小出播磨守に案内させて、長浜から来て待ってい

るといふ使者の部屋へ自分から出向いた。

かかるうちにも、彼の心の一隅には、長浜の城にのこしてある老母と妻の寧子ねねの身が、絶えず案じられていたであらうことは、彼なればこそなおさらのものがあつたに違いない。

平伏している使者を見るや、

「無事か、何かあつたか。——そちのこれへ来るまでに、母上には、どう遊ばしておられたか」

と、秀吉は早口に訊ねた。

この使者も例外なく疲労しきつた態であつた。病人の喰べるよ
うな物を喰べ、一室に休んでいたところである。そこへ何の予告
なしに秀吉が入つて来て、直接、あれこれと早口に訊ね出したの

で、彼はひどく慌あわてていた。

「はい。御母堂様にも、奥方様にも、まずは御無事でいらせられます」

「そうか。しかし長浜の城は、よも無事ではあるまい」

「さればで。——てまえが長浜のお城を脱して来たのは四日の早暁でございましたが、その時もうお城へは少数の敵が襲よせ始めておりました」

「明智方の誰の手勢か」

「いえ。浅井の旧臣阿閉あべ淡路守の浪人兵で、おそらく光秀に加担かたんしてのことだろうと思われまします。けれど、てまえが安土から瀬田へと急いで来る途みちみち々のうわさでは、明智の将の妻木範賢つまきのりかたの

軍勢が長浜を目ざして続々下つて行つたと聞きました」

「そちの出立が四日とあれば、以後の安否は知るよしもあるまいが、留守の者どもの覚悟はどう決めておるか」

「所詮しよせん、籠城するほどの御人数もおりませぬゆえ、万一のときは、御母堂奥方様などを、どこか山深き地へお移し申しあげて、あとはあとのことと、侍衆は死を期して申し合わせておられます」

使いの者は、ようやく落着きを得て、懐中から一通の書面を取り出し、秀吉の前へさし出した。

それは妻の寧ね子ねからのものであった。浅井の残党や明智勢の襲撃に備えつつ一面留守をあずかる主婦として、老母の処置を案じ

たり、家中の女どもや、侍たちをも励ましながら、嵐のような不安と混雑の中で書いたものとしては、文字のすがたも落着いていて、日頃の便りと変っているふうは見えない。

しかし、さすがに内容の辞句には、これが最後の便りかも知れないと感じている痛切なものがこもっていた。

まず、老母のつつがなきを告げ、中国表の御進退も今こそ大事、おからだもこの時こそお大事——と述べ、お国くにもと許もとの儀は一切お案じ遊ばし下さいますな。日頃は何不自由なく安穩に暮させて戴あいている私たち女どもであります、こういう時に巡めぐり合あってこそ、内助ないじよの功いさとかも知れるものとありがたく思つて、御老母さまを中心に、侍女こしもとの端までみな励み合つております。——とい

うことから、終りに、

——たとえ万一の事あろうと、秀吉の妻がなどと、世に嘲わらわれるような始末はいたしませぬ。万々、この方にはお心遣づかいなく、どうかこの大事の時をお乗りこえ遊ばしますように、それのみを、御老母さまも念じ上げていらつしやいます。

さすがに、手紙の末になるほど、筆のあとも走り書きに見えた。秀吉は満足した。そして使いの者へ、

「立ち帰つて後、もしなお、母や妻が無事でいたら、見た通りを伝えておけ」

といったのみで、彼は忽ちその一室を出ていた。折ふし城頭で吹く一番貝の音が城内城下へ流れていた。

風かぜは追おいて手

姫路城の内外から立つ炊すい煙えんは一時天も賑にぎわうほどだった。一番員の音とともに将士は、みなみな飯を喰いにかかった。秀吉もまだ広間の中央にあつて、具足のまま飯茶碗をかかえていた。養子の秀勝、堀秀政、彦右衛門正勝、官兵衛孝よしたか高たかなどみな同座だった。

「何杯目か。これで」

秀吉は自分の喰べた量を傍人に訊いていた。給仕の侍が、

「四膳召し上がられました」

というと、苦笑して、

「湯漬ゆづけを、もう一碗」

とまた求めた。

箸はしの間にも、彼は、その旺さかんなる食欲と同じように、絶えまなく時務を聴き、処置を断じ、また発ほっそく足の措そち置をあれこれと左右へ命じておくなど、飽くまで旺盛な気力と周しゅうとう到な頭脳を働かせていた。

さきに金奉行へいいつけておいた在庫金の分配のことも、「終わりました」

と、告げて来たし、庫中の在米を家中の家族へ残りなく頒わけ与えることも、

「一同へ布告いたし、割当てが相すみました」

と、それへ報告された。またその中へ、

「ただ今、亀井殿かめいが鹿野城しかのじょうから馳せつけられました」

という取次もあつた。

「亀井茲矩かめいこれのりが来たか。これへ通せ」

と、秀吉は座のまま、そこへ迎えて、茲矩これのりの姿を見るや、や

あ元気が、と訊ね、

「因幡いなばは辺土といえ、いつまた、吉川勢が変を窺うかがわぬものでもな

い。後いよいよ守りを固く頼むぞ」

と、いった。

亀井軍は吉川勢の一面を牽制けんせいするため、天正八年以来、因幡いなば

の鹿野城に拠よつていたものである。秀吉はいま、彼をここに見て、以前の口約を思い出した。

「中国の事成る上は、御辺には、出雲の国を与えるであろうと、信長公にもその儀は御内諾ごないだくを得ていたが、今度、俄にわかに毛利と媾和こうわしたため、そこを与えるわけには行かなくなつた。で、御辺へはべつに他の封土ふうどを遣つかわそう。どこか望みの地もあらばいうが
いい」

「お忘れもなくありがとうございますぞんじまする」

と、茲これのり矩も抜からず礼を述べた。そして、いうには、

「このたび、明智の御征伐あるにおいては、自然、六十余州は風に靡なびいて御麾下ごきかと相成りましょう。従つて私の望む地といつても

日本国内では諸国共にさし合いがありましたしょうゆえ、願わくば琉球ゆうきゆう

球を賜りたいもので」

秀吉はふと眼をまろくして、こやつ俺の上手うわてに出たなといううな顔をしたが、直ちに手に持っていた金扇へ「亀井琉球守」と書き、傍らへ「秀吉」と署名して茲矩へ与えた。

諸将がそれを羨うらやんで、

「今日のお門立ちに、逸いちはや早くかばかりなお墨すみつき附を戴いた者は他にない。琉球王は抜け目のない奴じゃよ」

と、打ち興じているところへ、留守として姫路に残る小出播磨はりま守と三好武蔵守のかみが、

「はや二番貝が鳴りましょう。ただ今から先発の荷駄隊や人夫が

発足いたしまする」

と、また座の一方へ来て報らせていた。

「さらば」

と、秀吉も起ちかけた。

そしていよいよ、出陣するにあたって、彼は、留守役の小出播磨守と三好武蔵守のふたりへ、こう云い遺した^{のこ}。

「勝敗は天運にもある。万一、秀吉が光秀のために討たれたときは、この城に火をかけて、一物ものこすな。わが母、わが妻、一族にも皆、然るべく云いふくめてある。総じて、本能寺にみまかされた御方に従い参らすつもりで、潔くあることだ^{いさぎよ}」

一瞬、残る人々も、征く人々も、一様な厳肅に打たれていた。

すると、播磨守のうしろにひかえていた一僧がやおら膝をすすめて両手をつかえ直した。これは日頃秀吉も帰依きえしている城下の真言僧んごんそうなので、何か善言を呈する心であろうと見まもっていると、彼はようやく眉をあげて、憂わしげに忠告した。

「ただ今から諸軍を閲えつして、御本陣は明九日の、暁天の御発足の予定とうかがいましたが、量はかるに明日は、出でて再び帰ることなしという大悪日にあたります。何とぞ、吉日を卜ぼくして、明後日、

当所を御出陣なされますように。——この儀何とも心がかりのまま、折角のお立際たちぎわながら、御賢慮に入れ奉ります」

——と。秀吉は、もうぬツくと褥しとねから起ち上がっている。そして真言僧の切なる諫言かんげんが耳にはいったのか聞き流していたのか、

突然、満座の者の憂いを吹きとばして哄笑した。

「何をいう。それなれば、明日はわれにとつて大吉日ではないか。出でて再び帰るなしとは、明日ばかりか、毎度出陣ごとに、兵家の常とするところだ。——このたびとて、一死君恩に報ずるの覚悟、もとより生せい還かんを期してはいない。もしまた、幸いに、秀吉死なず、戦いに勝たば、何でこれしきの小城を我が居となすに足ろうか。べつに天下の地を相し大城を築いて住もう。——えききよ易えききよ経けいにもいう、卦けは卦面けめんに非ず解心げしんにありと。いずれにしても、またなき吉日。明日こそ待たれる。さあ、出ようか」

そのまま、彼は室を出た。そして城門の外、大手口の欄干橋で、なお後から続く小姓組の面々や諸将の出揃うのを待ち合わせてい

た。

二番貝が高らかに鳴った。すでに荷駄隊は発足を開始していた。そして陽も西に傾く頃、秀吉はここから三番貝を吹かせ、自身の床几場しょうぎばを城外へすすめて、海道口の印南野いなみのに移した。

三番貝は勢揃いの合図である。秀吉が印南野に床几しょうぎを置いた頃、もう海道の広野も松並木も夜になっていた。蜂須賀彦右衛門はちすかにいいつけて、十数名の祐筆ゆうひつを臨時に選び、明々と高張たかはりを左右に掲げて、参陣者の姓名を着到帳ちやくとうちように記させた。

宵から夜半過ぎるまで、先鋒、中軍、後陣の配備に人馬の影は地を埋めて濤なみのごとく揺れていた。なおそのうちにも、後から後から、取る物も取りあえず、具足を投げ懸け、得物を押ツ取って、

着到場へ来て姓名を記入する者がひきもきらぬ有様であつた。

秀吉は床几に倚よつて、終始、高張の下でそれを見とどけていた。

着到帳に記された姓名は一万余にのぼつた。時はすでに九日のうし丑の刻（午前二時）を過ぎている。秀吉は左右にある彦右衛門正勝、森勘八、黒田官兵衛などに向つて、

「出発の用意はよいか」

と、問い、一同が、

「何なんどき刻でも」

と答えると、さらば貝を吹かせよと命じ、起つて、床几を畳ませた。

螺らしゆ手が貝を吹く。

長く緩く、また高く低く、合図の貝が鳴りわたると、先鋒鉄砲組の大將中村孫兵次の部隊から一鼓六足にて前進を開始していった。

第二軍は、堀尾茂助吉晴。次に中軍がつづき、羽柴秀勝は、養父秀吉の旗本たちより二、三町先に立って行軍し、後陣には、秀吉の弟秀長が將として続き、総軍一万は、五段になって、姫路城外の印南野いなみのを立った。

この頃ようやく、夜が明けて、海道の松のすがたの一つ一つも鮮やかとなり、東の方、播磨灘はりまなだの水平線と横たわる黎明れいめいの雲のあいだに、真ツ赤な旭きよくじつ日が出陣の足なみを祝ことほぐようにさし昇っていた。

「風は追い手だ。見よ、旗、馬じるし、吹貫ふきぬきなんど、この西風に、みな京の方へ吹き靡なびいておる。一個の人命如きは、朝あしたあつて夕べも知れぬが、量はかるに、わが軍の門出かどでは、天もその名分を嘉よみし、前途を味方し給うものと思われるぞ。まず、腹いっぱい、鬨ときをあげて、この発足を天下に告げよう」

貝の音をもつて、人馬の足なみを止め、まず中軍から、大だい喊かん呼こをあげた。それに和して、全軍も濤なみの如く武者声を張りあげた。中には、朝陽あさひに向つて、馬簾ばれんを打ち振る隊もあり、一斉に槍の穂をさし上げるのも見え、いなく馬の意気までが、すでに北勢明智光秀の軍を呑のんでいた。

一路、摂津せつに入り、尼ヶ崎に着くまでは、これまでの急行軍と

ひとしく、落伍する者は捨て去り、人馬ともに息を休めず、敢えて隊伍諸卒の整列や規矩きくにとらわるるなく、ただ、急ぎに急ぐことを旨として来た。

尼ヶ崎に着いたのは、十一日の早朝だった。際限なくなだれ入って来る軍隊に戸を開けたばかりの民家はただ目を睜みはりあつていた。

秀吉は路傍に馬を止め、

「禅寺でもないか」

と、休息する場所を求めさせていた。

「あれに一しょうあん小庵あんがございます」

と指さす小姓を案内に、海道から少し横道へ入って、附近の松

原に馬を繋がせた。

「どこでもいい。どこでもかまわん」

秀吉は頻りに云っていた。なぜならば仰ぎょうてん天して迎えに出た

和尚おしょうも左右の者までが、余りに何の設備もない小寺に過ぎない

ことを諄くどく言い訳するからだった。

「上がるぞ」

彼はもうその濡れ縁を上がって、気に入った部屋の一つに坐りこんでいる。堀秀政もつづいて坐す。諸将、小姓などはそこには詰めきれないので、裏から表まで、ある限りの空地を占め、この小さい禅寺の内に人々はなく、人々の軍中に禅寺があるようなかっこう恰好かっこうになってしまった。

「秀勝。これへお坐り」

白湯さゆひとつ飲むと、秀吉は、すぐ隣室に座をとって休んでいた。養子の秀勝を膝近く呼びよせた。

秀勝は、十五歳であった。

信長の第四子として生れ、幼名は於次丸おつぎまるとよばれていた。秀吉の養子となつてからも、もう五、六年にはなる。

秀吉が中国出征中は、長浜の城にいて、領下の政治を沙汰していたが、ことしの三月頃、信長の命をうけて、養父秀吉の麾下きかに参じ、具足始めの式をうけ、児島の城を攻めて、初の戦功をたてたのであった。

「秀勝」

「はい」

「お許もとの眼元を見ておると、亡しき御方がしの惚ぼれてくる。信長公に
よう似ておられる」

秀吉はしげしげと眺めた。秀勝は、諸将の中で今日この時、何
事を養父からいわれるのかと俯うつむ向いた。秀吉は眼をうつして傍ら
にいた堀久太郎秀政と秀勝とを等分に見てからこう云い出した。

「先君御落命の報らせをうけて以来、高松から当地にいたるまで、
お許もとらも見て来た通り、筑前は精進しょうじんけつさい齋さいを守つて来たが、こ
こ尼ヶ崎の地は、すでに敵の明智軍とも指呼しこの間近にある。――
きようにも、明日にも、いつ敵とまみえて、合戦に及ぶかもわか
らぬ」

秀勝は丸ツこい眼をあげた。若々しい感情はもうその眼の中に沸たぎる湯となつてあふれかけている。秀吉の親としての氣持も、信長の死後は一ひとしおいじらしさと慈いつくしみを加えていた。

「わしも四十七歳、はや老武者の組に入りかけて来たが、このたびの合戦こそは、畢ひつせい生のもの、先君のとむらい合戦、いざといわば、みずから鎧やりも持ち、太刀打ちもなす覚悟でおる。——が、年はあらそえん、食物を精進しょうじんもの物に限つておると、何となく力づかぬ。そこでわしは今日をもつて、精進を廃やめるが、お許らは、若いのだから、なお、精進をつづけておれよ」

「はい」

秀勝は明答した。久太郎秀政もうなずいた。

「——次には」

と、秀吉はなお語をつづけて、秀勝へ諭さとした。

「敵ひゆうがの日向守のかみ 光秀は、お許にとつては親のかたきたり、また主しゆの仇あだたり、申さば、二重の敵である。いうまでもないことながら、光秀を討たずして、お許の生命は天地にあり得ない。誰よりもさきに先陣せよ。わしより先に討死せい。養父も汝けなげの健気を見とどけた上で討死いたすであらう」

「かならずおくれは取りませぬ」

秀勝は両手をつかえた。諸将は厳肅な氣に打たれていた。秀吉がこの勝敗に一死を期している容子ようすは、疾とく姫路から見ていたが、さらに、強固な覺悟を、敵近きこの尼ヶ崎へ来て、ふたたび胆に

銘じ込まれたのであった。

「お湯が沸きましたか」

との、寺僧のことばに、彼は禅庵ぜんあんの裏へ出て、行水をつかった。そして、命じておいた食事を摂とった。彼の膳には調理された魚鳥の肉が豊富にのっていた。彼は、幾日ぶりの精進落しに、胃の腑ふをみたした。

終ると、一房へ入って、ごろりと眠った。一刻、軍馬もしずかに、蝉時雨せみしぐれの声のみがつつんだ。食と眠りが、秀吉の戦備であった。

すず
涼しき頭あたま

ここ天下の諸相は急激に一転したが、経て来た日かずを顧みれば、信長の死後、まだわずか今日で十日程しか経っていない。

近畿きんきの人心は、本能寺以来の動揺を、今なおそのまま抱いている。柴田、滝川は遠隔にあり、徳川は自国へ退き、細川、筒井の向背こうはいは知れず、丹羽にわは大坂表にあつて織田信澄おだのぶずみを始末したという風聞のみで、これもそれ以上に出ていない。

「——今朝来、尼ヶ崎には、はや筑前守の先手、中軍の諸勢が、続々到着して、大物だいもつの浦、長洲ながすのあたり、兵馬が充満して見える」

この噂は、事実のまま、十一日のその朝から風の如く、摂津せつを

中心に拮ひろまった。

けれど、なお、

「よもや、そう迅はやくは？」

と、半信半疑の者が多かつた。

それというのが、やれ徳川殿が西上して来るとか、北畠殿が進撃中だとか、どこで誰と明智とが接戦中だとか、余りに耳を捉とらわれやすい類似るいじの風説が多いことと、もう一つは、

——羽柴軍は毛利に釘くぎづ付けにされておるため、そうやすやすとは中国をうごき得ない。

という先入観も、一般の常識になっていたからである。

しかし、事態の中核に身を置いて、真に、秀吉を観み、時代の推

移を直視していた一部の人々にだけは、もちろんそんな錯誤さくごはなかつた。何といつても、旧信長麾下きかの諸大将のうちには、すでに動かない秀吉の支持者が存在していた。

多年、秀吉が中国で示して来た実際的なけいりやく経略けいりやくは、西日本の戦雲を背景として、遠地にある諸将のうちへも、いつのまにか、秀吉なる者の真価とその偉風を、かなり大きく投影していたのであつた。

これをもつて見ると、彼の長い苦節は、ひたすら信長への忠勤にほかならなかつた。が、結果的にいえば、秀吉は秀吉自身の素す地たじをこのあいだに築いていたということになる。

ともあれ、一部の人士は、秀吉が毛利と和を結んだと聞いたと

きから、

「さてこそ。東上の肚はら」

と、彼の意中を読み、また、日頃の期待を裏切られなかつた歡はらびをも加えて、彼が現地を去り、姫路を經へ、奔ほん転てん、摂津へ向けて驀ばくしん進しんして来るあいだにも、その途上へ向けて、

（早々来り給え。待つこと切）

と、飛報したり、また、

（明智方、その後の動静は、かくかく也）

などと早打して、その旗幟きしへ鶴かくしゆ首しゆしていたものだった。

大坂の丹羽長秀なども、

（まずは、彼の来るを待つて）

という態度で書簡を通じていたし、中川瀬兵衛、高山右近、池田信輝、はちや蜂屋頼隆等、みな同様に心を寄せていた面々である。

わけて高たかつき槻の高山右近と茨いばらき木の中川瀬兵衛の二将は、在城の地も近いので、秀吉が尼ヶ崎辺に着いたと聞くと、すぐ一部の手勢をつれ、また各、ことし八歳ほどになる質子ちしともなを伴って、秀吉の休んでいる禅寺へたずねて来た。——陣門の士は、前後して来た中川瀬兵衛へも高山右近へも、

「殿はただ今、お寝やすみ中ですが」

と答えたのみで、二将の来会を狂喜して、あわてて取次ぐなどということはなかつた。

ふたりはやや意外だった。

瀬兵衛も右近も、内心、自分たちの向背こうはいが持つ価値と力を知っている。

信長の生前までは、二将とも明智の麾下きかに置かれていた者である。その兵力ぐるみ一方の陣営へ転じて来ることは、敵味方の比率に二倍の狂いを生じさせるわけになる。

また、瀬兵衛は茨木の城主だし、右近は高槻の城を持っている。この領内を通らず京都へは出られないし、明智勢と接触はできない。ほとんど敵中にあるといってよいこの二基地を、戦う前に足場となし得るのは、作戦にも運輸糧食の上にも、大きな利といわなければならない。

で、当然、ふたりは、自分らが秀吉の陣門に参会してゆけば、

秀吉としても、待っていたという顔まではしなくても、

——よくぞ、早く。

と、迎えもし、歡びもして、歡待かんたいを示すであろうと思つていたらしい。

ところが、案のほか、いまはお寝やすみ中だからしばらくお待ち下さい、と陣門の将士はいうのである。それもよいが、寺内ほとんど人馬で、待つ間を休息している特別の設けもない。

中川瀬兵衛も、高山右近も、兵を外におき、伴つれて来た質子ちしと少数の従者と共に、境内の一隅に佇たずんでいるしかなかった。

ただ、その間も、時を忘れて眺められていたのは、後から後からと到着して来る遅れ馳せの軍馬に見える旺さんな流汗であつた。

後に大村由己おおむらゆうこが記録にも、

—— 諸卒相揃ハズト雖モ、イヘド九日二姫路ヲ立チ、昼夜ノ境モ

ナク、人馬ノ息ヲモ休メズ、尼ヶ崎ニ至ル。

とある秀吉の文字通りな急行軍のために、途中で落伍したものが、ひきも切らず、続々と、まず門前に来て、

「何の某なにがし、ただ今、着陣」

と、呼ばわると、これに立っている蜂須賀、森の二将が、どの辺たむろに屯して命令を待てとか、また、誰の部隊が彼処かしこにおるから、その手について休めとか、いちいち指さして、それらの軍隊に所属と位置を与えていた。

また、どこの使者か、どこから帰つて来た使番つかいばんか、寺中と

外との往来も頻繁だった。その中には、どこかで見覚えのある武士もあつて、

「はてな。今のは丹後の細川家の士さむらいではないか」

と、瀬兵衛は、ひとりの背を見送つて、つぶや呟いた。

光秀と細川藤孝ほそかわふじたか、その子忠興ただおきとの関係は密接である。藤

孝と光秀とは、多年、莫逆ばくぎやくの友たるのみならず、光秀のむす

めの伽羅沙がらしやは、忠興の妻でもある。

(細川家から何の使いを?)

これは今ここにある二人の関心であるばかりでなく、天下の衆目がみな強く意識している問題だった。——瀬兵衛のつぶやきに和して、右近もふとこう疑つた。

「昼寝と申ししていたが、実は筑前はもう眼醒めておるのではあるまいか。何にしても、余り無愛想な」

不満を顔色に現わして、すでに帰ろうかとすら思っているとき、ようやく、秀吉の小姓が走って来て、どうぞと、狭い禅庵の奥へ案内に立った。

通された一室にも秀吉は見えなかった。しかし疾うに目醒めていることは確實である。方丈ほうじょうかどこか近い所で大きな笑い声がしているからだ。かかる応対をうけるのは、中川瀬兵衛にしても高山右近たりとも甚だ心外らしかった。

——秀吉、何者ぞ。とつい思いたくなくなって来るのだ。彼も信長の遺臣なら自分たちも信長の臣下だ。いまだかつて、彼から高下

の差別をうけるような恩顧おんこをうけた覚えもなし、主従の約をしたわけでもない。

ただ、今日これへ自分から駈けつけて、彼の陣門に駒をつないだものは、故主の敵光秀を討たんという一いっぺん片の耿こうこう々の志を一つにする者と思うたからにほかならない。しかるに、その同僚を迎えるに、この態度は何事か。こんなことなら吾れからここに臨むのではなかった。秀吉が礼を厚うして迎えに来るのを待つて来てやるのであったに——と、右近もほろ苦い顔して悔いているようだし、瀬兵衛も頗る洩じゅうめん面めんをつくっていた。

それと、この二人の不快を手伝つてよけい堪らないものにしてゐるのは、その日の暑さだった。梅雨つゆはとうに明けているはずだ

が、いつこう空気は乾燥しない。そして空にはのべつという程、この頃の天下を象徴しているような去きよしゆう就のの定まらない雲が往来していた。その雲間から折々かつと照りつける陽はまた脳膜のうまくを麻痺まひさせるような執しつこさと強烈な光を持っている。

「暑いのも、瀬兵衛どの」

「ムムム。風もないし」

ふたりも勿論、脛すねから籠手こてまで身を鎧よろつていた。近来の具足は年々敏びんしやう捷しやうを貴んで軽略けいりやくになつて来たとはいつても、厚あつい革かわど胴どうの下には汗が流れるようだったにちがいない。

「筑前も、もうよい加減に、出て来そうなものではないか」

瀬兵衛は軍扇ぐんせんをひらいて、しきりに頸くびをあおいでいた。そし

て、敢えて下らざる意志を示すもののように、右近とともに、上座を取つて坐つていた。

ところへ、やあ、という声が風とともに入つて来た。秀吉である。二人の前へ来て坐るやいなや繰り返して云つた。

「やあ、どうもすまぬすまぬ。寝起きに御本堂へ出て、これをやつておると——（自分の頭をぺしやぺしや叩きつつ）ただ今、遠路から細川藤孝、忠興父子の使者が見えて、帰国をいそぐのとに、さきにその方の談合をすませた。そのため、まことに、お待ちせしたようだが」

と、いつに変わらぬ体ていで、座の上下などは眼のうちにない。

「ほう」

とのみで、ふたりは挨拶もわすれて、秀吉の頭ばかりながめていた。

秀吉が剃髪ていはつしていたからである。剃りたての頭に庭木のみどりそりがてらてら映つて見える。

「先君の弔合戦とむらいと申して、せがれ秀勝も髪を剃ろさんといい、堀秀政も剃髪すると云い出したが、お身らは若い、それまでには及ばぬ。武者振むしやぶりこそ作れと、ようやくあちらで止めて参つた。――

――そして今、二人の髪の端だけを切らせ、筑前のと添いえて、お位牌はいの前に供えて参つたが、おかげでこの暑さにも、頭だけは涼しくなつた。はははは。入道にゆうどうとは涼しいものよな」

とはいえ、気になるものとみえて、秀吉はしきりにそれを撫なで

まわしていた。

瀬兵衛も右近も、最前からの不快は拭き消された。こんどの一戦を前にして、秀吉が剃髪して臨むまでの決意を見せている以上、些末な私情に駆られるなどは、みずから恥ずべきだと思った。

ただ、いかんせん、談話中、秀吉の頭を見ると、折々、おかしくなつて堪らなかつた。

近頃は余り面と向つては人もいわなくなつて来たが、秀吉をさして「猿々」と呼び慣わしていた頃の先入主が、今もこの二人のどこかに潜んでいた。そしてその旧觀念と、眼の前のものとは、見る者の心のうちで、相互に擦つたい感情が挑み合っているらしい。

「迅はやいには一驚を喫した。高松からこれまでの間、ほとんど、眠るまもなかつたでござろうに。——いや、お元気を見て、われらも安心いたしました」

瀬兵衛が、おかしさを怵こらえて、まずは尋常に挨拶すると、秀吉も急に思い出したかのごとく、

「いや、途上度々、お飛脚を賜わつて、かたじけない。それによつて、明智方のうごきも知れ、また何よりの儀は、御両所の味方だにあればと、大いに意を強ういたして参つた」

と、世辞をいった。

高山右近も中川瀬兵衛も、そんな下手へたな世辞にすぐころりと欣よろこぶほど甘くはない。聞き流して、すぐ秀吉に注意した。

「いつ大坂へ向われるか。われはともあれ、大坂表には神戸信孝様もおられ、丹羽五郎左も、貴公の来るのを待ちぬいておる」

「いや、敵のおる方角でもない大坂表へなど、いま参つておる暇はない。大坂へは、今朝すぐ使いを出しておいた」

「信孝様は、先君の第三子。貴公から出向かなければ動くまい」

「秀吉の陣門へ来いと申し上げぬ。先君の弔合戦とむらいに参会せられよと云い遣やつた。側には丹羽長秀もおることゆえ、常時の礼や、つまらぬこけんにこだわつておられるようなことは万あるまいと思う。かならず明日は参陣されよう」

「伊丹いたみの池田父子は」

「これは相違なく会同する。まだ見えぬが、自分が兵庫まで来た

とき、使者をよこして、此方こなたまで誓紙をとどけて参つておる」

味方の糾きゆうこう合ごうについては非常な確信をもっている容子ようすだ。わ

けて山陰の細川父子が、明智家とは切つても切れぬ姻戚関係いんせきかんけいにあ

りながら、光秀の誘いを退け、却つて、今も今とて、家臣まつしの松

下康たやすゆき之を遠くから使いによこして、
(断じて逆徒には組みさない)

という誓約を入れて来たばかりである——という事実を、秀吉はかなり得意そうになつて、また、これが当然な世間の大勢であり武門の大道でもあるといつて、二人へ力説した。

そしてなお種々はな談しの末、やがて中川、高山の二人が、いずれも伴つて来た幼い者を、質子ちしとして、秀吉の手許へあずけようと

申し出ると、秀吉は大いに笑つて、

「無用無用。御両所のお心はよく分つておるし、かつは、このたびの一戦は、そんな旧いふる習慣によつて辛くも結ばれ合う味方同士ではないはずだ。幼少の和子わこたちは、早速、各のお城へお返しあるがよい」

といつて断つた。

雷らい気き

秀吉の休んだぜんあん禅庵は栖賢寺せいけんじであつたが、これと並んですこし先に広徳寺こうとくじがある。彼の本陣はこの二寺をあわせ用い、刻々

に増える軍勢を、附近の長洲から大物の浦まで充たして、十一日はここで過した。

その晩は、広い闇の諸方で、しきりに軍馬がいななき狂った。

「明智方のしほうでんまさたか四方田政孝の斥候隊が、近くの村落に出没している

――」

というような風説もあつて、陣中は夜どおし緊張しきつた裡うちにこもこも一睡をとっていたが、馬が寝つかないのは、それとは無関係であつた。宵の頃からいちめんに掻き曇ともなっていた空から折々電光がひらめいて、遠く近く雷鳴も伴ともなっていたせいであろう。

「天王寺辺から東のほうは、ひどい大雨だそうな」

大坂表から来た早馬の者にそう聞いた哨しょうへい兵が、共に哨しょうか

戒いに立っている友の影へ向って話している。

「この辺はポツとしか降らないが、この風はどこかで降っているようなあんばいだ。あすは雨かな」

「嫁入りの晩と、戦いの出がけに降るのは、縁起がいいというから、ぎつと来るのもいいだろう」

「敵もそう云っているかも知れまい」

「大きにそうだが、同じ大地へ天から降る雨でも、光秀の部下とおれたちとは、濡れ心地が違うだろう。みろ、馬さえあのよう
に勇んでいる」

「よかった、おれたちは」

「なにが」

「明智の家中でなくてさ」

「ははは。まっただ」

闇の中の人声を聞きとめて、秀吉はふと佇たたずんだ。昼間、快睡かいすいしたせいから、眠れぬままに、彦右衛門と茂助をつれて野営している士卒の様子をそつと見廻つて来たところだった。

「彦右衛門。聞いたか」

秀吉は顧みた。いま、哨しょうへい兵へいが大勢で語り合つていたことは、をさして云つたものであることは勿論である。

「戦いは、勝つておる。もう勝つた。そう思わぬか」

「まことに」

彦右衛門も茂助も、主人の気もちを正しく解といてうなずいた。

また、ここに聞く人ありとも知らず放言していた士卒たちの正直なことばにも心から共鳴した。

「もう丑刻うしの頃か」

「そうなりましょう」

「戻ろう。やがて進撃の貝も鳴るであろう」

裏門を探つて寺中へ帰つた。附近の農家であろう、長い声を曳いて牡牛おうしが啼なく。総じて、野良犬も鶏も鼠も何となく官能を尖とがらせているとみえて、どこの営でも兵は深々と眠っているが、動物たちは夜どおしかさこそと物音をたてていた。

「お尋ね申していたところでした」

秀吉が灯もない縁先に腰を休めると、小姓たちが来てすぐ告げ

た。

「大坂表の丹羽にわどのから、早馬のお使いが着かれております。すぐ御返書をいただいで、即刻、立ち帰らねばと、しきりに急いだり案じたりしております」

「また、来たか」

同じ所からこれで三度目の早馬である。秀吉は苦笑した。この方面の問題だけでも今夜は彼を寝かさぬようにできていた。

秀吉は縁に腰かけたまま「大坂の使者をこれへ呼べ」と迎えにやり、やがて彼の前に来て平伏した使者の手から、丹羽長秀の書簡を直接受けとった。そして一読すると、祐筆ゆうひつに筆を執とらせて、

「すぐ持ち帰れ、仔細は書中に」

と極めて簡単な一札を使者に託した。

けれど返書の文意だけでは余りに簡に過ぎると思つたか、使いの者が倉皇そうこうとして起ちかけると、なお、ことばをもつて伝言をたのんだ。

「やがて夜明けと同時に、秀吉は軍をすすめて、きようにも敵と一戦の覚悟である。すでに敵は眼前にあることゆえ、たとえ味方の諸勢が揃わぬまでも、兵機さえよろしと見れば、いつでも時を移さず交戦に入るであろう。——折角、信孝君のぶたかぎみをお迎え申して、

子としては、父なき御孝道を尽させ給い、臣としては先君の弔とむら

合戦いがっせん、ここは死生も御一緒に、御旗をひとつに、昨朝来、書

簡を以て再三御参会を促うながしまいらせたが、何のかのと御理由のみ

立てられて、いっこうお腰の上がらぬ様子。……さもあれば是非なし。悠々ゆうゆう、いつまでお待ち申しあげておられぬ場合。後に、お悔い遊ばすことなどないように、丹羽殿も切にお心入れあるこそ輔佐ほさのお役目であろうと。——左様に、筑前が申しおつたと、あからさまに伝えてくれい」

使いは恐懼きょうくして帰つた。使いの者のうけた感じでは、秀吉が多少、癩癩かんしやくを起しかけているように見えたかもしれない。

事実、きのうから三度も四度もむだな早馬と時間を空費しながら、まだ煮え切らない書面をよこしたり、返書を求めて来る神かんべ戸信孝のぶたかの態度には、秀吉もこの多事と兵機を寸刻たりと、ゆるがせに出来ない中だけに、やりきれないような鬱陶うつとうしさを覚え

ていた。

神戸信孝としては、秀吉が、尼ヶ崎まで来ていながら、大坂へ来て自分に謁えつを執とらないことが第一の不満らしく、

(自分は、信長の子だ。我から彼の陣へ参じる理由はない。予のこけんにもかかわる)

という面目とらに囚とらわれているのは確かだったが、それはそうとはいわず、丹羽長秀の名をもって、

(部下の大半が逃散したため、なお御軍勢の整備がつかぬ)

とか、また、四国の長曾我部ちようそかべの動静がさだかでないから、一兩日はなお見定めたいとか、あらぬ理由を立ててしかもなお、いちど貴所の方から大坂城へ来て、ここで御軍議を固められては如何いかが

か——などと悠長なことをいつて来ている。

で、秀吉はいま帰した使いに託した書中にも、これが最後の書状と断つて——

（かくの如き時は生涯二度とはありませぬぞ。秀吉とて明日はこの世の者でないかも知れず、かかる時を逸いっして悔いを千載せんざいにのこし給うな）

と極言して遣やつたほどだった。

一方の朝雲が白みかけた。今朝も雲脚くもあしは早く、まだ他地方はゆうべから吹き暴あれているような天候である。

兵糧用意の貝の音が陣々で鳴った。

海の近いせいもあるろう。夜明けのひとつころ頃は濃密な霧だった。そ

れに一万以上の軍勢がつかう兵糧の炊ぎに、陣々の炊煙もたちこめて、松の多い尼ヶ崎一带は、松か霧か人か煙か。

秀吉は寺内の一隅にある老松の根がたに筵むしろを敷かせ、堀秀政、中川瀬兵衛、高山右近、黒田孝高よしたか、蜂須賀彦右衛門などと、膝組んで何か談笑を交えながら、そこで一緒に兵糧の握り飯を喰っていた。

「精進を廃やめて、魚鳥を充分に喰べたせい、きようは何かしら非常に力づいた気がするよ。やはり食は士氣の根元だな」

秀吉の矛盾むじゆんを、彦右衛門が側から笑った。

「御剃髪ごていはつと同時に、肉食をお始めになられた御出家は、古今、殿をもつて嚙矢こうしといたしましょう」

「什^{そも}生^{さん}。それがわしの真骨頂だ。秀吉の出家は坊主の出家と甚だ意味がちがうからな」

これが生還を期せざる戦いに入る前の筵^{えん}だらうかと思われるほど賑やかな朝餉^{あさげ}である。そこへまた昨夜来、高槻の北方、芥^{あくたが}川^わ方面へ偵察に行っていた加藤作内光泰、福島市松などが帰つて来て、

「おいいつけの地方、隈なく巡^{めぐ}りましたが、敵らしい者には会いません。けれど民家は相当騒いでおります。昨日の昼、明智の小部隊が通過して、当所のお味方の動静を訊きあるいた上、勝龍寺方面へ立ち去つたと申しおりました」

と復命した。

秀吉は直接二、三の要領をたずねた上、ひと休みして、早く兵糧をとつておけと犒ねぎらつた。

程なくまた、

「ただ今立ち帰りました」

と、中村孫兵次、山内猪右衛門いえもんなどの一小隊が復命に來た。これも昨日の昼から出てようやくいま歸つた斥せつこう候部隊である。そして命ぜられた先も、渋川筋から洞ヶ嶺ほらみね附近の地域なので、かなり深入りして來たことが察しられる。

「洞ヶ嶺にある筒井順慶つついじゆんけいを訪ねて參つた光秀は、きのうお味方がこの尼ヶ崎に着いたと聞き知ると、にわかしもとばに下鳥羽へ立ち退いたといふことたでござります」

孫兵次の齎もたらしたことは重大な情報といわなければならぬ。諸将は聞き耳たてた。秀吉の眼も急にらんとして輝きをおびた。

「して、筒井は？」

「依然、洞ヶ嶺にあります」

「光秀はそれに抑えの兵をのこしておるか、否か」

「齋藤利としみつ 三の一軍を留めて去ったようです」

諸将は顔見合わせた。秀吉も黙然とうなずいた。それによつて、筒井順慶の向背はほぼほく卜し得たからである。

秀吉はまた、下鳥羽へ移つた以後の光秀が、さらに前進して来るもようか、後退する気配かを訊ねたが、そこまでのことは、中村、山内の二人にもわからないので、ありのまま、

「予察いたしかねます」

と答えた。やがて二番貝が鳴る。秀吉の周囲にいた諸大将は皆どこかへ駆け散つて行く。間もなく各隊は尼ヶ崎を発し、山崎方面へ向つて進軍を開始していた。秀吉の馬上姿もまた、馬簾ばれんともにも押し流さるるように軍勢の中に見えた。

淀よど・山崎やまざき・天王山てんのうざん

伊丹いたみの池田信輝も、一子勝九郎しょうくろうを伴つて、この日、途中から秀吉の軍に投じた。信輝も、今朝出陣の間際に、剃髪ていはつして、名も勝入しょうにゅうとあらためていた。

秀吉とは、清洲時代からの莫逆きよす ばくぎやくの友であり、おたがいの莫逆ばくぎやくも知っていれば長所も知り合っている仲である。

「やあ、御身も髪を剃おろされたのか」

「貴公も剃髪したか」

「期せずして、ひとつだったな」

「むむ。ひとつ心だった」

秀吉と信輝とは、それだけで他のことばを必要としなかった。

信輝は携たずさえて来た手勢四千人と共に行軍に加わった。

昨日以来、目立って、軍勢は強力になっている。秀吉の手兵約一万が最初のものであったが、高山右近の二千人、中川清秀の二千五百人、蜂屋頼隆の一千人、それに今また池田隊四千を加えた

ので優に二万を超えようとしている。

こうして全軍が、右に淀川を見、左に能勢のせや有馬ありま地方の山々を見ながら、北進して行くうちにも、なお二十人、三十人の郎党や家の子を率ひきいて来る地方郷党の小部隊の参加もひきもきらぬ程だった。

それらの者は、口々に参会の意志をこう表明した。

「明智の行為はゆるされぬ不道である。逆を討ち順を扶たすくるは武門の当然な鉄則でござれば、従来が行きがかりや旧縁よしの誼よみなど一切かえりみなく麾下きかに馳せ参じてござる」

このことばはほとんどみな一致していた。あながち羽柴軍の優勢だけを見て勝目に体を賭かけて来た者ばかりとはいわれない。

ひる
午ごろ 茨木いばらきに着き、小憩しょうけいのあいだに、秀吉は諸方の情報を聞きあつめ、また前進をつづけ、茨木と高槻たかつきの間、富田とんだに陣営をさだめた。

布陣の令が終ると、秀吉はすぐ部下を会して、作戦を評議した。そのとき端はしなくも中川清秀と高山右近のふたりが、

「先鋒はそれがしが」

「いや、先陣は自分に」

と、互いに云い張って、いずれも譲ゆずろうとしない小争論を起した。

高山右近はいう。

「敵近き地にある城主がその手の先陣たることは古来弓矢の作法

でもあれば、何と申されても、中川殿のあとにつくわけには参らぬ」

中川清秀も負けずにいう。

「先陣後陣のわけ目は、何も戦場と居城の近い遠いなどということで定めらるべきものではない。要は士馬精銳の如何にある。将たる人の覚悟と質にある」

「では、この右近には、先鋒せんぼうとして敵に当る資格がないといわ
るるか」

「いや、御辺ごへんのことは知らん。しかしそれがしこそ、余人におく
れは取らぬものと、みずからかたく信じておる。故に、先陣はそ
れがしにと、誰へ遠慮もなく望む次第でござる。中川清秀にこそ

お命じあれ」

清秀はそういつて秀吉に迫った。右近も秀吉に手をつかえてその命を仰いだ。秀吉は、当然、主将たるの態度を床しょうぎ几ぎに構えてけっさい決裁した。

「いずれの申し条も道理であれば、中川も一線に陣取れ。高山ももちろん一番合戦の所に出て、ことばに辱はじぬ功名を取ったがい

評議中にも、続々、斥候隊からの情報が入った。

「きのう以来、洞ヶ嶺ほらみね、八幡の陣を撤した光秀は、山崎、円明寺あたりの兵力も結集し、或いは、京都坂本方面まで後退するのではないかのような空気も見えましたが、俄然がぜん、今朝以来、明らか

に攻勢を示し、その一枝隊は早くも勝龍寺あたりまで転進しつつある情勢にござります」

この報らせをうけると、帷幕いばくの諸将は俄然、緊迫した眉を示し合つた。ここから山崎、また勝龍寺との距離は、ほとんど、電でんち馳いっつ一突の間でしかない。諸将のぎらぎらした眸にはすでにその辺に出没する敵影が見え始めているようだった。

中川、高山などは、先鋒の任を負つたので、すぐ立ちかけた。そして秀吉に向い、

「時を移さず、ここの本陣も直ちに、山崎あたりまで、お進めあつては如何」

と決断を促うながした。

秀吉はこの場合の色めき立って来たものには乗らず、至極悠長に答えた。

「自分はここでもう一日、神戸殿かんべのお出を待つ所存だ。半日一夜たりと、大事な機の刻々うごく時とは思うが、何としても、このまたとなき戦いに、幾名もおる先君の御遺子のお一方ぐらいはお加え申しあげたい。神戸殿をして生涯、悔いをのこし、世上にも顔向けならぬようなお立場にさせたくない」

「でも、とこうする間に、敵に有利な地勢を占めしられては」

「されば、神戸殿を待つにも、おのずから際限がある。——明日ともなれば、いずれにしても、山崎まで秀吉も出向かおう。全軍、山崎に集結した上、さらに聯絡れんらくを取るから、各はすぐ前進し

ろ」

「よろしい。ではなお刻々の状況は、後刻、使者をもつて」

と、中川、高山は立ち去った。

すなわちここを発した先鋒は一番隊高山、二番隊中川、三番隊池田勝入という順序であつた。

富田とんだを離れるや否、高山隊二千余は、もう眼のまえに敵軍を見ているような迅はやさで驀ばくしん進し出した。中川瀬兵衛以下、二番手の勢も、その馬煙を望んで、

「山崎にはもう敵勢が入っているのか」

と、疑い合い、

「それにしても、余りな急ぎ方だが」

と、あやしまれる程だった。

山崎の町へ入るとすぐ、高山右近の部下は、町をつらぬいてい
る道の木戸を封鎖して、附近の小道まで一切交通を遮断してし
まった。

あとから来た中川隊は、当然、その遮断を喰って、さてはと、
高山隊の急いだ理由を覚^{さと}つたが、こうなると意地でも彼の第二陣
に控えてはいられない。

「よし。その分ならば」

と、中川瀬兵衛はここの要所を捨てて、急に山の手方面へ向つ
て行った。その方面に見える一高地、名は天王山。

秀吉はついにその夜は富田に宿営したが、翌十三日の午^{ひる}近い頃

になつて、ようやく、

「ただ今、神戸かんべ信孝君ぎみ、丹羽にわ長秀様などの一軍が、淀川の岸まで到着されました」

という報らせをうけた。

「なに。信孝様が、見えられたとか」

そのとき秀吉は、それを耳にすると共に、ほとんど、床几しょうぎを倒して駆け出さんばかり歓んで云つた。

「馬を、馬を」

彼は、営外に立つて、あたりの者へ急せきたてた。そしてそれへ乗つてから、

「お迎えに行つて来る」

と、陣門の人々へ、馬上から振り向いて、ひと言告げ、淀川の岸まで急いだ。もちろん数騎の部下はあとから駈けつづいた。

満々たる水をたたえた大河のそばには、約四千人一隊、約三千人一隊と、ふたつに別れた軍隊が、船や筏いかだをすてて、馬に草を飼ひ、兵は河原に憩いこうていた。

「信孝君はいずれにお在わるか」

秀吉は大声で求めながら、自分を見まもる汗くさい兵の中に跳び降りた。

たれも秀吉とは思わなかった。

「どなたでござるか」

「筑前じゃ」

諸卒は初めて目をみはった。

秀吉は迎えも待たず、一部將のあとを見て、兵馬のあいだを押し分けて行つた。

照り返す河原の水べりを避けて、出水あとの堤崩れが見える一喬きょうぼく木の下に、三七信孝は、馬印を立て床しやうぎ几いこをすえて憩うていた。

ふと、振り向くと、秀吉が、何事かを大声で呼びかけながら近づいて来る。

その顔、その目、その声に接すると、信孝は何かしら、はッと、すまないような気持ちに胸てしおをうたれた。

また、父信長が、多年手塩てしおにかけて来た一家臣が、このときは、

主従の情をこえて、骨肉にも近いような感情で、つよく眼に映つた。

「才、筑前か」

彼が手を伸べるも待たず、側近くまで早足に歩いて来た秀吉は、いきなりその人の手を取つてかたく握りしめ、

「信孝さま！」

それだけをいった。そしてあとは何もいわず、いい得ず、眼と眼に語らせていた。

どつちの眼にも滂沱ほうたたるものがながれた。その涙のなかに信孝は父亡なききよなうの気持をことごとくこの一家臣に語り尽していた。秀吉もその胸のうちを察すればこそであった。彼はやがて、固く

握っていた相手の手をやわらかにはなした。それと共に、地にひざまずいて、なおしばし鳴咽おえつしつつ云った。

「よくぞ。よくぞ……お渡り下されました。いまは何事も申しあげている違いとまもなし心も他にありません。……ただ、そのみをあげがたくお礼申しあげます。またこのことこそ、先君の御霊みたまもかならず泉下せんかにおいて御満足に思し召しておらるるであろうことを信じて疑いませぬ。……やれやれ、筑前もおすがたをここに拝して、臣下の道のひとつを完まっういたしたような心地がされます。眞実、高松以来、初めてのうれしさにござりまする」

信孝は、秀吉の手をとつて、

「ここはすでに戦場、主將たる御身が、左様にしておられては、

信孝の居りようがない。まずまず床しょうぎ几を取られよ」

と、自身すすめた。

べつの一軍は丹羽隊であつた。丹羽長秀はその中にいたが、報らせをうけるとすぐこれへ来て、参会の遅延を謝し、またともにこの一戦に臨む同生共死のよろこびを誓つた。そして程なく秀吉の案内で、この軍馬七千も、彼の陣營の一翼となつた。

信孝を迎えた河原では、信孝の前にぬかずいた秀吉も、ひとたび自己の陣營に入ると、左右すべて彼にしょうふく懼伏し、威風払わざるものはなく、たとえ神戸かんべ三七信孝たりとも、丹羽五郎左衛門長秀たりとも、全軍の指揮者たるその位置には、自然憚はばからざるを得なかつた。

——といつて、秀吉自身が、ことさらに信孝を下におくという
ようなところはみじんもない。むしろ、宥いたわり慰めて事ごとに気を
労つかうふうすら見える。そして富田とんだの陣營に迎えるとすぐ、

「いまのところ、敵方の情勢はこうなっており、味方はかように
進み出ております」

と、手にとるごとく、作戦図について、詳しく説明を与えてい
た。

きのう中川、高山などの先鋒せんぽうが進出してから、夜に入つて、
すでに勝龍寺の西方あたりで、足軽隊同士の鉄砲戦があり、その
附近で、探り合いの放火が行われたという報しらせは——まず前線
部隊からこれへ伝令されていた。

そしてゆうべは、遠方からもその火の手がボウと見えたが、大した展開も見せず、鉄砲の音も止んで、そのまま夜明けとなったものである。

きよう十三日も、空は依然荒れぎみで、折々、はいぜん沛然と驟雨ゆうだちが来ては、また霽はれたりしているが、ゆうべも山の方ではだいぶ降っていたらしい。そのために鉄砲隊の足軽は、敵味方とも火繩ひなわの火が消えて難儀しているということだった。

それも一因であろうが、またひとつには、富田にある秀吉が前進して来ないため、中川、高山、池田、すべての軍は、満を持したまま、ただ彼の一令を待っているというすがたでもあった。

「合戦は恐らくこれから今日中に開かれましょう。大勢の決する

ところも今十三日中になりました。いずれにせよ、今日こそ定まる日です。御休息のおいとまもなかつたでしょうが、秀吉と共に御出馬なされませ」

程なく、彼は信孝を促して、富田の陣を払い、山崎へ向つた。

出がけにも、また一雨来た。金瓢の馬じるしは鮮やかに濡

れかがやき、諸将の陣羽織や太刀からも雫していた。

「おお。虹が、虹が」

途中、秀吉は指さした。

しかし人々が仰いだときはもう見えなかつた程、天相の变化

は迅かつた。

山崎へ着いたのは申の刻（午後四時）、先鋒三部隊の八千五百

に、予備軍一万を加え、山も河も町も、兵馬の影のないところはなくなくなった。

「今、明智方の一軍は、天王山の東のふもとへ、死にもの狂いの突撃を開始し、お味方の中川隊と激戦中との報らせでございまして」

着くとすぐ秀吉はこの一報を聞いた。秀吉は、戦機熟すと見た。で、予備軍中の加藤光泰を池田隊へ加え、また堀秀政の軍を高山右近、中川清秀の二隊へ増援させて、

「いざ。われも」

と、全軍全面にわたる大攻勢の命令を一下した。

裁さきの悲ひ歌か

九日。——それは秀吉が早そうぎ暁ように姫路を出発していた日にあ
たる。

明智光秀は、この九日の朝、坂本を立つて京都へ引つ返してい
た。

同じ日月の下に在あるふたりの者の居所とその行動を見くらべて
見ると、秀吉があのような心と姿で送った姫路城の八日の晩を、
光秀は同じ夜、坂本の城に、どんな感慨と夢を抱いて過していた
ろうか。

ここで一応、本能寺變の後、それからのわずか五、六日間には過ぎないが、光秀の行動と彼に蒐あつまった世の衆目の機微きびな現われとを、顧みてみる必要もあろう。

本能寺の余燼よじんもまだいぶつていた六月二日の当日、未ひつじこくの刻（午後二時）頃には、彼はもう京都を去つて、

「安土あづちへ。安土へ」

と狂風のごとく急いでいた。

もちろん京都にも部下を残して、残党狩りによる織田色の一掃に努めさせ、町々には地子じしせん銭免除（減税令）の高札とともに軍令をかかげ、また万一を思い、山城やましる摂津せつ方面のうごきに対し、その圧おさえには明智家の属城勝龍寺の城へ、重臣の溝尾庄兵衛みぞおしやうべえを入

れておくなど、朝来急速、万端の手配を終った上であることはいうまでもない。

だが、洛外らくがいを出た彼の第一歩は、その日、粟田口あわだぐちから瀬田まで来ると、もうそこに、

(そうは、させぬ)

となす障しょうがい碍がいにつまずいていた。

ひる
午まえに、あらかじめ誘降状を送っておいた山岡やまおか美作かみまさか守のかみ

の兄弟はその使者を斬り、城を自爆し、瀬田大橋にも火を放つて、家中とともに甲賀の山中へ遁走とんそうしていた。

この違算のため、瀬田は通行できなくなつた。光秀ひきどおは憤りいきどおを眼に燃やした。焼き落されて半ば破壊された大橋の残骸ざんがいは、彼へ

むかつてこういつているようにも見える。

(汝が世を観るみごとく、世は汝を観ない)

光秀はやむなく、坂本城に留まって、むなしく両三日を過し、橋の急修理をおえて、ようやく安土へ襲よせかけた。

安土はすでに死の町と化している。あるじ主なく人なき巨城であった。

蒲生賢秀がもうかたひで以下の留守居衆が、信長の妻子眷けんぞく族ことごとをつれて悉く

日野の城へ退いていた後だし、町の家々にも、暖簾のれんも見えず商品の影もない。

しかし天下第一の大城の天守には、多年蓄積されていた金銀や名物ものなどの財宝がそのままあった。

城を取めた後、光秀は、それを見た。けれど彼の心は少しも富

まなかつた。却つて反対な感情が呼び起された。

（自分の求めているものはこんな物ではない。こんな物を求めてしたと考えられたとは心外だ）

光秀は庫中の金銀を悉く取り出させた。そして部下の賞与や寄附や治民の費用に惜し気なく撒いた。小禄の者にすら数百兩ずつ与え、上將たちの賞賜には、三千兩、五千兩と頒け与えた。

安土に居あわせて、その状を見ていた宣教師のオルガンチノは、ひゆうが「日向どのには、幸運を楽しむ日もそう長くないことを、もう自覚しておいでとみえる」

と、独りつぶやいた。異国人の眼にすら光秀の無理な力で持つた「天下人」の威権はそう観察されていた。

——われ光秀はいったい何を求めている者か。

光秀はそれを自分にしばしば問うてみる。「天下人たらん」と、当然な答が湧く。しかし、どうしたものか、われながらその響きはうつろにしか血に響かない。

信念からの発^{ほつそく}足でなかつたことを自認せずにいられない。元来そういう大望を抱いていなかつた自分であることも誰よりも自分が知っている。

その器^{うつわ}でもなく、その大望もなかつたと知る彼が、かくなつて来たわけはただひとつ、「天下人信長」を討つたからにほかならない。天下人は、天下人を仆^{たお}した者が代るといふ不^ふ文^{ぶん}律^{りつ}が時代の中にある。それを否^{いな}みようもなく光秀をして大難業に駆^からしめ、

光秀自身もまたひたぶるにその権化ごんげたらんと見せている。——にもかかわらず、光秀の心の奥底に棲すむ光秀の本質は、すこしもそこに自身の前途も理想も見出してはいない。

信念の根のない熱情を強いて振おうとする姿は狂きょうそう躁そうにしか見えなかった。彼のねがいと満足とは六月二日の一火をもつてもう果されていたのである。あの朝、信長の死を聞くや、堀川の陣にあつた彼はうそか本心か、

(妙心寺の一室をかりて予も自刃せん)

といったという。そういう巷こうせつ説せつが一時行われた。心ある者はそれを取つて云つた。

(なぜ死なせてあげなかったのか——)と。

伝えられるところによれば、その際、帷幕いばくの重臣たちが極力それを引き止めたものだといわれている。或いはそうだろう。信長という者が一火の灰と化したせつなに、光秀の胸に凝り固こつていた万丈ばんじょうの氷ひょう怨ゆきげは雪解のごとく解け去つたであろうが、彼をめぐり彼とともに事をなした将士一万余は必ずしも彼と同じような心態ではない。彼らにとつてはむしろ事はこれからだと期せざるを得ない。元々、信長一箇を討つのみが拳兵目的の全部ではなかつたからだ。そして彼らはみな信じた。

（今日以後現実に、わが光秀様が天下人に成られたのだ——）と。ところが、彼らの仰ぐ当の光秀は、このときすでにその実じつを失つて虚になつていたのである。六月二日以前の彼とそれから後の

彼とで、別人のようにその容貌も気魄も、叡智^{えいち}までが變つていた。ひと口にいえば、虚化していた。どこかにうつろが窺^{うかが}われるのである。——それは単なる疲労などとは大いに違う。

とはいえ、天下は動いた。愚者の暴拳と輕視し去る者はない。天下は光秀自身の肚^{はら}以上、彼の一拳を計画的なものにも觀^みているし、彼の才腕、彼の智囊^{ちのう}を大きく買っている。刻々として、彼の誘いに応じ、彼の軍に投じ、また遠くにいても、呼応^{こおう}するかのごとき表情を見せている分子も少なくはない。

五日から八日の朝まで、彼は安土にいたが、その間とて、彼はただいたずらに、庫中の金銀や満城の綾羅^{りょうら}珍^{ちん}什^じの処分をしていただけではなく、次の段階にたいするあらゆる努力を一面に傾

けていたことはいうまでもない。

丹羽長秀の本^{ほん}拠^{きよ}、佐和山^{さわやま}を攻めさせてこれを収め、秀吉の城長浜も同時に陥^{おとし}れた。そして人的には美濃の諸侍を誘降し、六^{ろっか}角家^{かくけ}の旧臣や京極家^{きやうごくけ}の一族、また、若狭^{わかさ}の武田義統^{たけだよしのり}などを加えて、それぞれ適所に用い、ひたすら兵力の増強にあせっていた。

一応、江^{ごう}州^{しゅう}附近の攻略をすませると、光秀は留守居軍の一部をとどめ、全軍装備を新たにして、ふたたび上洛の途についた。途中は坂本城で泊った。

そこでも、軍勢の一半を割^さいて、山^{やま}科^{しな}から大津方面へ陣取らせた。

氣を勞^{つか}えば限りのない程、諸方面に万一の備えが要^いる。それ程に、彼の期待の対^{たい}象^{しょう}はまだはつきりした意志を表示しないでいる。

明示しているものは、蒲生賢秀の如く、細川藤孝父子の如く、きつぱりと、彼の誘いを断つた者のみである。

わけて、細川忠興は、またなき彼の愛^{あい}媚^{せい}である。信長を倒した以上、一も二もなく自分に従^ついてくるものと、光秀は決定的に思いこんでいた。

ところが、使者の齎^{もたら}して来た返事によれば、その忠興も父藤孝も、

(もつてのほか)

という立腹であつたというばかりでなく、

(故信長公に二心なし)

と、髪を切つて、誓いを示し、また直ちに、明智家から嫁いでいる忠興の妻の身は、子供を添えて山ふかき里に隠し、一方即刻、秀吉の許へ使いをたてて、

(共に逆臣を討たん)

という誓約を送つたとも——その宮津から立帰つて来た使者から、彼はつぶさに聞かされていたのである。

このときまで、彼は、味方に引き入れる者の対象にばかり氣をとられていて、いったい天下の何者が、自分にとつて、最大な強敵として立ち現われて来るであらうかを——まだ的確てきかくに想定し

ていなかつた。

秀吉。

という存在が強く彼の胸を打つたのもようやくこの日頃からのことだった。

中国在陣中の彼の兵力と、その人物などを、まったく埒外らちがいにおいて、観過みすぎしていたのでもないし、軽視していたわけでもない。むしろその存在には甚だ脅威を感じていた程だが、なお光秀をしてひそかに安んぜやすしめていたのは、

（毛利と四つに組んでいる秀吉は急にうしろを振り向けまい）と、予想していたところにある。

かたがた、本能寺襲撃の早朝、堀川の陣から急派しておいた毛

利向けの二使者が、海路陸路、いずれかの一人は、疾とくに芸げいしゆ州うへ行き着いて、中央の異変を知り、自分からの書簡を見て、

(時こそ到る)

と、歡呼をなしている時分であろう。そしてやがて、東西きよう 挟やく撃げきして在中国の羽柴軍を粉碎せんと答えて来るにちがいない。

——そう希望し、そう判断して、吉報の到るのを、今か今かと、心待ちにしている程だった。

が、この方面の使いも、梨のつぶてである。のみならず、自分の麾下きかに属し、しかも京都と近接している摂津あたりの中川瀬兵衛、池田信輝、高山右近などからさえ、まだ何らの返答がない。

また、大坂表にある織田信澄のぶずみは、光秀の婿むこでもあるから、彼

がこれにも望みをつないでいたことは確かだが、その信澄は、僚り
ようしよう將の丹羽、蜂屋などの手に襲われて死したといううわさが、
 もう一般に聞え渡っていた。

夜の明けるたび、光秀の耳に入るものは、事ごとの齟齬そごと、裁
 きの悲歌であつた。

ほら
 洞ヶ嶺みね

彼にとって、坂本の城は思い出がふかい。

まだわずか半月前。

信長に面罵めんばされ、響きよう応おうの役を褫奪ちだつされ、憤然、安土あづちを去つ

て、居城亀山へ去る途中、幾日もここに留まつて、悶々もんもん、迷いの岐路きろに立ったものだが――

いまは迷いもない。恨みもない。同時に反省も失つた。

光秀はいつのまにか、正しき知識人の本質を、一時的な「天下人」の虚名と取り換えていた。

従兄弟いとこの左馬介光春さまのすけみつはるは、安土の守りに残して来たが、この城には、光春の夫人や、その子女たちや、また例の、ひょうきん者の叔父、明智長閑齋ちようかんさいなどという身内の者がたくさんいる。

わずか半月ぶりで接した光秀に、なぜか今度はそれらの内輪の者までが、何となくあらたまつていて、窮屈に覚えたが、相変らずなのは長閑齋であつて、

「このたびは、天下様にお成り遊ばして、われらはまるで、夢か
としか思えません。瓜うりや茄子なすが、急に花園の壇に上されたような
もので、御眷族ごけんぞくの端たるわれらも急にお行儀をあらためており
ます。末々公家衆などのお交際も繁くなれば、瓜や茄子かんむりも冠し
ておいて厳かにおらねばなるまいと懼おそれましてな。——いや正直を申せ
ば、先の短い愚老などには、迷惑やら仕合せやらで」

などと軽口ろうこうを弄して、その楽天振りに少しの変化も来たしてい
ない。明智一族中、この老人だけは、べつな曆こよみでも持つて暮して
いるようである。

どんな無用人でも、その所を与えれば、世に無駄人はいないと
よくいう光秀は、日頃、従兄弟にむかつて、この老人を祝して、

（左馬介の家庭には、あの屈託のない年寄がおるので、何ぼう奥が明るいか知れぬ。家に後顧こうこがなくてよい）

と、称たたえていたものだが、今度の一泊には、長閑翁と戯れあう子らの嬉き々たる声もうるさい気がした。

——明けると早暁に、白河越えを経て、京都へ向っていた。

吉田神社の神官吉田兼和とは日ごろの交誼よしみも深い。その兼和が白河口に待っていて彼に告げた。

「御入洛と聞いて、撰家せんけ以下の公家方が、公式にお迎えに出ようと、慌あわただしく装よそおっております。この辺で御小憩ねがいたい」
光秀は、拝謝した。

「いや、洛内もまだまったく鎮しずまったといえぬし、近畿の情勢も

なおわからぬ今日、左様な重々しい儀礼は相互の迷惑。やがて御所へ御礼に伺候する日まで、おあずけ願つておこう」

その折、彼は、銀子五百枚を御所へ献上したいとて、その手続きをこの友に依頼した。同日また五山、大徳寺その他へも多額な寄附をしたので、安土から携たずさえて来た手許の軍用金はすっかりなくなつてしまつた。そして夜は、下鳥羽に陣営して眠つた。この夜九日である。彼はまだこの時まで、秀吉の動向については何ら知るところもなかつたが、河内、摂津方面に散在する諸大名の態度には、何となく不安を感じ出していた。

光秀は、翌十日の朝、本軍を下鳥羽において、一部隊だけをひきつれ、山城八幡に近い洞ほらヶ嶺みねへのぼつて行つた。

ここは山城の綴喜郡つづきごおりと河内の交野郡かわちとの境をなす峠路である。光秀は旌旗せいぎを立てて、終日ひねもす、何ものかをこの国境に待ちうけていた。

「筒井家の先鋒は、まだ見えぬか」

「見えませぬ」

「高山、中川、池田などの使いは？」

「何の訪れもありません」

陽の傾く頃まで、光秀は幾度も、同じ問いを、帷幕いぼくから陣外へ発してみた。

そして自身も折々、

（そんな筈はないが？）

と、いぶかる如く、陣外に出て、河内摂州の山野をながめ、焦しょう躁そうの眉へ、手をかざしていた。

彼がここへ来た唯一の目的は、大和やまとの筒井順慶の軍を待つためだった。もちろん事前に順慶とは謀しめし合わせてあることでもあり、平常の関係としても、一子十次郎を養子にやる約束まで結んである筒井家のことなので、この来会と協力は当然なものとして、ほとんど、何らの疑いもさしはさまず、約を履ふんで、旌旗を立てていたものであった。

ところが、日も暮れかかるに、その順慶は遂に來ない。——のみならず、一面、疾とく檄げきを飛ばしていた高槻の高山、茨木の中川、伊丹の池田などの、わが麾下きかと見なしていたところの諸將も、い

い合わしたように、ひとりとしてここに会合する者を見ないのである。

光秀の焦躁しょうそうは当然であつた。

「利三としみつ。何の手違いであろう？」

彼はなおこれをもつて、謀状しめしじょうの手ちがいか、或いは諸軍勢の用意が遅れているもののような程度に解したがっているふうだつたが、そう質問をうけた老臣の齋藤内蔵助くらのすけ利三は、すでに非なる大勢が心のうちに読めていた。

「……いや。筒井殿には、来会の意志がないのでしよう。さもなくば、大和郡山やまとこおりやまからここまでの坦々たんたんたる道、かように時遅れるわけはございませぬ」

「いや、左様な道理はない」

光秀は敢えて云い張った。そして急に藤田伝五を呼び、一書を認^{したた}めて、急に郡山へ催促の使いにやった。

「伝五、乗換馬も良いのを曳^ひいてまいれよ。駒の足で急ぎに急げば、明朝までに立ち帰れるであろう」

「筒井殿がすぐお会いくださりさえすれば、夜明けと共に帰れましょう」

「会わぬなどというわけはない。深夜たりとも、すぐ会って、返辞をただしてまいるように」

「かしこまりました」

伝五は部下数騎をつれてすぐ峠を下り、木津川沿いに郡山の道

を急いで行つた。——が、この使いもまだ歸らぬうちに、諸方面の偵察隊は、秀吉の軍勢が疾くも続々東上を開始し、すでにその先鋒部隊は兵庫辺まで来ているという事実を相次いで、ここへ報らせて来た。

「あり得ないことだ。何かの誤報ではないか」

初めのうち、光秀はまだ、そう左右の者へいつていたほど、そのことについて、味方の物見が頻々ひんぴんと報じて来るような秀吉の迅速な行動は、頭から信じきれないような容子ようすだった。

——どうして秀吉がそう簡単に毛利と和議を取り結べよう。また、和議を計つたはかところ、あれだけの地域に膠着こうちやくされてい
た大軍を急に撤回てっかいして、上洛して来るなどは思いもよらない。

到底、至難なことである。と絶対に信じていたものらしかった。

「いや、虚報とは思われませぬ。何しても早く、御対策を決せねば相成りませぬ」

この際にも、正しく事態を直観していた者は、かの老将斎藤利と三しみつであつた。そして光秀がしゆんじゆん逡巡しゆんなお決しかねている進退にたいしても、

「それがしのみは、ここに止まつて、筒井殿に備え、後おあとを慕きゆうきようて参りますれば、殿には、急遽きゆうきよ下山あそぼして、秀吉の上じようらく洛そしを阻止そしなさらなければなりませんまい」

と、明確に指針を与えた。

「筒井は望みなかろうか」

「十中八、九までのところ、まずお味方には参りますまい」

「秀吉阻止の策は、如何どうしたものだろう」

「伊丹、茨木、高槻などの諸勢も、はや秀吉に款かんを通じおるものと見るほかありません。筒井勢もまた同様とすれば、機先を取つて彼を摂津の入口に邀撃ようげきするには、遺憾いかんながらお味方の兵力は不足であります。——が、量はかるに、いかに秀吉といえ、ここへ到るまでには、なお五、六日を費やしましょうから、その間に淀よど、勝龍寺の二城を固めて、隘路あいろの南北に堅陣を設け、その間に江ごうし州ゆうその他の諸勢を糾きゆう合ごうするならば、一時の防ぎにはなりません。しょう」

「なに。それでも一時の防ぎに止まるのか」

「爾後のことは、大策を要しましょう。局所の合戦のほかのものです。しかし今は焦眉しょうびに迫っております。一刻もはやく下鳥羽しもとばへ」

利三としみつは急せぎ立てるように云った。

光秀が山を下りたのは、まだ夜明け前の暗いうちだった。――

明けると十一日。前夜、郡山こおりやまへ使いに行つた藤田伝五は、怒

りを眉に持つて立ち帰つて来たが、利三の顔を見るやいな云った。

「だめだ。順慶じゆんけいめも、裏切りおつた」

そして、相手の不信義を鳴らしてなおも、

「順慶坊主め、口の先では、程よく申しおつて、いつこう去きよしゆ

就うを示さなんだが、帰途、探り得たところでは、彼からも秀吉

からも、頻りと使者の取り交わしがあつたようだ。——げに頼みがたきは人心か。日頃、明智家とは、あれほど好誼ある仲と思われたものすらかくの如しだ」

と、罵つてやまなかつた。聞く老将利三の方には、何らの感情のうごきも見られなかつた。当然なことを当然と聞いているふうでしかない。ただ白い眉と、まばらな髯ひげを持つ面おもてを、ありのままに彼へ向けていた。

ちまき
粽のこと

光秀が、むなしく洞ヶ嶺ほらみねを去つて、下鳥羽の本陣へ帰つて来た

頃——十一日の午頃ひるごろ——には、すでに一方の秀吉は尼ヶ崎に着いて、一睡いっすいの快をとつている時刻だったのである。

光秀の本陣は、下鳥羽の秋山という一丘にあつた。

この日の暑さは、尼ヶ崎の禅寺も、この丘も変りはない。光秀はもどると直ちに諸将を会して帷幕いぼくのうちに作戦方針を議した。

——とはいえまだ、いよいよ当面の敵とわかつた秀吉が、ここから指呼しこのあいだ尼ヶ崎に来ていようななどは思いも寄らないふうであつた。この先鋒部隊や先発の小荷駄隊は摂津口せつづくちにぼつぽつ現われても、秀吉自身が到着するのはなお数日を要するものと観みていたのである。

しかしこれをさして彼の叡智の混乱というのは当らない。彼は

そのすぐれたる常識をもつて常識の水準からこう判断を下したに過ぎない。しかもこの判断は世人すべての常識でもあつたのだ。

「では、即刻工事を急がせましょう」

あけらしげとも

明智茂朝がまつ先に帷幕から出て行つた。評議は時をうつさず終つたのである。茂朝は駒をよせて淀へ急いだ。よど急遽、淀城に補強工事を加えて、敵に備えるためだつた。

淀を右塁とし、勝龍寺の城を左塁とし、能勢のせ、亀山の諸峰と、

せば

あいろ

小倉之池に狭められたこの京口の隘路を取つて、羽柴軍を撃摧げきさいせんとす準備行動のそれは第一歩とみられた。

また、前々から、散陣的に、淀川の対岸から山崎方面へ出して
おいた幾つかの部隊にも伝令をとばして、

「勝龍寺へ籠こもつて、防塁をかため、満を持して、敵を待て」と伝えさせた。

伏見には家臣池田織部いけだおりべを。宇治には奥田庄太夫を。淀には番ばん頭しら大炊助おおいのすけを。また勝龍寺の城には、三宅綱朝みやけつなともをそれぞれ籠めてある。

配するに万全を期しているが、敵方の兵数を推し量はかるとき、光秀はなお一いちまつ抹の弱味を抱いだかずにいられなかつた。朝ちようらい来、午ひるを過ぎても、諸方から麾下きかに集まって来る兵は相当あつたが、いずれも近畿の小武門や浪ろうろう牢の徒で、いわば、名もなき輩やからが出世のいとぐちを求めて来るに過ぎなかつた。大量の兵力をひっさげ、一方の將たらんといつて来るような曠はれある参加者はほとんど

なかつた。

「いまのところ、味方の兵数はどれ程にのぼつておるか。勝龍寺、洞ヶ嶺、淀なども合わせて——」

光秀が左右に質すと、祐筆は着到帳と、龜山以来の譜代の者と合算し、また安土、坂本その他、遠くに散在してある兵力とを差引いて、次のように書き出して、光秀へ示した。

齋藤利三としみつの隊 二千人

阿閉貞秀あへさだひで 明智茂朝しげともの隊 三千人

藤田伝五 伊勢貞興さだおきの隊 二千人

津田信春 村上清国きよくにの隊 二千人

並河掃部なみかわかもん 松田政近まさちかの隊 二千人

——御本軍

約五千

ざつと、計一万六千である。光秀は心のうちでつぶやいた。

「……もし丹後の細川と大和の筒井だにこれへ加わっていたならば、日本中部を縦断して、われは絶対に不敗の態勢を取り得たであらうに」

すでに作戦方針を決定した後までも、彼は甚だ兵力の差に重点をおいて苦慮した。

由来、彼の頭脳は計数的であつて、にわかには、寡^かをもつて衆を破るが如き飛躍は、ひらめいて来なかつた。

それと、秀吉と直面するの大戦を前にしたが、どこかに一^{いちまつ}抹、敗戦を意識する気おくれが潜んでいた。これは決定的な敗戦の因

をなすものであるが、光秀の性格とここ数日の齟齬そごがかくさせたもので、彼自身にも、どうにもならないものだったろう。

彼は、彼自身で起した怒濤どとうの高さに、今や溺るる怖れすら自覚していた。しかし、それは表面の彼の姿ではない。彼自身も気づかないでいる潜在意識においてである。

その夕方、この下鳥羽の陣へ、一群の町人たちが伺候しこうした。京都の町代表たちで、

「地子銭じしせん御免除の御礼のため、町民一同に代つて参じましたもので——」

とのことだった。そして、祝福の意を表するため、

「御合戦の大勝利をお祈り申しあげ、併あわせてお門立ちのお祝いま

でに——」

と、手製の粽ちまきを献上した。

これらの者を迎えて、扈從こじゆうの将星を左右に繞めぐらし、悠然ゆうぜんと床几しょうぎに倚よっている光秀のすがたには、まさに新しき「天下人」たるの威風に欠けるものはなかつた。

侍座じざの一将は、京都市民のよろこびと、献上ちまきの粽とを、光秀の前に披露して後、一同へ向つて、

「洛内の取締りは、厳いましに戒めてあるが、なお日も浅いゆえ、さまざま流言るげんも撒まかれ、陰いんにあつては、御行動を誹謗ひぼうし奉るような説をなす者もあろう。しかし政まつりごとをなす主権者に悪行あるときは、それを廃せし例は、わが朝のみならず、唐土にもあることで、周し

武ゆづがその主ちゆう紂おう 王しを弑しいし、諸民の困窮を救い、周の八百六十年の基を開いたのを見てもわかろう。わけてわが日の本は上ばに万んだいふえき代ふえき不易の大君がおわしての武門であり、將軍職でもあれば、決して一信長が絶対の天下人でなければならぬ理由はない。汝らも、この辺をよく弁わきまえて、市民の者が妄もうせつ説せつに惑わされたりすることのないようによく努つとめい」

と、申し渡した。

光秀も、一言与えた。そして折角こころぎちまき、志の粽まきだからといって、彼らのいる前で、そのうちの一つを取って喰べた。

ところが、剥はぎ取った粽の笹が、まだ少しこびりついていてとみえて、光秀は横を向いて舌のさきからベツと吐き捨てた。

「——あかんぜ、あの御大将は。きつとあきまへんぜ」

帰り途。口さがない京童きようわらべの性さがを持つている代表たちは、口々に語り合つて行つた。

「粽の皮はよう残るもんじゃ。それをよう見もせず口に入れるよ
うな大将ではあきまへんわい。戦いは明智方の負けでつしやろ」

このことを、後の諸書が、みな誇称こしょうして、光秀が粽を笹の皮ぐるみ喰つたというように伝えているが、恐らくこの程度に過ぎない小事であつたらう。

けれど京都人は由来、人に接すると、そうした小事を見つけて、すぐ相手の寸すんしゃく尺はかを量る性癖をもっている。中ちゆうげん原げんへ中原ういてへと、古来から多くの武門が侵入して来ては没落し、あらゆる有為

転変んぺんを、いつも被治者の立場から長い眼で見て来たため、自然養われて来たものかと思われる。

桂川かつらがわ

法体ほつたいの施薬院秀成せやくいんしゅうせいが、

「惟任これとうどのお目にかかりたい」

と、下鳥羽しもとぼの本陣を訪ねて来たのは、京都町民の代表者たちが、そこを辞してから間もない頃だった。

光秀は、藤田伝五、その他四、五の将まじを交えて、兵糧をつかっていた折である。

伝五の報告で、筒井の変節はもうあきらかだったが、なお順じゆん慶けいの余りなる豹ひょう変へんぶりには、ここでも諸將の憤りのたねと
なつて、武門の風上にも置けぬ男のしと罵られていた。

そこへの取次であつた。

「はてな、施薬院が？」

光秀は眉をひそめた。施薬院は本能寺変の少し前に、信長から
中国の陣へ差向けられていた者である。

「ま、通せ。——ともかく」

気のゆるせぬ心地もするが、また多大な感興と好奇も抱いた。

秀吉の近状を知る者として、絶好な便りとも考えて面会したので
ある。

「まずは、御健勝で」

と、施薬院は事もなげに平常どおりな挨拶をのべた。信長のことはすこしも触れて来ないのが、光秀には何となく痛痒いたがゆい気がした。

「お許もとは、中国へ下ったばかりと聞いていたが、どうして、にわか
かに立ち帰って来たか」

「筑前どのが、直ちに、京都へ攻め上られるため、われらの如きは、足手纏あしでまといと思し召されたのでしよう。急に、お暇を下されたので、早々立ち帰って来たわけでございまする」

「なるほど……ムムム」

と頷うなずいてから、ほんの言葉のつき足しに過ぎないような語調で、

「筑前は達者か」

と、訊いた。施薬院せやくいんも、至極、無造作に、

「はいはい、いよいよ頑健な御様子に見られました」
と、答え、

「あのお方の御精力というものは底がわかりません」
と、問われぬことまでいった。

「筑前には早や、毛利と和睦わぼくして、北上の途中にあると聞くが、
お許がこれへ来る頃には、どの辺まで来ておったか」

「何を仰せられます」

施薬院はその迂うを嗤わらうように、

「もはや、ついそこの、尼ヶ崎まで来ていらつしやいます。それ

も今朝ほどのことです」

「えッ……?」

「まだ御存じなかったのです」

「先鋒ではないのか」

「おそらく先鋒の方がおくれたでしょう。筑前どの自身、紛れもなく着いております。途中の風雨も陸路船路も、ほとんど、不眠不休のおいそぎ方で」

「……そ、そうか」

語気やや紊れるのを、光秀は強いて沈着をよそおいながら、

「尼ヶ崎では面会いたしたか」

「余りに夥しい軍馬を見、わざと通り過ぎて参りました」

「兵数は」

「わかりませぬ。武家なれば目づもりでも知れましようが」

「尼ヶ崎へは立ち寄らず、この下鳥羽のわが陣へ立ち寄ったのは、何か用向きがあつてのことか」

「中国でお暇をいただく折、日向守ひゆうがのかみに会うたら申し伝えよと、

筑前どのからお言伝ことづつてを頼まれておりましたので——」

「筑前からこの光秀へ言伝てとな？ ……。おもしろい。何と云いおつたか」

光秀は異常な昂奮を抱いた。人をもつて言伝てして来たことばといえ、まさにそれは、敵將の決戦状ともいえるものと思つたからである。

施薬院は、次のように、それを伝えた。

「中国でお別れする折、道中用心のためにと、私へ手ずからお槍を一本下された上。——さて、筑前どのがいわれるには、その方は仕合せな仁じや、いずれ光秀と会うだろうが、このところ、後の天下は、光秀が取るか、自分が取るかだ。その両将のいずれにも心証しんしょうのよいその方の家はまことに安全を保証されているものといわねばならん。——ついては、自分より先に光秀に面会いたした折は、筑前がかく申しおったといえ。……そう仰せられまして」

と、施薬院は、ここでちよつと、額ひたいの汗を、懐紙で軽くたたいた。そして秀吉の口吻こうぶんそのままいった。

ひゆうがのかみ

「——日向守とは毎度会いはいたして来たが、戦場で会うは初めて。大将と大将とが、直じきの太刀打ちいたすも、数日のうちにある。主君の敵なれば、部下の槍も待たず、かならず直の太刀打ちいたして、勝負を決すであろう。日向にも左様に心得おられ候え——と、かように屹きつと仰せられました」

「……………」

光秀はあきらかに感情をうごかしている。しかしじつと押し黙って聞いていた。がやがて、その硬直を解くと、しずかに一笑を見せて、

「筑前が云いそうなことよの」

と、立って、うしろに立て懸けてある槍を取り、施薬院に与え

て、こう云い足した。

「言伝ことづてたしかに聞いた。大儀である。——秀吉からも一槍を貰うたそうだが、わしからも贈ろう。洛中はまだ物騒じや。供の者に持たせて、用心怠りなく帰るがよい」

施薬院が辞去した頃は、すでに下鳥羽しもとばは宵だった。風が出て、雲脚くもあしが迅はやくなりかけている。

「暗いぞ。気をつけて参れよ」

光秀はそれを見送って、陣外の丘の端たたずに佇んでいた。——が、彼を送るのが主ではなく、白眼、天を仰いでいたのである。

「降りそうな……」

と、彼は独りつぶやいた。この風では降りもしないかと思われ

る一方に出た眩つぶやきだった。戦いに臨まんとするや、まず氣象を見定めておくことは將の肚はらとして重要である。光秀はかなり長く雲のうごきや風の方向を案じていた。

さらに、脚下の淀川を見た。

チラチラ、と風にそよぐ小さい灯は、味方の哨戒舟しょうかいぶねである。大河のうねりは白く、山崎その他、摂津せつづ一円は、ただ漆うるしにひとしい闇でしかない。

「筑前風情ふせいが、何ほどのことを！ ……」

この河の、はるか海口うみぐち、尼ヶ崎の空へむかって光秀のひとみが、光こうぼう芒を放ったようにすわったとき、彼のくちびるはかつて吐いたことのない強い語氣をもらした。

「作左。作左。作左衛門はおらぬかッ」

彼のすがたが大股に身をひるがえして元の営内にもどつて行くとき、暗い烈風は、しきりに附近の幕舎に大きな波を立てていた。「はいッ。堀与次郎、おりまする」

「堀か。そちでよい。すぐ貝を吹け。——全軍に出陣の用意をと」陣払いの終るあいだに、光秀は洞ヶ嶺、ほらみね伏見、淀、その他の味

方へ、急使を派した。遠くは、坂本城にある従兄弟いとこの光春へも、

(——退いて防がんよりは、前進して彼を邀撃ようげき、一戦に大事を決せん)

の覚悟を告げて、その来援を促うながして発したのである。

夜は二更にこう。星ひとつ見えない。

軽捷けいしやうな戦闘隊をまず丘から降ろして、桂川の上下を見張ら

せ、荷駄、本隊、後軍とつづいた。

驟雨しゅううが来た。全軍、渡河を半ばにしつつ、真つ白な雨に打たれた。

風も伴っている。西北の冷たい風だった。暗い川上を望みながら足軽たちはつぶやいた。

「この川の水も、この風も、丹波の山を越えて来たものだ」

昼ならば見えもしよう。老坂おいのさかも遠くはない。その老坂を越

え、丹波亀山の故郷こくにもとを出て来たのは、つい十日余の前だったが、彼らには、三年も四年も前のことだったように回顧された。

「溺れるなよ。火繩ひなわを濡らすなよ」

部将は、組々の者へ注意していた。山岳地方は、大雨だったにちがいない。桂川の水勢は常よりも烈しかった。

槍隊は、槍と槍をつなぎ持ちにして涉り、鉄砲隊は銃座と筒口を持ち合つて越えた。

光秀をかこむ騎馬の一隊は、迅い水泡を残して対岸へ上がつていた。どこともなく前方の闇でパチパチと湿つぽい銃音が断続して聞え、民家の火か、単なる篝か、遠くに火花が見えたが、小銃の音が止むと同時に、それらの閃きも消えて、真の闇に還つていた。

「お味方の先駆が、敵の斥候隊を追い払ったものでござります。火花もまた、円明寺川附近の農家へ、敵の小勢が、逃げるに当つ

て、火を放つけたのでしたが、直ちに、消しとめました」

伝令将校から報告がある。

光秀は意に介するなく、久我くがなわて暇ひまをすすみ、味方の勝龍寺城には入らず、わざとそこから西南方約五、六町ほどの御坊塚おんぼうづかに本陣をさだめた。

この二、三日の天気癖である雨はすぐ霽あがつて、墨を流したような濃淡を見せている空に星すら燦きらめき出している。

「——敵もしずかだの」

光秀は御坊塚に立つと、山崎方面の闇を一望して眩つぶやいた。

すでに秀吉の軍と、わずか半里を隔てて相對したと思う無量な感慨と緊張とが、その語の底に大きく呼吸をしていた。

ここを全軍の基点として、勝龍寺を後方の補給兵^{へいたん}站基地とし、さらに西南方の淀から円明寺川の一線を扇なりに引いた。前衛各部隊をそれぞれ配し終った頃——夜はすでに明け近く、淀の長流もほのぼの所在を描き初めていた。

突然。

天王山の一面に烈しい銃声^{こだま}が飴し出した。陽はまだ昇らず、雲は暗く霧は深い。天正十年六月十三日。山崎街道にもまだ一馬のいななきすら聞えない時刻であつた。

火^ひぶた

両軍が山崎に会して、この晨あしたを、生の日か死の日かと期して相あ対峙いたいじしたとき、秀吉から光秀へ「戦書」を送ったとも伝えられているが、果たして、そういう余裕があつたかどうか。

また、そうした古法の陣押しによつて、接戦の口火が切られたかどうか。

事實は。

光秀もまた御坊塚に着陣して間もない頃。また秀吉も、まだ後方とんだの富田に在つて、大坂から神戸かんべ信孝の来会あるを待っていた——十三日未明——まだ暗いうちに、期せずして、秀吉方の山之手隊と、明智軍の奇襲部隊とは、暁ぎょうあん闇のうちあんに、もう激烈なこの日の序戦に入つたのである。

——今しがた。

天王山方面に聞えた烈しい銃声がそれである。夜来、折々湿つぽい小銃音の小ぜり合いはしていたが、このときのは、

「すわ！」

と、耳あるほどな者はみな毛穴をよだてて、やがての戦況如何にと、彼方なる雲か山かの一山影を凝視していた。

北軍光秀の陣営御坊塚から見るときは、天王山はここから約二十余町の西南にあつて、その左の麓ふもとに、一すじひとの山崎街道と、一ひと条とすじの大河とを擁ようしている。河はもちろん淀よどである。

山頂はかなり高く峻けわしく、最高二千七百尺はある。別名をこもりの松山ともいい、宝たから寺でらの山ともいう。峨が々がたる岩山で、全

山、松の木が多い。

——きのう秀吉の本軍が富田とんだ大塚附近まで進出すると、麾下きかの諸将はみなまツ先に、この山に目をそそいでいた。

「あれは何山というか」

「あの東麓とうろくが山崎の駅か」

「敵の勝龍寺は、あの山の、どの辺の方角にあたるか」

など口々に土地の案内者に問いただしていた。

地理に詳しい者を陣中に伴うことは、どの隊でも必携ひっけいの具と
していた。それに問うて、天王山の軍事的価値に目をつけたこと
もまた、多少戦略眼のある人々のあいだではみな一致していた。

「あすの合戦はあの山を先に占しめて、高地から敵を俯瞰ふかんして打つ

の有利に立つた方がまず勝ちであろう」

また必然、諸將の胸には、

「——先駆けて遮さきが二無二、天王山にお味方の旗を立てた者こそ平野の一番首よりも、戦功第一の誉ほまれたらん」

と、ひそかに期するものがあつたので、十三日の前夜、それを秀吉に献言し、或いは、みずからそこに赴かんと願ひ出た諸將が、幾人もあつたらしい。

「いずれは明日あす一日できまる戦いと観みる。淀、山崎、天王山を中心に、死ぬも生きるも、およそ数里の外には出まい。われと思わんものは行け。ただし、味方争いするな。わたくしの功を競うな。ただ念ぜよ。故右大臣信長公の在天の霊と、弓矢八幡の照しょうらん覧

を」

が、秀吉のゆるしを得るや、勇躍して、真夜中のうちに、ここを立って天王山へ長駆したものの、鉄砲大将の中村孫兵次、堀秀政、堀尾茂助など、あやめ黒白もわかぬ一勢であつた。

南軍秀吉の麾下きかがみな目をつけた重要な地点を、北軍の光秀が、うかつ迂闊に見のがしているわけは絶対でない。

光秀が、長駆、かつらがわ桂川を渡つて、にわかには御坊塚まで出る決断をとつたのも。

——同時に天王山を占めて。

と、作戦態勢をすでに描いていたればこそその行動だつた。

この辺の地理に明るいことにおいては、敵の先鋒の中川清秀や

高山右近にもゆずらない光秀でもある。かつは、同じ山河の地勢を觀るにしても、光秀の觀るところおのずから彼ら以上のものを觀ていよう。

で、光秀は、桂川を越えて、久我くがなわて嶮を行軍中に、もうその途中から一軍を割さいて、

「下海印しもかいいんじむら寺村を北に見、天王山の北側より攀よじ登つて、山上を取れ。敵襲よせ来るも、構えて、要地を譲るな」

と、激励して、そこへ送つていたのであつた。

命をうけた者は、勝龍寺城にいた松田太郎左衛門で、並河なみかわかも掃部の配下であり、この辺の地理に精通しているところから特に選ばれたものである。

松田太郎左衛門は、弓鉄砲組をあわせ、約七百余の兵をひきつれて急いだ。

ずいぶん迅速じんそくといわねばならない。光秀の司令も行動も、決して戦機を外はずしてはいなかつたのである。

にも関かかわらず、この時すでに、南麓なんろくの広瀬方面を突破して来た秀吉の諸勢は、先を争つて、山へ取ツついていた。

しかし、なお真ツ暗な時分であるし、土地に不案内の将士が多い。

「登り道がある」

「そこは登れまい」

「いや、登れる」

「間違つた。このさき、崖だ」

などと麓ふもとを巡つて、各攀路はんろを搜り合うにあせていた。

ここまではほとんど後先あとさきなく、一斉いつせいにかたまつて来た堀秀

政の隊、中村孫兵次の隊、堀尾茂助の隊なども、忽ち分散して、

あなたこなたに、石ころを落し、灌木かんぼくを掻き分け、騷然そうぜんと、

麓一帯に物音を起しているに過ぎなかつた。

さきに——前日の昼——先鋒部隊を命じられて、山崎まで出ていた高山右近と中川瀬兵衛の陣も、ここから近いのである。

わけて瀬兵衛は、高山右近に先んじられて、山崎の町から関門の閉め出しを喰つて、この山之手方面へ陣していたので、忽ち味方の奇兵的行動に感づいた。

「その要地たることは、此方とて気づかぬではないが、筑前どのの命令もまたず、みだりに逸はまった行動を起してはと、ふかくみずから慎んでいたのだ。——さるを、後方にひかえていた諸隊が、われらにも無断で、先駆けするとは怪しからぬ。その分なれば、瀬兵衛とて、彼らごときにおくれるものではない」

憤然と、旗本数名、銃士わずかを連れたのみで、山麓から数町上の宝寺へ駈けあがって行った。

この道こそ、唯一の登り口で、あとは容易に頂へ行けない樵夫そま道みちにすぎない。瀬兵衛は、それを知っていただけに早かった。しかし宝寺の門前まで近づいてみると、もう先に来て、その山門の扉を、大声あげながら叩いている一群の武者があつた。

「誰だツ。味方か」

瀬兵衛が、声をかけると、山門の下の人影は、振り向きもせず、「問うもおろか」

と、答えた。

これは堀尾茂助の声だった。

茂助吉晴は、いまでこそ、錚々たる羽柴麾下きかの一将だが、そ

の青年期までは、岐阜ぎふの稲葉山つづきの山岳中に育った自然児である。彼の眼をもつて見るときは、この天王山の如きは、ほんの一小丘としか思われないうちがいない。

「寺僧、起きろツ。山門を開けぬと踏みやぶるぞ」

堀尾の部下は、そこを叩きつづけている。戦いを予感して、寺

内ふかく潜ひそんでいた僧は、やがて紙燭ししよくを持って出て来た。そして山門をあけるや否、どこかへ隠れてしまった。

「つかまえろ、一名、道案内に——」

瀬兵衛たちが、それを求めているうちに、堀尾茂助の主従は、十数名しか見えなかつたが、わき目もふらず境内を駈けて、裏山の道へのぼっていた。

瀬兵衛は、それを見送つて、舌打ちしながら、捕えた僧を追いついて、
立てて、

「山上まで、案内せい。早く早く」

と、槍おどで脅おどしていた。

とこうするうちに、山崎の町に陣していた高山右近の部下まで

これへなだれて来た。——実にこの未明に行われた天王山先陣の士氣の烈しきには、味方と味方のあいだにおいてすら相ゆるさぬものを互いに示していた。

味方と味方の負けじ魂は、時にきわどい摩擦まさつを起こすし、全戦局あやまを過るような危険もなしとはしないが、さりとして、この氣魄きはくもないような氣魄では、敵と相あいまみ見えても、直ちに、靈魂そのものとなつて、身を投げこむことはできない。

功を競きそうべからずであるが、男は各 磨き合え、恥はたがいに恥と知れ、というのが秀吉のころであつたろう。

とまれ、この暁ぎょうあん 闇 中天王山一番駈けは、いつたい誰が早かつたのか、どこの部隊が先駆だつたのか、ほとんど我武者羅がむしゃらのあ

らそいで、後の軍功によるも、記録によるも、皆目、見当がつかない。

堀、堀尾、中川、高山、中村各家それぞれ自家の先登をその家の記録には主張しているし、「堀家家譜」ほりけかふ「川角太閤記」かわずみたいこうき「池田家譜集成」いけだかふしゅうせい「武功雑記」ぶこうざつき「明智軍記」あけちぐんきなどの諸書の記載も、また、みなまちまちになつてゐる。

しかし、想像に難くないのは、いずれにしても、逸早く山上近くに達した人数は、各隊のうちの極めて少数だけで、それも一将の下の一隊と限らず、諸將の部下が交まじり合つて、偶然、早足者だけの混成部隊となつてゐたろうと思われることである。

道は嶮けわしいし、夜はまだ明けないし、味方には違いないが、誰

の手勢やら組やら分らない中に伍ごして、ここの将士はただえいえいと山上へ急いだのだった。そして、はや頂上も近いかと思われた頃、いきなり方角も知れないところからつるべ撃ちに弾たまをうけた。

撃ち出したのはもちろん明智方の松田太郎左衛門の銃隊である。しかし、松田勢が先に火ぶたを切ったからといって、天王山の山上を先に踏んだのは明智方であつたかといえ、そうはいえないものがある。

なぜならば、それよりずっと前に、羽柴方の侍、山川七右衛門、山川小七、岸九兵衛の三名が、こっそりそこへ登つていた。そしてまだ人気ひとけなき山上や麓の闇を見下ろしながら、

「この要地を真ツ先に乗つ取つた者は恐らくわれらが一番である。この三名を措おいてはあるまい」

と、遅れている味方や、まだ気配もない敵の静かさを嗤わらつていた。

すると、どこやらで、

「やかましい。黙つてその辺に身を伏せておれ」

と、叱つた者がある。

驚いて、あたりを見廻すと、何ぞ凶はからん、自分たちより先に、この山上に来て、岩陰にうづくまり、居眠りをしていた男があつた。

「誰か」

と、訊くと、

「高山右近の手の者、
なかがわふちのすけしげさだ
 中川淵之助重定」

と、答え、

「貴公たちが、がやがやいうので、折角、敵が来るまで一睡りひとねむと思つていたのに、眼をさまされてしもうたではないか。ただ高い所へ登つただけでは、てがらでも何でもない。お互いにてがらを談じ合つていいのは、明智を全滅してからのことだろう。まだ勝敗もわからぬうちに、はしやぐのはちと早過ぎはせんかの」

ひどく愛想の悪い男である。こうぶつぶついうと、彼はまた自分の膝を抱えて居眠りを始めている。

しばらく経つとここへまた、中川家の臣、阿部仁右衛門も登つ

て来た。二人の鉄砲足軽も一しよだった。——で、山上にはこの頃すでに七名の羽柴方がいたわけだった。

そのうちに麓の宝寺やその他の方角から、味方の大勢の声がかすかに聞えて来たし、同時に——ほとんど同じゅうして——北側の下海印寺方面からも、すさまじい勢いで、明智方の松田隊七百が、これも先は、先頭、後は後、隊伍の順もなく、先登を争つて、あらしの如く駆け登つて来た。

「まだ撃つな」

例のぶつちようづら 仏頂面ぶつちようづら した中川淵之助は、あだかも自分が、この手の指揮者でもあるように、逸はやりかける他の六名を戒いましめて云つた。

「——ずんと敵をそばまで引きつけてから一度に撃て。この下の

道の曲り角に、白いものが見えるだろうが。あれは俺が松の枝に括くくしつけておいた白鉢巻の小布だ。銃つづの標的をあの下に狙ねらいさだめておけ。そして敵の影がそこを曲つて来たら、途端に浴びせかけるのだ」

小面こづらの憎い味方だが、云い分は良策だし、頼もしいところもあるので、みなその言に従つて、敵の来るのを、待ち構えていた。

ところが、松田太郎左衛門の先鋒隊は、まだ山上に間のある八は分所ちんぶどころからはや後方の山腹に羽柴勢の影を認めたので、忽ち機先を取る戦法に出て、一いつせい斉に銃火を浴せかけたのであった。

当然、羽柴方も応射した。

しかし、これはまだ距離も距離だし、暗くもあり、敵味方とも

極めて目標の不的確な氣勢射撃に過ぎなかつたので、どつちに取りつても、大した効はない。

むしろ、七名の小人数ではあつたが、この途端に、山上から数百歩駆け下りて来て、明智兵の影を認めるや否、銃つつさき先下がりに撃つて来たわずかな弾丸のほうか、はるかに奇効きこうを奏した。

最初の七発の弾たまのうち、三弾は確かに敵を仆した。のみならず多寡たかはともかく頭上に羽柴勢の現われたことは、明智勢をして少なからずあわてさせた。敵の顔まで見える距離で敵を見たのは、この大決戦において、この一瞬が初めてであつたのだから、全隊が一時ぎくと衝撃しょうげきをうけたことには相違ない。

敵の形相ぎようそうも、阿修羅あしゆらの姿も、戦たたかいが酣たけなわとなつて、自分もそ

れとなつたときは、何でも無いものであるが、もつとも不気味なのは、初めに接近したときである。

その刹那には、敵と名のついた者は、人にもあらぬ悪鬼か羅刹らせつの如き感じがするものだった。しかしこれは、敵方が視みる心理も同様なのであるから、その殺氣めまに眩めまいをせず、日頃の丹田たんてんで、沈着に押し迫つた方が、序じよの勝口を取ることはいうまでもない。

松田隊の先頭には、主将の太郎左衛門はいなかった。太郎左衛門の部下の将、辻義助つじよしすけが指揮に立つて来たものである。義助は、よく肚はらもすわつていた侍とみえ、すぐ奇襲の敵が六、七人に過ぎないことを看破かんぱして、

「騒ぐな。小勢だ」

と、不利な低地を取っているため怯ひるみがちな味方を励まし、

「銃つづぐち口をみなあの上の岩角にあつめろ。一いっせい齊に撃て」

と、呶鳴った。

少なくとも、七、八十挺ちようはあろうかと思われる鉄砲の影がうごい

た。それが皆、ひとつつ焦点へ銃口を向けたのである。上の岩頭に立っていた七名は、当然、蜂の巣となるべきまと的に位置していた。

——と。中川淵之助は、他の岸九兵衛、阿部仁右衛門、山川兄弟などに対むかつて、

「間に合わん。俺は突ツこむぜ」

云い捨てると、鉄砲を捨てて高きから低き敵へ、猛然駈け向つて行つた。

一弾放つと、一弾こめて、火縄を点じ関ひきがね金を引くまで、かなりの時を要するのが、この時代の火器のどうしてもまぬかれ難い弱点だった。

殊に、明智方の銃士は、桂川を渉わたるとき、驟雨しゅううのために、だいぶ装備を濡らしている。中には幾筋もの切火縄がみな役に立たず、後に退っている者もいた。

その虚を衝ついたのである。淵之助に倣ならつて、阿部仁右衛門も岸九兵衛も、劣らじと、捨身に出た。パパッと慌あわてた弾たまけむり煙むりが立った。こう撃つ弾は中あたつていないこと確かである。淵之助の陣刀は、もうそこらの敵を薙なぎ分けていた。山川七右衛門の弟小七は、素手で取っ組んでいた。槍を向けて来た敵がいたので、その

槍欲しやと奪いにかかったためである。

まつまつまつ
松松松

後に思いあわせると、松田隊の七百余人の部隊は、このときも
う二分されていた。

南軍のほうでは、堀尾、中川、高山、池田の各手の将士が、先
を争って天王山の先登^{せんとう}を競っていたが、堀秀政だけは、

「横道をとつて、北側の麓へむかえ」

と、急に山の腰を迂回^{うかい}して、行動を別にしていたのであった。

その目的は、すでに山へかかっていると観^みた敵勢の退路を断つ

にあつた。

果然、その横襲は、松田隊を中断して、主将の松田太郎左衛門を、目前に見ることができた。

ここの激突は、山上よりも烈しかった。松樹や乱岩の多い山坂の混戦なので、鉄砲などはまどろいとなして、槍、太刀、長柄で喚きあう者が多かつた。

組んで、岩頭から落ちる者がある。惜しくも組みしきながら後から一と突きに刺されるのもある。

もちろん、弓組もいるので、弓鳴りや銃声は間断もない。しかしそれ以上なのは、敵味方約五、六百の喊声だった。その声は、たれひとりとして、喉から出しているようなのではない。満身の頭

髪と毛穴から発しているとしか聞えない。

押しつ押しされつだ。いつか陽はさし昇っている。めずらしく青空と白い雲が見える。こう照り出すと、いつもなら満山に聞える蝉せみの声もきようは唾おしとなったかのようである。

そして山をも揺がす武者の叫きよう喊かんが、それに代っていた。累るいるい、
々、あなたやこなたに、はや数えきれぬ朱あけの屍かばねが点綴てんてつされた。
或いはひとつに或いは重なり合っている姿は悲痛を極める。しかしそれが味方を叱咤しったする力は非常なものだった。その屍かばねをふむ戦友はみなすぐ死生の外へ駆けた。堀隊の兵もそうである。明智隊の兵もそうである。

山上の戦況はまだ不明だが、ここも一勝一敗をくり返していた。

そのうちに、北軍の松田隊に揚つていた諸声もろごえがふと急変した。陽声から虚声になつたのだ。わあッ——と、まるで嬰兒あかごが泣くときのような退ひく息を示したのである。

「ど、どうしたのだッ？」

「なぜ退くかッ。退くな」

味方のみだれを怪しむ者は、味方にむかつて憤怒した。しかしそうした人々も、忽ち雪崩なだれに巻かれて、麓ふもとのほうへ駈け出した。自分たちの主将、松田太郎左衛門が一弾あたに中つて、部下の兵に担かつがれてゆくのをようやく眼に見たからである。

「追えッ。突きまくれッ」

掘隊の大半は、すでに追撃をかけている。——が、秀政は、声

をかぎりに、

「追うなッ」

止めていた。制していた。

けれどその間髪の勢いは到底、制止も何もきくようなものではない。果たせるかな山上から、松田隊の先鋒がまるで濁流のように駈けて来た。後続隊が来ないところへ、主將討たると聞いて、当然降りて来たものだった。

数においては、堀隊は彼の比でない。一戦どころか、ひと支えもなし得ず、急坂を駈け降りて来た敵の部隊に、つき飛ばされ、踏みつぶされてしまった。さきに麓へ追って行った堀隊の一部もまた、秀政の案じたとおり、挟きょうげき撃をうけて、惨たる苦戦に立つ

てしまった。

そのとき堀尾、中川、高山、池田の混成山之手隊は、山上にむらがり立って、

「取ったッ」

「天王山は、わが軍のもの」

と、序戦第一の歓呼を張りあげていた。

けれどそれは一部の将士だけに過ぎない。あらかたの者は、そこを占拠するや否、なだれを打って麓へ退いた明智勢を急追していた。そして途中から堀秀政の手ひとつになった。

秀政もこの時は、多くの味方を得たので、ためらいなく、さきに駆けた部下の一部を救うためにも、急せきに急いで、追撃戦へ移

つていた。

逃げ散る敵は道を選んでいないので、追う者また道を見てはいなかった。

このすさまじい「駈かけ落おとし」のうちには、宮脇又兵衛（後に長なが門守のかみ）は馬を用いていた。そして宝たから寺でらのうしろの断崖の上に来てしまったのである。馬は当然、硬直してうごかない。その間に、身軽な敵勢は、小道を駈け下り、或いは、藤ふじ蔓づるなどにすがって、蜘蛛くもの子のように逃げ降りてゆく。

「武門に伍ごして、日頃は人並の言を吐いている又兵衛も、いざとなつては、わずか数丈の切岸きりぎしに怯ひるんで、馬を捨てたといわるるも口惜しい。——源九郎がひよどり越えの嶮けわしさは知らねど、ま

まよ彼も人、我も人」

又兵衛は両の手に手綱たづなを結んで、ひたと馬の背に胸を伏せると、
逆落さかおとしに絶壁を乗り落した。

人に見せんためではないが、せつなの勇姿を目撃した者も多か
った。敵とも味方ともつかず、ただ一つの喊かんせい声が、わあツと、
その蹄ひづめから立った砂煙へ驚嘆を送った。

砕けたか？ 脚を折ったか？

と人々は、刹那のあとを、なお見まもつたが、何のこともなく、
馬は又兵衛を乗せたまま、追いついた敵勢のなかを狂きょうほん奔して
いた。

この道筋ではなかったが、堀尾茂助も、馬で敵を駈け落してい

た一人であつた。彼は、用い馴れた十文字の槍をふるい、目ぼしき敵を三名まで引っかけて突き伏せたが、そのたびに、徒歩かちの家来、堤五兵衛、松田又市、柿権八かきなどを顧みて、

「いまの首を取れ」

と、いいつけ、自身はなお、寸間の時も惜しんで急追をつづけていた。

このほか、ここ一山を中心として、ふつぎよう 弘ひる 暁ふたとから午まえの二いとま刻きばかりにわたる合戦中に、武功を示した将士は列挙するに違いもないほどである。以てもついかに、秀吉麾下きかの面々が、たがいに手つばに唾つばして、たとえば宇治川の先陣に臨むがごとき——はれ 曠はれと、意気とを——心に期していたかがわかる。

この意気は、もとより彼ら箇々のものに違いないが、大きく観みると、秀吉の意気の投映であり、秀吉という主体を得て、初めて太陽系を環めぐる諸衛星のような勢いと燦かがやきを持ったということもできる。

が、秀吉はこのときまだ前線に着いていなかった。神戸信孝の来着を淀川に迎えていたためである。信孝や丹羽長秀などの軍を加えて、彼がその本陣をここへ進めて来たのは、まだ陽ざかりの未ひつじの下刻（午後三時）頃であった。この炎天に、暁の雨も乾いて、人馬は汗と埃ほこりにまみれ、華やかな緘おどしの色や陣羽織もみな白っぽくなっていた。ひとり燦さんさん々として烈日を射るが如きものは、金きんぴ瓢ようの馬じるしだけであった。

秀吉はその馬印を、山崎八幡宮の社前に立てさせた。

天王山に銃声の訶こだましていたうちは、空家のようなだった町も、明智勢が退却して、ここに新たな甲かっちゆう冑ゆうの潮が混み入ると、忽ち戸ごとに、水桶や瓜の山や、麦湯などが持ち出された。そしてその接待に、羽柴兵がむらがつてくるのを歡びとする町民たちの中には、女子供まで立ち交じっていた。

「敵はもう一兵もあれにいないか」

秀吉は馬も降りず、間近まぢかの山上に見える味方の旗じるしを凝視していた。

「おりませぬ」

答えたのは蜂須賀彦右衛門である。諸隊の戦況報告を綜そうごう合し

て判断を加え、概念を秀吉に伝えていた。

「出ばなに、指揮者を亡うしなつた敵の松田隊は、その一部は北ふもとの麓へ、残る一部は友岡附近にある友隊と合したようにござりまする」

「光秀ともあろうものが、なぜこの高地を左様にあっさりほうきと抛棄したろうか」

「おそらく、彼とても、かほど迅速には思い得なかつた結果でしよう。『時』の量はかり違いです」

「彼の主力は」

「勝龍寺をうしろとし、円明寺川を前にして、淀よどぐち口から下植しもうえ野のにわたって、満々と陣しておるようです」

神官や小姓組が来て、木蔭の涼しい所へ、お床しょうぎ几ぎを設け置き

ましたが——と休息をすすめたが、秀吉はなお馬を立てたまま見向きもしない。

堀尾茂助、堀秀政、中川淵之助、宮脇又兵衛など、やがて続々これへ帰つて来た。そして各、馬前に一いちえつ閱を受け、かつ、秀吉自身の前線出馬を賀し合つた。

「山麓まで行つてみよう。まだ死骸もそのままだろうが」

休むいとまを秀吉は血戦のあとへ馬を向けた。そして、しやうで聖天堂んどうのわきから中腹近くまで登つて行つた。ここからは淀も、円明寺川の一線も、敵の布陣も、一眸ぼうのうちだつた。

「秀政も茂助も、馬で駈け落したそうだの。中川や高山も、よい家来をもち、他家に恥なき戦功をあげたのはめでたい。とりわけ、

宮脇又兵衛は、信長公の先発として、中国へ下るべきを、引つ返して、きよようの働きは、聞くも胸のすくような心地がする」

彼は、又兵衛を呼んで、手ずから長刀ちやうとう一と振りを与えた。

敵味方の累々るいりいたる死屍は、松の根がたや岩角に、そのまま、

擦りようらん乱あけの朱を見せていた。

「お味方もお味方ですが、敵もなかなかよく戦います。明智方にも、恥を知るさむらいは多いようです」

堀秀政がいうと、秀吉は、さもあろうと頷うなずいた。そしてそれらの死屍ししのあいだを歩いて、すぐ山を降って行きながら、こう連歌れんがの上の句を口誦くちずさんだ。

松松松どれも日本の姿かな

「たれぞ。下の句しもを付けてみんか」

——しかしそのとき、円明寺川の方面に、喊かんせい声と銃声せいが揚つた。きつかり申さるの刻こく（午後四時）頃の陽脚ひあしであつた。

相搏あいうつ 両軍りようぐん

円明寺川は、山崎の駅の東方にあたる。一ひとすじの流れは川の姿をなして、淀川よどがわに注そそぎこんでいるが、附近は葭よしや蘆あしにおおわれた一帯の沼地である。そして常ならば行々よしきり子の声こゑが喧やかましく聞えるのだが、きようは一鳥の声こゑすらない。

——が、この附近にはすでに、その日の午前から、明智方の左

翼と、羽柴方の右翼とが、一水を挟んで、じつと対峙していたのである。

折々、ザアと、葭よしの葉裏を白く翻かえして、沼地を渡る風の中には、わずかに旗竿はたざおの先が見えるぐらいで、軍馬らしいものは兩岸共に見えなかつたが——北岸には、斎藤利三としみつ、阿閉貞明あへさだあき、明智茂朝げともなどの兵力は、先頭予備を合わせて、約五千はいるはずであり、また南岸には、高山右近、中川瀬兵衛の部下四千五百に、池田信輝のぶてるの兵四千というものが、重厚に陣列をかさねて、いわゆる一触即発の幾時間かを、むなしく湿地の暑熱むに蒸むされて戦機を待っていたものだった。

これはもちろん秀吉の来着と、その命令一下を待っていたもの

で、はや味方の山之手隊が、天王山を占領したとも聞えていたの
で、この方面の将士は、なおさら武者ぶるいして、

「いったい、本軍は何をしているのだ」

と秀吉の着陣が遅いことを罵りののしたいばかりはがゆ齒痒がつっていたので
ある。

一面、御坊塚おんぼうづかに本陣をおいていた明智光秀は、疾とく天王山へ
さし向けた松田太郎左衛門の討死、またその部隊の全面的な敗退
を聞いて、

「遅かったか」

と、自己の指揮が、時を誤っていたことを、まずみずから責め
ていた。

その一高地を、味方の勢力下に置いて戦うのと、敵の手に委して決戦に臨むのでは、作戦上、重大な相違を来たすぐらいなことは、もとより彼も充分に知っていた。

けれど、これへ進出するまでの間に、光秀は、その機を掴む寸前において、三つの「未練」に惹かれていたのである。未練とはいわゆる決断を鈍らせる迷いにほかならない。

一は、筒井順慶との会約にひかれ、むなしく洞ヶ嶺ほらみねに一夜を焦躁して送ったこと。二は、下鳥羽に帰陣して後も、なお淀城の修築などを命じていたほど——秀吉の進撃に対して時間的な過誤かごを抱いていたことである。

また、その三としては、根本的な彼の肚はらの問題になる。つまり

積極か消極か。攻勢をとるか、守勢を選ぶか。御坊塚へ進出する直前まで、彼の大方針は多分に、岐路きろを決していなかった。

これは、老臣齋藤利三などの意見も大いに彼を迷わしていたといえよう。利三は、使いをもって二度まで、光秀にこうすすめていたのである。

(ここの御一戦では、どうしてもお味方の不利と考えられます。如しかず、秀吉の鋭鋒を躲かわして、ひとまず坂本まで御退陣の上、江ご州しゅうその他に散在しているお味方の勢を一つに結束し、不敗の陣容を確しかとかためた上、敵をお邀むかえ遊ばすが、ここにおいては、唯一の良策ではございますまいか)——と。

齋藤利三の献言は、決して理由なきものではない。

一万六千と数えられる明智勢も、その質を見ると、内二割は、やましろしんぶ山城新附の兵である。これは子飼の士卒にくらべると、断然見劣りがする。あちこちで新たにきゆうごう糾合された未訓練の兵であるから、弱いことは知れきつている。

また部将のうちにも、すわひだのかみ諏訪飛騨守とか山やまもと本山入とか、その他、くぼうけ旧公方家の遺臣だの、たんばぶし丹波武士と称する土豪なども交まじつている。これらの者の闘志を、果たして、あけちふだい明智譜代の旗本たちと同様にみ視て、この戦列に恃たのんでいられるかどうかも甚だ疑わしいのである。

これに反して、敵秀吉の軍容は、圧倒的な優勢にあるといわなければならぬ。

数においても。

中国から引つ返した彼の直屬軍一万に、池田信輝の四千人、高山、中川の両軍をあわせて四千五百人。ざっと一万八千五百人を擁ようしている。

加うるに、大坂表から参加した神戸信孝、丹羽長秀、蜂屋頼隆の総勢約八千を容いれたので、総計すると、二万六千五百人。

が、その実数となつた。明智方から比して、断然一万は多いのである。

のみならず、その麾下きかは、いわゆる精銳であり、また故信長の譜代であり、かつ、絶好なる――

「故右大臣家の 弔合戦とむらいがっせん」

なる大旆たいはいを持つているのだ。

これに対して、その出足早な潮さきにむかつて行くのは、到底、明智方の不利である。

この際、明智方としては、京都という政略上重要な地をひとまず敵ゆだに委ねても、坂本まで退ひいて、そこにある三千の兵と、また味方のうちでも最も恃たのみがいある良将としている明智左馬介光春をも帷幕いぼくに加え、かたがた、四国の政治的变化や、信長の遺臣中にも必然起るであろう内訌ないこうと自壊作用などを待つて、おもむろに陣容をかため、ここに玉碎を選ぶよりは、万全な戦いをなすべきではあるまいか。

これが斎藤利三の考えるところであつたのである。

老将の見解にはおのずから肯綮こうけいに値するところが多い。光秀

も内心は大いに心を惹ひかれなこともなかつた。けれど彼は、

「ここで敗るる程ならば、坂本にたてこもるとも敗れ去らんは必ひつじよう

定である。もし京都を敵に委すならば、光秀の名分は何によつて立てようぞ」

と思つた。たとえ幾多の不利はあるとも、一戦も交えず、京都を明け渡すことは、彼の心事として、断然、忍び得ないものがあった。

人にも語らず、檄げきの文にもそれは称いえないことだつたが、光秀の心事というのは、実にこうであつた。

(たとえ主と名のつく信長をいっちよう一 朝に討つも、われも御民みたみ。信
 長も御民。弓矢の精神こころになど變りのあるべき。さるを、一戦もせ
 ず、御所の地たる京都を易々いはいとして敵に渡すからには、あれみよ
 光秀こそは、何を奉じて天下に立たんつもりぞ。不利と見れば、
 禁門の御所在も打ち忘れて、引き退く心根の卑いやしさを見よ。信長
 を討つたる心も、それをもつてみれば、まったくの乱臣賊子の出
 来心に過ぎまい。そういわれても是非がない。よし屍かばねはいかに辱はずかし
 めらるるも、その一点を疑わるるは百世までの心外である。――
 光秀は断じて、都をうしろに、この山崎で一戦を決しよう。なん
 の秀吉、何する者ぞ)

かくて、この戦いに面した光秀の心事は、すでにこれへ臨む前

から、おのずから悲調を奏かなでていたものと観みてよい。

——秀吉、何する者ぞ。

との気概は示しても、心の底には、必勝を期すまでの確信はなかつた。

その悲壮な決意は、主なる将にはみなよく酌くみ取られていた。その点、彼にもまた、彼のためにはいつでも死のうとする腹心は多い。

とりわけ齋藤利三のごときは、年も老齡としではあるし、忠ちゆうかん諫かんすでに容いるるところとならず、大勢の見透しにも老将だけに、

「きようこそ、一期いちごと覚えたり」

とは、誰より先に、ひとり決めていた覚悟であつたらう。

——で、円明寺川口の銃声も、その斎藤隊から突如として揚つたものだった。

戦いの切っかけというものは微妙である。両軍とも小半日は葎かのあいだに、ブヨや蚊に喰われながらも、じつと対峙たいじしたまま、上將の号令を神妙に待っていたが、そのうちに、羽柴方の陣から美しい鞍を置いた一頭の放れ駒が、水を呑もうとしてか、ふいに円明寺川の岸へ跳ね出して来たのである。

馬の持主は郎党であろう。それを追いかけて来た四、五名の兵が見えた。それへ向つて、対岸の葎よしの中から、ぱつと弾たまけむり煙けむりが立ち、つづいて、パチパチパチとつるべ撃ちが注そそがれたのであつた。

「あッ、殺^やられた。撃て、撃て」

川べりに伏した味方の兵を救うために、此方からも、北岸の弾煙へ向つて弾が送られた。かくてもう命令を待つ^{いとま}違はない。

「——全軍突撃」

という秀吉の命令は、実に、この銃声が揚つてから後に届いたものであり、明智方もまた、敵の動きに反動を起して、果然、川を渡つて来たものだった。

淀へそそいでいる川口はかなり広いが、少し上流^{かみ}のほうは、さしたる川幅ではない。

ただし、水は数日^{やぶ}来の驟雨^{しゅうう}で相当激している。鉄砲を持った明智の銃隊が北側の藪^{やぶ}に姿をあらわして、南側の堤上に立つ羽柴勢

を狙い撃ちするあいだに、はや彼方此方、しぶきを蹴つて、押し渡つてゆく甲かっちゆう 冑群は、明智の精銳級と目されている槍隊の士たちであつた。

「槍組ツ。出ろツ」

堤の上でも高山隊の一将が、躍り上がつて、指揮していた。

川幅が狭いので、銃の効果は少なかつた。前の一側が撃つて、弾たまご込めするため、後列の一側が入れ代る間に、はや此方の岸へすがりついた敵は、直ちに、銃隊のふところへ跳びこんで来る危険があつた。

「銃隊は横へ開け。味方の前を塞ふさいぐな」

槍の穂をそろえて突き出した中川隊の一群は、あらかたその槍

をふりかぶつて、堤の下や水面を撲りつけた。

もちろん目ざすものは敵兵だったが、槍を繰り引いて突き出すいとまよりは、振りかぶつて撲りにかかったほうが、より迅速に、敵の出足を防ぎ得るからであつた。

激突は、川の中で起つた。

槍と槍。槍と太刀。——或いは長柄ながえ。

斬ツつ、斬られつ、である。

「面倒ツ」

と、吠えて組む者。

しぶきを揚げて戦列から水中に没し去る者。

濁流は渦卷いた。

いや、武者と武者の中に、わずかに流るる水があるといつてよい。川は戦う武者で埋められている。

血あぶらは、水面にぱつと泛ういては、ぱつともとの水に回かえつてゆく。

そのうちに、南軍の第二陣、中川清秀の一隊は、下流の戦鬪を、高山右近の手勢にまかせて、

「突ツこめ。突ツこめ」

「ただ、突ツこめ」

「横にも、後にも、顧かえりみするな」

「突ツこめ突ツこめ」

「ただ突ツこめ」

御輿みこしかつ昇の懸かけ聲こえをそろえて社を出るように、わっしわっしと、重厚な戦列を押し出していた。そしてはやくも、円明寺川の東岸の藪に迫り、遮しや二無二、敵の中へ駈け入った。

この辺は、明智の左翼第二隊、阿閉あべ貞明の陣地である。北軍の破綻はたんはまずこの一線から生じた。すでに味方の左翼が猛突撃を起しているにかかわらず、しきりと弾たまけ煙むりのみ立てて、火器の威力を恃たのみ過ぎていたためである。

藪を踏みこえると、所々の湿地のほか、畑や野道や団栗どんぐりばや林しなどが見える。明智勢はそのいたる処に真ツ黒なうごきを呈しており、今や、味方の陣地内へ一步突き進んで来た敵を見ると、怒濤のように、思い思いの相手を目掛けて駈け蒐あつまった。

「ありやありや」

と、異様な声を発して、明智方から挺身ていしんして来る巨漢おおおとこがある。見るまに、彼の重そうな強槍は、中川隊の士を四、五名突ツかけて、左右に芻はねとぼし、なお此方へ奮ふんじん迅して来た。

具足はつけているが兜かぶとはいただいていない。鉢巻から逆立つ乱髪いつきよは一炬ほのおの炎のように赤ツぽく見え、その大きな双眸そうぼうの光と共に、いかにも万夫ばんぶふとう不当のさむらいらしく見えた。

その漢おとこに突き崩されて、中川隊の一角は、ふたたび川の側まで押し返された。——と見て、中川勢のうちから、

「おのれ、われ独り武者顔する憎い奴。ここに織部おりべのあるを知らぬか」

と、呼びながら、颯さつ爽そう、前を遮さへぎつて、猪武者いのししの槍のなかばを、槍をもつて、ぴしツと搦からみ合わせて行つた一将があつた。

中川清秀の婿のふるたおりべしげなり古田織部重然ひとまであつた。

この二者の戦鬪は、余り烈しくて、人交ひとまぜをゆるさなかつた。彼に比して、織部の槍は、細目だつたせいにか、戛かつぜん然、けら首のあたりからポキンと折れて、その穂先だけが、あたかも氷片のように遠くへ飛んだ。

「あなや。若殿危うし」

と、周囲に戦つていた中川家の家士たちは、思わず眼前の敵を捨てて、救けに向いかけたが、織部は咄とつさ嗟に、折れ槍をふりかぶつて、敵の手許を強く一打ちし、同時にそれを捨ててむずと猪武

者のふところへ組みついていた。

中川家の家士達は、途端に後へ迫つて、織部おりべの相手方を、滅茶苦茶に斬りつけ、また、突き抉えぐつた。

秀吉の第二軍中川勢の突出は、明智方の最左翼にある斎藤隊が克かち取つた凸形とつがたを、忽ち危ういものにした。

中川勢が急に右転して来れば、うしろを巻かれる懼おそれが生じるからである。

その斎藤隊の鋭鋒えいほうを、防ぎかねて見えた高山右近の部下も、「二の手の中川勢はもう遙かに先を取っているぞ。中川勢におくれるな。彼らの下風かふうに措おかれて堪たまるか」

と励まし合つて、押されては押し、押しでは押し返され、ほと

んど、川の中を両軍の死者で埋めるばかり吠え戦った。

「退けーッ。陸へ退がって、敵の奴輩を、寄せては叩け、寄せては突き伏せろ」

斎藤勢のあいだから振り絞るような号令が響いた。これは早くも味方の中川勢が敵のうしろへ迫った証拠と高山隊も見て、

「突け、突け、突けッ！」

「息つかすな」

と、対岸へ退く敵のしぶきをかぶって、追撃の槍を一斉にそろえた。

川口に近いこの辺には藪もない。湿地に続く湿地帯であった。それだけに、いちど退き足となると、防禦物もなく、事実上総崩

れとならざるを得なかつた。

馬が駈け渉る。旗じるしが突き進んで来る。高山右近の隊も、ほとんど、北岸へのぼり尽した。

この頃、西陽はようやくやく傾いていた。たそがれ迫る茜の雲は、
 悽愴な夕空の下に、喚き合ふ真ツ黒なかたまりとかたまりを照
 らしながら、寂寞と、ひとり夜空のたたずまいを整えるに他念
 がない。

ここでもまた、約半刻にわたる激烈な戦いが繰り返された。
 いちど崩れるかと思えながら、また取って返して、沼地や灌木
 地帯の足場の悪い所に立ちながらも、なおよく防ぎ戦う斎藤勢の
 粘りづよさには、驚くべきものがあつた。

ここばかりではない。

阿閉貞明あべの隊といい、明智茂朝の隊といい、総じて明智勢のうえには、一種不気味なる死に物狂かまいがあつた。何とはなく光秀の胸中に予期されていた悲痛の奏かなでこそ、この死に物狂かまいが揚げる破軍の声だつたのである。

「ここは、孤立する惧おそれがある。味方の山之手隊は、潰滅かいめつされたという。並河掃部なみかわかもんどのも討たれた。諏訪飛驒守すわも討死した。——つつまれぬうちにはや引き退のこう。退ひけや、退ひけや」

悲歌は、しきりに立ち、悲報は風の如く、明智方の一軍二軍、さらに中央の第三軍をもつつんだ。

予備隊としては中軍には、御坊塚おんぼうづかを中心とする光秀直属の五

千人を真ん中にして、右は藤田伝五、伊勢貞興らの二千人が陣し、津田信春、村上清国らの二千人があつた。

そしてこの中央部には、蜂屋出羽守頼隆が当つて来た。

藤田伝五は、押太鼓を打ち鳴らして、歩武堂々、戦列を展開した。

さきに立てた弓隊が、一斉に弓鳴りを発して、物凄い矢風を送るや、蜂屋隊もそれに報いて鉄砲をあびせかけた。

「交われツ」

と、伝五の麾が、一令、風を截ると、弓隊は散開して、こちらも鉄砲隊が出て応戦した。漠々、立ちこめる硝煙の霽れるを待たず、次には、間髪をいれず、鉄槍鉄甲の武者が敵へ向つて、

その下を搔かいくぐつていた。

藤田伝五と、部下の精銳は、蜂屋隊を撃退した。

蜂屋隊に代つて、神戸信孝の麾下きか、峰みね信濃しなの守のかみ、平田壺岐ひらたいき守

が、新手を出して、明智勢に當つた。

伝五行政は、それをも撃碎して、追おい退のけた。

一時は、當る敵もないような勢いに見えた。

鏖とうとう々と、無敵をほこる藤田隊の押太鼓は、信孝の身边をむら

がり守る騎馬の士たちの足なみをも、しどろに乱おびやして脅おかした。

ときに、国分佐渡守やほか二、三の部将が、およそ四、五百の

兵をひきいて、藤田隊の横から、急に、攻せめ鉦がねを鳴らし、喊ときの聲

をあげ、さも大軍のように、喚わめき襲よせた。

雲はほの紅あかいが、地上はもう夕闇だった。藤田伝五は、自身、やや深入りを自省していたところでもあつたので、

「右転！」

と、麾きを振り、

「曲がれ、曲がれ、どこまでも右へ」

と、急に指揮をかえた。

全軍、円を描きながら、徐々にもとの中軍と合して、手固く戦うつもりだった。

ところが、急に左方から、秀吉の麾下、堀秀政の一手が、猛襲して来た。これは伝五にとっては、地から湧いた兵みたいに見える、

「退ひく策てはない」

伝五は、咄嗟とつさに思い返したが、もう陣容を立て直すいとまもなかつた。堀隊は疾風のように、敵を中断し、一方の勢を包圍にかつた。

伝五の前には、金色こんじきの杵きねの馬うまじるし印が、近々と揺れて来るのが見えた。

「さては、神戸三七信孝、自身進まれたな」

と見たので、いまは猶予なく、子息の伝兵衛秀行でんべえひでゆき、舎弟の藤と三行久うぞうゆきひさ、伊勢与三郎などと共に、一団四百七十騎、

「この首渡すか。あの首を申しうけるか」

と、真ツ黒にかたまつて、敢然、数もわからぬ敵の中へ駈け入つた。

腥せいふうや風野を蔽おほうとはこの一瞬のことであつた。宵はすでに暗く、死闘のおめきは、一声一声、血のにおいをふくんで天を翔かける風となつた。

羽柴軍の全陣のうちでも、神戸隊は最も兵力の多い点で重厚だつたのである。それに丹羽長秀の三千人もそれを救たすけている。いかに、藤田伝五やその骨肉どもがみな豪勇であつても、到底、刀槍をもつて掻き分けられるような薄手な線ではない。

伝五は、全身六カ所の傷をうけた。

そしてついには、戦い戦い駈けまわる馬の上で、われ知らず昏こんんこん々と神気を失いかけていた。

すると、うしろの闇で、

「ち、父上ッ」

と、子の絶叫が聞えた。

息子の伝兵衛秀行の声よと思うと、彼はハツと馬のたてがみか
おもてら面を上げた。途端である。何やら右眼のうえに打ぶつかったのは。
——彼は空の星が額ひたいに落ちたように感じた。

「あッ。——鞍へ、鞍へ。固くおすがりになつておいでなさい。

矢はそれています。額のお傷は浅手です」

「だれだ。わしを支ささえたのは」

「藤三です」

「舍弟か——伊勢与三郎はいかが致した」

「はや、討死を遂とげられました」

「諏訪は」

「諏訪どのも」

「伝兵衛は」

「——また、敵に囲まれました。お供いたします。鞍の前輪に、身をお伏せなされませ」

伝兵衛の生死には触れず、藤三は兄を乗せた馬の口輪を把つて、乱軍のなかを一散に落ちて行つた。

金瓢押し

相搏つ味方の咆哮は、申の刻（午後四時）から酉の下刻（七

時頃)までつづいた。

久我くがなわて暇から円明寺川に沿う北野一帯は、この咆哮のうちに、

とツプり暮れた。

「——思いのほか手強い」

と、秀吉をして、つぶやかさせた程、明智勢の抗戦も熾烈しれつを極めた。

が、何としても、この総決戦を展ひらく午まひるえのうちに、明智方が、

天王山の一高地を敵手てきしゆに委ゆだね、その山之手支隊の大半を失い、

かつまた、松田太郎左衛門、並河掃部なみかわかもんなどのこの手の大将を早

く亡うしなつていたことは、決定的な敗因をすでにそのときに約したも

のというほかない。

機を見るに敏な秀吉は、この薄い線を衝いて進出した。まだ赤い斜陽が円明寺川を染めているうちに、自身の率いる予備隊一万をのこらず押し進めて、上流から敵を圧縮したのである。果ては、ほとんど敵の中に自己の中軍を置いたとも云い得るほど、大胆なる積極性をその馬印に掲げて、前進また前進、一歩たりと、退くことをしなかつた。

とはいえ、このことでも、決して易々として、進み得たわけではない。

御牧三左衛門みまき、奥田宮内くくない、明智十郎左衛門、進士作左衛門しんしざくざえもん、妻木忠左衛門、溝尾庄兵衛みぞおしょうべえなど、明智家譜代ふだいの名だたる勇将は、

ことごとくこれへ殺到したといつてよい。

「筑前、あれにありとみえたり」

「ござんなれ、猿さるめん面」

「われこそ、一ひとやり槍」

と、およそ名のある程の者は、みな彼の夜目にも燦さんたる金きんぴよ瓢うの馬印を目がけぬはなかつたのである。

秀吉の姿は、秀吉を狙う敵方の將たちを、著しく勇気づけ、死をも忘れさせたことは確かだった。

故に、彼の予備軍は、一万という大軍とはいえ、尺地を刻むジリ押しにしか進み得なかつた。

もつとも、この時もうその予備軍中から、加藤光泰や堀秀政に、各 二千ずつをさずけて、中川、高山などの他の手薄な方へ救け

に廻っていたので、実数は五、六千しかなかったにちがいない。

で、ここの戦況も、一時は勝敗いずれともいえなかったという
 ほうが正しいであろう。——光秀にとつてもまさにここは本陣そ
 のまま前衛であり、秀吉も自身剣けんこうげきふう光戟風ふうのあいだに馬を進め
 ているので、いわば主力と主力の真の決戦は、ここにおいて定ま
 るものと観るべきである。

思い出されるのは、秀吉が、さきにそうぎよう僧形しきの施薬院せやくいんをして、
 下鳥羽しもとばにある光秀の陣を訪わせ、

(毎度、合戦はしておるが、まだ大将と大将との、直しきの太刀打ち
 はしたことがない。このたびは主あるじの讐しかたきたる敵の討伐に向うのであ
 るから、三日のうちに攻めのぼって、光秀と直しきの太刀打ちをいた

すであろう。そう伝言しておいてくれ)

と、施薬院の口から光秀へ通じておいたことばである。きょうの秀吉の進撃ぶりを見れば、その予告は決して一場の戯れでも恫喝でもなかつたことが今思い当る。彼は本気に光秀と直の太刀打ちをせんと望んでゐる血相だつた。しかし馬前馬側の旗本たちとしては、甘んじて彼にその先驅を誇らせてはおかないことはいうまでもない。

川角かわずみ太閤記が誌すところの記述——

秀吉ガ御馬ノ先手衆サキテシユウ、鎧合ヤリアハセ申スト等シク、日向守ガ備

ヘヲバ突キ崩サレ、一町バカリ引退ク処ヒキノヘ、又々、敵ノ先手
詰ツメカケ候ヘバ、秀吉、味方若シヤ押掛オシカカラレ可クヤト思シ召メシ

ケム、味方ノ鎧ヤリノ石突イシツキモ働カザル程、御馬印ノ瓢フクベヲ御詰カケナサレ、ソレヨリ又敵ヲ突キ立テラル

とある辺りの情景は、まさにそのときの情景を描いて躍やくじよ如たるものがある。

由来、秀吉といえ、智策に富み、攻城野戦にも、多くは敢えて戦わず、これを謀ぼうしゆう収する計に出で、また自身勇戦をなすは甚だ得意でもない人であると見られているが、必ずしも、彼が勇将でないという確証はどこにもない。

彼はただ、能あたうかぎり兵を損ぜず、無血の戦果と最大の戦果を希こいねがつてに過ぎないのだ。青年将校時代すでに、箕みつくりじよう作城の激戦には、味方に先がけて身に数カ所の手傷を負うほどな勇気を

衆に示している。彼に、摩利支天まりしてんの一面がないとは決していわれまい。

わけて、山崎の一戦には、

(大将と大将との太刀打ちにて勝敗を決せん)

と、光秀へ云い送り、また、その場に臨んでは、

——味方ノ鎧ヤリノ石突モ働カザル程、御馬印ノ瓢フクベヲ御詰カケナサ

レ

とあるを見ても、いかにこのときの彼の形相が、見敵けんてきひつさつ必殺の意気に燃えていたかがわかる。

きようこの時の彼の戦法は、あだかも永禄えいろくの頃、越後の上杉謙信が、敵信玄の陣域深くへ基地を取つて、一鞭いちべん、妻女山さいじよさんか

ら川中島の敵幕中へ突入した——あの捨身不退しやしんふたいの構えにも似ている。

何で、この前に立ちふさがり得る敵があるうか。

明智方にも、勇者は多かつたが、奥田市之介、溝尾五左衛門、

桜井新五、逸見木工允へんみもくのすけ、堀口三之丞じよう、磯野弾だんじよう、正、鳥山主

殿助ものすけなど、枕をならべて、討死を遂とげてしまった。

星が暗く、道は湿地。

血か、沼か、びしょびしょしたものを、踏みこえ踏みこえ秀吉の中軍は、間断なきジリ押しを進めてゆく。

そのうちに、一窪地くぼちから、頻しきりにパチパチ撃つ者がある。

前列の四、五名が、次々、撃ち仆された。弾たまつ継ぎの早さから見

て、一小隊も伏せてあるのかと思うと、撃手は、一名らしい。ただ左右に家来を三、四人置いて、撃つては弾をこめさせ、一弾撃つてはまた、ほかの鉄砲をとって狙っているらしく思われる。

「退かざる敵はない中に、さりとして健気な敵。虎之助、参つてみよう」

秀吉がうしろへいうと、あつと、主人の声を潜つて、もう駈け出している若武者が見える。当年、二十二歳となる小姓組の加藤虎之助であつた。

ダン、ダン！ 二つばかりの弾音に出会つたが、虎之助の迫る脚のほうが、その弾煙の消えるよりも迅かつた。

窪地の敵は、もう間に合わないと見ると、銃を抛つて、

「汝、何を望んで来たか」

と、猛然、突つ立つて、眼をいからした。

虎之助は、初陣ではない。

中国在陣中、

冠かむりやま

山の城、そのほかでも、一ひとかどの戦功はあ

げている。

手馴れの槍を横に進めて、

「戦場での望みは、名のある敵の首。名もない汝なれば、取るに足りぬ。——俺の槍にかかつてよいほどの首か、さまでの値打もない首か。もう一度、吠えて見よ」

と、云い返した。

敵はもさ猛者だった。

からからと打ち笑つて、

ひゆうがのかみ

「日向守様の御内、伊勢与三郎貞興の侍頭、進藤

はんすけ

半助とはそれがしのことよ。主人貞興は、はやお討たれなされ

た。この半助も、生きて何かせん。——この上はただ一弾をあの

馬印の下にある秀吉に報わんと身を伏せていたものだ。汝、まだ

年ばえも未熟な小冠者、半助が討ち取る相手には足らん。——

退けツ。邪魔するな」

おこ

「烏濟なお人よ。これでも相手とするに足らぬかツ」

虎之助は、いきなり槍の穂先を高目に、びゅツと、敵の真眉間

まみけん

をかすめた。

およそ槍は穂先下がりとなりやすいものである。顔を狙えば喉

ほさきさ

のど

のあたりに、喉をねらえば胴のあたりに来るのが普通である。半助も、その的確には驚いたとみえ、

「かつツ」

と、首を交^かわしぎま、陣刀で払った。

払させた槍を、咄^{とつさ}嗟、そのまま、虎之助は抛^{ほう}り捨てた。——ひどい乱暴である。兜^{かぶと}の鉄鉢^{てつぱち}を砲弾のように向けて、彼の横つ腹へぶつけて行^いった。

「あツ」

半助はよろめく。

虎之助は組みついてゐる。

もう勝った形だ。

——が、両方とも無手むて。そうして双方とも、鎧よろい通とおしの柄つかに
 手をかける違いとまがない。

「小癩こしやくな若者め」

半助の足軽三人が、わらツと、虎之助のうしろへ廻つた。鉄砲
 の逆手、また、ふりかぶつた刀、一度にその背へ落ちんとした。

どたツと、その三人が地ひびき立てて仆れた。虎之助危うしと
 見て、味方の前列から飛んで来た武者たちが、一人一人、敵の足
 軽を討つたのである。

軍鶏しやもと軍鶏のように、羽がいを組み合わせたまま、地上もろだに諸

倒おれとなつていた虎之助は、自分の具足の緒をつかんでいる死
 力こぶしの拳こぶしを挽もぎ放すと、ぶるぶるツと、血ぶるいしながら、何物を

か引つ抱えて、秀吉の馬前へ、一目散に駈けもどつて来た。そして、

「仰せつけの物、持つて参りました」

と、進藤半助の首のもとどりを掴つかんで、星明りに翳かざして見せた。
「祐筆、筆を」

と、馬上のまま求めて、秀吉もまた、星の光に、白紙へこう書いて、虎之助へ投げ与えた。

武勇心掛ぶゆうこころがけてがらもの手柄者の若者とは汝たるべし。いよいよ武功を
尽すべし

六月十三日

秀吉判

加藤虎之助どの

眞情しんじょう率直そつちよくだ。何の文辞も、誇張もない。——が、この一

片の紙は、黄金の兜かぶと、名物の茶入れにも優ること数等の勲章となろう。これを約された若い一武者は感涙にむせんで押しいただいた。市松、助作、佐吉、孫六などの他の小姓たちは、羨望せんぼうの眼をみはつて、ひそかに後の自己へ誓っていた。

御坊塚おんぼうづか

暗い松風が陣営を搏つ。

陣幕は白い生き物のように、大きく膨ふくれる。はたはたと翻ひるがえつて

はまたしきりにただならぬ悲歌を謡う。

「与次ツ、与次ツ」

「はいッ」

「いまあれへ来て、何事かを告げるや否、すぐまた、取って返した使者は、誰からの使いか」

「はッ」

「なぜいちいちこの光秀に告げぬ」

「まだ……事実や否やも、しか確と定まりませぬゆえ」

「何であろうと、伝令のつたえを、光秀の耳に入れぬ法やある。

与次郎ツ」

「はいッ」

「しつかりせいッ。——味方の敗色にそちまでが度を失うたか」
 「残念なことを仰せられます。堀与次郎は、死を期しております
 る」

「……そうか」

光秀はふと、自己の甲かんだか高さに気がついて声を落した。そして
 堀与次郎をたしなめたそのことばは、そのまま、自分に向けて聞
 くべきだと思い直した。

さるにても、御坊塚おんぼうづかのこの本陣も昼のひところ頃にくらべると、
 何と、寥々りょうりょうたる松風の声ばかりではあると、彼は、慄然ぶぜんとし
 て見まわした。

ゆるい傾斜の下は、畑のづらと野面へつついている。東は久我くがなわて暇、

北は山岳、西は円明寺川まで一いちぼう眸の戦場もいまは青い星のまたたきと、一色の闇のみであつた。

さる申の刻こくから酉とりの下刻げこくまで、わずかまだ一刻半（三時間）のあいだでしかない。野に満ちていた味方の旗幟きしは、いずれへ潰つぶえ去つたのか。

——誰も討死しました。誰も敵の中で相果てました。誰も誰もと、相次いで報じて来る味方の名を、彼は胸に留めきれないほどここで聞いた。

いっときはん一刻半の間にある。

今も、堀与次郎が、その悲報の上にまた一つの悲報を受け取つたにちがいない。

けれど彼ももうそれを光秀の耳へ取次ぐ勇氣を失っているのであろう。——光秀に叱られて、ふたたび丘の下へ立ちに行つたが、見ていると、力なげに松の幹へ鎧の背を凭せ^{もた}かけて、默然、星を仰いでいる。

「——何者だツ」

その与次郎は、ふいに、杖としていた槍を持ち直して、彼方の闇に馬を止めた者へどなった。

「お味方だ。お味方だ……」

息を喘ぎ^{あえ}ながら此方へ登つて来る影は、その足つきから見ても、明らかに傷を負っている。近づいた与次郎は、愕然^{がくぜん}と、自分の肩をその者へつき出した。

「刑部ぎょうぶじゃないか。つかまれ。俺の肩に」

「お。……与次郎か。御主君は」

「上におられる」

「まだここにおられるのか。あぶない。もうここもいけない」

香川刑部。それは、藤田伝五の手に加わっていた明智の一部将であった。

刑部は、光秀の床しょうぎ几ぎの前に、のめるが如く手をつかえた。

「斎藤どの。阿閉あべどの。津田どの。そのほか藤田伝五どのを始め、諸軍、総くずれと成り果てました。お味方の将、精銳の士、屍かばねを重ねて、討死を遂げ、いちいち指折って、名を思い出すことも出来ません」

「……………」

この暗い松影の下なのに、光秀の顔ひとつが、白く泛ういているように仰がれた。

返辞はない。

聞いていないかのようである。

刑部ぎょうぶは苦しげに語をつづけた。

「いちどは、秀吉の中軍へまで迫りましたが、闇迫る頃から、退路を撃ち乱され、主将伝五どのの行方も知れずなりました。……」

また、御牧みまき三左衛門どのの一軍も、敵の重囲に落ちて、苦戦を極め、辛うじて、御牧どのの以下、およそ二百ばかり、一団となつて、西久我の部落まで、落ちのびておられました——その御牧どの

が、それがしを見て申さるるには——はやこどもこれまで、御主君には、一刻もはやく、勝龍寺の城へ退いて、御籠城ごろうじょうの用意あるか、さもなくば夜のうちに、江州ごうしゅうへお落ちあるこそ良策と思われる。御辺は、御坊塚へいそいで、はや疾とく、三左衛門のことばを主君へ伝え給え。それまでは、三左も死を逸はやまらず、ここにあつて、殿軍しんがりを構え、主君がお立ち退きの合図を見て後、われら生き残りの二百余名、一手となつて、秀吉の陣へ駆け込み、斬り死にして果て申さん所存——と、かように、申しおられました」

「……………」

光秀はなお沈黙していた。

使命を終ると、刑部の影は、急に平たくなつた。地に俯うつ伏ぶしたまま、呼べど答えぬ者になつていた。

光秀は、じつと、床しょうぎ几ぎから見まもつていたが、冷然と与次郎をかえりみて、

「刑部は、深傷ふかでを負つていたのか」

「はい」——与次郎は悲涙を眼に溜めていた。

「ことぎれたものとみえるな」

「左様に思われます」

「……与次郎」

と、まったくべつな声がらをもつて光秀はふいに訊ねた。

「最前、そちの受け取つた使番の報しらせは何であつたのか」

「今はつつまず申します。あれは、筒井順慶の軍勢が、にわか
に、洞ヶ嶺ほらみねを降つて、淀方面からお味方の左翼を強襲しに出て来
たため、さしもの齋藤利三としみつどのを始め、お味方の諸隊も、踏み
こたえる力も尽き、総くずれになつたものと、その敗因を報らせ
て来たものにござります」

「何だ。そのようなことか」

「今さら、お耳に入れても、この挽回ばんかいはつきませぬ。いたずら
に、御不快と焦しょうそう躁そうを加えるまでのことと、実は折を見て、お
話し申すつもりでおりました」

「なんの、人の世じゃ。とりわけ順慶のごときは、人の中でも、
最もありふれた人柄。あれのやりそうなことよ。たれが齒牙しがにか

けようぞ」

光秀は笑った。強しいて笑ったといえないこともない。そして彼の手は陣後をさし招いた。馬を曳ひけ、馬をと、にわかにに、焦心いらつて呼ぶのであつた。

深しん夜や行こう

援軍また援軍と追いかけに兵を出したので、残り少なくなつていたが、ここにまだ老臣旗下以外、二千に近い兵力はある筈。

光秀はその手勢をひっさげて、敵中の御牧三左衛門兼かねあき顕の残軍に合し、最後の一戦を試みようとしたのである。

馬上に身を移すと、全御坊塚の營にとどろくような声で、自身、進撃の令を叫んだ。そして、全營の兵がむらがり寄るいとまも待たず馬首を振り向け、左右の士わずか数騎と共に丘を駈け下つていた。

「あッ。——立つは誰だ」

光秀は急に馬を止めた。ふいに一つの陣幕の内からまろ転び出た人影が、傾斜を駈け下つて、いきなり道に立ちはだかり、光秀の馬の前に、大手を拡げて立ったからである。

「たてわき帯刀。なぜ止める？」

光秀の声はするどかつた。

老臣のひだたてわき比田帯刀なのである。帯刀の手はすぐ主人の馬の口輪を

つかんでいた。ひとたび、悍気かんきにまかせた馬は容易にその本能を制しきれないもののように、頻りに土を蹴あつて足搔あいた。

「与次郎も、三十郎も、なぜお止めせぬか。降りろ、降りろ」

比田帯刀は、数騎の旗下をさきに叱いんぎんつて、慇懃いんぎん、光秀へ頭を下いんぎんげた。

「常のわが殿とも覚えませぬ。——勝敗は一場の変に過ぎませぬ。目前の一敗をもつて、直ちに、おん身を捨てんと遊ばすような軽拳わらに出るは、日向守光秀様らしくもないことです。血迷えりと嗤わらわれましよう。——なおなお、ここには敗れても、坂本には御一族もあり、各地にやがてを待つ諸將の散在すること、必ずしも、後図こうとの策なきではありません。……まず、ここはひと度、勝龍寺

の城まで、お立ち退きがしかるべくと思われまする」

「おろかよ、帯刀」

光秀は、悍馬かんばのたてがみと共に、顔を振った。

「——常ならぬ今だ。常の光秀をもつてわれと視みるか。駈け崩された諸隊の兵も、光秀先陣に立てりと聞けば、ふたたび結集して鋭気を取り戻そう。——かたがた、御牧三左の一隊を、敵中に捨て殺しはできぬ。秀吉にも一泡ふかせん。筒井順慶の信義も懲こらしめてくれん。——光秀はただ漠然と死に場所を求めにゆくわけではない。光秀の光秀たることを示そうとするのだ。——放せつ、要いらざる妨さまたげするな」

「ああ、さすが叡智えいちの殿の御眼も、きょうに限って、なぜかその

ように曇らせ給うておられるか。——きようわが全軍にうけた傷た手は、討死の者、尠なくも三千人は降りませぬ。傷負いは数知れず、しかも重将ことごとく討たれ、新附しんぷの兵はみな離散し、この御本陣においてすら、今は幾いくばく何の兵が残っていると思し召すか」
「放せ。……何でもよいわ。放さんか」

「その御放言こそ、すでに死を急がれておる証しるしです。帯刀たてわきはあくまでもお止め申しあげる。——ここになお、三、四千の屈強があるならともかく、御馬に続く者どもとては、おそらく、四、五百もありますまい。あとは皆、黄昏たそがれごろから忍び忍びに陣地を脱して逃げ散つておりまする」

老臣ひだたてわきのりいえの比田帯刀則家ちゆうかんの忠諫ちゆうかんは、声涙ともに下るものであ

った。

人間の智性などというものは、かくも脆ぜいじやく弱やくなものか。ひとたびその叡智そごに齟齬そごを来すと、こうも愚かえに還かえるものだろうか。

帶刀は、光秀の狂きやう躁そうを眺めて、

(こうもお違いになられたか)

と、痛涙して、以前の光秀の深慮聰明なすがたを偲しのばずにいら
れなかつた。

「——比田殿のおすすめは、われらも至極のおことばと存じます
る。勝龍寺の城はすぐ間近、ひとまずそこにお入りあつて、善後
の策をお立て遊ばすも決して遅くはございませんまい。いぎ、御供
仕りましょう」

進士作左衛門、明智茂朝、その他の将も、いつか馬前へ来ていた。二人は、いちど前線に立つたが、やはり光秀の身を案じて、これへ退がっていたものだった。

「こうしている間にも、敵勢に近々と詰め寄られたら、百事空しくここに終ろう。さ、一刻も早く、お轡くつわを把とつて、勝龍寺へお移し申しあげい」

帯刀はもう主人の意志を問わなかった。貝を吹かせて急に北方へ後退を命じた。村越三十郎、堀与次郎などは、自身の馬を捨てて徒歩となった。そして主人の馬の轡くつわをつかんで北の方へ無性に駆け出した。丘上の将士もまた追い慕った。しかし、比田帯刀のことばに違わず、その数はわずか五百ぐらいに過ぎなかった。

勝龍寺の城には、三宅藤兵衛が守将としていたが、ここも敗色の外ではあり得ない。一種暗澹あんたんな凄風みなきが満城に漲みなぎっていた。

微かすかな燈を囲んで、一同はこの敗戦の収しゅう拾しゅうを凝議した。それを理性の正しい判断に求めるとき、光秀も、もう策なきことを覺さとつた。

城外の哨兵しょうへいは、頻りと敵軍の近づくのを告げている。この城もまた秀吉の破竹な軍勢を防ぐに足る堅壘けんるいではない。元々、摂津の中川、池田、高山らにたいして、万一の変あらばと、擬勢ぎせいを張っていたに過ぎないものだった。

淀の城ですら、つい昨日、その修築を命じていた有様だ。怒濤の音を聞いてから築堤にかかったといえないこともない。事ごと

逆にゆくと、光秀ほどの人物も、こう目先の晦くらくなるものかと思われるばかりである。

ただ、彼としても、おそらく遺憾なからうことは、年来の宿将や家士たちに限つては、彼の恩顧おんこを裏切るなく、まったく捨身奮ふ迅んじんの戦いをなし、涙ぐましき主従の義を示していたことだった。

主筋の人を討つた明智家のうちに、なおこの主従の道義の破れずにあつたことは、一見、矛盾むじゆんなようでもあるが、やはり光秀の徳といえるし、また、道義に生きるほか生き所も死に所もない、武門の鉄則を明示しているものでもある。

為に、わずか一刻半の合戦だったが、その日の両軍の死傷は、夥おびただしい数にのぼっている。もちろんこれは後の調査によるもので

あつたが——明智軍の死者三千余人、秀吉方の死者三千三百余名、負傷を加えれば算を知らぬ数であつたという。以て、彼の意気にも劣らなかつた明智勢の気魄きはくも知るべく、しかも、敵の半数に近い寡兵かへいと、不利な地に立つての戦いであつたことを思えば、光秀の敗北は、決して世の嗤わらい草ぐさとなるような敗北ではなかつた。

おぐるす
小栗栖

淡墨たんぼくのような雲の裡うちに、水無月みなづき十三日の月が滲にじんでいた。

離ればなれに先へ一、二騎、また少し後から数騎の武者が影をかさねて、点々十三騎ほど、淀川の北から伏見方面へ落ちて行つ

た。

「ここは何処どこの辺りか」

やがて道の暗い山のふところに入ると、光秀は、比田たてわきのり帯刀
則家いへを顧みてたずねた。

「大亀谷おおかめだにでございましょう」

帯刀の面にも、続く数騎の影にも、梢を漏もる月の斑ふが、青い潮
光のようにこぼれていた。

「では、桃山の北を越えて、小栗栖おぐるすから勧修寺かんしゅうじ道へ出るつも
りか」

「御意ぎよい。——夜の白まぬうちに山科やましな、大津近くまで辿たどりますれば、もうお案じはございませぬ」

——と。光秀の少し前をゆく進士作左衛門が、ふいに駒を止めて、

「叱ッ」

と、手を振った。

光秀も止まった。つづく駒もみな止まった。そして囁きもやめて、道のゆくてをずっと離れて、物見をしながら先へ先へと歩いてきた明智茂朝しげともと村越三十郎の二騎の影が眸ひとみに入った。その二騎は、谷川のほとりに駒を立てたまま、うしろの人々へ手を以つて、

(待て)

と、合図をしながら、全身を耳にしていつまでも、佇たたずんでいた。

(敵の伏勢ではなかつたとみえる)

人々はやがてほつとした顔色にもどつた。先頭の二人が振る合
図に従つて、ふたたび密々ひそひそと駒を進めた。月も雲も真夜中の中
天に寝まろんでいる相そうである。いかに忍びやかに進めても、馬は
坂路にかかると石を蹴り、朽木を踏み折るので、小さいこだま筈にも、
寝鳥が立つ。そのたびに、

(敵か?)

と、光秀主従の影は、駒の脚をすく竦ませた。

大敗のあと、宵にいったん勝龍寺の城へ入つて、終日のつかれ
を休め、さして、

(どうするか?)

を議してみたが、結局、坂本へ落ちてゆくほか方策もなかったし、衆臣もみな光秀にその隠忍いんにんの道を選ばれたいと請うこので、光秀もようやくそれに方途をきめて、城の後事は守将の三宅藤兵衛にあずけ、自身は宵の頃すでに、そこを脱していたものであった。

——がなお、その勝龍寺を出るときまでは、彼に従う手勢は約四、五百人はあった。しかし、久我暇なわてから淀をこえ、伏見の里に来るまでに、ほとんど、散々に脱軍して、残るは腹心の者ばかりわずか十三騎とまでなってしまった。

「多いは却つて敵の目につく。死生を共にするまでの覚悟のない者はむしろ足手纏あしでまといだ。坂本にはなお光春様あり、三千の精銳

がある。ただただ、そこへ行き着くまでの御無事こそねがわしい。あわれ御主君のうえに、神助あらせ給え」

明智茂朝しげとも、村越三十郎、進士作左衛門、堀与次郎、比田帯たてわ

刀きなどの腹心たちはそう慰め合っていた。

くわしくいえば、大亀谷は、山城の紀伊郡深草村きいごおり ふかくさむらの山中で

ある。道はこれから宇治郡醍醐村うじごおり だいごむらの南小栗栖みなみおぐるすへ通じている。

谷といい、山といつても、この地方にはさして峻峻けんしゅんな所は

ない。そして、この夜に限って、久し振りの水無月十三日の月輪みなづき

を空に見たが、先頃から雨天がちに、木の下こ したやみ闇ははじめじめ泥濘ぬかる

んでいるし、低い道には思わぬ流れが出来ていたりして、主従十

三騎の落ちて行く道は、決して容易なものではなかった。

加うるに光秀も、その腹心たちも皆、綿の如く疲れきった心身を引きずっている。——山科やましなはもう程近い。大津まで出ればもう大丈夫。——と励まし合って行くものの、各の疲労感にうける感じでは、その間近な距離が、百里もあるような気がするのであつた。

「才。——部落へ出た」

「おぐるす小栗栖であろう。ひそかにしたまえ」

「そうだ。静かに通ろう」

やがて面々は目顔で、戒め合っていた。いまし草ぶかい山家やまがの茅屋根かややねがおちこちに見えて来たからである。そうした人里はつと努めて避けたいのであるが、道はおのずから家々の間へ入ってゆく。

——が、幸いなことには、何処をながめても、燈影ほかげ一つ見えなかつた。白い月の下、大竹藪に囲まれた山里の屋根は、世の騒そうら乱らんも知らず、深々とみな眠り入っている気配だった。

厳密な眼を光らせて、はるか先の方を、物見しながら駈けていた明智茂朝、村越三十郎の二騎は、狭い村道の一とすじ道を、つががなく通り越して、かの藪の曲がり道に佇たたずみ、あとから来る光秀たちのひと群れを待ちあわせていた。

その影と、二人の引ツさげている槍の白さが、半町ほど先の樹陰に、キラキラ見えたときである。バリバリツと、青竹でも踏み折るような響きと共に、ううむ——と野獣でも唸うめいたような声がどこやらでした。

「……や？」

光秀のすぐ前に立つて、密ひそやかに駒を歩ませていた比田帶刀は本能的にうしろを見た。

暗い竹叢たけむらに覆われた山家の柴垣しばがきに沿うている暗がりである。光秀の影は、十間ほど後に、釘付けくぎづになつたように立ち竦すくんでいた。

「お館やかたツ……」

返辞もしない。

高い若竹の茂りが風もない空に揺れている。ばらばらと頻りにする地の音はそれから降る夜露だった。

「如何いかがなさいました」

帶刀が引つ返そうとしたときである。いったん馬のたてがみに俯うつつ伏して脇腹を抑えているかのように見えた光秀は、胸の下と なった手綱の手をうごかすと、急に面を上げて、トトトトと、小刻みに駒の脚を早め出した。

ものもいわず、帶刀の前もサツと先へ駈け抜けてゆくのである。不審には思ったが、まだ何も気づかずに、帶刀はそこから後になつてつづき、作左衛門や与次郎も、それに倣ならつて駈けつづいた。三町ほどは何事もなくそのまま駈けた。先に待っていた茂朝、三十郎の兩名もひとつになり、光秀は一行十三人の六騎目にあつて進んでいた。

すると、ふいに村越三十郎の馬が竿立さおだちになった。とたんに三

十郎の抜いた白刃が鞍下がりくらさに左の脇を払っていた。

かつん！

と鼓膜こまくをつき徹とおすような音響は、その白刃と竹槍のあいだから発したものである。

穂先を斬り落された青竹の手先が、ガサツと、竹叢たけむらのうちに隠れたのが、実に迅はやくはあつたが、明らかに他の人々の眼にも見え
えた。

「土匪どひか？ 今のは」

「——らしいぞ。油断あるな。この大竹藪のうちに立ち廻つてい
るとみえる」

「三十郎。何ともないか」

「なんの、野伏のぶせりどもの竹槍などに」

「構うな。いそげ、ただいそげ。構うてはうるさいぞ」

「……が、お館やかたは？」

と見まわして、

「や。あれに」

と、人々は何か急に愕がくぜん然と色を失った。

つい百歩ほど先に、光秀は落馬していたのである。しかもただならぬ唸うめきと苦悶くもんに身を曲げて、ふたたび起たちも得ぬ容ようす子であった。

「殿。お気を慥しかと遊ばして下さいッ」

「お館ッ。お館……」

「もう少し参れば山科やましなです。お傷もさして深傷ふかでではありませんせぬ」
「お心をたしかに」

すでに馬を降りて駆け寄っていた明智茂朝や比田帯刀などは、光秀を抱き起して、こう励たましながら、強たつてでももう一度駒の背に搔かい上げようと試みていた。

——光秀はすでにその意志もないようだった。ただわずかに顔を横に振っていた。

「あッ。如何あそばしましたか」

三十郎、与次郎、作左衛門など皆、われを忘れてそこに影を重ね合あった。そして苦しむ光秀の唸おえつきと人々の長嘆と、また嗚咽おえつに似た声とが辺りに流れた。

空には、月一つ、そのときばかり殊さらに冴さえていた。そして附近の大竹藪一帯の暗がりには、俄然、土民たちの露骨なあしおと跫音あしおとや喚わめきが、ざわざわ立騒いで来た。

「さきほど、物陰から竹槍をつけた土寇どこうの徒が、なお尾つけ狙うているとみえる。弱味を見せると、足下あしもとを見て、よけいに執念しゅうねく寄つて来るのは彼らの持前。——三十郎も与次郎も、ここよりは、辺りの土賊どもを——」

茂朝しげとものことばに、人々は、急に前後へ立ち別れて、寄らば、と槍を持ち直すもあり、また陣刀をひきぬいて、

「こやつら」

と、大喝だいかつして、気配のする大竹藪の中へ、躍り入ったものも

ある。

ザザザザと、まるで猿ましらの群れか、木の葉の雨のような音が、一瞬、小栗栖おぐるすの夜半よわのしじまを破った。

「茂朝。……し、茂朝は」

「おりまする。こうして、確乎しつかと、殿のおからだをお抱き申しあげておりまする」

「お。……茂朝」

光秀は、ふたたび唇をうごかした。そして自分を支えている彼の腕や肩を、探さぐるように撫でまわすのであった。

おびただ夥しい脇腹の出血は、すぐ視力に影響して来たにちがいない。

舌もあやしくもつれて来た。

「いま、茂朝が、傷口を巻いて、所持の薬をさし上げますから、しばらくお^{こら}休えを」

「……無用」

要^いらぬ——と首を振るのである。そして何か求めるように手をうごかした。

「……何でござりますか。……何ぞ？」

「やたて」

「矢立^{やたて}と仰せなされますか」

茂朝はいそいで^{よろい}鎧の袖から懐紙と矢立を取り出した。

おぼつかない指先に、光秀は筆を持たせてもらった。そして白い紙のうえを睨まえた。

(さては辞世じせを書きおくお心とみえる)

茂朝は胸の塞ふさいがる気がした。今ここで光秀にそんなものは書かせたくないと思ひ募つつた。大きな運命というものへ対して、彼の執着は無性な反抗を心のうちで試みていた。

「殿。殿。……かいなないお筆をお取り遊ばしますな。大津まではもう一息、そこまで辿たどりつけば、左馬介光春様にもお迎えに見えられましょう。……さ、傷口を巻きましょう」

と、懐紙を地に置いて、わが帯を解きにかかると、光秀はふいに、愕おどろくべき力でその手を振った。

そして左の手をつかえ、地上の白紙へ向つて右手を伸ばすと、筆の腰も折れるばかりな力で、

順逆無二門ジュンギャクニモンナシ

と書いた。

——が、次の文字は、もう手のふるえが烈しく書けないらしいのである。光秀は茂朝に筆を渡して、

「あとを書け」

と、云つた。

「……………」

茂朝の膝に凭もたれたまま、光秀は、面おもてを天に向けた。一痕いっこんの月を凝視することしばしであつた。その月よりも青い死色がみるまに面上へ漲みなぎつて来たとき、ふしぎにも少しの紊みだれもない小声で、光秀は、偈げのあとを、こうつぶけた。

大^{ダイ}道^{ドウ}ハ 心^{シン}源^{ゲン}ニ 徹^{テツ}ス

五十五年ノ夢

覚^サメ来^イレバ 一^{イチ}元^{ゲン}ニ 帰^キス

茂朝は筆を投げて哭^ないた。

とたんに、光秀はわれとわが喉^{のど}を短刀で搔き切っていた。

愕^{おどろ}いて駈け戻つて来た進士作左衛門や比田則家も、その体^{てい}を見

ると、

「いまは」

と、主人の屍^{かばね}に寄り添つて、各、自己の刃に伏した。——な

お四人、六人、八人と、数を加えて、同じように光秀の死骸^{めぐ}を繞^{めぐ}つて殉じた人たちの亡骸^{なきがら}は、またたくうちに大きな一箇の血の

花卉かべんと花心かしんを地上に描いた。

さき大竹藪へ駈け入った堀与次郎と、一、二の者は、土民の群れと戦つて、斬り死にして果てたものか、村越三十郎が闇へ向つて、

「与次郎、戻れッ。与次郎、与次郎ッ」

と、いくら呼ばわつても、ふたたび歸つて来なかつた。

その三十郎も傷を負つたので、竹林の中をよろば這いよろば這い歸つて来ると、すぐ側を摺すり抜けて通る人影があつた。

「あッ。茂朝どの」

「三十郎か」

「お館やかたはいかが遊あそびました」

「御最期だ」

「げッ」

——仰天して、

「ど、どこに？」

「三十郎。お館はここにいらつしやる」

茂朝は、馬の鞍くら覆おおいに包んで抱えていた光秀の首しゅきゆう級きゆうを彼に示し、暗然と面をそむけた。

「おおッ」

と、彼は烈しい勢いでそれへ跳びついた。主人の首級にむしやぶりつくや否、おいおい声をあげて慟どうこく哭した。

「さいごのおことは」

じゆんぎやくにもんなし

「順逆無二門——のいちげ一偈であつた」

「順逆無二門——と仰つしやいましたか」

「たとえ、信長は討つとも、順逆に問わるるいわれはない。彼も我もひとしき武門。武門の上に仰かしこぎ畏むはただおひとかた一方のほかあろうや。その大道はわが心源しんげんにあること。知るものはやがて知ろう。——とはいえ五十五年の夢、醒さむれば我も世俗きよほうへんの毀誉褒貶に洩れるものではなかつた。しかしその毀誉褒貶をなす者もまた一元に帰せざるを得まい。……そんな御鬱ごうつかい懷を吐かれて御自刃遊ばした」

「わかります。……わかります」

——三十郎はしやくり上げながら、拳で顔じゆうの涙をこすつ

た。

「戦巧いくさこう者しやな斎藤どのの諫めいさもお用いなく、みすみす不利な地形と寡兵かへいをもつて、山崎に決戦を辞さなかつたのも、その大道によ拠られたためです。山崎を退ひいては京都を捨てることになるからです。御心事を察すると、哭ないても哭ききれません」

「いや、敗れたりといえ、その大道をお捨てにならなかつたことだけは、ひそかに本懐として死なれたにちがいない。最期の偈げがそれを天にさげんでいらつしやる。……お、時移しておると、また土寇輩どこうばらが襲よせ返して来るだろう。三十郎」

「はッ……」

「わし一人では御始末をする術すべもなく、あれに取り遺のこして来たお

首級しるしのない屍がある。あれをどこぞ人目に見出されぬ土中へ埋めてお隠し申しあげてくれ」

「余の方々は」

「みな御遺骸を繞めぐつて、いさぎよく死に就いた」

「おいいつけの役目をすました後、それがしもどこぞ死所を求めましょう」

「わしもこのお首級を、知恩院ちおんいんにある光忠みつただどのへお渡し申しあげ、その後、身の始末をする所存だ。——では、さらばぞ」

「おさらば」

ふたりは竹林の中の小道で立ち別れた。こぼるる月の斑ふがきれいであった。

瀬^せ兵^べ衛^え御^ご苦^く勞^{ろう}

一方、勝龍寺城も、その夜のうちに陥^おちた。

ちようど光秀が小栗栖^{おぐるす}附近で最期をとげていた時刻である。

山崎、円明寺川の線に、明智勢を撃^げ摧^{きさい}した南軍の堀、中川、

高山、蜂屋などの諸部隊は野を吠え、草を掃いて、

「必定、光秀は、あれにこそ在^あらん」

と、勝龍寺を取り囲んで来たのであった。

だが、その光秀は疾^とくに、伏見方面へ落ちた後とわかって、寄

手は失望したが、なお囲みは解^とかなかつた。

城中からは、守将の三宅藤兵衛以下、数百の兵がいる様子だし、それらの者が、一時、矢弾やだまのあらんかぎり烈しく撃ちつづけて来るからであつた。

ところが、その猛射は、滅前の一いっさん燦さんだつた。程なく、はたと止むと、城じょう楼ろうの一端から、ボウと赤い焰さが映さして、月の夜空へ濛煙もうえんを吐き出した。

「さてはみずから火を放つて、城兵のこらさず一手となり、城を出て斬り死にせんの準備したくと見ゆるぞ」

寄手いましは戒め合つて、各部隊に異様な緊張をたたえていた。そして城門から殺出する敵を迎えたがさいご、一兵も討ち余すことではないとひしめいていた。

するとそのうちに、城中の焰は消えてしまった。墓場のようなしじまと暗い余煙だけが望まれる。——はてなと、寄手は怪しみにとらわれていた。

「寄手の将にももの申す。守将三宅藤兵衛は、所詮しよせん、支え得ぬところと覚悟いたして、ただ今、自刃して相果てました。罪なき部下は、それぞれ郷里に帰してやりとうござる。——この儀、お聞き届けあらば、直ちに開城いたすであろう」

人影が一つ、城門の上に見られた。そこから寄手の陣へむかつて、こう呶鳴っているのである。

三宅藤兵衛の股肱ここう、溝尾みぞお五右衛門であつた。この申し入れは、もちろん寄手にゆるされた。五右衛門は、居る所から直ちに開門

を命じ、城兵数百が事なく敵の手に接收されたのを見届けると、

「どれ、俺も行こうか」

と、そこから降りた。

しかし彼は、城外へは出て来なかった。間もなく櫓やぐらの下あたりから再び火焰かえんが立った。寄手は一斉になだれ込んだ。そして忽ち消火に当たったが、五右衛門はすでに腹を切つて火中の白骨となつていた。

宵の頃、円明寺川の激戦にやぶれ、重傷の身を、駒の背に抱きあげられ、舎弟の藤三に守られて、辛くも戦場を脱した藤田伝五行政は、夜の明け方ちかい頃、ようやく淀よどの町はずれに辿たどりついでいた。

「兄上。しばらくこれでお待ち下さい」

と、舎弟の藤三行久が、橋の畔ほとりをしきりに歩きまわるので、伝

五は、

「行久。何を探すか」

とたずねた。藤三は答えて。——小舟を求めて、兄上をお落し
申し上げんつもりですと云った。

伝五は、憤然と叱った。

「殿の御生死も知らぬうちに、我ひとり安き道に就つけようか」

——が、そのうちに、勝龍寺城の落去も伝わり、光秀の死も聞
えて来たので、兄弟は、淀の小橋のたもとに坐つて、見事に刺さし
交ちがえて果てた。

勝龍寺城へ南軍が混み入った後も、西ヶ岡方面や、久我^{くが}、桂川
一帯のひろい地域には、なお折々、ぱちぱちと遠い小銃音がして
いた。

各所で掃討戦が行われているらしい。

一面、中川瀬兵衛、高山右近、池田勝^{しょうにゆう}入、堀秀政などの諸

将は、一応みなここに部隊司令部を移して、大かがりを焚^たかせ、
城門外に床^{しょうぎ}几をならべて、神戸信孝と秀吉の到着を待つことに
していた。

その信孝は、程なくここへ臨んだ。

かがやく戦^{せんしやう}捷^{せう}の入城だ。将士は旌旗^{せいぎ}を正してつつしみ迎えた。
信孝は馬を降りて全軍堵列^{とれつ}のあいだを通った。

「やあ。やあ」

彼はしきりに将士へ温顔をふり撒まいた。とりわけ池田、高山、堀、堀尾などの面々へは、いんぎんに過ぎるほど、ていねいな会え積しやくを与え、犒ねぎらいの意を示した。

殊に、中川瀬兵衛へは、その手を取って、こういった。

「このたびの大合戦に、さしもの明智軍をも一日に撃ち摧くじき、亡ち父信長のうらみを散じ得たのは、まったく御辺たちの忠節と奮戦ちによるものであった。信孝、忘れは措おかぬぞ」

高山右近へも池田勝入へも、同様な賞辞を呈した。

ところが、すぐその後から来た秀吉は、高山、池田などの前を通つても、何も言葉をかけなかった。のみならず彼は陣駕籠じんかごを用

い、それに乗ったままでやや身を反りそ気味に澄まし返っているふうさえうかが窺われる。

荒武者の中でも、精悍無比せいかんむひな中川瀬兵衛は、小面憎こづらにくく思ったか、

「清秀がここにおるぞ」といわんばかり、わざと大きな咳せきばら払いを一つひびかせた。

——と、秀吉は、駕籠のうちから、一瞥いちべつをくれた。そしてただ一言、

「瀬兵衛。御苦労」

と、云い捨てて通ってしまった。瀬兵衛は、足ずりして怒った。「信孝様さえ、下馬して色代しきたいされたのに、駕籠のままを通ると

は不遜極まるやつだ。——猿めが、もう天下でも取ったように心得おるか」

あたりの人へも聞えよがしに云い散らしたが、さて、それ以上には怒れもせず行為にも出せなかつた。却つて、自分が小さくなるばかりだからである。

ひとり瀬兵衛だけではなく、丹羽でも池田でも高山でも、みな同列の織田遺臣のはずだったが、いつのまにか、秀吉は彼らを自分の麾下同様にあつかい、彼らもまた、意識しつつ秀吉の下風に在らざるを得なくなっていた。誰もみな割りきれない気持ちにちがない。だが、さればといつて誰もそれを拒むことのできないのであつた。

城中に入つても、秀吉は焼け残りの建物に一瞥いちべつを向けたのみで屋内に身を休めようとはしなかつた。

広庭に幕を張らせ、信孝と共に床しょうぎ几をならべて、すぐ諸將をここに会し、次の指令をささげ始めた。

「久太郎（堀秀政）はただちに兵をひきつれ、山科やましなから栗田あわだぐ口ちへ押し通れ。目的は天津へ出て、安土と坂本との通路を遮断しゃだんするにある」

また、中川、高山の二将に対しては、

「瀬兵衛と右近とは、丹波路へむかつて、急げるだけ急げ。敵の残兵の多くは丹波へ逃げたろう。それらの者が、亀山こしもに籠こもつて、備えをなすいとま違いとまも与えぬようにだ。時おくれると、陥おとすにも手間ど

ろう。明日中に亀山へ迫るぶんには、苦もなく陥おちるはずだ」

そのほか、誰は鳥羽、七条方面に急げとか。誰は吉田、白河方面へ先発せよとか。すこぶる明快なさしずであるが、傍らに、信孝をさし措おいていつていることだけに、諸将の眼には、秀吉の態度が、甚だ不遜に見えてならなかった。

だが、この折には、最前、口に出してそれを立腹した中川瀬兵衛も、他の者も、

「心得申した」

と、云い、

「よろしい」

と云い、大お様おに命をうけて、たれもそれを色に出さなかつた。

そして、今朝から初めての軍糧を兵に解いて、酒を酌み、腹をみたし、ふたたび次の戦場へ立った。

人を自分の麾下きかに服せしめるにも、時と所があることを秀吉はよくのみこんでいた。誰も彼もこの勝軍かちいくさに気を好くして沸き立っている時と場所こそつけ目であったといつてよい。こんな中で瀬兵衛の如きムキになつて怒つてみたところで、あたりの雰囲気は却つてその小心を嘲わらい消してしまふのが常例である。

が、秀吉は、そのつけ目だけを利用して、これらの万夫不当ばんぶふどうや、扱い難い猪勇ちよゆうの同僚を、敢えて麾下に見るの冒険を試みているほどの無分別でもない。

軍には絶対に、首脳がなければならぬし、統帥とうすいは明確でな

ければ紊みだれる。身分上、信孝こそ主将たるべきだが、この軍には出おくれて来たし、戦陣に立つても果斷、英邁えいまい、ともに欠けていることは、全軍の諸将もみな認めているところだった。

さればとて、秀吉を措おいて他に人があるかといえ、これはまつたたくない。箇々の胸には秀吉の下風に甘んじきれない自負を持つていても、

(自分では他が納まらない)

ことぐらいは各知っているからである。殊に、この弔合とむらいがっ戦せんの主唱者が明確に秀吉であり、その糾合きゆうごうに應じて立つた以上、今となって、

(ひとを部下扱いにするのは怪けしからぬ)

などと、筋目立ってみたところで、自分の小量を自分で吹ふいちよ聴うするようなものだし、かたがた、戦捷の陣営に組みしながら、みずから功を捨てて裏切りの誹謗ひぼうを求めいともるような結果になろう。で、諸将は各、休息する違いとまもなく、命じられた新戦場へ向うべく、やがて、一斉に座を立つたが、それに対しても秀吉は、将座についたまま、

「大儀大儀」とか、

「いや、御苦労」

とか、極めてあつさりあごと、顎えしやくで会釈を送っているだけだった。

きょうじょうきょうか
橋上橋下

秀吉もまた同夜のうちに淀^{よど}まで進んだ。

ここで信孝と宿營を共にし、未明に立つて京都へ入った。

六月十四日である。京都では何よりも先に本能寺の焼け跡を訪れて、亡主信長の霊^{とむら}を弔^{とむら}つて、戦況を報告した。

——といつても、もちろんここの焼け跡には、燃え残りの伽藍^{がらん}の残骸と灰のほか何物も余されてはいなかった。

ただ一隅の池のほとりに、高台寺^{こうだいじ}かどこかの法師達が来て石を積み重ねておいたという所に、誰とはなく花や水など供えていた跡があつたので、仮に、そこを信長以下 殉^{じゆん}難^{なん}の将士一同の霊地として、信孝と秀吉は、姿をそろえて、額^{ぬか}ずいたのであつた。

「ここに立つてもまだ、安土あづちへ参れば、お目にかかれそうな心地がしてならぬ……」

といつて信孝は落涙した。

秀吉も、去りがてに佇たたずんで、

「御無念さ、いかばかりでお在わしたろう。——その六月二日から、ちようど今日は十三日目、燃え残りの棟木むなぎや柱にもまだ火のにおいがするようだ。……おお。小袖の焼け布きれが落ちてゐる。弓の折れも見える」

と、其処此処を見まわしなどして、うたた感慨にとらわれていた。

しかし彼が軍を駐とどめて、ここへ立ち寄つたのは、この日さらに、

蹴上を進んで、大津にまで出る行軍の途中であつた。

ゆうべ勝龍寺から直接立つた秀政の隊は、すでに、今朝あたり、近江辺まで突出していたであろう。そのほか、昨夜以来の配置によつて、醍醐、山科、逢坂、吉田、白河、二条、七条、洛の内外いたるところも、秀吉指揮下の隊が部署についていない方面はない。

今朝は、陽の色までが、何となく爽けく違つて来たように仰がれた。

(妙心寺から大勢曳き出されたそうな)

(嗟峨でも捕まつたという)

(本阿弥の辻で斬られるのを見て来た……)

町々の噂は、残党狩りで持ちきっていた。山崎から逃げ込んだ落武者や、この治安に当っていた明智方の兵は、ほとんどひとりも余さず捕斬ほざんされた。

さきに二条城の戦いで負傷し、のちに知恩院ちおんいんに入つて療養していた明智光忠も、この朝、

(はや秀吉の馬じるしが京都に入つてきました)

と侍臣に聞くと、すぐ一室を閉じて自刃してしまつた。数名の家臣もみな殉じゆんじた。

なおまた。

昨夜来、丹波越えに向つた高山、中川の二隊は、十四日朝、亀山城を包圍していた。けれどここにはもう光秀の家族はいなかつ

た。一子十兵衛みつよし光慶が留守している筈と思われたが、それも見
 あたらなかつた。老臣おき隱岐五郎兵衛は前日病死していた。そのほ
 かこれという程な将士もない。為に、ここではほとんど何らの
 抵抗もうけることなく寄手の入城を見ていた。

明けて十四日というこの日頃には、中央以外の地方諸侯は、ど
 ういう方策を決していたらうか。

まだ依然たる昏迷こんめい中にあつたといつていいが、さすがに海道
 の徳川家康と、越前の柴田勝家とは、やや積極的な動きを示して
 いた。

勝家は、養子勝豊、勝政、その他の諸将をすでに先発させ、自
 身も北きたノ庄しょうを出て、山越えに、近江おうみへ急いでいる頃であつた。――

—もちろん上洛を遂げて、故主のあだ光秀と一戦を果さんために。家康の徳川勢も、同様の目的のもとに、今十四日には、すでに熱田^{あつた}まで来ていた。そしてなお京都へ向つて続々行軍中であつた。すでに遅しというほかはない。光秀はすでに破られていた。しかもその光秀と同様な誤算を、家康もまた勝家も抱いていた。—秀吉の反転突進が、さまで鮮やかに迅速に、てきぱきとこの大世転を処理し終つていようとは、なおまだ思いもよらぬこととしていたのである。

世人もまたおなじだつた。きのう一日で、明智の存在が泡沫^{ほうまつ}のごとく、地上から抹殺^{まっさつ}されてしまった今朝、その起るとききの急^{おどろ}なるに愕いた世人は、ふたたび、その散滅^{さんめつ}の呆気^{あつけ}なさに、茫

然としてゐるふうに見える。

しかしまだこの日となつても、まったく無傷な兵力を擁ようしてゐる明智方の一族があつた。安土を占領してそこに拠よつていた約一千余人と、坂本の城に在る千数百という人数である。そしてこの方面の將は光秀の従兄弟いとこにあたるかの明智 左馬介光春さまのすけみつはるだつたことはいふまでもない。

あわせれば二城で約三千の兵力はある。むなしくこれを近江口に置いたことは光秀として用兵上すこぶる下策であつたと酷こくひよ評うする戦略家もあるが、光秀とて決してそれだけの軍をあそばせておくつもりではなかつた。ただ秀吉の猛撃が余りにも一瀉いっしゃ千里せんりの急潮をもつて押しして来たため、予備軍としていた安土、

坂本の新手を加えて反撃に出るいとまもない結果となつてしまつたのである。

光秀が山崎へ臨む前に、急遽きゆうきよ、従兄弟の光春へあてて早はやう打うちした書面は、本来、遅くも十三日の朝には着いてよいはずだが、途中の聯絡れんらくが困難なために、これが光春の手にとどいたのは、すでに十三日の夜半を過ぎていた頃だった。

急を知ると、光春は、

「これに遅れたら取り返しはつくまい」

と観みて、すぐ安土の一千余名にことごとく出軍を命じ、未明、城門を出て、陽ののぼる頃、瀬田の仮橋へかかった。

——もし光秀が小栗栖おぐるすに死なず、もう数里を遁のがれ得ていたなら、

この朝、山科から大津へ出て、たとえ勝てないまでも、光春と共に最後の一戦を華やかにすることができたであろうに。すべては全く手遅れだった。

ここ瀬田の橋口も、光春の最期を見るべき所ときめて、おびただい敵影が手具脛てぐすねひいて待ちうけていた。

橋は中断されていた。橋板を剥はがして、桁けたと杭くいばかりになつてゐる箇所だの、放火して焼き壊こわした跡など見える。

「近くの民家を潰つぶして、すぐ架かけ渡せ」

馬上の左馬介光春の面おもてには、何のうろたえも見えない。

附近の民家はどしどし潰つぶされた。古材木の柱や戸板はわいわい担がれて来る。或る者は、瀬田の河流に身を沈めて、橋杭を補強

し、或る者は、桁けたを這い渡つて彼方から綱を投げ、長い板を引つぱっている。

頃あいを計つていたらしく、対岸の敵勢はこの機を見ると、銃を揃えていちどに弾丸を浴びせて来た。

「身を伏せろツ」

と部下へ命じながら、自分は毅然きぜんと立つたままで、敵の弾たまけむりを睨んでいた明智方の足軽頭がしらは、こめかみの辺を撃ちぬかれて、橋はし桁げたからもんどり打つて河中に墜おち、ドボンと、大砲の弾が落ちたようなしぶきを揚げた。

「怯ひるむな、怯ひるむな」

なおそこへ、長い棟木むなぎだの、床板だのは、絶え間なく運ばれて

来る。一步一步、決死の修理をつづけて、味方の突撃路は作られてゆく。

屍かばねは橋上を埋め、血は橋はし桁げたからしたたつて、瀬田の流れを紅あかくした。

対岸の敵勢もなかなか重厚らしい。銃手が弾たまごめに時を移している間には、弓隊が矢風やうな矢唸りをたてて、これまた凄まじい鏃やじりの数を射て来るのだった。

この一軍は、事変の初めから反明智態度をあきらかに示していた瀬田の城主山岡景隆の全家中と、さきに山崎から急派されていた堀秀政の先鋒せんぽうの一隊である。きのう以来の勝ちいくさに続いて、光秀以下、敵の一族諸將の終りも聞き知って、いまや意気の

昂^{あが}りぬいている軍勢であるから、その矢弾^{やだま}といい、喊声^{かんせい}といい、ほとんど、左馬介光春の率いる一千余の兵力の如きは、主を失つて路頭に迷う敗残のあわれなる群を擲^や擄^ゆするような概でしかなかつた。

「明智の者どもよ、まだ聞き及ばないのか」

「山崎の総敗軍を知らずに、ここを通ろうとするのか、知つて通ろうとするのか」

「日向守光秀さえ、昨夜、小栗栖^{おぐるす}で相果^{あひ}てているぞよ」

「土民の竹槍^{たけやり}で」

「悪因^{あくいん}悪果^{あくか}の見せしめを身に示して」

「それとも知らぬか」

「知ってか。ばか者」

「うつけたる、うろたえ軍」

「何のために通るぞ」

「どこへ落ちる気で——」

こう口々に罵る敵側の弾けむりの裡うちに、時には、ドツと笑う声すらするのである。

それに対して、光春の部下は、味方の作業隊のために、必死の掩護射撃えんごを酬むくいながら、尺歩丈進せきほじょうしん、押し詰め押し詰め、味方の屍かばねを墨として、徐々に大橋の半ば以上を踏み取り、やがて左馬介の号令一呼の下から、千余騎いちどに、対岸の敵陣中に突貫した。

それは橋上ばかりでなく、橋の下の急流を、馬で渡し、筏いかだで進み、或いは、半裸体になつて、泳ぎ渡つてゆく者もあつたのである。

志賀しがの浦風うらかぜ

山岡景隆兄弟や、同苗どうみょう美作みまさか守のかみなどの一族は、いわゆる甲賀武士の頭目とうもくだつた。

こんどの大乱に際して、さきに旅行先の堺さかいからあわてて本国へ歸つた徳川家康の道中の難儀を、甲賀山中で扶たすけた一種の山ざむらいも皆、この山岡一族の配下に属する者どもだつたといわれて

いる。

この一族が、節義を立てて、当初から光秀の誘降ゆうこうをしりぞけ、断乎だんことして、反明智を守り通したことは、筒井順慶などにくらべると、大いに偉いとしなければならぬ。——要するにこの瀬田城は、以前、瀬田掃部助せたかもんのすけの居城であつたのを、信長の代に、山岡一族に与えられたことを、深く恩としていたことによる。

こういう山岡勢に加えて、堀秀政の先鋒隊が合しているので、その強さはいふまでもない。しかも、光春が安土から率りついてきた手勢一千余に対して、彼は少なくともその三倍に近い兵力を擁ようしていた。

辛からくも、瀬田の大橋口は、遮しや二無二突破して、光春以下、その

大軍のうちへ、面もふらず駈け入るまでの果敢かかんは示したが——到底、それはみずから求めて苦戦の中へ自軍を投じたというしかない戦鬪であつた。

「散るな、崩すな、まんまると円陣をむすび、円を旋めぐらしながら北進せよ。——味方の旗を離れて遠く戦うなよ」

光春は声をからして、その馬上すがたを、戦う喊かんせい声と馬けむりの中に、揉もみに揉まれていた。

この場合、軍の分裂は、敵のねがうところで、光春にとっては、自滅を意味する。彼はあくまで千余人の力を一団として、颯たいふう風のごとく、旋回陣せんかいじんを取りながら、大津まで突破しようと試みたのだ。

しかし、その大津まで出ること成功しても、それは決して勝利をつかんだことにもならないし、大勢の上に曙しよこう光を見ることでもなかった。

ここで勝つても、ここに敗るるも、彼のゆくてにはただひとつ。死、

それあるのみだった。

山崎すでにやぶれ、一族みな四散し、主将光秀もまた非業ひごうの死を遂げたり！ と聞ゆる今、彼として赴おもむいて何かせん、生きて何かせん——である。

とはいえ、その光春にも、なおまだ、これだけの苦戦をなしても果そうとする一つの望みはあつたにちがいない。

それは、もちろん、

(ただは死なぬぞ)

であり、日頃からの覚悟と希ねがいからも、

(こころよく果てたいもの)

とする生涯最高の場と時とに今や直面していることの自覚であった。

(——さむらいの道、一生涯の華はなも実みも、成るか成らぬかは、ただ死しに際ぎわの一瞬にあること。生涯のつつしみも守りも研みがきも、もしその死を誤あやまてば、生涯の言行すべて真を失い、ふたたび生きてその汚名を拭ぬぐい直すことはできない)

日頃、彼が家中の子弟にもいつていたことばを、彼はいま、我

とわが身に云い聞かせながら、馬上、槍を横たえて、怒濤どとうと怒濤の相搏あいうつごとき血戦の中を、悠々、少しずつ、粟津あわづの方へ進んでいた。

——こうして、ようやく、大津の町の東口まで突破して来たものの、ふと炎のような息のひまに、前後につづく兵を見ると、わずか二百騎ぐらいしか見えなかつた。

多くは、途中で討たれたか、或いは負傷したものだろが、粟津の辺で、有力な敵の部隊に味方を中断され、それからは四分五裂となつて来た結果である。

「坂本へ。坂本までは」

左馬さまのすけ介光春は胸のなかで、不断にその目標を意識していた。

行き着くまでは、死なぬぞと誓った。

坂本の城には、なお多くの家中の者と、そして亀山城から移した光秀の夫人や子達や、そのほかたくさんな老若男女の眷族けんぞくが籠こめてある。もちろん自分の妻子もいる。

「あれらの者にも、心安く逝ゆけるように、よい死に方を取らねばならぬ」

光秀のなきあとは、当然、彼が一族の家長であつた。光春はいちばん後から死のうと思つていた。

その坂本は程近い。もう一里半か二里である。

しかし大津の町へ入ると、町屋は煙につつまれている。光春の先に立って駈けていた荒木山城の子荒木源之丞、乙之丞おとのじょうの兄弟

は、忽ち駒を返して、

「殿々。この道は通れませぬ。——道を変えねば」

と、手を振った。

兄弟に倣ならつて、ほかの徒士かちぜい勢も、どつと後戻りして来た。両側の家々から火を噴いているので、所詮しよせん、熱くて通れないのである。

「なぜ通れぬ」

光春は、先へ出た。

荒木兄弟が、

「新手の敵が、町屋に火を放つけて、この先の辻に充満しておりま
する」

と告げると、光春は、

「この小勢で、田や畑道を奔らば、それこそ、敵に迂回されて、よい獲物と包まれよう。敵の真つただ中を割つて通るのが、どこよりもいちばん安いのだ。わしについて通れ」

と、やにわに、馬に鞭打つて、焰の町中を駈け出した。

火ばかりではない。その姿を狙つて、矢や弾丸も彼へ蒐まつた。光春は、左の肱を曲げて、鎧の袖を額のまえに翳し、馬のたてがみに俯伏し気味に突撃して行つた。

「それ、殿につづけ」

兄弟も、他の部下もわあツと、咽びながら、火の下を駈けた。迂へ出た。

登れば逢坂おうさか、西は三井寺みいでら。また一方の道は柳ヶ崎やな さきの浜辺へ出る。

ここの要所を占めていたのは、堀秀政の本隊だった。もちろん久太郎秀政自身も、この中にいるはずである。当然、光春以下、明智勢はそれへぶつかってゆき、堀隊もまた猛然と邀むかえ撃った。馬のうごきも槍の柄も意のままにならないほど道幅も狭い辻である。しばしの市街戦は、焼け落ちる建物のひびきと、人間の咆ほうこ哮うと、血の黒煙で、夜か昼かも分らなかつた。

ここの辻は、坂の裾すその三叉路さんさろなので、当然、坂上を取っている堀軍は、地形上からも有利であつた。

そのほかすべての条件からも、光春主従の終りは、いまここが、

その時と場所であるとしか見えなかつた。

けれど光春以下二百の兵は、その絶対的なものを、いわゆる「ものともしない」死にももの狂いをもつて驚くべき勇戦を持ちつづけていた。

ここまで、光春を離れず、従ついて来ただけでも、その兵は、尋常一様な兵数の質でないことはわかるのである。

——為に。

地の利をしめ、黒煙猛火を味方とし、あまつさえ数倍の兵力をもつて、それを喚わめきつつんでいた堀隊も、却つて、少数の敵に、まったく一泡ふかせられた形となつた。刻々敵も討ち滅くらしてはいるが、味方もそれに数倍する死傷者を累る々ると路上に重ねてい

る有様であつた。

「あれが左馬介光春か」

堀秀政は指さしていた。

坂上にある彼の床几しょうぎば場は、燃えさかる町屋の煙のため、すぐ下の戦況すら透視とうしできなかつた。

「どれでしょうか」

側に彼をかこんでいる家臣の堀監物けんもつや近藤重勝は、眼をこすりながら、秀政の指のさきを見わたしていた。

「あれ、あの白地の陣羽織じゃよ。乗っているのも良い馬らしい」

「オオ、なるほど」

「光春だろう」

「慥しかとはわかりませぬが」

「光春ならで、あれほどの武者が、部下のうちにいるとは思われぬ。久太郎秀政の前に立たせて不足のない敵だ。どれ……」

「いや否、彼は、傍らの馬へとび乗って、坂下へ駈け降りていた。」

堀久太郎秀政は、この年、ちようど三十歳である。天王山、山崎などで、彼の名は、羽柴軍のうちでも断然重きをなして来たが、なおまだ帷幕いばくにかくれて計謀けいぼうに参ずるよりは、陣頭の勇将であった。

彼は、味方を押し分けて、敵勢の直前に馬を立てた。同時に、大音声で何か敵へ云ったが、あたりの叫きようかん喚や炎の音で、到底、

ことばの意味はとどかない。

けれど、その態度や物の具などで、大将秀政ということは、すぐ知れた。明智勢の眼が、みなそれへ蒐あつまった。

「死ぬならあれと刺さし交ちがえて」

と、雑兵までが、どツと秀政のすがたの下へ寄つて来た。

「われと見て、うしろを見せるか。左馬介さまのすけ、左馬介」

秀政は、馬前の敵を見ず、彼方の白い陣羽織を見ていた。およその敵は、馬蹄ばていにかけ散らし、槍をもって叩き伏せた。そしてただ白い陣羽織のみを目がけていた。

光春は、煙の中から、ちらと此方こちらをふり向いた。

——と、猛然、彼の影は、あたりの敵をふりすてて、秀政のほ

うへ馬首をめぐらして来たが、突然、前に立ちふさがった味方の若者の二人が、左右から主人の口輪をつかんで、ぐるりと、反対な方へ駈け出してしまった。

それは光春が、日頃目をかけていた二人の小姓だった。

うしろからは、堀秀政が、

「きたなし！」

ののし
と罵り、

「返せ」

と呼ばわり、

「——逃げんとしても、逃げ得る道もあるまいに、左馬介光春は、死に場所を知らないのか」

と、乗れる駿しゅん足そくにまかせて、その追撃は物凄**い**ばかり急**だ**つた。

堪たまりかねて、光春も、

「放せツ」

と、駒を止めて、二人の手を、馬の口輪から振り飛ばそうとしたが、二人の小姓はなお、

「いけませんツ。殿には、お落ち下さいまし」

「あとは、われら二人で」

と、必死に拒こばんで、しかも一人は槍の柄で、光春の馬の三頭さんずのあたりを、力まかせに撲りつけた。

馬は愕おどろいて、光春を乗せたまま、盲目的に彼方かなたへ飛んで行つた。

ふたりの小姓は、もとの道へ取つて返して、健気けなげにも、堀秀政と槍を交え、枕をならべて戦死した。

——止とどまるを知らない奔馬ほんばの手綱をやつと締めて——光春が、田の畦あぜの、湖に注いでゆく小川の縁から振り向いたときは、もうその二人も見えず、追つて来る秀政のすがたも見えなかつた。

そのかわりに、近くに望まれる街道にも、うしろの畑道の土橋や森の附近にも、百騎、二百騎ぐらいな敵の集団が、あだかも空から網の中へ翔かけこんで来た鳥を眺めているように、そう物々しく動きもせず、此方を見ている様子であつた。

危地は決して脱していない。むしろ反対に、光春の危険は加わつた。混乱の重囲から、完全な重囲のうちへ移つて来ただけのも

のである。

こういふとき慌あわてふためくと、後々までの語り草になされる。

包围している敵の意志も、

（左馬介光春が、どういう死にざまをするか、これは見ものである。見ていてやろう）

というような落着き払った意地悪さを示しているのだ。どう緩か慢まんに放つておいても、所詮しよせんは檻おりの中のものに等ひとしい。左馬介が逃げきれぬものではない——という自信たつぷりな気持を前提としてであるということはいふまでもない。

「叱しいッ……」

光春も悠々ゆうゆうたるものだ。手綱の一方をぐいと挙げて、馬を叱つ

た。無理にここで馬を止めたはずみに、馬の前肢がやわらかい土にふかく入ってしまったている。その前脚を怪我なく抜かせておもむろに馬首をめぐらすためだった。

駒は、田と小川のあいだを、ゆるやかに湖のほうへ向って歩み出した。

軽い速度になって、しきりと鬣たてがみを振りながら、白い泡を口輪に吹いているのは、なお馬が悍気かんきをしずめていない表情である。光春の手綱は、努めてそれを宥めなだながら歩ませている。

びゅんツ——と、一矢、風を截きって、彼の面と鬣たてがみのあいだを通った。

ぶすツと、そこらの畝うねにも、銃弾のもぐる鈍い音がした。

が、多くは、矢も弾も、田の面に落ちた。まだ彼の位置は射程圏外にある。

しかし彼の駒はどこへ出る気であろう。行こうとする道はすべて敵にふさがれている。それ以外は琵琶湖の水あるのみである。そのうちにふと光春のすがたが見えなくなつた。

遠巻きにしていた敵勢は、多寡をくくつて見ていた自己の心理を遽かにたしなめて、

「逃げうせたぞ」

「どこかへ影をかくした」

急にあわて出した様子である。そして無性に、光春の姿の消えたあたりに向つて、矢弾を盲射し出した。

各、一騎打に自信のあるらしい武者が、東の森からも、西の街道からも、三騎、七騎、十騎と前後して駈け出した。もちろん光春に近づいて、雌雄を決する気ぐみにちがいがなかった。その面々は馬上から味方のほうへ手を振って、

「射るな」

「しばし撃つな」

と、制しながら、何か、口々に呼ばわり呼ばわり駈け巡って、光春のすがたを捜しているふうだった。

すると、彼方の葭の茂りが、風でも分けてゆくように、一筋、際だつて戦いでいた。——見ると、まぎれもない金鞍を乗せた馬の背と、その馬の背を降りて、みずから口輪をつかんで曳いて

ゆく白地の陣羽織の武者が——葭よしのうちに影を沈めながら、しかも極めて悠々と、湖水の方へ歩いてゆくのが見えた。

「おッ。あれだ」

「左馬介。待てッ」

十数騎の武者は、功を競った。われこそ、その獲物をと、争うかのように、面々、いずれも馬をおどらせて葭よしの中へ駈け入った。

その田圃たんぼみち道から、湖の波打際までのあいだ約一町ぐらいな

幅は、いちめんな葭におおわれているのである。乗り入れた面々は、みな葭の根の生えているやわらかい湿地に気づかなかつた。

馬の脛すねは蘆あしの根よりも深く泥土うがを穿つて、到底、その駿しゅん足そくを

あらわすことはむずかしい。

「——いけない」

と覺つて、何騎かは、馬の背を降りた。或いはまた、ふたたび畦道あぜみちまで戻つて、遠く、葭のない先の方へ迂回うかいを試みた。

葭のあるのは、町はずれの、この附近だけであつて、柳ヶ崎のてまえになると、松原つづきとなり、白砂青松なぎぎせの渚である。

「ここへ出て来る他あるまい」と、光春の方向を察して、先へ廻つていたのである。この辺から打出ヶ浜うちでにかけても、羽柴方の軍兵は充満して、三井寺方面から明智兵を掃討して来た堀秀政とその旗下もまた、附近の松林のなかで、一息ついていた。

——と。そのみでなく、湖岸の全味方のうちから、何事かわあつと歓声に似たような動揺どよみ声こゑがあがった。

見ると、彼方の蘆の岸から水面およそ半町ほど先をゆるい波紋が一すじ真つすぐに描かれてゆく。

それはまったく誰もが予想さえしていなかったことを、ふいに眼に見せられたときに出る敵味方なき驚嘆といえよう。

いま、琵琶湖びわこの心をさして、一頭の馬は、鮮やかに水を掻いてゆく。そしてその波紋の中に浮きつ沈みつ見える白い陣羽織こそ、彼らがさつきから手に唾つばして求めていた左馬介光春のそれに違いなかった。

人間の想像力にはおおよそどうしても一定の限界がある。あとでは当然その非に気づくことでも、事実のあらわれる瞬間までは、いつも十目十指的な常識の線から一步も出られないのが普通らし

い。

今、左馬介を逸いつした羽柴勢が、むなしく声をあげている心理も、われとわが常識を嘲あざけるに似ていた。

(甲冑を着、太刀を佩はき、あまつさえ、今朝からの戦いに疲れ果てた左馬介が、騎うまのまま湖上にのがれ得るはずはない)

と、きめこんでいた考え方が、眼に見せられた事実によつて見事にくつがえされたのであつた。——鉄は水に沈むもの、かつこふぼつという確乎不拔な通念のほうてんぶくが顛覆を見てしまったのである。

大きな不覚にちがいないが、かくまで鮮やかに受けた不覚に対しては、戦国武者のあいだでは、敵ながら天あつぱれ晴なものとして、一時の歡呼を惜しまなかつたのみか、

「さすがは、明智一族のうちでも、彼ありといわれていた男」

「見事哉、かな左馬介」

と、どよめきどよめき、私語を発して、それを賞め称ほえたたている者すらあつた。

殊に、堀秀政や、その他、互いに名を惜しむ武門の将は、美しきものに見み惚とれるときのような眼で、湖の沖を凝視していた。

弾も矢もとどかない距離にまで——すでに左馬介は泳ぎ出していた。

「よも坂本までは、あの馬を泳がせきれまい」

「——どの辺で、溺おぼれ出すか」

兵の多くは、なおまだ期しているものの如く、無駄矢も無駄弾

も放たなかつた。

——と。波打際を数町離れた左馬介光春は、やがて弛ゆるい半円の波紋を描いて、水面わずかに見える馬の頭を——西の方、坂本のほうへぐるりと向け直していた。

「改正三河後風土記みかわごふどき」や、その他の諸書が記すところによると、その日の光春が装いは、白練絹しろねりぎぬの陣羽織じんうゑに、時の名ある画匠がしやうが、水墨すいぼくをもつて雲龍うんりゆうを描いたものを着ていたという。

また兜かぶとは、二ノ谷と銘のある明珍造みようちんづくりの輝かしき物であり、馬おおかげも大鹿毛おおかげの雄で、よほど優駿ゆうしゆんであつたらうことは、朝からの戦鬪せんとうに耐えて、なおよく湖上遠くに出て、さかんに水を搔かいている悍気かんきを見てもわかることだつた。

しかしどんな名馬でも、その馬をして長く疲れぬように乗りこなすには乗人の如何によることというまでもない。

弓太刀の表芸以上、当時の武将が騎馬を重んじていたことはいうまでもないが、特に光春は馬術熱心だった。このことについては、青年時代秀吉とのあいだに一挿話そうわも遺しているが、いまはそれをいっている違いとまはない。——いま彼が馬首を向け直した湖上から斜めに見ても、彼方なる坂本の城は、なお目づもり約半里の余はある。そこまでよくこの馬が耐えるや否や。また、世の笑い草になるかならないかの衆目もある。光春としてもまさに畢ひっせい生せいを賭としていたにちがいない。

ただ見る眼には、いちめんの湖でしかない広さにも、その水底

には深淺があるということはいうまでもない。

左馬介光春は、よくそれを弁わえていた。

安土を出たときから、死を期していた今日ではあるが、彼は本来の性格としても飽くまで無謀や愚挙ぐぎよはやらない人である。その点、従兄弟の光秀よりは、彼のほうが遙かに徹底した理性家であったといつてさしつかえない。なぜならば光秀は生涯の完成にあつて、ついにみずから信ずるところの教養も忍耐も一挙ごに自身で破摧はさいしてしまつたが、左馬介光春はといえば、なおこの期ごになつてもその自己を——敵軍すべて取り囲む琵琶の湖中においてさえも——珠たまの如く愛めでて持つてゐる姿であつた。

この湖上はいうもさらなり、この辺の地はみな自身の領土であ

る。しかも坂本のすぐ城下である。光春が、田畑の畦道あぜみちから葭か蘆ろの茂りまで、どこはというと、知りぬいていることは、当然であった。

水馬の技でもそうである。

彼が、湖に馬を泳がせたことは、彼としては、きよう初めてのことではない。

常に、居城の坂本の馬場から、この大津附近まで、水馬で渡ったことは何十遍も経験があるのである。従つてこの辺の湖底は、深いか浅いか、ほとんどそらんじている彼でもあつた。

——馬の足の外れる深さにかかれば、身を馬の三頭さんずに下げて、かるく手綱をくれながら馬を泳がせ、また、浅瀬にかかれば、し

ぶきを咬かませて駈けわたるのである。このようなことはあながち彼の創意でもなく、敵前渡河のときは、かく操あやつるものと訓おしえている前人の貴い経験に基づくものであった。

ただし、これが非常な至難かのように考えられて、後世、説をなすものが絶えない。

いわく。

（左馬介の湖水乗切りというのは、派手がましく伝えた虚説で、ほんとは湖水の岸を駈け廻って坂本へ入ったにすぎない）

また、別説には、

（彼は、湖水と町屋とのあいだを駈けて通った）

ほかにもなお、小舟に乗って坂本城へ渡ったものである、など

という説もある。

これらの説はみな、堀秀政やその他の羽柴勢が全然、その兵力を、湖岸や坂本への通路には配置していなかったもののように、あの戦局を見ているらしい。

用兵上、しかも敵に数倍する兵力と、時間の余裕をも充分に持っていた羽柴軍が、そんな一方抑えの作戦をする訳はない。

要するに、左馬介の湖水渡しを否定したがる史家心理には、そのことの至難に思われるのと共に、余りにも、事実そのものが劇的であり過ぎるといふことに却^{かえ}つて、懷疑^{かいぎ}をもち、これを通俗中の巷^{こうせつ}説と片づけてしまいたいものがあるのではなからうか。

けれど古来、身をもって歴史を描いた日本武士のすがたは、常

におのずから最高な劇的の一天地を作っている。みなとがわ 湊 川、しじよ 四
 条うなわて 躰、おけはさま 桶狭間、川中島、高松城の一舟、松の間の廊下、雪
 の夜の本所松坂町、劇以上の劇でないところはない。

——が今、当の左馬介光春にとつては、そのことは決して、後
 の人が考えるような至難や無謀を敢えてしているものではなかつ
 た。彼はただ日頃の水馬の錬れんせい成をきようはただ甲冑を着けてし
 ている程度にしか思つていなかつた。

そうして、悠々と、波間に馬を遊ばせてゆく左馬介の白い陣羽
 織は、この湖に多く住む鳩にの一羽が泳いでゆくようであつた。

——依然として、なお、

「いまに溺れ死ぬだろう」

と、それを見ていた湖岸の羽柴勢は、やがてふたたび騒ぎ出した。固執していた自分たちの予想にまたも裏切られたからである。

左馬介光春の姿は、敵の矢弾の射程距離外を注意ぶかく迂回して、やがて難なく坂本城の東の浜へ、水を切つて駈けあがつてい
る——

唐崎からさきの一ツ松からその辺りは、いちめんきれいな真砂まやじと松

なぎさ

原の渚なぎさだった。波打際のしぶきを離れるや否、彼はいつさんにその松原へ駈け込んだ。そしてしばらくその姿を緑のなかに没した
と思うと、坂本の町屋と松原のあいだにある十王堂じゅうおうどうの前にふたたび姿が見えた。

——遠く、それを認めた羽柴方の兵は、われに返つたように、

一時に鼓を鳴らし、喊声をあげ合つて、

「や、や。乗り抜けたぞ」

「城へ入れるな」

と遽かに、潮を作つて、こなたへ奔突して来る様子であつた。

振り向いて、それを見ながら、左馬介はにこと笑つたようであつた。——なお一鞭当てて急ぐかと思つと、彼は十王堂の前でひらと馬を降りた。

馬の手綱を拜殿の廻廊柱につないでから、身をゆすぶつて、鎧の袖やふところの水を走らせ、二ノ谷の兜を脱いで、神前に置いた。

そして矢立を取り出した。筆を持つて御堂の前に立つたのであ

る。やがてその白壁にこう書いた。

明智左馬介光春、ただいま湖水を乗り渡し候ふ馬也。年来の

忠勤をいたはる暇もなく訣別けつべつをつぐ。誰にてもあれ、我に

劣らぬもののふにこの大鹿毛おほかげを給ふべきなり。愛めで給へかし。

筆を捨てて、階きざはしを降りると、左馬介は、大鹿毛の濡れ寝ている

鬣たてがみを幾たびも撫でて、

「鹿毛よ。おさらばだぞ」

と、人に語るように云った。

大鹿毛は鼻をすり寄せて、彼の肩へ顔を載せた。あだかも甘え

泣いているようである。光春はその頸うなじを抱えながら、あなたの唐

崎の松をながめて、ふとこう吟ぎんじた。

われならで誰かは植ゑん一つ松

こころして吹け志賀しがの浦うらかぜ

この一首は、かつて光春が、初めて坂本の城を領したとき、唐崎に記念の松を植えさせ、その折、それに寄せて詠んだ和歌である。

何で、その歌がいま左馬介の口に出たか、左馬介にもわからぬい。ただ、説明できることは、こんなとき人間は、何か無性に鬱うつかい。懐つかいを放ちたくなる。天地に向つて慟どう哭こくしたい感情を反対な形で現わそうとした努力が、思わず朗ろう唱しょうとなつたのかもしれない。とにかく左馬介は、愛馬を捨ててそこから身を翻ひるえすと、たちまち町口の木戸へ駆けこんでいた。彼の味方は、わツと哭なくよ

うな声をあげて、彼を坂本の陣営に迎え取った。

世々の物よよもの

光春は城に入ると、ここに留守していた全家の老幼男女から、そのすがたを、焦土に降つた菩薩ぼさつのように取り囲まれた。

坂本にとどまつていた光秀の夫人や一族の者も、かならず彼が一度はここへ来るものと信じて、必然、取らねばならぬ最期とは知りながらも、

「左馬どのがここへ見えられた上でも遅くあるまい」
と、待ちに待っていたのであつた。

光春はすぐ令を下して、

「云い渡すことがある。将士はみな本丸へ集まれ。城外の木戸へ出ておる者も呼びもどせ」

と、げち下知させた。

やがて集まった頭数は三、四百に足らなかつた。半数以上は、光秀の死を伝え聞くとともに、ゆうべのうち何処いずこともなく逃げ落ちてしまったものとみえる。

「よく今までここを支えていてくれた。しかし、事こころざしと違たがい、味方は山崎にやぶれ、大殿も昨夜小栗栖おぐるすのあたりで敢あえなき御最期と聞く。すでにわれらの惟これとう任日向守様のなき今日となつては、われらの望みも同時に終つた。——かさねていう。この最

後の最後まで、異心なく、踏みとどまってくれた各の善戦にたいして、左馬介は、故光秀様を始め、御内方ごないほう、ほか一族になり代つて、心からお礼を申す。かくてこの一城は、わが明智一党の最後の墳墓ふんぼと相成つたが、各にはもう武士として恥なき本分を尽し果されたことでもあれば、この上、求めて死をいそぐにあたらぬこと、それぞれの郷土に帰つて、さらに、土魂をみがき、今日の訓えおしを生涯に活かし、よいさむらいとして終つてくれるように。……これは光春が命じる最後の命令である。かならず守つてもらいたい」

左馬介はそう告げ終ると、やがて庫中の金銀から何くれとない器物や身廻りの物など、すべてをそれらの人々に頒わかち、

「はやく落ちてゆけ。搦手からめてを出て山づたいに、四明ヶ嶽しめいだけを越えればなお遁のがれる先はあろう。とかくして、われら一族どもの足手まといになつてくれるな。はやく、はやく」

と急せいて、ほとんど、そのあらましの者を、追うように、搦手の一門から落してしまつた。

あとの城中は、空洞うつろのような広さだつた。その寂寞せきぼくのうちに限られた血縁の人々と、かしく少数の女人たちと、そして極く内輪の近臣しか残されていなかつた。

——すると、奥の丸の橋廊下を、幾人もの幼な子を、その母なる人や侍こしもと女たちと共に両手をひいて、こなたへ渡つて来る老人があつた。光春の叔父で明智光廉みづかどにゆうちちようかんさい入道長閑齋かんさいという、あ

の面白いひとであつた。

「じじ様。みんなして、どこへ行くの」

光秀の末の子、乙寿丸おとしゆまるは八つであつた。こうして、奥の者が

揃つぼねつて局つぼねを出ることはめずらしいので、ふしぎそうに訊いていた。

「さあ、いずこへ行きましよう。嵯峨さがの花見か、竹生島ちくぶしまへお舟

で月見か」

このひとの常として、洒々しやしやらくらく落々らくらくと子供相手に戯たわむれてい

る容ようす子は、きょうも平生と少しも変りがなかつた。夫人や侍女こしもと

や乳人めのとたちは、さすがに、折々面をそむけて、そつと涙をふいて

いたが、長閑齋のことばを聞くと、涙の中でも、ふと笑つてしま

うことがままある程であつた。

もちろんここには左馬介光春の妻子もいる。その上に、龜山から光秀の妻子眷けんぞく族までここへ引き取っていたので、ひと口に奥の者といつても、縁類を加えた老幼男女の数は何してもずいぶん大勢である。光春は、それを皆、叔父の長閑齋に頼んで、騒ぎ乱れぬように、本丸の広い一間に寄せ集めさせたのである。長閑齋の役目はなかなか難しく辛いはずだった。しかしこの老人は辛い顔も悲しい容子ようすもしていない。例のとおり子らと戯れながら、何度にもわたって、橋廊下を往復し、やがて滞りなく奥とどこの者を全部、ひとつ広間にあつめた。

「賑やかなことじやな。このような多数の道づれでは、どこへ参ろうと、淋しゆうない」

彼は、その真ん中に坐つて、たえず何か喋舌しゃべつていた。

けれど多くの女性は泣きぬれている。それが子たちの童心をも異様にしめやかにするので、いつもなら彼の肩や膝に取りついて忽ち、よい遊び相手とせずに措おかない子らも、各、その乳母やその母の側にすがつて離れなかつた。

「叔父上、みな、お揃いなさいましたか」

やがて光春はそれへ臨んで、光秀の夫人へむかい、

「はや敵は、城下近くに迫りました。いまはお心措こころおきなく、お始末遊ばしますように。——光春もすぐおあとを慕うて参りますれば」

と、最期をうながした。

光秀の夫人は、わが子、身寄りの子など、幼い者を左右に置いて、光春の妻と並んでいたが、

「何かと、こまやかに、嬉しゆう思います。わけてお許もとにひと目でも会えたのは、またとない仕合せでした。ここには氣づかないなく、お許の思いのままよい死に場所を取って、敵に唾わらわれないようにして下さい」

「ありがとうございます。……では」

こんじょう
今生 これきりの一札をのこして、

「叔父上。おねがいします」

「承知した」

「女房。みだれるなよ」

妻へも、一言いって、彼はすぐ去つた。

城壁の外には、もう鉄砲の音が聞えて来た。それと、たつた今、ここにゐる者が立つて来た奥の丸から突然、濃い煙が立ちはじめた。

これは光春の命によつて、小姓の奥田清三郎とふなきはちのじよう船木八之丞のふたりがみずから放つた火であつた。その火焰が橋廊下のある中庭を隔てて此方の広間の障子へ赤く映つた。

「——怖いッ」

取りすがる子の叫びや、急に泣き立てる子の声がながれた。その中にも、長閑齋の声だけは、何となく明るく、

「泣くじゃない、泣くじゃない。さむらいの子は、泣かないもの。

——じじも行きまずぞ、母御も参ろうぞ。みなも来い。お手々をつないで死出の旅出じや。さあ、お行儀よく、おすわりなさい。順々に、じじが連れて行つてさしあげる」

黒煙の漂ただよい出した障子いちめん、こまかい血しおの霧が打つた。みだるる黒髪の下から最期の息で子の名をよぶ母の声も洩れた。しかしすべては一瞬の震撼しんかんに似ていた。刺し交さえ、刺し交ちがえ、おくれる親も子もなかった。——ひとりなお生き残つて、やがてそこから廊下へ出て来たのは、長閑齋だけであつた。

その頃、大手の城門は、ぱりぱりと響きを立てていた。寄手の勢が破壊にかかり出したのだ。石垣の彼方此方からも、先を争う兵の影がよじ上つて来る。

からめて
搦手からは火であつた。

この方面の火は、さきに城中の者がみずから放つた奥曲輪おくぐるわの火とつながつて、忽ち半城を蔽うばかりの火勢となつた。

「八之丞、清三郎。いちいち弾込たまごめしては手鈍てのろい。鉄砲を取り代え取り代え、弾のあるかぎり撃て」

光春は矢倉にのぼつて、残り少ない左右の者に、なお下知げちしていた。そして自身も、鉄砲を構えて、狭間はざまから筒先下がりはづまに敵兵を狙撃していた。

すでに城兵の大部分を逃ちようさん散させたあとなので、武器だけは夥おびただしく残っている。一弾放つては、またほかの鉄砲を取つて撃ち、使い捨てに撃ちつづけていた。同じ矢倉にいる七、八名の小姓も

部将もみなそれに倣ならつて敵に猛射を浴びせた。

「左馬どの。居るか」

「居るツ。周防すおうか」

「そうじゃ」

「申しつけた品々は」

「矢倉の下まで運ばせたが、如何なされる？」

「何でもよい。すぐこれへ運び上げさせてくれい」

「心得た」

階段口から半身だけあらわして、そこから光春の背へこう云つていたのは三宅周防守だった。周防守はすぐ矢倉の二階辺りまで降りて行って、下に待っているさむらいたちにむかい、

「上げる。上がって来い。それらの品を持って、お矢倉のうえまで」

と、手を振っていた。

その間も、光春は、鉄砲を撃ちつづけていたが、程なく、三宅周防守と、ほか四、五名の味方が、何やら蒲団包みにした荷物や、^{むしろ}蕙ぐるみにした梱^{こり}などを三、四箇ほど、すぐうしろまで担^{にな}い上げて来たのを見ると、

「鉄砲止めッ」

と、四方の狭間^{はざま}へむかつて、ふいに休戦を命じた。

なお漂^{ただよ}う硝煙だけは立ちこめていたが、一令のもとに、そこはしいんと静まり返った。左馬介光春は、狭間から半身を乗り出す

ようにして敵勢を見ながら、

「寄手の大将、堀殿はあたりにおらぬか。かくいうは、守将の左馬介光春でござる。堀秀政どのに物申したい」

敵も急に喚かんせい声をひそめた。そして堀秀政の従兄弟にあたる監けん物もんのすがたが矢倉の下に立った。

「左馬介どのか。今ほどは寔まことにお見事であつた。よい語かたりぐさ草を
おのこしなされたぞ。はや最期のお支度と察するが、此方に物申
したいとはいかなる儀か」

「やれ、監物どのか」

と、覗のぞき下ろして――

「なお少々さし上げる矢弾はあれど、武門のごあいさつもはや打

ち切る。やがて全城火となり申さん。そのあとでは、われらの骨すらお求めあるも難むずかしかろう。ついては、可惜あたら、灰となすにも忍びぬ品々を、貴公の手を経て、世にお戻しいたしたい。お受け取りあれや」

云い終ると、蒲団包みや、蕙むしろぐるみの荷物を、細ほそびき曳ひにからげて、狭間はざまから下へするする降ろして来た。

堀監物は意外な感に打たれた。寄手の将士もみな一いちよう様な眼をそこにこらした。矢倉の下なる監物と、上なる光春とのあいだに、なお数語が取り交わされた。

光春はいう。

「いま、お手許へお渡し申した品々は、亡き光秀様が、故信長公

より生前功あるごとに拝領いたした物ばかりでござる。——それに添えてある目録もくろくを一見ねがいたい。——虚堂きよどうの墨跡ぼくせき、茶の湯釜、名物の茶入れ、ほかに太刀、その他数点」

監物は下で目録を見ていた。そして兵に荷を解かせ、照らし合わせて、すぐ答えた。

「お目録どおりたしかに受け取り申した。が、せつかくの御秘蔵を、憎き敵の手へお譲りあるとは、いかなる思し召しのことか。特に何人へお譲りありたいとかいうお望みでもあらるるか」

「何の」

と、光春は高き所から一笑を見せて、

「敗れ去れば天下さえ、次代の勝者に移ってゆくものを、一箇の

茶器名刀の如き何かあらん——です。ただ、それがしの思うところは、かかる重器は、いのちあつて、持つべき人が持つあいだこそ、その人の物なれ、決して、わたくしの物ではなく、天下の物、世々の宝と信じ申す。——人一代に持つ間は短く、名器名宝のいのちは世々かけて長くあれかしと祈るのでござる。これを火中に滅すのは、国の損失、武門の者の心なさを、後の世に嘆じられるを口惜しと、かくはお託し申す次第。——依つて、その名器名刀が、やがて誰の御所有になろうと、左様なことは、ただ今、この世に暇いとまする光春の知ったことではありません。——流るがんでんしよう玩らん転てん賞しょう——それでいい。持つべき資格のある者に持たれ、世の流れにまかせてゆけばよいのです」

告げ終ると、光春は、はや死を急ぐらしく、その狭間から姿をかくした。

堀監物はあわてて、再び、矢倉の上へむかつてこういつた。

「左馬どの、左馬どの。なおお訊きしたいことがある。もういちど姿を見せられたい」

「おう、何事」

ちらと、また光春が、下を覗いた。

「ほかでもないが、いま受け取った数々の重器のうちにも、かねて明智衆にありと聞く、世に名高い吉広江よしひろえの脇差わきざしは、目録に

も見えぬが、お取り出しを忘れたのではないか。——もし御失念なれば、庫中からお持ち出しになる間、お待ちいたしてもよいが

？」

すると、左馬介光春は、呵々かかと笑つて、

「あれは平常、日向守ひゆうがのかみ様が、特に御鍾愛ごしょうあいの名刀。わけて明

智家には、由緒ゆいしよふかい品でもあれば、やがて死出の山にて、光

秀様にお会いしたとき、お手渡しいたさんものと思つて、わざと

取りのぞいておいたのでござる。——はや火も本丸まで燃えつい

て来たようですから、余事を申しておる違いとまもない。監物どの、い

ざ、攻めかかられよ」

ことばの下から、ぐわんツと異様な音がした。光春は一閃いっせんの

火光と黒けむりの裡うちにかくれ、矢倉の狭間のすべてから、同時に

濛々もうもうと硝煙がふき出した。

次の一瞬には、轟然と、全楼ごとごとく、一火となつて崩れて来た。火薬を積んで自爆したのである。

坂本城は、明智方最後の一拠地だった。左馬介光春以下、一族とその股肱は、思い残りなく、生涯の終りを飾った。かくて地上にはこの日限り、明智方と名のつくものは、一城一兵もなくなつたわけである。

自爆した矢倉の崩壊と共に、全城また火の海となつたので、寄手の勢は、いったんその火勢から、囲みを開いた。

ところが、その焰の下から、まだ生きていた一人の敵が躍り出した。

「寄手の若い者に物申さん」

と、その老武者は、熱風の中から駈け出して、

「われは光春の叔父、明智長閑齋ちようかんさいみつかど光廉である。欲しくば寄れ、この首をさずけん」

そしてりゅうりゅう槍をしごき、堀勢の一角へ猛突して来たのだった。

日頃、家庭の儿女たちや、坂本の家中一般からも、「のん気なお方」といわれ「おひやらかな御老人」と、まるで奥曲輪おくぐるわの玩おもちや

具みたいに見られていた長閑齋は、この日、光秀光春の妻子から老幼すべての者の最期までを見届け終ると、やがて矢倉にのぼっていた。そして甥の光春に切腹をすすめて、その介錯かいしゃくをつとめ、さらにまた、三宅周防守らの将士が、すべて自害し終つて

から、矢倉下の火薬に点火するという——最後の役までもして
いたのであった。

「やあ、口ほどもないぞ。当年六十七歳の老武者の槍先から逃げ
まどうような奴は、この先ともに世に生きていたところで、世の
役には立つまい。われと思わん若い者なら、この首を取れ。取っ
てみよ」

長閑齋は、広言を吐きぬいていた。実際、彼の槍に立ち得る者
もなかった。真実死をきめた人の働きには、老若の差もありとは
見えない。まさに老獅子の奮迅ふんじんに似ていた。

突き崩された寄手は、ついに鉄砲を揃えてこれを撃とうとした。
すると堀秀政の旗本、薬師寺某やくしじは、

「さすがに、甥も甥なり、叔父も叔父なり、あわれにも、見事な死に振りよ。ねがわくは、あの入道首はそれがしに給われ」

と鉄砲組の狙撃そげきを制して、一いつそう槍をもつて立ちむかい、ついに突き伏せてその首級をあげた。

長閑齋は、さきに甥の光春を介かいしやく錯やくした光春所持の刀を帯していた。首級はその品と共に、やがて、堀秀政の手から三井寺へ送られ、秀吉の実検に供えられた。

「死んだか。……この長閑齋も、おもしろい老人だったが、とりわけ、光春は惜しい男だった」

秀吉は、首と刀を前にして、左右の諸將にこんな思い出を語った。

「あれはもう——だいぶ以前のことになるが、光秀が初めて坂本城を拝領した頃、信長公のお使いで、この筑前が祝いに参ったことがある。そのとき、光秀は下へも措おかずわしをもてなし、またしきりに、従兄弟の光春をも会わせたがつて、何度も、左馬介を呼びにやったらしいが、ついに出て来なかつた。——その歸りがけじゃ。わしが湖畔の道へかかると、松原の中で、茜あかねの陣羽織を着た男が、余念なく、馬の稽古を励んでおる。この方の行列にさえ一顧いっこもくれず馬ばかり飛ばしているのだ。——あとで聞くと、それが左馬介光春であつたそうな。その時分から、わしもひそかに骨のある男と見ていたが、果たして今日、その真価を天下に示した。……もしこの男が、わしの麾下きかであつたらと真実思う。し

かしこう惜しまるるもまた人の華はなだが」

駄だ農のう

秀吉は三井寺に宿陣していた。十四日の夜はまたも大雷雨であった。坂本城の余燼よじんは消え、墨の如き湖や四明しめいヶ嶽だけの上を、夜もすがら青白い稲いなびかり光ひらが閃めきぬいた。

もし、地上の現実を超えて、人の感情や幻想をも、歴史の影として書くことができるならば、この夜の凄^ひい黒雲の中には、明智一党の軍馬がなくつわお轡とぎの音や喊とぎの声を止めず、また本能寺方面にもただならぬ武者声が聞かれたであろう。そして叡えい山ざんの根本こんぼんちゆ

中堂うどうあたりには、かつてこの峰々で焼き殺された無数の僧侶、
 碩学せきがく、稚児ちご、雜人ぞうにんたちの阿鼻叫喚あびきようかんもたしかに聞え、或いは
 哭なき、或いは笑い、或いは鬨い、それが電光と雷鳴をなしていた
 といつても、あながち過言ではないであろう。

なぜならば、京近畿きょうきんぎの諸民は、明智氏の滅亡を知つても、な
 お明日の世がどう向いてゆくか、地上の修羅しゆらがいつ熄やむか、大き
 くそれを見とおすことはできないのみか、むしろふたたび、信長
 以前の乱脈な風雲が世をおおうて来るのではないかと——夜の具
 をかぶりながら、この夜の雷雨に夜ツびおびて脅おびえていたろうと思わ
 れるからである。

が、夜明けとともに、一天はきれいに拭ぬぐわれ、ふたたび暑い夏

空となつていた。

この日は、十五日である。

三井寺の本陣から見ていると、湖の東岸に当る安土の方に、濛もうも々と黄色を帯びた濃煙が揚り始めた。

「安土が旺さかんに焼けております」

哨兵の報に、諸将が廻廊に出て、秀吉以下、手をかざしている
と、瀬田の山岡景隆から早馬があつて、

「——今朝来、江ごうしゅう州土山に陣しておられた北畠殿（信長の第

二子信雄）と、蒲生殿の勢が一手になつて安土へ攻めよせ、城下

城壘に火を放たれましたため、火は湖の風をうけて、安土一円を
つつんでおります。——が、すでに安土にはさしたる敵兵もおり

ませぬゆえ、合戦というほどな合戦は行われていないものと存じます」

こう状況を伝えて来た。

秀吉ははるかにその状を想像しながら、

「理由なき放火よ。信雄様はともあれ、蒲生までが、何をあわてて」

と、口のうちに、不機嫌な^{なげ}呟きを鳴らしていた。

しかし彼の眼はすぐ和んだ。信長が半生の血と財力をかけて築いた文化は、あらゆる意味において惜しまれはするが、秀吉にはやがて秀吉自身の力をもつて、ふたたびそれ以上の文化や城廓を再現してみせる確信があつた。その抱負は、このときはもう彼の

肚はらにも充分な確信をもつて描かれていた。むしろ今日を画かくして過去のものは過去に帰してゆく天意にたいして、新たな励みと感激を覚えた。

折ふしました、山門の方から哨しょうかい戒かいの将士が、一名の男を取り困こんでここへ連れてきた。

「小栗栖おぐるすの百姓、長兵衛という者が、日向守の首級を、醍醐だいごへん辺への畔くろで見つけたと申して、ただ今、それを持参のうえ、訴えて参りました。——この儀、君前までお取り次ぎを」

中門の守将は、直ちに駈けて、ちようど縁に出て立っていた人々の下へ行つてひざまずき、そのまま秀吉の耳へ達した。

敵将の首を実検するには厳おごそかな作法と礼をもつてするのが慣ならわ

しである。秀吉は扈從こじゆうに命じて、直ちに本堂の前に床几しやうぎを設けさせ、やがて左右の人々と共に着席して、光秀の首を見た。

「……………」

凝視ぎようしするのみで、秀吉は何もいわなかつた。ただ無量な感慨につつまれている姿であつた。

この折、秀吉が床几を立て、

(主君信長を討つた酬むくいを思い知つたか)

と、光秀の首級を杖で打つたなどということが、「豊鑑ほうかん」には書いてあるが、嗤わらうべき筆者の臆測というしかない。

同じ臆測をするならば、秀吉が振り上げた杖は、むしろ首級の傍らにしたり顔して控えていた訴人そこんの男に振り下ろされたろうと

考えたほうが、まだ遙かに秀吉の心事に近い。

光秀の首を土中から掘り起してこれへ持つて来た訴人というのは、年頃三十がらみ、風体から見ても、酒焦けさかやのした、面構つらがまえもどことなく悪ずれている男だった。

当人の申したてでは、小栗栖村の百姓長兵衛と称えているが、元々百姓の家に生れ、農村の事に通じている秀吉には、ひと目見
て、

(これは良農ではない。どこの村にもいる駄農というやつだ。かかる者に恩賞を与えて、郷土に誇らしめるのはおもしろくない)と考えたことであろう。

事実、この長兵衛という男は、醍醐だいご辺の百姓とも、小栗栖の庄

屋の息子だとも、諸書に種々伝えられているが、いずれにしても真面目な農でないことは確からしい。今もむかしも、農村にはかならず一人や二人はいるぶらぶら者——怠け者で、すれからしで、^{へりくつ}屁理窟ばかりこねて、勤勉な農をダニのように^{さまた}邪^{さま}げている——いわゆる駄農の類^{たぐ}いには違いないようである。

従来^{じゆらい}の通説によると、とかく戦国期の百姓は、平常は田畑に出て働いているが、附近に戦争があると忽ち^{どひか}土匪化して、弱い^{おちゆ}落^{おち}人を^{うど}襲^うつたり、戦死者の持物を剥^はいだりすることを稼^{かせ}ぎとしていたかの如く伝えられている。しかしこれは史家の大きな誤認だと思^{おも}う。日本の百^{おおもたから}姓^{せい}の郷土における悠久なすがたを、他民族の百姓と同列に視^み、或いは唯物史観に陥^{おち}ちた史家の誤^ご謬^{びゆう}にほか

ならぬものである。決して、過去の史家にいわれたような弊風へいふうと悪質な生態が、当時の農村そのものであつたわけではない。

ただこういうことはいえるかと思う。

戦乱による「時の敗者」にとつても、悪質な闇の横行者や怠け者にも、当時の農村は全国的によい匿れ家かくがにされていたという事実である。滔々とうとうとこれらの者が流れこんでいたには違いない。

だが、こういう帰郷者や外来者と、祖先以来そこに住んで、黙々と土のみに天命を託して、五穀を禱いのり耕していた純然たる百姓とは、当然、区別して考えられねばならない。室町むろまち以来、一戦ま

た一戦あるごとに、夥おびただしい不純が純の中へ割りこんで来て農村の姿を殺伐化さつぱつかしたが、その荒すさびきつた時流の底にも、古来からの

農は、依然粗壁あらかべの中に貧しい燈を細々ととぼして、時代の物音に脅えながらも、本然の勤めと農の心は失われていなかつたことは確かである。——さればこそ時移れば、さしもの濁流も、ふたびもとの純に澄むのであつた。

「光秀の首はどこから持つて来たか」

秀吉の問いをうけると、小栗栖村おぐるすの長兵衛は、待つていたように幾つも頭を下げて、百姓に似げない弁舌で答えた。

「醍醐道の藪ほとりの畔へ、誰知るまいと埋めておいたやつを、後から掘り返して持つて参りましたので。はい」

「どうして、そこに埋いけてあつたものが、すぐ分つたのだ」

「それや分るはずでございますよ。小栗栖村の大竹藪を、日向守

やほか七、八騎が通るところを、こいつと見定めて、竹槍で一突きくれたのも、かく申す長兵衛でございますからね」

「おまえが竹槍で光秀を突いたというのか」

「へい、左様で」

「よく致したなあ」

「そりやあ、大将様の前でござんすが、少しばかり腕にも覚えがありますから」

「百姓もし、腕にも覚えがあるとは、おまえはなかなか隅に措おけないしれ者だな」

「しれ者たあ、何でございますか」

「百姓らしくもない、喰えん奴じやと申すことだ」

「へへへ。土地の百姓どもときては、意気地なしの、腰抜けばかり揃っておりますから、たとえ、明智方の大将株が、落武者となつて通ると分つても、こいつに、竹槍をつけるなんていう度胸ツぶしのあるやつは一人だつていけません。はばか。憚りながら、もしこの長兵衛が、音頭おんどを取つて、野伏りどもを集めなかつたら、日向守はまだこうして、首になつてはいなかつたらうと存じます」

「仲間の野武士は多勢か」

「五十人の余も狩り集めてやった仕事なんで。へい」

「では、汝一名のがらというわけでもないな」

「左様でございます。その五十人の奴らは、てまえが帰るのを村で首を長くして待つておりまする」

「ふム。何で待っておるのか」

「てへへへ」

と、長兵衛は、自分の頸すじくびを平手で叩きながら――

「御大将には、申し上げかねますが……その、御褒美の金の割り前をもらおうってんで……」

「褒美か」

「へい。何分、よろしく」

もみで揉手をして、また平伏した。

秀吉は、左右に命じて、首を首桶に納めさせ、やがて云った。

「長兵衛」

「へい」

「汝は、酒好きだろう」

「すこしばかりは」

「遠慮するな。飲みたいばかりに働いたことだ。きようは存分飲んで帰れ」

と、傍らの福島市松とほか二、三名の荒武者を選んで命じた。

「この男に、酒一斗与えて、飽きるほど飲ませてつかわせ。飲み切らぬうちはそちたちの刀にかけても帰すな。飲みほしたら門前から抛り出してやれ」

「かしこまりました」

「あ。……た、大將様。御褒美のお金は」

「追って、小栗栖村一同の村民へ施与せよいたすであろう。家臣をつ

かわして地頭名主へ手渡ししてやる。汝に持たしては、途中、一斗の酔でこぼしてしまふに違いない」

「さッ、立て。飲みに来い」

荒小姓の福島市松などは、左右から彼の襟えりがみをつかんで、面白半分面白半分に何処かへ引つ張つて行つた。

桔梗きぎよ分脈ぶんみやく

光秀の首は本能寺の焼け跡せきに曝さらされた。水色みづいろ桔梗きぎよの九本旗がここの暁あけに鼓譟こそうしてからわずか半月の推移であつた。

もとより見るにまかせてあるので、市民は朝から夕べまでいしゆ蝟しゆ

集うした。それだけで充分このことの政治性はあつた。ひとたびは光秀の逆を道義に照のらして罵のしつた者も、いまは口の裡しょうみに称名しょうを念よじて歸うつた。稀まれに腐屍ふしの下へ花を投なげてゆく者もあつた。警固の武士もそれを見て咎とがめるようなことはしなかつた。

京都を中心とする残党の詮議せんぎなども、極めて短期間にすまされ、より大きな意味の人心転換せんげんがはかられていた。生前、光秀と親交のあつた吉田兼和よしだけんわや里村紹巴さとむらじょうはなどの召喚しょうかんされたことが、ちよつと民間の神経をとがらせたが、これも即日、

——咎とがめなし。

ということことで歸かへされていた。

秀吉の軍令は簡にして明であつた。職に励め、悪事はなすな、

紊みだす者は斬る——の三則に尽きている。そしてまた光秀の場合とちがっていることは、京都に入ったからといって、すぐ地子じしせん銭の免税を布告したり、五山や公卿くげたちへ献金したりするような媚態びたいのない点だった。いや彼はまだ正式に信長の葬いをしていないのである。この大葬はただ兵力によつては出来ず、また彼一名の名をもつてするわけにもゆかない。

すべてはその後でという肚であろう。殊になお中央の大火はようやく鎮しずまったものの、飛火は各州の国々に及んでいる。

柴田、佐久間、前田。また徳川、滝川、毛利、長曾我部ちようそかべ。なお信長の遺子たる北畠信雄とか神戸信孝とか、親族たちの意向から、さらに、その間に伏在する諸武門の心態など、これをいちいちつ

ぶさな思考に糺ただして望見ぼうけんしていたら、到底、手の下しようもない千波万波というほかはない。天下の相貌はまだまだ決して一いった旦んの狂瀾きょうらんからもとの平静に帰ったわけではないのみか、信長ゆ逝き、光秀去つて、ふたたび全土三分の大分裂を来すか、或いは、室町中期のもつとも悪い一時代のような、同族抗争と群雄割拠さまの状さまが再現するにいたるかも知れないと思われるようなものすらある。

かかる中に、秀吉は数日三井寺からうごかなかつた。

十七日には、ここへまた、明智方の老臣齋藤内蔵助利三としみつが、捕われて引かれて来た。

秀吉は、この老虜将ろうりよしょうの白髪をあわれみ、

「望みは」

と訊いてやった。

「ただ、死のみ」

という利三の答えだった。

訊問じんもんによつてわずかに彼が知り得たところによると、内蔵助

利三は十三日山崎に敗れた後は子息の利光や三存みつよしとも別れ別れ

になり、江州ごうしゅう堅田かただの民家にひそんでいたところを捕えられた

ものである。身には幾力所かの矢傷槍傷を負い、毛髪は麻のよう
に白く、見るからに慙あわれであつた。

十八日、洛中らくちゅうを引きまわし、後、首級は粟田口あわだぐちに梟かけら

れた。

ここに市井の一小事件があつた。

首の紛失である。

粟田口に梟かけられた齋藤利三のそれは、本能寺から移して来た光秀の首級と並べられていたが、曝さらされたのはわずか半日、その夜、何者かに盗まれてしまった。

「明智党の仕業しわざである」

「まだ残党がいるのだ」

洛中の者は、詮議かれつの苛烈きりつを予想して恟きよう々きようとしていたが、このことについては、存外、その後さしたる余波もなかつた。

ところが、それに安心し出した頃になると、だれいうとなく、

「首を盗んだのは、画家の海かい北ほう友ゆう松しょうらしい」

という噂がたった。

友松は当時洛北の一寺院に住んでいたが、そこを訪うた者の言によると、彼は依然たる貧乏と画三昧がさんまいのうちに慎んでおり、それについて訊ねてみても、自分がしたともいわなければ、自分ではないともいわない。ただ笑っているのみであつた。——ということであつた。

前々から光秀とは心交を契ちぎつていた彼ではあり、内蔵助利三とは取りわけ親密だつた友松なので、

(てつきり、彼が)

という当然な臆測が生んだ風説にはちがいないのである。けれどもまた、当人がどこかそれを肯定している容子ようすであるから、察し

ると、案外、世間の考えが中あたつていられるかも知れない——という者もあつた。

しかし京都守護の軍から友松へたいしてべつに召喚もなく過ぎた。為に、洛の内外は、日ならずして、前にもまさる平穩に返つていた。

——これはずっと後の余談になるが、斎藤利三の末娘は、お福といつて、やがて稲葉正成いなばまさなりに嫁かした女性である。

良人の正成は、小早川秀秋こばやかわひであきに仕えていたが、関ヶ原の役にやぶろうろうれて牢浪ろうろうの果て、妻のお福は二代將軍秀忠の息竹千代めのとの乳人めのとになつて柳りゆうえい營えいにあがつた。有名な老女かすがのつぼね春日局かすがのつぼねはこの女性なのである。ひと年、上洛して天顔てんがんにまで咫尺しせきするの榮すらにな

った。そのおり、この春日局は、いまは亡きひとながら海北友松の遺族をたずねて、

(天正十年六月の父の忌日きじつをまつるたびに、あなた方の御先代友松どののお情けも思い出され、その御芳志は今もつて忘れておりませぬ)

と、手土産の金一封を置いて東へ帰つたということである。

これをもつて見れば、いよいよ海北友松の——笑わらつてこたえず而不答——

——の態度には、その陰にひとつの事実があつたことは確からしい。

明智氏は亡んだが、桔梗ききぎょうの根は諸家に分脈ぶんみやくされている。その

うちにも妙たえなるものは、後に伽羅沙がらしやとよばれた細川忠興夫人であ

る。父光秀が叛旗をあげた日から最期にいたるまで——いやその

後々までも、夫人がいかに世の批判と家庭のあいだに立つて人知れぬ苦悩をしたかは、想像に余りあるものがある。それは一篇の戦国女性史をもつてしななければ到底語りきれないものであるから、ここではこれ以上及ばないことにしておく。

母^{はは}の城^{しろ}

三井寺の秀吉は、その本陣をそっくり十数隻の兵船の上に移した。馬も乗せ、金屏風^{きんびょうぶ}も乗せた。十八日のことである。目的は安土への移動だった。

陸路にも軍勢が蜿蜒^{えんえん}と東進していた。微風^{きふう}にうごく旗幟^{きし}を乗

せて湖上を行く船列と、湖岸をすすむ陸の行軍と——両々相映じてゆくさまは壯観というもおろかであった。

が、安土はすでに焦土である。ここに到着するや、ひとりとして、ぶぜん慚然としないものはなかった。

こんぺき金碧の天守閣もない。外廊の諸門もそうけんじ総見寺のろうしやう楼廂もほ

とんどあとかたなく焼けている。城下町はもつとひどい。野良犬あきの漁る餌もなかった。南蛮寺のぼてれんがうつろな眼をして歩いている影が妙に目につく。

ここにあるべきはずの北きた畠はたけ信雄は、蒲生がもう賢秀とともに江ご州しゅうの土山にたてこもり、いまなお伊勢伊賀の叛乱軍と抗戦中

なることも来て見てわかった。

安土の放火は、直接、信雄が指揮したのでもなく、蒲生賢秀の意志でもないことが同時に判明した。一部軍隊の行為には違いないが、何か命令を穿はきちがえたものか、敵側の流説に乗ぜられて、逸はやまったものらしく想像された。

「心ない業わざだ。取り返しもつかぬ。返すがえすも惜しいことを」秀吉と同行の神戸かんべ信孝はしきりと嘆いたが、それでもこの放火が信雄の手でなされたものでないことが判明してからは、よほどその憤激もなだめられたようである。

秀吉はといえば、彼の志向はすでに江北から美濃方面へ転じている。

ここに着くとすぐに堀、中村、宮部などの諸隊に命じ、江北の

山本山城へ急がせていた。明智の一将阿閉淡路守と、それに組みした京極高次一族などの逃げ籠こもつていゝる小城である。

光秀の乱に呼応して起つた若狭わかさの武田元明は、丹羽長秀の佐和山の城を奪い、また、阿閉淡路守も同じ頃、秀吉の留守城を襲つて長浜を占拠していた。

いくばくもなく、中央の戦況は俄然がぜん非となり、光秀も討たれたと知るや、長浜の阿閉淡路守はそこを出て、そこから約三里の地にある山本山城へ移つてしまつた。もちろん京極きょうごく一族と共に。

かくて猛烈な寄手の攻囲をうけると、山本山城は、脆もろくも一日半で陥ちてしまつた。阿閉淡路守は斬られ、一子孫五郎は湖畔から船でのがれようとしたところを、里の者に妨さまたげられた上、なぶ

り殺しにされてしまった。また京極高次も、坂田郡の寺内で捕われかけたが、ちようど追手の堀秀政は、以前、京極家に仕えていた関係もあつたので、その旧恩によつて辛くも難をのがれ、これは越前の柴田勝家を頼つて遠く落ちのびて行つた。

安土滞陣もわずか二日だつた。船列はふたたび湖を北した。秀吉はいよいよよかつてのわが家たる長浜の城へその本軍をすすめた。城は無事だつた。敵影もなく、すでに味方の兵も入つている。

ここへきんぴよう金瓢うまじるしの馬簾が上がると、城下の民は狂舞して、彼が船から城へ通る道すじへ溢れ出て来た。女も子供も年寄も土下座して迎えた。涙して顔をあげ得ない姿もある。歓呼して手を振るもあつた。われを忘れて踊り出す領民も見えた。

（よかったよかった。みな息災でうれしいぞ。お前たちもよく^{こら}えた。わしもこの通り達者だぞ）

秀吉の眼はそういつている。領民の熱意にこたえるため、かれはわざと馬上で通った。こういうときの領民は国主の慈眼を読みとることに甚だ賢い^{さと}。語らずといえども領主の心はよく知るのである。

が、秀吉には、重大な不安も残っていた。長浜城へ入ってからそれはなお濃いものになっていた。一刻も晏^{あんじよ}如としてはいられない寂しさと焦^{しようそう}躁^{そう}にかられていた。

「知れたか。——母上の御安否は？」

こここの本丸に坐つてからは、出入する諸将にたいして、彼はた

えずこう訊ねた。——明智軍の襲撃にあうまでは、この城中につ
つがなく暮っていた老母や妻などの身の上がにわかには案じられ出
して来たのであった。

「百方、手分けして、お行方を求めさせておりますが、まだ確報
もございませぬ」

と、いまも彼の前にひとりの将が復命していた。

「領民の内には薄々知っている者がおりはせんか」

と、秀吉はいう。

「——と、思われましたが、存外、その領民にも皆目得るところ
がございませぬ。御一同して、ここをお遁れ遊ばす折には、極力、
そのお行き先を秘して参られたものようです」

「なるほど。それはそうかも知れんな。領内の者にそれが洩れていたようだったら、忽ち阿閉あべ淡路の手勢があとを追つて危害を加えたにちがいないからの」

秀吉はまた他の一将を迎えて、こんどはまつたくべつなことを話していた。この日、佐和山城の敵もそこを放ほうてき擲して、若狭方面へ逃走したということであつた。で、そこも以前の城主丹羽長秀の手に戻つたという報告をいま耳にしたのである。

そして、夜に入つてからであつた。

小姓組の石田佐吉と、ほか四、五名の同輩が、何処からかあわただしく立ち歸つて来た。

秀吉の室まで来ないうちに、小姓溜りだまや廊下のほうで、何やら

歡びあう声が沸いている様子に、心待ちに待つていた秀吉は、

「佐吉がもどつたか」

と、左右にたずね、

「なぜ早くこれへ来ぬか」

と、叱りに遣つたほどだった。

石田佐吉は近郷の出生である。従つて、浅井郡や坂田郡の地理にかけては誰よりも詳しい。そこで彼はこんなときこそ知識を生かすべきだと考え、みずから望んで、主君の母堂や夫人の落ちのびた先を昼から捜しに出いたのであった。

心のふるさと

石田佐吉はやがて秀吉の前にかしこまっていた。

「ようやく、さる所で、みな様の御所在を訊きあててまいりました」

と述べる彼の復命によると、秀吉の母堂と寧子ねね夫人などの眷族けんぞは、ここから約十余里もある山奥ひそに潜ひそんでいるというのである。長浜から供して行った家士や侍こしもと女などもみな一つ所において、今日まで敵の目をのがれ、からくも一同は生命を保っている様子であるとも云い足した。

「佐吉」

「はい」

「そちはどこでそれを訊き出して来たか」

「寺の者から聞いてまいりました」

「寺とは」

「幼時わたくしが稚児ちごとして養われていた真言寺しんごんぢらの三珠院さんじゆいんで
ございます」

「よいところへ目をつけおつた。すると、母や寧子の潜んだ先も、
寺の縁つづきとみゆるな」

「仰せのとおり、浅井郡の大吉寺だいきちぢという山寺の由にござります
る」

「大吉寺とは、聞かぬ名だが、詳しくは、どの辺か」

「坂田郡の七条、鳥脇とりわきなどを経て、伊吹いぶきの山裾へつきあたりま

す。すると、北国街道が横たわっておりますが、これにならわらず道を横ぎって、なおも伊吹の西麓へ登ってまいるのです。——その辺まででも、お城からおよそ六里はございましょう」

「くわしいな、そち汝は」

「三珠院にいた時分は、あの辺をよく飛びあるいたもので、いわば童時代わらべの古戦場でございますから」

「うム、うム」

と、うなずき続けて——

「そこからまだ山奥か」

「なお六、七里、めつたに里人も通わぬ道を参ります。姉川の上流あずさがわ梓川たにの水は、溪をせき淵をなし、道に沿っておりますが、

どこまで行っても水源に到りません」

「待て待て。そう聞いても呑みこめぬ。明日の道案内に従ついて来い」

「おやすいことですが、わたしよりもつとよい道案内がおります。それを迎えにお遣やり遊ばしては」

「たれだ、それは」

「美濃衆みのしゅうの広瀬兵衛ひろせひょうえにござります。あの辺は美濃ざむらいの

広瀬が領地の由を、三珠院でも申しておりますが」

「いや、美濃へ使いをやっている暇はない。明日にも秀吉はそこへ参りたい。広瀬へは挨拶だけを遣やつておこう」

「明日、何刻ごろお出ましになりますか」

「朝立てば、夕には、母にも妻にも会えようが」

「たといお馬でも、一日では参れません」

「早立ちでもだめか」

「到底——」

佐吉が首を振ると、

「では。——今からすぐ出向こう。今からなら、あすの夕には行き着けよう」

秀吉はいうとすぐ座を立ち上がっていた。

やもたてもない気持ではあろうが、余りといえ急である。同席の諸将はあつけに取られた顔だし、扈^{こじゆう}従^{ひとかた}の家臣たちは、支度にあわてふためいて、その忙^{せわ}しなさは一方^{ひとかた}ではない。

「あとは、たのむぞ」

堀秀政などをかえりみながら、秀吉は小姓のかける陣羽織を背にうけていた。そしてなお云った。

「大津には彦右衛門をのこしてあるし、安土には神戸どのが止まつておられる。佐和山といい、この長浜といい、はや抑えは心配ない。——で、ちよつと母を迎えに行つて来るゆえ、両三日のいとまをくれい」

「行つていらつしやい」

諸将はそういうしかない。

総立ちで、城門まで見送つた。そのあいだ、人々のつらつら思うには、いったいこの羽柴という大将はどこまで続くものだろう。

背中から眺めても、いつこう見ごたえもない体格なのに、そのどこからこういう気力や体力が湧いて出るものか——という驚嘆に似たあやしみであった。

「——なんとおおぎよう大仰な。母を迎えにまいるのは秀吉のわたくし事。……そう大兵を供して参るには及ばぬことだ」

秀吉は城門を出るとすぐ大声でどなっている。須臾しゆゆの間に勢揃いして待つていた六、七百の兵列をそこに見たからであった。山崎、坂本と連戦して来て、安土でもほとんど休むいとまもなく、早曉そこを立つてこれへ来たばかりの今夜である。兵の顔はまだみな泥の如く疲れきつているのである。秀吉はそれをも察してそういったのかもしれない。

「供は、五十騎もあればよい。ただし小姓どもはなるべくみな来いよ」

すでに馬上へうつり、松明たいまつを持つ人々が列の先に立つわずかな間を、秀吉はそう告げていた。あらかたの兵はあとに留むべしといった。

「それは危ない。五十騎では少なすぎる。この夜道——わけて伊吹の山近くにでもなれば、なおいかなる敵勢ひそが潜んでおるかも知れぬに」

堀秀政も池田勝入も、口をきわめて諫いさめたが、秀吉には、その懸念けねんはないとする確信があるものの如く、「案じるには及ばぬ」
とのみで、やがて、松明の火光を先に、長浜の城門から東北方の

並木道を一路遠ざかつて行つた。

宵から四更にかけて、秀吉はさして急がずも五、六里の道は拂はかどつていた。石田佐吉がさきに走つて、七尾村の三珠院を叩いたのはまだ真ツ暗な時分であつた。寺僧の驚きは一通りではあるまい——と思ひのほか、何ぞはからん、山門をひらくと、寺内は煌こ々うこうと燭をてらし水を打ち、清掃いたらざる所もない。

「たれだ、わしの立ち寄ることを、先触れしたものは」

「佐吉にございまする」

「そちか」

「はい。この辺で殿の御休息あるはまちがいなしと思ひ、足早な若党ひとり先へ走らせて、五十人前の弁当と、お湯漬ととのの調えなど

命じておきました」

この寺のお稚児ちごだった佐吉が、秀吉に貰われて長浜城の小姓部屋に入ったのは、彼が十三のときだった。

それから八年目の今日である。石田佐吉も二十一歳の若武者とはなつた。しかも事理に明るく敏びんさい才衆をこえている。秀吉も常に、

（市松も虎之助も助作も、みな武勇すぐれておるが、その中の佐吉はすこし異つておる）

と、いつもいつているほどである。

この佐吉を、親代りともいえるほど、幼時から育てた三珠院の住職は、いまなお健在だったので、今日の佐吉を見て、よろこぶ

こと限りもなかつた。

同時に、久々な城主の来訪でもあつたので、寺中をあげて款かんた待いにつとめたことはいうまでもない。

けれど秀吉の気持は、唐突を知つて、ほんの小憩しょうけいを求めに立ち寄つたに過ぎないのであるから、従者の弁当ととのを調べさせ、自分も湯漬の馳走になつて、一碗の茶を喫きつし終ると、

「世話になつた。いずれ沙汰するであらう」と、直ちにそこを出発した。

この頃となつても、夜はまだ明けきつていなかつた。ただ目のまえの伊吹山の線がほのかな暁紅と薄浅黄の空にはつきり浮き出して見え、耳こもりに小禽こもりの声が聞かれて来たにすぎない。道の露はふ

かく、そして樹の下は暗かった。

住持のいいつけで、山にくわしいという若僧がふたり、わらじ穿ばきで、松明のさきに立ち、

「大吉寺まで御案内申しまする」

と、伊吹の腰へ上つて行つた。その僧が指していうには、

「伊吹に連なる彼方の山は国見といい、あのへんを東へ越えると、美濃の揖斐郡いびごおりになります。——またこれから奥は草野ノ庄くさのしやうとい、むかし平治の乱に源義朝みなもとの父子が匿かくれたのもそこだと云い伝えられております」

秀吉は樂しげに見える。一步一步、母や妻に近づいていることを意識してであろう。道の嶮けわしさも身のつかれも知らない容子で

ある。そして静かに明けて来た伊吹の西谷にしたにを行くほどに、ここはもう彼にとつて母の懐ふところかのような心地がするらしかった。

さきに石田佐吉がいったことばの通り、梓あずさがわ川の溪流は、それに沿つて溯のぼつても溯つても水源らしくならなかつた。却つて、行くこと数里にして豁かつぜん然とあたりは展ひらげ、山奥とも思われぬ広々した谷あいへ出た。

「あれが、かなくそ山です」

つき当りの巍ぎが峨たる一峰を指して、案内僧がひたいの汗を押し拭ぬぐつた頃、陽ひもちようど中天、真夏の暑さは昇りつめていた。

「まだよほどあろうか」

「この辺から東草野ですが、大吉寺までは、なお二里もございま

しよう。何しろひと口に草野ノ庄といつても、上草野、東草野に
わかれ、東西二里、南北五里というひろい谷でございますからな」
僧はまた先に立つて行く。道は狭せばまるばかりである。この辺か
らは騎馬では無理といふので、秀吉も扈こじゆう従の家臣も徒歩になつ
たが、そのとき、何を認めたものか、左右の者は、にわかにとよ
めき立つて、

「敵らしいが」

と、噪さわぎはじめた。

良よい息むすこ子

ひとつの山陰を旋めぐるつて、次の視野へ出たときなのである。——
見るとなるほど、彼方の山腹にひとかたまりの兵が屯たむろしていた。
向うでも驚いたとみえる。遠くこちらの一行を知るととたんに総
立ちになっていた。何か指揮するような表情を示している者だの、
また幾人かの兵はわらわらと何処かへ駈け散らかつてゆくらしく
も見えた。

「伊吹へもだいぶ逃げこんだと聞く。その阿閉あべ勢か 京きょう 極ごくの残
兵どもであろう」

秀吉の供人たちは、あり得ることとして、直ちに、隊伍の中の
銃手を前に繰り出した。すぐ打敷けと命じるのだった。すると前
の方では、かの道案内の二僧が、

「敵ではありません。草野ノ庄を守っている哨兵しやうへいです。大吉寺から出ている見張りの衆ですから撃つてはいけません」

と、手を振りぬいて後の者を制しながら、一方、あなたの山腹へ向つても、出せるだけの声を張つて、何やら手真似てまねで意志を送つていた。

すると、山腹たむろに屯していた兵の影は、崖をくずれ落ちる石ころのように、一斉にそこを降りはじめた。まもなく背に小旗を差した一将が此方へ向つて駈けて来る。近づくに従つて味方にちがないことが確認された。味方である。長浜の留守にのこしておいた一家臣にちがない顔を秀吉も思い出していた。

もとより山寺である。大吉寺は大吉堂ともいい、一字いちぢうの堂と、
破やれはてた僧房一棟ひとむねしかない。

平治の頃、義よしとも朝父子が匿かくれたという頃には、この山中にも、
四十九院の殿舎があつたと古記はつたえているが、いまは野瀬のせと
よぶ溪流に臨むその小部落をあわせてもそんな戸数はなかつた。

雨が降ると、雨がもる。風がふくと、壁うつばりや梁の土がこぼれる。

そうした本堂に、寧ね子ねは老母に侍かしずいて住み、僧房のほうには、身
内の若い者や年寄や侍女たちを住まわせていた。また長浜からつ
いて来た家臣やその郎党たちは、附近に小屋を建てたり、部落の
農家に分宿したりして、ともあれ二百何人という大家族が、ここ
に半月以上の、きのうまで予想もしなかつた必死の生活を体験し

ていた。

六月始め、本能寺に！——とあの乱が聞えたときにはもう長浜へも明智軍の急潮を目前に見ていたのである。——何をすまももありようはない。はるか中国にある良人おっとにあてて、妻として、寧子ねねが一書をしたため送ったのが、実にやつとの暇であった。老母を負い、眷族けんぞくを伴い、家臣を励まし、城をすててのがれ出るにあたって、もとより持物などは顧かえりみていられなかった。老母の着換えと、良人が君公から拝領した品などを、馬の背に積ませたのがようやくであった。

この場合、誰よりも悲壮な覚悟と大きな責任を「女の道」に感じていたのは、いうまでもなく寧子である。家の留守をあずかり、

良人の母に仕え、なお多くの召使を擁している身として、

(どうしたら戦陣にあるわが夫つまに、妻よ、よくやつたと、欣よろこんで

もらえるだろうか)——を生命いのちにかけて念じたにちがいない。きのうまでは、良人は戦場に在り、自分たちは国内にある、という観念でいたのが、一朝にして、そのけじめもなく、居る所いずこも戦場と化したのである。

が、これが戦国のあたりまえな相すがたであつた。戦国に生活してゆく人々にとっては、たとい一時の狼狽はしても、

(夢のような)

と、おろおろするようなことはなかつた。あり得ぬことと嘆き沈んで、滅めつしつ失しつに囚めわれてしまうような不覚者は侍女のなかにも

いなかつた。

ただ、母の身を、何処へ移しまいらせようか——それには寧子も心をいためた。一時、城は敵手にゆだねても、あの良人のことである。いつかかならず奪^{だっかい}回する。その信も固かつた。けれど万一、老母の身にひとすじの矢でも負わせたら取り返しがつかない。留守をあずかる妻として、良人にあわせる顔はない。それのみいっぱいに思った。

「ただ母様を。——母様のお身を護つて給^たも。寧子の身などかもうてくれるな。いくら惜しい物とて、財宝には心をひかれまいぞ」寧子は、召使う女たちへも、一族の誰彼へも、こう諭^{さと}したり励ましたりして、必死に道を東へ東へ急いだのであつた。

長浜の西方一帯は湖だし、北は敵の京極や阿閉あべの与党けんせいが牽制けんせいしているし、美濃路の方面はまったく動静が知れないし、必然、伊吹の山ふところを望んで逃げてゆくしかなかったのである。

勝者の一族たる場合は、よくぞ武人の妻にとあらためて思うほど曠はれた幸さちにもつつまれるが、ひとたび敗者に立ったときの——わけても居城を逐おわれて落おちゆうど人になつたときの——惨たる姿と心根とは、平常、野に働いたり、町に物を商あきなつてゐるものには、到底、想像もできないみじめさであつた。

その日から食には飢え、野伏のふせりや敵の斥候おびやに脅おびかされ、暮れては雨露うろのしのぎにも困り、明けては血にそんだ白い足をたがいに励まし励まし逃げるのであつた。

ただこういう辛酸しんさんのなかにも毅然きぜんとして失わないものは、

(もし敵とらに囚とらわれたら)

と、そのときの一つの覚悟と、

(時あれば、ふたたび、敵にものみせて)

と、ひそかに誓うやがての意気であつた。不屈な女の一心だつた。平常の臙脂えんじや黒髪くろかみのうるわしさも、もしこの日にしてその芳香かうかうを心から発するのでなければ、ただ醜みにくしさをかくす似而非えせのものと、女と女のあいだですら蔑さげすみ、卑いやしむ氣風があつた。

野瀬の部落は絶好な避難所であつた。遠く哨しやうへい兵へいを立たせておけば、まず敵の急襲きゅうしやくにあわてる懼おそれはない。真夏なので、夜の具、食糧なども、何とか間に合う。

ただ佗^{わび}しきは、余りに人里と隔絶されているため、以後の世情が皆目知れないことであつた。

(使いもはや帰りそうなもの)

寧子は西の空へ想いを走^はせた。長浜を落ちる前夜、あわただしく一書をかいて中国の良人へ持たせてやった使いの消息もあれきりだつた。或いは途中で明智の手にとらわれたか、ここの匿^{かく}れ家を探し当てないものか。朝夕を千々^{ちぢ}に思うのだつた。

ところが、それより先に、山崎に合戦があつたと近頃聞えて来た。ひそかに里へ出した一家臣が三珠院で聞いて来たことである。それを耳にしたとき、寧子の血は皮膚の表にまで色になつて出た。

「……さもあろうよ。あの子のことじゃ」

これは老母の言葉であつた。さも当然としてゐるかのようである。とはいへ、髪もいつか真ツ白になりかけてゐるこの母は、朝起きるから寝るまで、大吉寺の本堂にべたと坐つたままほとんど身うごきもせぬ姿であつた。

ひたぶるに、わが子の せんしやう 戦捷を念じていた。いかに世は乱れ

ても、自分の産んだ子が大道を踏みちがえるようなことのないことだけは固く信じてゐるものの、いまなお寧子にうわさするとき、むかしの口癖をそのまま、あの子あの子と秀吉をよんでいるこの母であつた。終日の祈念は一すじに、

(この年老いた身に代えても)

と、念じてゐるにちがいない。——そして折々には、ほつと正

面の本尊仏を仰ぎ見ていた。大吉堂のそれは立像丈余のしょうかんの聖観音であつた。

「お母さま。何かしら近いうちに、ここへ吉報があるような気が寧子にはいたしますが、お母さまには……」

すこしの暇でもあれば、彼女も母のそばへ来て、ともに掌てをあわせていた。ここへ移つてからの彼女は一切召使の手をからず、母の食事から夜よるの具ものの上げ下ろしまでみなしていた。また間には、家中の妻子や病者を見舞つたり、とかく意気銷しょうちん沈しんしやす一郎党たちをも励ましてまわるなど、まったくもう一度、秀吉がまだ貧乏時代であつた頃の一主婦に立ち還かえつているすがただつた。

「ほう。そなたもそう思うか。この母もそう思うてじや。何とい

う故は知らぬが」

「わたくしは、この聖観音さまのお顔を仰いで、ふとそんな気がしてまいりました。おとといよりは昨日。きのうよりは今日。一日ましにはつきりと、わたくしたち母子^{おやこ}へ御微笑を投げかけられてお在^わすような……」

朝、母子して、そんなことを話していた日であったのである。まことに虫の知らせというものであったかもしれない。

日没のはやい谷陰の部落は、もう御堂の壁に暮色をたたえ始めていた。

寧子^{ねね}は内陣の陰で、燭^{しよく}に燧石^{ひうち}を磨^すっていたし、老母のすがたはただ一つ暮れ残ったもののように、聖観音の下にじっと祈りの姿

をつづけている。

非常な迅はやさで来る躑あしおと音がそのとき外の方に聞えた。少なくとも十名足らずの武者らしい。老母ははつとしたように振り向いた。寧子も御堂の縁へ出て立った。

「——殿がこれへお出でになりますッ。間もなく殿が見えられま
すッ」

境内中へひびけとばかり呼ばれるほどの声だった。毎日、二里ほど先の下流まで見張りに出ている哨しょうへい兵の者たちである。みなのもめるような姿勢をして、傾いた山門を駈けこんで来たものだったが、とたんに彼方の濡縁に寧子のすがたを見たので、そのままで寄る間も惜しい気もちで、みな口々にそこから叫んでしまった

のであった。

「お供には、御家中の誰彼をひきつれ、およそ五十騎ほどで、お休みもなくこれへお急ぎ中です」

「殿をはじめ、供の衆も、みなすばらしいお元気で」

「とこうする間に、すぐお着きになりました。夢かのようにすが、夢ではありません。まさに、中国から攻めのぼられて来たわが殿です」

かかる声々は、濡縁の前を去って、やがてまた、狭い寺中はおろか、裏の武者小屋から、部落の家々にまで伝わって行つたが、その伝わることの迅さは、たちまち大吉寺を中心に、野瀬の部落全体から、何ともいえない声が、わあツと一斉にわき揚つたので

もよくわかる。

「母さま」

「……寧子よ」

老母と彼女とは、その歓声をひとつの声とも思われず、相抱いてうれし涙にむせんでいた。

老母は聖観音へ額ぬかずいた。寧子も心からひれ伏した。はや現うつもなげなその姿へ、母は母らしく促うながした。

「寧子。いかにこの時とはいえ、あの子も、久しぶりにそなたを見るのじゃ。そのすがたは余りに窶やつれ過ぎて見えよう。いそいで髪など撫でての……」

「はい。はい」

「そして、御門前まで出て、お迎えしたがよい」

寧子はいそいそと庫裡くらりの水屋へかくれた。髪をなで、笕かけひの水を掌てに溶といて、瞬間に薄化粧をほどこし、帯、襟もとも直してそこから藁草履わらざうりを穿はいた。

一族の主なる者、家士はことごとく、すでに門前に出て、年の順、身分の順に、出迎えの列をととのえている。附近の木の間木の間にも、老幼の顔がいっぱいのぞに覗のぞいている。その多くは部落の者たちであつた。何事が起るのかと眼をまろくしている様子である。

しばらくすると、また二名の武者が、先駆としてこれへ報らせて来た。——もうすぐそこへ殿を始め御一同お見えになります、

というのである。寧子の前へ告げ終ると、その者たちもまた列の端に加わった。急にそこはひそまり返る。誰のひとみも一すじの道の彼方にさす影を待っていた。寧子ねねはもう眼にあやうげな潤みうるみをたたえ、まぶた瞼にほのかな充血を見せながら、求める人々の肩の陰たたずに佇んでいた。

間もなく一団の人馬はこれへ着いた。汗ほこりと埃のにおいはまた、騒然たる出迎え人のどよめきに包まれて、大吉寺の門前は一時、馬つなぎにいななく馬の影と、相擁して無事を祝しあう人と人の影で埋まった。

秀吉もまたその一人だった。彼は、部落近くから背を借りて来た駒を、いま山門の前で降りると、それを従者にあずけ、すぐ右

側の列の端に並んでいた幼い童わらべのひと群れを見かけて、

「どうだ、山の中は。遊び場がたくさんあつてよかろう」

と、はなしかけた。そして手近な所にいた少年や女童めわらべの肩を打ちたたいた。

これらは皆、家中の者の家族だった。で、もちろん、それらの者の母親や祖母、老父なども立ち交じっていた。秀吉はその顔を一つ一つ見てあるくように歩を山門の石段の方へ運ばせながら云った。

「よし、よし。みなつつがなくこれにおるな。筑前も安心いたしたぞ」

それから左方の列へ顔を向け直した。そこには家士一同が肅しゆく

然^{ぜん}と頭を下げていた。

秀吉はやや声を高めて、

「一同、いま立ち帰ったぞ、留守中の難儀、察し入る。御苦勞だつたの」

列をそろえていた家士たちは、膝までの手を、さらに、膝の下まで下げた。

石段の上、山門のふところには、親族の老幼と、主なる家臣だけが迎えていた。秀吉は、そこでは左右へ向つて自分の健康を示す笑顔を撒^まいて見せただけだった。わけて妻の寧子へは、ほんの一顧を与えたのみで、ことばもかけず山門を通つた。

けれど、そこから先の良人の姿には、たえずつつましやかな妻

の影が添っていた。そろそろと従って行つた小姓たちも、また一族の誰彼も、寧子のことばによつて、みな休息につくべく去り、或いは、

「後刻、また」

と、縁の上で、礼のみを送つて、各の居るべき所へ姿をかくした。

天井の高い御堂の中に、低すぎる燭台がただ一つぽつねんと燈ともつていた。そのかたわらに繭まゆのように真白い髪の人くちばいろが朽葉色のうちかけを着て、ひそと坐つていた。いうまでもなく秀吉の母である。後にやがて子が太閤たいこうとなつたときは大政所おおまんどころとあがめられたひとである。

「こちらにおいでか」

妻に導かれていま濡縁へ上がつて来た子の声はその陰でする。

老母は音もなく立つてその姿を入口の端近くへ移した。

秀吉は薮しとみの下で、陣羽織ほこりの埃を払っていた。尼ヶ崎の陣中で剃

ろした髪はまだそのまま陣頭しんずきん巾につつんでいる。寧子は良人の

うしろへ廻つて、そつと、

「お母さまが、板敷までお迎えに出ていらつしやいます」

と、小声で注意した。

秀吉はあわてて母の前へ寄つてひれ伏した。どうしたのか何も
いうことができなくなっていた。やがてようやく洩らしたことは

は、

「母上。御難儀をおかけいたしました。おゆるし下しおかれましよう」

という一語に過ぎなかった。

老母はすこし膝を退^さげた。入口まで立つて出迎えた礼を、もういちど繰り返して、わが子に手をつかえるのであった。わが子とはいえ、この際の礼儀は、凱旋した家の主^{あるじ}を迎えるのである。こうするのが武門の家風でもあった。つね日頃の単なる親子としてではない。

けれど秀吉は、ここに無事な母の姿を見たとたん、つい骨肉の情愛それだけになって、老母の膝へ寄りかけたのである。しかし老母の恭^{きょうけん}謙な礼儀はそれをそつと拒むかのようにして、こ

ういうのであつた。

「お許もと様もつつがなく、まずはようお帰りなされた。……けれど、この母の難儀や無事を問う前に、なぜ、右大臣様（信長）の不慮をお語りなさらぬか。また、憎い敵の光秀を討つたのか、まだか。……それを告げては下さらぬか」

「はい。まことに」

秀吉は思わず襟を正した。老母はかさねて、

「知りたや、如何あろうと、この老母までが、日々あこがれていたのも、お許という子の生き死にはない。右大臣家の臣、羽柴秀吉という大将のはたらき振りであつた。御主君の亡きあと、どう御始末なされたか、尼ヶ崎、山崎あたりまでは、軍を返して、

お上りなされたとは聞きながらも、その後のことは、いつこうま
だこの山奥までは聞えて来ぬ。……この年寄は、ただそれのみを
案じておりましたのじや」

「申し遅れました」

言葉は愛もなき他人行儀に似ているが、秀吉は体じゅうの血が
沸^{たぎ}り立つような嬉しさに揺すぶられた。

母の母らしい当然な愛に慰撫されるよりも、いまの老母のたし
なめは、彼にとって、百倍千倍の大きな愛と、同時に、将来まで
の励みを与えたような気がしたのである。

子を膝にかかえ寄せ、子に数々のやさしい愛撫をすることなら
ば、それは鳥獣の母もしよう——けれど人の母ならでは見られな

い真の愛は、時にその本能にも超えた高さのものである。秀吉はその大愛に五体を打たれた。——なぜならば、彼も人の子として、実は、心のうちで、

(母からそういわれたい)

と、希^{ねが}っていたことだからである。

なぜ、子は母に、そういう希^{ねが}いを抱くかといえ、いうまでもなく、戦場でも、いとまあれば、うしろ髪をひかれるのが情^{じょう}だからである。何は措^おいても、ひと目、母の無事を拝してと、万難を冒して、これへ来たのも、彼としては、決して帰って来た心ではない。——明日はまたすぐ、この母をも何ものをも捨てて、死生の中へ——と胸には期している身である。

いや、秀吉ばかりでなく、およそ大義に生き、高い生命に燃えようというものは、家ではさりげなく見せていても、みなそうした希^{ねが}いを、母にももち、妻にももち、また弟妹にも持つであろう。あとへ残してゆく弱い者を思えば思うほど、その心理は痛切である。だから、もしその弱い者たちの口から、健^{けなげ}気なひと言でも聞けば、男子たるものは、それこそそれを無限の愛と受けて、同時に、顧みなき自己の雄魂を、弥^{いや}が上にも強め得るのであった。

秀吉はまだかつて、ひとに向つて、将来、大をなさんなどという壮語^{もてあそ}を弄んだことはない。亡き信長はよく彼を評して、大^{たいきも}気者^の大気者といったが、おのずからな大気は辺りへ示しても、みだりな大言は放たない彼であった。けれど、彼を生んだ母は、誰

よりも彼を知っている。きょうの言葉は、まさに、子を知る親の言葉にほかならない。

（——母は知っていてくれる。成るも成らぬも、母は覚悟していで下さる）

これは子にとって最大な強味であり恩愛でもある。秀吉は、中国以来連戦のつかれも、これから先の後顧こうこも、いちどに取り除かれた気がした。今はただ、渾身こんしんの努力を天命に託して、天意の応こたえを待つのみとする清々すがすがしさがあるだけであつた。

で、主君信長の死に会してから取つて来たここまでの経過と、これからも貫かんとする大志望を、彼はこの老いたる母にもよくわかるように、噛みくだいてつぶさに語つた。

老母は初めて涙をたれた。そしてまた、初めて、健気なことよと、子を称ほめた。

「よう短い日のうちに明智を討ち尽しなされたの。右大臣様の靈も、さすが致したと、御生前のおいつくしみも、お悔い遊ばすこともなく在おわそう。……実をいえば、この母とて、万一お許が、まだ光秀の首も見ぬのに、さきへこれへ来たのであつたら、一夜とて、ここへ寝かすことではないと、心できつく思うていました」

「いや、秀吉も、それをすまさぬうちは、母上に合わせる顔はないぞと、つい二、三日前までは、一念ただ戦いのほかはありませんでした」

「それがこうして、無事を見合うことができたというのも、そな

たの取った道が、神仏の御旨にかのうたからである。……さ。寧^ね子もこれへ寄ったがよい。揃うて、お礼を念じましようぞ」

老母はそういつて、正面の聖観音へむかつて坐り直した。

そのときまで寧子は、良人と母の間よりも、もつと離れて、ただつつましく坐っていたが、老母にそういわれると、はい、と静かに立つて御堂の内陣へあるいて行つた。

二つの吊^{つり}燈^{とう}明^{みょう}と龕^{がん}の内^{うち}へ燈^ひを入^いれに行つたのである。そしてもどると、初めて良人の隣に坐つた。

母子三人は姿をならべて、ほのかな明りへぬかずいた。秀吉は頭を上げて凝視したのち、ふたたび三礼をなした。聖観音の御厨^{みず}子^しの側壇^{しやうだん}には、主君信長の俗名をしるした飯^{いはい}の位牌^{いはい}が仰^{あや}がれたか

らである。

それがすむと、老母は初めて、心の重荷も降りたように、

「寧子よ」

と、やさしく呼びかけ、

「この子は、風呂好きじゃ、湯浴ゆあみのしたくはさせてあろうの」

「はい。おつかれを解くには、何よりはそれと思ひまして、大急ぎで今、させておりまする」

「そうか。ともあれ、汗など流させたがよい。母はその間に厨くりやへ行つて、何ぞ、この子の好物でも調理させておきましょう」

老母はふたりだけを残して立つた。

「寧ね子ね」

「はい」

「そなたも、このたびは、何かと心労であつたろう。が、前後の処置、誤りなく、よく母上をお護り申しあげてくれた。秀吉もそれのみ案じていたが」

「武人の妻には、これくらいな難儀は、いつあるか知れぬはずのもの、日頃、覚悟しておりましたせいか、さほどとも存じませぬ」

「そうか。総じて苦難というものは、そこを乗り越えて、苦難をうしろに振り向いてみると、おもしろい、何とも愉快なものだ。……ということがわかつたろう」

「いま、こうして、わが夫のお無事を眺めていることが、ほんと

に仰つしやるとおりな心地でございまする」

「人生、その起伏がなくては、何の味もない。——夫婦の仲とて、同じようなものではないかな」

「ホホホホホ。左様でございませうか」

「中国の長陣中、安土までは帰つても、長浜の家まではつい立ち寄るいとまもなかつた。——が、こうして久しく見ぬ妻に久し振りで会うと、わが家の古女房も、何となく目にさやけく見え、そなたのつつましさまでが、花嫁の頃を思い出させる」

「ま。——」

と寧子は顔をあからめて、

「何を仰せ遊ばすかと思えば」

「いや、いや、ほんとだぞ」

秀吉は大真面目にいうのであった。

「ふたり限りきりで、この御堂の素筵すむしろに坐つておると、ふたりが祝言きよすいたした清洲時代の——あの弓之衆長屋が思い出されるではないか。そなたの羞はじらう容子ようす、また、良人を迎える心からな容子。すべてが、その頃の楽しさに返つて来る。余りに馴れた夫婦というものは、時に二、三年ほどは別れてみるもよいものじゃ」

「それは殿方のお気持でございましょう。女房心はまた少しちがいまする」

「そうかな。……ふうム、どうちがう?」

そのとき本堂の袖部屋そでべやに、ざわざわと人のけはいがした。睦むつま

じくはなしこんでいた夫婦はあいだを措おいて向き直った。見れば一族近親の老幼たちであつた。ともあれ殿様へ御挨拶をとというので、各、多少衣服を改めてこれへ拜しに来ているのだった。

「おう。誰も達者よな。誰も無事でおつたの。よかつたよかつた」秀吉はそれらの者一同へ、いちいちことばをかけて、息災を祝した。やがて、一浴の後、べつな室に夜食のしたくが調とうと、それらのうちの主なる者も加えて、賑やかな内輪の晩飯をたべた。

一家の者は、この主あるじを中心として、心ゆくまで団だん欒らんの夕を過した。あすは早朝この山奥を引払つて、ふたたび敵手とから奪り返した長浜城へ帰る——というので、老いたるはいうまでもなく、女子供も嬉き々きとして寝つかれないほどだった。

「あすは早いぞ。早起きだぞよ」

子をたしなめつつ、親たちは寺域の中のお小屋へもどつた。大吉寺の御堂も早目に燭を消していた。老母は、聖観音の前に臥し、秀吉夫婦は、聖観音の御背にある内陣裡ないじんうちの一房にやすんだ。梓あずさがわ

川の溪谷の音と、ほととぎすの音が、夜もすがら聞えていた。短夜もまだ明けぬうちから身支度や馬の用意に大吉寺は騒さわめいていた。長浜落ちのとき何もかも捨てて来たので、帰る日にも荷物ものは少ない。

秀吉は、寺へは寺領を寄進し、村長むらおきへは、村一同への恩賞を下げ渡して出発した。列伍は長々とつづいて行く。母堂は急づくりの山やま駕かごへ乗せられ、秀吉夫婦が側へついていた。

白い霧の海に、旭あさひが映じている。梓川の溪谷に沿うて、道は狭くなつてくる。騎馬の士は馬を降りて馬を曳いた。嶮けわしさに馬も耐えないのである。

かご駕も楽ではない。秀吉は老母の辛抱を察して、

「母上。お辛うございましょう。ちとお休みなされては」

と駕の外で、しばらく休息させてから、自分の背を向けた。

「こんな難路、あと半里か一里の間です。こんどは、わたくしが背負うてさしあげましょう」

老母はためらわなかった。老いては子に従え——ということばのまま、すぐ両手をさしのべて、秀吉の肩にすがった。

「あ。わたくしに」

寧子も求め、小姓たちもあわてて来たが、秀吉は、頭を振り振り母を負つて立つた。

「十年の不孝の罪を一日で償つぐなうのじや。秀吉にさせろ、秀吉にさせろ」

秀吉は坂道を降り出した。——あなたの子はまだこんなに元気ですぞ——と母へ見せるように歩いた。が秀吉は母のからだの余りな軽さに、ひとり母の年齢をかぞえていた。

途中まで来ると、長浜から幕ばくりよう僚りょうの一名が、きのうからの戦況報告に来るのと出会った。長浜でも秀吉がこう早く帰つて来るとは思つていなかったとみえる。

報告には、別条もなかった。

「さきに御当家から諸家へ向つて、明智征伐の事終ると——疾とく御通牒ごつうちようのあつたためか、徳川殿の軍は、昨日、鳴海なるみから浜松へ引つ返されたとのことです。一方、近江境まで来ていた柴田軍も、これまた、大事すでに去ると、茫然ぼうぜん、進軍を見合わせておる様子です」

秀吉は黙笑のうちにつぶやいた。

「徳川どのも、この度はすこし慌あわて気味ぎみだったとみえる。間接ではあるが、この秀吉のために、光秀を牽制けんせいしてその兵力を分散せしめる役をしてくれたような結果になった。いま、むなしく引つ返してゆく三河武士どもの無念顔が見ゆるようだ」

かくて、彼は、母を長浜へ安んじ終ると、翌二十五日、また直

ちに、美濃へ進発していた。

一時、美濃も動揺しかけたが、彼が征くや、即日そこも平定を見た。彼は、故信長もいた旧山河、稲葉山の城を信孝に献じて、まず旧主家への誠忠を示し、つづいて、同月二十七日に開かれる予定となつた清洲会議の当日を悠々、一睡のあとに待っていた。

柴田勝家しばたかついえ

彼はことし五十三歳の武将としては千軍万馬の往来を積み、人間としても、世路の紆余曲折をなめ尽して来ている。加うるに門地閱歴えつれき、並びにその麾下きかに持つところの実力といい、頑健な

体格といい、この者こそは、時雲に選ばれた随一の男だと観るに誰も不審とはいふまい。彼自身ももとより深くそう任じている。——この六月四日、越中魚崎の陣にあつて、本能寺の変を知つたとき、とたんに感じたこともそれであつた。

(わしの動きは重大だ、ここぞ、万全を期さねばならぬ)——と。為に、彼の行動は手間どつた。その自重からである。——しかしまた、心は疾風のごとく、現地の京都へ急いでもいた。

彼とは、織田随一の出頭人、北陸の探題、柴田修理亮勝家のことである。彼はいまや、畢生の智と力と、そして、のるかそるかの一擲を賭けて——越中魚崎での対上杉軍との戦場を捨て——急遽、上洛の途中にあつた。

急遽とはいえ、越中を離れるにも数日を要し、居城の越前北ノ庄しやうでも幾日かを費やした。——が彼としては、決してこれを遅いとはしていない。ただ勝家ほどな者が、この大事に、ひとたび動くとなると、いわゆる不敗の万全を期すために、当然な自重が当然な時間を必要とし、その速度から時が差引かれていたに過ぎない。

越中で対陣中の上杉景勝かげかつの兵にたいしては、麾下きかの佐々成政と前田利家の二軍をのこし、北ノ庄にも部下を留め、勝家としては実に、超速度の転進とは見えたが、その主隊が、越前と近江の境、柳ヶ瀬やなせを越ゆる頃、日はすでに十五日となっていた。そして主将勝家に遅れて、北ノ庄や越中方面からなお追いついて来る後

続部隊と合し、全軍が峠とうげで馬をやすめていたのは、もう行くてに望まれ出した江北一帯に夏雲高い、翌十六日の午頃ひるであつた。

十六日といえは、彼が信長の死を知つた四日の日から数えると、十二日間を費やして来たことになる。何ぞ知らん、中国で毛利と対していた秀吉は、京都の飛報を入手した点では、勝家より一日程早かつたにちがいないが、四日には毛利と和議の誓紙を交わし、五日そこを発し、七日姫路着、九日には尼ヶ崎きんぎへ向い、そして十三日には山崎の一戦に光秀を討ち、今頃はもう洛中近畿きんぎにわたる残兵の掃討そうとうから、戦後の布令まで揭示し終つていた時分であつたのだ。

越中から京都への道と、備中高松からの道とでは、多少道路の

嶮^{けん}や距離の差に長短はあるにしても、秀吉が対していた局面と、勝家が向っていた戦局とでは、比較にならない難易があつた。勝家の立場のほうはずつと有利であつたことはいうまでもない。全面的転進を計るにも、戦場から離脱するにも、秀吉の場合よりは遙かに変じやすい事情にあつたものを——なぜこう手間どつて来たろうか。——要するに勝家の“自重万全”の觀念が、この貴重なる“時”を代価としてあたら費^{つひ}やされて来たものというしかない。

かたがた、余りに彼が百戦の老巧だけに、その自信と体験が、いよいよ思慮分別の殻を厚くし、今次の如き天下一変の大転機に當つては、却つてそれが疾風の行動の邪^{さまた}げとなつても、常套^{じょうとう}て

的きな作戦変更という形式からついに一步も飛躍し切れなかつたことの一因といえよう。

「やすめ。馬に水飼え」

「そのあいだに、全員は腰兵糧を解け。ただし、村口の哨しょう戒かいに当っている隊は、交代で休息するように」

「また南条からこれまでのあいだに、途中から御陣列に加わつた後あと入りの組は、さつそく到着を認しためて、その人員名簿を、こここの出立までに、本隊の祐筆ゆうひつまで差出しておくように」

柳ヶ瀬山中の一村は、いま人馬で埋められていた。

ここから西すれば京都方面へ。東すれば余吾よごの湖うみを経て、江州長浜街道へつづく。

全軍が駐とどまると、勝家の主隊から命をうけ立ち別れた部将たちが、声を張つて、前後の部隊にそれぞれ令を伝えていた。

次から次、次から次へ、令は令を伝えて忽ち全軍に届いたように思われたが、なお未だ北の方の登りを、蟻のごとく陸りくぞく続と、これへ向つて行軍中の後続隊もあるらしく、前隊との聯れんらく絡をとるための法螺貝ほらがいが遠く夏山のはるか下の方に聞えているので、こでもたえず法螺貝をもつてそれに答えていた。

この辺一帯の山地を総称して柳ヶ瀬といっているが、くわしくいえば近江伊香郡片岡村。そして今、大将柴田勝家が馬をとどめた所は、椿つばきざか坂さかのほとりで、小さい神社の境内だった。

勝家は非常な暑がりやであるらしい。わけてきよ山の山道と炎

暑はこたえたものようである。木蔭に床しょうぎ几しつらを設えさせると、そこらの木から木へ幕を掲げさせ、その中で行儀悪く具足の緒おを解いていた。そして養子の権六勝敏かつとしへ背を向けて、

「権六、拭いておくりやれ」

と、鎧よろいをゆるめて、頸くびから背なかへ手を入れさせて、汗をふかせた。

二人の小姓は、大扇を持って、勝家の腋わきの下を、左右から煽あおぎぬくのだった。汗が乾きかけると、勝家は身を痒かゆがって、

「権六、もつときつくこすれ、きつく」

と、もどかしがった。

養子の権六は、まだ十六歳である。養父のそばにあつて、行軍

中も親孝行の体ていがいじらしく見えた。

勝家の皮膚には、汗腫あせもに似たものがいっぱいできていた。勝家にかぎらず、皮革と金属で包まれた夏の軍士の皮膚には、具足病とでもいうべき皮膚病が非常に多いのであるが、勝家はそれが殊にひどかった。

こう夏弱くなつたのは、天正七年からここ三年越し、ほとんど身を北国の任地において、北陸経営の任にあたり、居住も多く北ノ庄の城廓で過していたため——と彼はよく自語しているが、実は老いていよいよ強壯な、胆汁たんじゆうしつ質ともいえるような体質からのものであることは否いなまれそうもない。今権六がいわれるまま強くこすっている所を見ても、すぐ毛穴から脂肪しぼうのような赤い血が

ふき出る程であつた。

「大殿。ただ今、神官や村長むらおさどもが、御門出おんかどでの祝いと、こ

の山の溪流で漁とれた串くしぎ魚かなやら餅など捧げ持つて見えましたか」

幕の裾から武者のひとりのが告げると、勝家はあわてて、もうよ

いと権六の手を退のけ、具足を纏まとい直していたが、傍らの佐久間玄

蕃んば允盛政のしようもりまさをかえりみて、

「お汝こと、村人どもの挨拶をうけてこい」

と、いいつけた。

玄蕃げんばが立ちかけると、玄蕃と並んでいた毛受勝助めんじゆしよすけいえてる家照が、

その足もとを遮さえぎるように、

「いや、大殿」

と手をつかえて、勝家の大きな体を仰いだ。そして、

「村人どもの素朴な志、寸時なりと、大殿御自身、会えしやく釈をお与え遊ばしては戴けますまいか」

と、わが事のように願った。

「玄蕃、立たんでもよい」

勝家は、毛受勝助の乞いを容れて、自身、そこで神官村人を引見して、祝いをうけた。

またすぐその後で、幕僚たちと共に、献物の串魚なども披ひらいて兵糧をつかい始めたが、毛受勝助には、口もきかず、眼まなざしも向けなかった。

勝助の諫かんげん言は、もつともなことだった。勝家も、それが領うなずけ

ないほどの愚将ではない。しかし、二十五歳の若い一部将からそんな注意をうけたということが、鯉の胆きもでも噛みつぶしたように、勝家の内省の中にいつまでも苦いものが消しきれないでいるらしいのである。

ここにはなお、勝助の弟、勝兵衛もいた。兄が二十五、弟が二十一。勝家としては、柴田家にとっては功劳のある毛受茂左衛門の息子たちなので、左右において重用もし目にもかけていたが、弟の勝兵衛の方はともかく、兄の勝助家照の方はどうも余り好きでなかった。——というのは、時々、今のような直言をするからである。

鬼柴田とか、瓶かめわり破柴田とか、彼自身の上に、若い頃からの剛

勇の誉れが高かったせいか、その剛胆無双をもつてみずからもゆるす風が常々の起居にもあつて、ともかく勝家の日常には、粗暴というか、倨傲きよごうというか、不行儀をもつてむしろ矜ほこるようなところがあつた。慎みという念が乏しく、僻地へきちの陣中でも食いたいと思うときは「食いたい」といい、飲みたいときには「飲みたい」といい、痒かゆいときには「痒いから搔かけ」と、誰にでもその皮膚病をこすらせる如くである。

（大殿はまことに飾り気がなくてよい。今日のような御大身になられても、御若年の当時とお変りなく、われらを窮屈きうくつがらせぬようにお扱い下さる）

そう解して、主人の一面を、ひどく磊落らいらくな、またその人物の

大きな所以ゆえんであるとして、称ほめちぎる家臣もあるが、毛受勝助などは、それを阿諛あゆの言として、強しいても反対な苦言を呈している方だった。

越中の境に長陣の折、そのときも何か勝助として感じていたことがあつたのであろうが、勝家から徒然つれづれに読む書があつたら差し出せといわれたのを機しおに、三略の一部の紙中を折つて、すぐ目につくようにして出した。

後で勝家が繰くりひろ展ひろげて見るとそこの一章にこういう文があつた。
 軍井未グンゼイイマダ達タチセズ、将渴カツヲ日イハズ。軍幕未ベダ弁ベンゼズ、将倦ウム
 ヲ日ハズ、軍竈未サウダ炊カシガズ、将飢イエヲ日ハズ、冬、裘キウヲ暖ヌクニ
 セズ、夏、扇センヲ採トラズ、雨ニ蓋ガイヲ張テラズ。是ヲ、将ノ礼トイ

フ。

この時も勝家は、二、三日不機嫌な色をなしていた。しかし部下統率上のこれくらいな常識は充分わかりぬいている大将なので、為に、勝助を退けるなどという暗愚なまねは決してしない。ただ自分の持っている胆汁質な欲望と粗野な本質にたいし、彼自身としては、せつかく北陸探題の総大将たる威厳とにらみあわせて、極めて不調和なく、その矜きょうじ持を保っているつもりなのへ、他の意志をもつて水を割られると、甚だその節度が持ち難くなるらしかった。従つて、一時は慎みもするが、すぐ以前の鬼柴田、乃至ないし瓶かめわり破柴田に立返つてしまうのであつた。

きょうの不興にも、きょうの事ばかりでなく、三略の文句がま

た彼の頭に追加されていたかもしれない。何しろ、食事の席はあまり賑わなかつた。ところへ折も折、秀吉からの早打がこれへ来合わせて、さすがの瓶破柴田の胆きもをも潰つぶすような報告を彼もたらに齎もたらした。

使者は二人であつた。ひとりかんべのぶたは秀吉の家臣、ひとりかは神戶信孝の臣。

各、主人の一書を持ち、二通を併あわせて、同時に勝家の前に呈した。

二通とも、大津三井寺に在陣中の秀吉、信孝の手で認したためられてあり、日附も同じ十四日とあつた。

(——この日、逆将明智光秀の首級を検し、亡君信長公の弔とむらい合

戦、ここにおいて、首尾よく遂げ果し終^{おわ}んぬ)

と、秀吉の方には山崎以来の戦況が概略認めてある。そしてなお、

(——この由、在北国の織田遺臣一統へ、さそくに御披露ありたく、尊台まであらましを急達しておく、事あらためていうまでもなく、今次の変は、御同様悲歎にたえぬことながら、故主御さいごの日より十一日を出でぬうちに、逆将の首級をあげ、賊徒一兵もあまさず掃滅し得たことは、身の功を誇るにははなけれど、いささか泉下^{せんか}の尊霊をお慰め参らせたものと信ずる。この儀、貴公におかれても、まず不慮中の歡びとして、同慶給わるものと思う) というような文章であつた。

秀吉が書中でいっているとおりに、大いに歓ぶべきことにちがひなかつたが、勝家にはどうしても、歓びとすることができなかつた。

むしろ、反対なものが、まだ文面から眼を離さないうちに、彼の満面にみなぎっていた。しかし返書にはもちろん祝着この上もなしと書いた。そして自軍もこの柳ヶ瀬まで駈けつけて来たことを特に強調しておいた。

使者を帰すと、彼は、その使者の口から聞いた情報や書翰によつて知つた程度では、到底、次の行動にかかり得ないもののように、水野助三、鷺見源次郎、近藤無一などという健脚な若者をすぐつて、大津方面から京都あたりまで、実状の探索に放つた。そ

して、爾後の全貌が明確にわかるまでは、ここの椿坂に宿営する
ほかはないと肚をきめたものようである。

「まさか？ ……しかし、虚説であろうはずもなし？」

この日、勝家は、さきに信長の悲報をうけた時以上の驚きを喫
したような容子ようすだった。『すでに光秀の首級をあげたり』という
厳たる報告に接してもなお頭のどこかで「まさか？」と疑惑する
常識を一掃しきれなかった。——もし自分よりも先に光秀の軍へ
向つて弔とむらい合戦の先陣をつける者があつても、それは神戸信孝か
丹羽長秀か乃至、堺に滞在中と聞いていた徳川家康などを加えた
近畿合体の織田遺臣軍であろうと見越している程度だった。そし
てそのいずれに形勢がうごいても、勝敗は到底一朝一夕のもので

なく、織田家において、自分以上の上席にある者のない自分がそこに臨めば、当然、明智討伐の総大将として、われを仰ぎ迎えずにもいられまいと充分思いこんで来たものであつた。

そういう予見のあいだに、秀吉という者の存在が皆無ではなかつた。秀吉が見たとおりつまらない男だなどとは決して思つていない勝家でもあつた。むしろかなり秀吉の底を知っている者といつてよい。秀吉の一将校時代からずいぶん意地悪くその擡頭たいとうを邪魔したこともあるからである。踏んでも踏んでもひし拉げない御小人の藤吉郎頃から、近年にいたつては、重臣の自分らと肩をならべ出して来た彼の器量にたいし、白眼はくがん、常にゆるがせには視てみいなかつたのだ。——しかし、それにしても、どうして彼が、毛

利軍を措おいて、中国から一転できたか、そんな早業はやわざができたか、勝家の常識では、ほとんど、奇蹟を聞くような気がしたのである。

宿営地の椿坂は翌日へかけて、本格的に警備が強化された。

往来は遮断しやだんされ、京方面から来る旅人たちは、哨兵しやうへいに留められて、悉く一応の訊問をうけた。

蒐あつめ得た情報は、すぐ本陣の幕舎へ、部将から伝えに行つた。

それらの巷ちまたの説を綜合してみても、明智軍の全滅は疑う余地もなく、坂本城も陥ちたこと確實である。なお昨日今日あたりは、安土方面に炎々と黒煙くろけむりが望まれる——といっている旅人もあり、羽柴筑前守殿は、一部の兵をひきいて、はや長浜へ向われたと機微きびを告げる者もあつた。

一夜明けても、勝家の心は、依然として穏やかでない。「われは何をなすべきか」の問題が容易に決定しないからである。辱はじや体面を考えると、限りなく不愉快になった。北陸の軍馬をすぐつてここまで臨みながら、拱きょうしゆ手して、秀吉の大活躍を眺めていゝるときは、真に、彼の耐えうることはない。

それにしても、「この勝家は何をなすべきや？」がすぐ頭ののぼつてくるのだつた。織田家の大老たり、首脳部の首席にある者の当然な任は何よりも明智討伐にあつたのだが、そのことがすでに秀吉の手で終つた今日では、何が最大な急務か、また、秀吉の上うわ手に臨みうる策か。——苦慮はそこなのである。

いつの間にか、彼の頭は全面的に、秀吉なる対象に占められて

いた。——しかも対敵感情に近い憎悪をもつてそれが強く思考を左右してくる。古参の股肱ここうを寄せて、昨夜深更しんげいまで凝議ぎぎしていたのもそれだった。その結果、きようはこの帷幕いばくから急使きゅうし或いは密使として立つ者が八方へ急いでいた。国元の北ノ庄へも、越中魚崎の味方へも。

また遠くは、上州三国の嶮けんをこえて、越後春日山へ討ち入り、上杉勢の本拠をつくべく、すでに呼応の聯絡れんらくをとつていた滝川かづます一益きか麾下の軍隊へも。同時に滝川一益個人へ宛てても、べつに懇ねんごろな私書を送った。

特に神戸信孝にたいしては、きのう帰った使者に特に持たせてやった返書に追いかけて、さらにあらためてまた一書したたを認めた。

使いの人物にも老臣の宿屋やどや七左衛門をえらび、ほかに心の利く家臣二名を添えて立たせ、何か重大な内意を含ませてやったようである。

以上のほか、祐筆二人が、勝家のことばをうけて、半日書き通していた書状は二十余通の多きにのぼった。要旨は、七月一日を期し、清洲きよすに会同、主家の継嗣けいしのこと、明智の旧領処分の問題など、当面の重大懸案を議せん——というのであった。

勝家は、この会議の発唱者として、いささか宿老の体面をとりもどそうとした。また、自分を措おいて、この重大懸案は一步も解決に入り得ないことをも、充分承知していた。それを「鍵」として、彼は当初の方角を一転、尾張の清洲へと向った。

途上、聞くところによれば、また追々に帰って来た水野助三や
 近藤無一などの報告に徴しても、彼の廻かいじょう状じょうが届く前に、織田
 遺臣のあらかたは、期せずしてみな清洲へ向っていることがわか
 った。そこには、信長の嫡ちやくし子し信忠の遺子三法師丸ぼうしまるがいる関係上、
 自然、安土以後の織田家の中心がそこに移されたかのような観を
 なしていたためであるが、勝家には、そのこともまた、何か逸早
 く、秀吉が僭せんえつ越えつな音頭おんどを取って事態をうごかしているように邪じ
やすい推おしされた。

おりづる
 折鶴

清洲城はここ毎日、登城の列、下城の人馬で、凡^{ただ}ならぬ光景を見せていた。

かつては信長が起業の地であつたここが、きようは織田家の跡始末を議する会議地と目されている。

が表面、ここに集まつた遺臣たちは、

(三法師君の御機嫌を奉^{ほうし}伺するため)

と称して、お互いが、柴田勝家の飛状に接しているともいわないし、また秀吉の意によつて来たということも表示していない。

しかし暗黙^{あんもくり}裡に、やがて近く城中に大評議がひらかれるという予定は、誰にもわかつていた。議題の内容も周知であつた。ただ日取や時刻などの公的な通状がまだ達しられていないにすぎない

い。——で、三法師君への伺候しごうをすませても、諸侯中、帰国する者としてない。各、多くの軍兵を擁ようし、城下の宿所に待機していた。真夏の暑氣に加えて、狭い城下町に、何倍もの人口が一時に入ったので、その混雑や喧騒けんそうはひととおりでない。厩うまやの馬が町中へあばれ出したとか、御小人同士の喧嘩沙汰やら、頻々ひんぴんたる小ほ火騒やさわぎやら、無聊ぶりようを感じるひまもない。

月の末近くには、神戸かんべ信孝、北畠信雄の一門もそろい、以下、柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽にわ長秀、細川ふじたか藤孝、池田信輝、筒井順慶、蒲生がもう氏郷うじさと、蜂屋はちや頼隆よりたかなど、あらかた到着していた。

ひとり滝川一益が、まだ見えていない。それについて、

「信長公御在世中は、一にも滝川二にも滝川と、御重用をうけて、

関東管領の重職をもさずけられておりながら、今次の凶変に、こ
う馳せつけに遅るるとは何事だ。さてもぶざまな漢おとこよな」

と、巷ちまたの悪評は、かなり露骨であつた。

「自体、あの仁じんは、経略家肌で、忠義一徹ではない。このたびも
そのために、すぐ足が立てなかつたものである」

などと評して憚はばからぬ者もある。

町中の酒亭しゅていなどでも殊さら聞えよがしに、談じている仲間も
あつた。

「一益殿の取柄とりえといえは、新しい武器に精を入れてよく用いるぐ
らいなところじやろ。だから射術には明るく、滝川勢といえは、
鉄砲撃ちはみな巧者じや。その点を、信長公にも買われていたの

じやろうが、なんの戦争はからツ下手だ。若いうちは常に先鋒隊に置かれ、相当、勇名を鳴らしたが、それも当時の織田軍全体に破竹の勢いがあつたからで、何も彼が秀ひいでていたわけじやない」

「そうかもしれぬ。こんどのような場合に、立ち際たぎわの悪いところを見ると」

「立ち際のみか、頭も悪い。上州 厩橋うまやばしという遠方ゆえ、手間どつたのは仕方もないが、途中、北条勢と勝目のない戦いなどして、神流川かんながわではさんざんに敗北し、やつとのことので、居城の伊勢長嶋へもどつて来たなどは、気のどくといおうか、近頃の笑いぐさといつてよい」

公然な非難である。そのついでに、明智討伐に出遅れた柴田勝

家にたいする非難もちらちら沙汰されていた。当然、これが滞在中の諸家の耳にはいらぬはずはない。羽柴家の家士もすぐこれを秀吉の耳にいった。すると秀吉は顔をくずして領うなずいた。

「そうか。……もうそろそろやり出しておるか。柴田をも難じておるので、柴田から出た流説るせつとは誰も思うまいが、それは皆、勝家がさせておる反間はんかん苦肉くにくと観みてまちがいあるまい。大評議前の謀略戦じゃよ。小細工はやらせておけ。いずれ滝川は柴田に抱き込まれる者、それでよいのだ」

信長亡きあとの、織田王国の縮図が、ここ数日の清洲に見られていた。

やがての大評議を前にして、その帰結を、各の将来に予想し、

おたがいの肚はらをさぐりあつていふ形だつた。そしてその間に、当然な黙契もつけいやら、反目やら、また流説を用い、誘惑を講じ、抱きこみ、切崩しなど、あらゆる謀略が行われつつあることも蔽おおうべくもない。

殊に、柴田勝家と神戸信孝との往来は、目につくものがあつた。一方は、宿老の上席、一方は故信長の三男。こう二者の公事を超えた親密ぶりは、時人の目につかざるを得ない。

「修理どの（勝家）には、御二男の信雄様を措いても、信孝様を、次のお世嗣よつぎに立てんの下したごころ、心と思わるる。はて、一ひとはらん波瀾はまぬがれまいぞ」

誰も、直感した。

けれど、その信孝擁立ようりつの競争者は、誰もが、信雄であると信じていた。

信長の跡目は当然、信長に殉じゆんじて、二条城で戦死した嫡男信忠の次弟たる信雄か信孝にゆくであろうという見解には、何なんびと人も疑う余地のないこととしていたが、その二人のうちの、いずれが立つか、また、支持すべきかは、各迷うところであつた。

信雄、信孝。——共に永禄元年正月生れの今年二十五歳だつた。同年にして兄弟というのもおかしなわけだが、この時代の上流家庭にはままあるというよりは普通のこととされていた母系のちがう兄弟なのである。その上、信雄が兄、信孝が弟となっているものの、本当の生誕月日からいうと、弟の信孝の方が、二十日も先

に生れていた。故に当然、彼が兄であつていいはずなのに、信孝の母の生駒氏が賤しい家系の女子であつたせい、出産の届け出を怠つていたため、信長の第三子と定められ、遅く生れた信雄の方が、第二子にすえられて来たものであつた。

従つて、この兄弟は、兄弟とはいへ、骨肉の真情はうすかつた。信雄は陰性であり、消極的な性情だったが、信孝に対してのみは、常に反撥はんぱつを起すような感情をもつていた。従つて、殊さらにも、この弟を下風に見て、兄たるの上座をかりそめにも冒おかさせなかつた。

信長の後継者として、公平にこの二者をくらべてみるときは、誰の目にも、第三子の信孝のほうに多くの資質が認められた。戦

陣に出しても、彼は、信雄よりもはるかに大将らしくもあるし、平常の言動にも覇氣はきを示し、何よりはまた、信雄のようにひっこみ思案でない。

故に、父信長、長兄信忠の死に会したこんどの場合でも、山崎へ出て来て秀吉の陣に君臨して以来、とみにその覇氣をあらわし、はやくも織田の相続者を以てみずから任じているふうが歴々と最近の言動にもあらわれて来ている。その包蔵をしめす顕著な一証としては、山崎の合戦後は、事ごとに、秀吉をいみ嫌い始めているのでもおよその想像はつく。

明智勢の襲撃にあわてて、自軍の手で安土の大城へ火をかけた信雄にたいしては、

「賞罰をあきらかにするなれば、彼にも責任を問わねばならぬ」と、いったり、また、

「信雄は、ばか者だ」

と放言したこともあるという。ところが、そういう陰での言葉も、誰が伝えるともなく、いつか信雄の耳にも入るような空気が今の清洲には濃厚だった。目に見えない謀略の網目が、人間の非凡を嗅ぎわけている状態といつてよい。

はじめ会議の開催は、月の内の二十七日と予想されていたが、滝川一益などの来着が遅れ、その後また、一日延びて、ようやく、七月一日の夕べ、在清洲の総大名衆へ、触^{ふれ}状^{じょう}がまわった。

——明日、辰^{タツ}之下刻、総登城候へ、御城ニ於テ、各申シ談

ジ、天下人ヲ相定ムベク候也

というのである。

大評定 触ふれがしら頭は、いうまでもなく柴田修理勝家。

一益が到着後も、なお何という理由もなく、一、二日のびていたことや、諸般のさしずなども、すべて彼の一存によるものらしく思われた。もとよりそれに対する不平の声などはあり得ない。なぜなれば、彼が、神戸三七信孝を立て、すでにその信孝と事前けったくに結託していることは、隠密の沙汰ではなく、公然、知れわたっていたからである。

信孝は柴田を威とし、柴田は信孝をかさとして、圧倒的に會議を押しきろうとする氣勢が表面化され出した。しかも大多数はそ

れに傾いているかのような形勢の下に大評定はひらかれた。

当日の清洲城は、数ある間ごと間ごとが、思いきつてみな開け放たれていた。この日も、照りつづいて、暑さと人いきれに堪えないためもあつたらうが、見方によつては、物蔭での個人的な談合はゆるさぬと、暗に制^{せいぎよ}御しているようにも取れる。武者溜り^{だま}の詰人を始め、要所の杉戸杉戸にいる控人も、悉く柴田の家来と^{ことごと}いつてよいほど多くの外臣が入っていることもただの手助^{てつだ}いとは見えなかつた。

辰^{たつ}の下刻には、すべてそろい、巳^みの刻^{こく}には、総大名衆すべて、大広間に着席していた。

席順から見ると、

柴田、羽柴、丹羽にわ、滝川、と左右両座にわかれて向いあい、以下、池田勝入しやうにゆう、細川藤孝、筒井順慶、蒲生氏郷がもうじさと、蜂屋頼隆など居流れていた。もちろん、正面の上座は、一門の神戸三七信孝と、北畠信雄の二人が、席をわかつていたが、なお一方の上うわぶ襖すまへ寄つて、もうひとりの幼い君が、傳もり人の長谷川丹波守に抱かれていた。

これが三法師君さんぼうしぎみである。

うしろには、この遺孤いこの父信忠が二条城で戦死した折、信忠の遺命をうけて、敵中からこれへ遁れ落ちのがて来たという——遺臣前田玄以げんいがつつましげに控えていた。ひとり生きてこれに在ることようすは面目ないというような彼の容子を衆目は見ていた。

三法師は、何といつても、まだ三ツなので、傳人もりの長谷川丹波守が膝へのせて正面へ向けていても、決してじつとしていかなかった。手をのばして、傳人の頤あごを押しやったり、膝の上に立ったりしてしまふ。

当惑顔な丹波守を扶たすけて、玄以がうしろから何か小声であやしている、肩越しに、その玄以の耳をひっぱった。玄以も弱つて、意にまかせていると、さらに、うしろに身をかがめていた乳人めのとが、そつと三法師の手へ色紙で折った折鶴を持たせて、玄以の耳を救った。

「……………」

列座の諸將の眸はみなこのあどけない遺孤いこに注がれていた。微

笑をふくむもあり、暗涙をたたえるもあつた。ひとり勝家は大広間いっばいに眼を放つて、「困つたもの」とつぶやきたいようなじゆうめん渋面をつくつていた。

きようの清洲会議のきもいりにん胆煎人として、また議長として、いちばんいぎげんぜん威儀儼然として、先ほどからへきとう劈頭第一の口をきろうとしているのに、人々のひとみがいたず徒らに散っているため、その唇が、発言の機を逸して、むなしくあることがたま堪らない不快となっているらしかつた。

勝家はずいに口をきり出した。

「筑州殿」

秀吉をさしてである。

秀吉は、向う側の席から正視を向けた。勝家は強しいてその顔を笑い作りながら、

「どうであろう」

と、至極、談合的にはなしかけた。

「——何といつても、まだあの通りたあいがない御幼少じゃ。傳も人の膝に置かせて、お苦しい目におあわせ致さんでも、よくはあるまいかの」

「さようにも」

秀吉の答えは、どつちともつかないものだった。——折れて出ればそう出るかと、すぐ対立感をとがり立てたものだろう。勝家の全身にはすぐ威厳を交まぜた反感が硬直し出した。劈へきとう頭早くも

甚だおもしろからぬ顔つきが露骨だった。

「……が喃のう、筑州殿。三法師君の御出座を求めたのは御辺ごへんとはちがうか。——修理は、いっこうに知らんが」

「されば、筑前がおすすめ参らせたには違いありません。ぜひにと」

「ぜひにと」

勝家は大紋の衣服の皺しわを大きく揺りうごかした。午ひるまえなので

まだ暑気もさしてではないが、彼には式服の厚着と例の皮膚の腫できもの

物とが人知れぬ苦痛らしかった。こういうことは些細かかわに似ているが、時によると重大な意志表示にもふと語気の上へ大きな関かかわりをもたないとは限らない。殊に、柳ヶ瀬を越えてから後は、彼が

秀吉を見る気もちは、まったく一変していた。従来とて彼を後輩視して来た先入観が根本をなしているので、決して折合いのよい間がらではなかつたが、山崎の合戦を境として、逐日、織田遺業の勢力圏けんに、秀吉なる名が、何とはなく、澎湃ほうはいたる威勢をもつて聞え出して来たことは、勝家として、到底、晏如あんじよとしているに忍びない現象であるのだ。

そればかりか、秀吉が先君の弔合戦とむらいを果したというそのことの反動として、

(北ノ庄殿(勝家をいう)には、時遅れて、山崎にも参り合わず、さだめし手持ちぶさたなお心地であろうに) などという不面目も酬むくわれている。近頃、何かにつけて、双者を対比する風潮が一般

に表面化して来たことは何を意味するか。勝家にすればこれも苦にがにがが 々しい沙汰といわねばならぬ。筑前と自身とを、対等に視みられることさえ、不愉快この上もないのである。いわんやその者のたまたまあげた一いち殊しゆ勲くんによつて、数十年来の織田家における元老的地位を閑かん却ぎやくされて堪るかと思う。むかし清洲のお濠ほり浚げらいや馬糞掃除をしていた御小人あがりの匹夫ひつぷが、今日、衣冠いかんして得々たるかの如き前に、何で柴田修理勝家ともあろう者が下風に置かれていようぞ——そう思うのであった。この日、彼の胸中は張りつめた強弓のように、そういう感情やら万策の懸かけ引ひきに緊しめられていたのである。

「きよようの評ひょう定じょうを、筑州殿には、何とお考えかしらぬが、お

よそ列座の諸侯も、このような大事を議す場所に臨むは、織田家あつて初めてののことと、みな臍ほぞを固めておられよう。……何じや、三歳の幼君を、強しいて、ぜひとまでこれに仰いで」

勝家はすけすけ云い出した。彼の言動は、ひとり秀吉にばかりでなく、辺りの諸大名へ共感を求めているという風だった。そして秀吉からいつこう冴さえた返答も聞かれないと見ると、なお同様な語気をかさねて、

「追々、時刻もない。評議にかかる前に、御退座を願つてはどうじやな。それとも、何か御辺ごへんの都合でもあるのか。筑州殿」

至極、風采のあがらない秀吉は、式服となつても、大紋の着ばえもせず、列座の中ではどう見てもやはり野生のものでしかない。

位置としてはすでに信長の在世中に、屈指の重職を与えられ、
実力としては、中国征攻中も、山崎のいっしょう一捷でも、充分示され
てはいるが、実際に、会つてみると、

(この人が)

と、むしろ聞いていた名声や想像を裏切られるくらいなもので、
深くその人間にふれてゆけばともかく、ただの眼で、いわゆる一
見した程度では、この者と不測の時代を共に進み、生涯の大事を
一緒にするなどということは、考えものだという気を起すほうが、
むしろ常識として無理もないといつてよい。

一見、直ちに、さすがはと、その人らしく見られる者では、滝
川一益など風采奕えきえき々たるほうで、一流の武将とうけとるに誰も

吝かやぶさとしないであろう。丹羽五郎左衛門長秀にはどこか枯淡こたんがあつて禿はげあがつている鬢びんづらなど、戦陣振りも頼もしげに思われる。蒲生氏郷がもつは座中第一の若年ではあるが家柄のゆかしき天性の気稟きひん、どこか薰くん々たるものがある。重厚なる風格において、身なりは秀吉より小さいくらいなものだが、瞳どう光射るが如き池田勝入あり、また清雅せい温順おんじゆんに見えて、腹中何をつつむか分らないような大人の風格の持主に細川藤孝がある。

秀吉の風采はが栄はえないといつても、或いは、こういう人々の中だけに、よけい見劣るのかもしれない。何といつても、その日の清洲会議に列した程の者は、時代の一流級ぞろいである。ここには加わっていないが、北越の陣に残っている前田利家と佐々さつ成さ

なりまさ

政と。そして別格ではあるが、徳川家康とを加えしめれば、まず日本の中心的人物は網羅もうらされているといつてもさしつかえはなからう。その中においての秀吉である。人品となつては、どうもまだ仕方のないものがどこかにある。

それを自分でも感じるが、ここでは秀吉もひどく慎しく、謙けんき虚よを旨としているふうであつた。山崎で捷かつや、戦後、諸軍の礼をうけつつ駕籠の上から、

(瀬兵衛、御苦労)

といつて、彼奴きやつ、もう天下人に成りおわせたような気でおるか——と同輩の将を口惜しがらせたような不遜の態度は、今日はどうにも見あたらなない。さつきから非常な真面目さであるのみだつ

た。勝家の口数にたいしても畏るるかのようおそに寡黙かもくであつた。――が、勝家の執拗しつような言に、今はせひなくというような容子で、「いや宿老のおことばは、ごもつともです。三法師君の御出座を仰いだには、理由がないではありませんせぬが、なるほど、まだお無邪気なお年、長評議に、ああしておられては、御窮屈きよくにちがいない。かたがた、今日の触頭ふれがしらたる宿老の御意ぎよとあれば、ひとまず、御退座をねがうことにいたしましたよう」

と、穏当な語を返して、少し膝を上座に向け直し、傳人もりの長谷川丹波守へ、

「そのようになされるように」

と、立座を促した。

丹波守は頷うなずいて、膝の三法師を、うしろの乳人めのとの手へ渡した。

三法師は、盛装した大勢の人々が居ならんでいる様が、何か無性に楽しいらしく、乳人の手をつよく拒こぼんだ。それを無理に抱いて、立とうとすると、こんどは突然、手足を振って泣き出した。そして手にしていた折鶴を列座の諸侯のまん中へ抛なげつてしまった。

諸侯はふと、眼に涙をもった。

薫香散くんこうさん

土圭とけいの間の点鐘てんしょうは、午ひるを報じていた。

それも耳に入らないように、大評議の広間は、ひそとした緊張

にみなぎっていた。

「主君信長公の不慮の御他界は、おたがい何とも痛^{つうこく}哭^くのほかはないが、すでに事定まった今日となつては、偏^{ひとえ}にお跡目^{あとめ}を正し、御遺業をうけついで、御在世の日にまさる忠勤を励ましあうこそ、臣下の道でもあり、また一尊霊をなぐさめ奉ることとも存じて：
…かくは今日」

と劈^{へきとう}頭に、議長格の柴田勝家から、主君を悼^{いた}むの辞やら、爾^じ後の報告^ごなどがあつて後、

「さて、それについて」

と、予定の議題が、これも彼の発言の下に、提出されたものだった。

即ち、その一は。

(御遺族のうち、どなた様をもつて、お世嗣よつぎとお定めするか)の問題であり、二には。

(旧明智所領の配分如何)であつた。

まず第一の重大懸案について、勝家から列座一同へ、

「御意見もあらば」

と、たず訊ね。

「ほかならぬ儀。あとでとやかくのないよう、腹藏なくお考えを述べられたい」

と再三にわたつて、諸侯の発言を求めたが、誰も、顔見あわす

のみで、押して私見を披瀝ひれきする者もない。

ないのは当然であつた。

この場合、もし軽率に、自分の思うところを主張しても、万一結果において、その反対な立場の者が、織田の相続者として擁立されることにでもなれば、当然、その発言者の前途は危険なものにならざるを得ない。

で、誰もが、けいこつ軽忽に口をひらくべきでないとして——じつと、沈黙をまもつたまま、およそ大勢の定まるのを見ようとしているふうであつた。

勝家は根気よく一同の慎しんもく黙を慎黙にまかせておいた。さもあろうと、およそはこの場の成行きを予察していたものようであ

る。そしておもむろに威儀をあらためて口を切った。

「方々に別しての御意見とてなければ、さしずめ、宿老として、この方が愚存ぐぞんを申しのべるほかおざるまいが……」

その時、上座にあつた神戸信孝の容子ようすに、ふと顔いろのうごくのが見えた。勝家の眼は、秀吉にそそがれ、秀吉は、滝川一益の姿と、信孝の容子とを、見くらべていた。

微妙なうごきが、一瞬、心から心へ眼に見えぬ波長を立てた。

清洲一城、人なきかのような、異様な緊張としじまの中にある。「この勝家が見奉るところでは、三七信孝様こそ、実げに実げにお年ばえと申し、生来の御器量、お跡目として、申し分なきお生れと存じ上げる。惑まどいなく、三七様をこそと、この方はすでに心に定

めており申す」

ずばとした発言だった。というよりも宣言といったほうに近い。

勝家はすでに、牛耳ぎゆうじを取ったものと観みたのだ。ところが、

「いや、それはいけませんまい」

すぐ反対の声が出た。云い出したのは秀吉である。

秀吉は、勝家の提議を、まっ向から反駁はんぱくした。

「何さま、お見立てとしては、宿老のお考えもよろしかろうが」

と、かろく一蹴しておいて、

「筋目から申すなれば、正しく御嫡男信忠様の跡は、三法師様こそ、御相続あるべきところではおざるまいか。国に法あり、家々にもおのずから家法はあること。下々においてすら、かような大

事は素みださぬものを、まして」

勝家の面おもては、朱へ墨をにじませたように、感情をあらわしていた。

「アア待て、筑州」

「いや」

と庄して、秀吉はいうだけを云いつづけた。

「三法師様は、まだ御幼少と、仰せられるであろう。——が、御一門以下、柴田どの始め、宿老諸将がそろうて、お守り立もていたすからには、御幼少とて、何の御不足やあろう。忠勤をもて仰ぐ御方は、何もお年ばえの如何にあるわけではありませんまい。——筑前においては、ぜひに、御筋目を正されて、三法師様をこそ、

お跡目に仰ぐべきものと信じまする」

勝家は、ぐだつとしたように、懷紙を出して、衿えりくびの汗を押し拭っていた。大きな暗礁あんしやうにのしあげたかたちである。しかも秀吉の主張は、家系の正法であり、常道であつて、反対のための反対とは聞えない。

ここでまた、非常な失望を顔にあらわしていたのは、北畠きたばたけ信雄ふおであつた。彼はあくまで信孝を対象として、表向き信孝よりは兄となつているし、生母の家系もいゝので、ひそかに自分こそ——と独り期していた気もちがあつたことはいうまでもない。それが、暗に相違したので、すぐ彼らしい卑屈ひくつが出て、居るに堪えないような容子をしていた。

三七信孝の方は、もつと覇氣はきがあるだけに、秀吉の横顔を、上座から凝視するの風を示していた。

「さあて、喃のう？」

勝家は、是ぜともいわず、非ひともいわず、こう大きく呟つぶやいて、席上の空気から何かを窺てとろうとした。

しかもまだ容易にその賛否を態度に示す者もいなかた。勝家も本音をふき、秀吉も肚を割つて、二者の二説が、真反対に立つて、はつきり対立をあらわすとなつては、いよいよそのいずれに拠よるかは大である——となすもののように、緘黙かんもく沈吟ちんぎんは、よけいに外皮の殻を厚くするばかりだつた。

「筋目とな。……なるほど。……が、無事泰平の世とはちがい、

先君の御遺業とて、まだまだ半ば、多難多端は、御在世の日にまして来ように。——さて、どうあろう」

勝家は頻しきりと、味方を誘った。彼がうめくようにこういうと、そのたびに、領うなずいてみせているのは滝川一益だった。しかし、その他の諸將の胸きよう懷かいは、依然、見てとるにむずかしい容子ばかりである。

秀吉は、再言して、

「もし信忠様の御簾ごれんちゆう中に、御懷妊の方でもあれば、御産のひもの解かるるを待つて、御男子か女子かの上までお見とどけ申しあげた上、さてと、かような会議も開かるべきに、まして歴れつき乎たる若君がおありになるのに、何で異議や御詮議ごせんぎの必要があろう。三

法師様こそ、即座にお定めあつてしかるびよう存ずる」

飽くまでも主張した。余人の顔いろなどは問うところではない。一に勝家へ向つての反駁はんぱくだった。

諸將の容子には、声にこそ出て来ないが、秀吉の説にうごかさ
れて、

(それこそ道理である)

と、内心大いにうなずいたかの如きものが見えた。

この心理の傾きは、秀吉がいう嫡孫ちやくそん承祖しょうその正論に肯定を余儀なくされたというだけのものではない。「理」の半面にもうひ

とつ「情」の裏づけがあつたによるのである。

——といえるわけは、

会議の直前、諸将は、信忠の遺孤いこ三法師のいたいけな姿を見ている。

ここに在る諸将は、例外なくみな子をもつ家の父であつた。今日あつて明日知れぬ武門の身には——三法師のいじらしい姿をながめて、誰もが、身につまされずにいられなかつたにちがいない。

その情念の上に、理念からも、堂々たる正論を掲げて、衆しゅうは判んに問うたのであるから、さしも自主かん緘もく黙もくを持じしていた諸将も、秀吉の主張にうごかさされたのは当然であつた。

それに反して、勝家の主張は、一応もつと尤もつともらしく聞えるが、根拠が弱い。方便主義であり、また、信雄の立場を完まったくなくしている。信雄とすれば、自分をさし措おいて、弟の信孝が跡目に立つよりは

まだ、三法師が擁立ようりつされるを望んでいるであろうことはいうまでもあるまい。

勝家は反駁はんぱくに苦しんだ。

きょうの評議で、秀吉が易々として自分の提議を容ゆるれるものは思っていないが、三法師を擁して、こう強硬に主張して来ようとも予測していなかった。また、秀吉以外の諸侯が、かくも易々と、しかも多数、三法師支持へ傾こうなどは、なおさら、思っていないかった。

とはいえ、ここで秀吉にやぶれるなどは、何としても忍び難い。「ふうむ。……なるほど、……理くつじやな。理づめで申さば、まずそんなものであろうが、三歳の幼君をいただくのと、お年ば

えもたのもしき将器豊かなる御方を仰ぐのとは、われら重責を負う遺臣としても、その施政に士氣に、将来の大計にも、やはり大きな違いがないわけには参るまい。毛利といえ、上杉といえ、なお安からぬものが多いところじゃ。三歳の若君でどうなろう。

先君の御遺業も半途に止め、このまま縮もうという織田家ならばつじやがの。——いや、守ろうとすれば四辺は、時こそ得たれと侵して来る。所詮しよせんふたたび乱世じゃ。室町家の末路の轍てつを踏もうも知れぬ。いや、勝家には危ぶまれる。どうあろう？ 諸侯」

座中を見まわして彼の眼は支持者をさがした。が、どこからも明瞭な反応がないのみか、偶然彼の眼とちあつた眸が、突として、

「御大老」

と呼びかけ、却つて、横から斬りかけるような反勢を示してきた。

「おう、五郎左殿か、何じゃあ？」

勝家も反射的に、頼みをかけぬ返辞を投げた。五郎左——丹羽長秀は初めて発言した。

「だんだん御深慮は伺つたが、ここはまず羽柴殿の説を容れられては如何なものかの。羽柴殿の云い条、五郎左も至極と存ずるが……」

宿老格では、丹羽長秀もまた、宿老の一人である。

その五郎左が、緘かんもく黙を破つて、秀吉方へ、自己の旗いろを明

らかにしたので、この時、勝家の面色ばかりでなく、座中は俄にわかに色めくものがあつた。

「五郎左殿よ、それはまた、どういうわけでの？」

勝家は内心の忿懣ふんまんを抑えながらなじつた。——が、形勢ここにいたつては、秀吉との対立、もはやまぬがれ難しと肚のうちできめこんだものか、焦しょう躁そうの半面に、瓶かめわり破柴田らしい傲岸ごうがん不屈ていな体をも、わざと示していた。

多年のことだ。長秀は知っている。彼のそういう性情をよく心得ている。——でなだめるように、

「大老。お腹立てなさるなよ」

と、まず温顔を向けてから、自己の所存を述べはじめた。

「——何といつても、羽柴殿は、最も先君の御意にかなつておる者ではござるまいか。右府様、御非業ごひごうの節、すぐ中国より取つて返し、俱ともに天を戴かざる無道人の光秀を討つたるは、われ人ともに、悲痛の中の面目、ありがたいことでおぎつた」

「……………」

勝家の面色は惨たるものに塗られた。が依然、くずれないのは、その五体もあらわしている我意一徹な線であつた。

長秀はなお云いつづけた。

「あの際、大老にも、越中の陣におかれて、右府様の御最期を知るやいな、たとえ手勢は揃わずとも、飛馬に鞭をあててお上りあらば、羽柴殿とくらべては、倍にも勝る御身上、明智ごときもの

の二つや三つは、立ちどころに踏みつぶされたであろうものを。……さてさて、御油断ゆえに、わずかの遅れ。惜しいことでおざった」

諸將、たれの胸にも、このことはあつた。長秀の言は、諸將の感情を代表したものといえる。

同時に、これは勝家の大弱点であつた。出遅れて、故君の弔とむらい合戦に会さなかつたという一事だけは、何としても弁疏べんその道がない。長秀は巧みにそこを衝ついてから、秀吉の提議が正しくもあり、穩当でもあるという、自己の賛意を忌憚きたんなく述べ終つた。

彼が口をつぐむと、ここ大評議場の空気は一転、險悪を孕はらみかけて来た。勝家の苦境を救おうとするかの如く、滝川一益が側の

者に急に私語し始めたのをきっかけに、諸所において、低語歎息が聞え出した。——これはむずかしい。織田家の御運の別れ目は今。——と表面は片語の騒めきに過ぎなかつたが、声なき底に勝家対秀吉の正面切つての衝突が、どうなることかと、より以上の関心となつたのはいうまでもない。

この重苦しい空気の中に、当の勝家はと見れば、茶道衆が、すでに午の刻を過ぎている旨をそつと伝えて来たのに対して、

「うむ。ウム」

と、うなずいたきりで、汗ぬぐいをくれといいつけ、同朋の者が、水絞りの白布を捧げると、大きな手にそれをつかんで、襟ぐびの汗を拭きぬいていた。

「……はて。当惑な」

その時、秀吉は、左の手をわき腹にあてていた。そして急に眉をしかめて見せながら、勝家に向つていう。

「これはどうもならぬ。……柴田殿。にわかには、虫気が起つたものとみえ、腹が痛む。失礼なれど、しばし中座する。おゆるしを」
つと立つて、評議の席を抜けてしまった。

遠い、だいた台子まの間まで来ると、

「いたい。……いたい」

秀吉は大げさに腹痛を訴えながら、まごまごしている同朋衆へむかい、

「枕、枕」

と、よび、それから、

「薬をくれい」

と、すぐ横になつてしまった。

大病人のようである。

しかし心得ている病人とみえ、書院庭から吹きこんでくる涼風へむかつて枕をすえ、うしろ向きになり、汗に蒸むれた襟元を自分でくつろいでいた。

が、典医てんいや茶坊主どもは、あわてぬいている。侍たちも、こもごも見舞に来て、

「御気分は……？」

と、氣遣つたが、秀吉は、

「そつとしておけ。そつとしておけ。……持病だ。やがて癒なおる」
うしろ向きのまま、蠅はえでも追うように手を振った。

どうぼう
同朋がとりあえず、薫香散くんこうさんを煎せんじて来て献じると、秀吉は
起きて、

「これは、暑氣中あたりにもよい」

眩くらきながら、喉も大いに渴かわいていたところか、熱いのを、ふう
ふう云いながら飲みほした。

そしてまた、横になった。

どうやら本当に寝ついてしまったらしいので、同朋衆も侍たち
も、次へさがって、そつとしておいた。

大評議の広間とこことは、幾つもの間数をへだてているので、

秀吉が立つた後、どうなったことか、気配も知れない。

だが、ちょうど同朋衆が、頻りと午を告げていた折でもあったから、秀吉の中座を機会に、どうやら午食の休憩に入ったらしくも思われる。

いつとき
一刻ほどの時が経った。

そのあいだ、七月の真昼は、かんと照りつけるのみで、一城の広さは、事もなげに静かである。

そして、次の風雲を孕み、明日の世代を分つともない一いちだ朶の夏雲が、清洲きよすの上に、じつと、動きもせずあつた。

「筑前どの。御気分はどうじゃ。……落着かれたかの」
いつの間にか、枕許に、丹羽長秀が来て坐っていた。うしろに

清洲の侍もひかえていた。

「……ウム？ ……おう」

秀吉はむくと肱ひじを立てて、長秀の顔を見、急に気がついたかのように、

「やあ、失礼を」

と、坐り直した。

「柴田殿が、迎えて来いといわるる。……はやお越しあるがよい」
「評議は」

「貴公が座にいらなくては、評議にもならぬ。——ともかく参られてからと、柴田殿のことばだが」

「それがしの申し条は、はや尽しておる」

「いや、あれから各の詰所へさがり、半刻ほどの休息の間に、風模様は変った。柴田殿も、考え直したらしくみえる」

「参ろう」

秀吉は立った。長秀は思い入れの微笑を見せたが、それにニコともせず、秀吉はもう先に台子だいすの間まを出ていた。

勝家は、眼でじろと彼を迎えた。

座中一同も、ほっとしたかのようなのである。議場の空気は前とちがつていた。勝家は折れて、秀吉の提議を容いるべし、と確言した。ここに、三法師を相続者と定める議案は一決した。

勝家の譲歩によつて、

「めでたい、めでたい」

と、一瞬、大評議場は、危雲を払って、解とけあう和氣に醸かもされた。

「三法師君を、天下人と仰ぎ奉ること、各にも御同心、勝家にもはや異存なし。祝しゅうちやく着、祝着」

彼もしきりにいつていた。自説の形勢ことごと悉く非なるを見て、にわかてっかいに前言を撤回し、からくもこの場を切り抜けたというかたちである。

がなお、彼として、ひそかに期すものはあつた。

それは次の議案——旧明智所領の処置——つまり領土分配をどう割り振るかの問題である。

これが直接、諸將の利害にかかわる実質的懸案だけに、相続問

題以上、ひと揉めはまぬがれまいと予想されていたが、案外そうでなかった。

「そのことは、ひとえに、宿老方のよろしきように」

と、さきにいっしょう一捷かくを掴かした秀吉から、謙けんじょう讓じょうを示したこと

が、まず非常に、会議の進しんちよく捗とくを円滑にしたのである。

「では、一応、大老のお考えを……」

と、宿老格の丹羽、滝川などが、ここで前にはまるつぶれとなつた柴田勝家の顔をたてて彼を中心に合議して原案をまとめにかつた。

しかし、すでに秀吉の存在は、何となく、冒おかし難いものになつている。まと纏められた原案は、やはり一応は、秀吉の前にも送られ

て来て、

「御意見、どうあろうか」

と、彼の内見を求めざるを得なかつた。

「――筆を」

秀吉は同朋どうぼうからそれを求めて、原案をいちえつ一閱していたが、筆に墨をふくませると、無造作に三、四項へ棒を引き、かつ、私見を書き加えて、

「かようにされては、如何」

と、訂正して返した。

ふたたび勝家の手に廻されてくる。勝家は苦々しい容子である。黙思もくし久しかつた。勝家の望みとしていた項目にベタベタ墨が引か

れているからである。けれど、秀吉は自分へ割りあてられて来た
江^{ごうしゅう}州 坂本の知行分にも自分で棒を引いて消していた。そして
秀吉自身は、ふつうの諸將並に、わずか丹波一国を書き入れてい
るに過ぎないのである。

寡^{かよく}慾を示して、勝家にも、寡慾をすすめて来たものだ。そして
信雄、信孝に多くを割当て、あとは山崎^{とむらい}の弔合戦の功によるかの
如き分割案の振り当てだった。

「……明日もあること。暑中の長評議とて、各も疲れたろうが
勝家もちとつかれた。この議は、あすとしてはどうか」

ついに勝家は保留として即答^{こば}を拒んだ。それには、異議はない。
夕陽もさして来て暑さはいよいよ苛^{かれつ}烈だ。第一日は閉じられた。

次の日。大評定第二日目。

勝家は、だきようあん妥協案をもつて、

「かようでは、どうじやな」

と、宿老たちにはか諮つた。

夜前、勝家は、自身の家臣たちを集めて、宿所できゆうしゆ鳩首談合

して来たものだった。

が、秀吉は容いれなかつた。

きようもまた、この分割案を挟んで、両者の対立が激化するかとみえたが、大勢はすでに秀吉に加担している。どう粘ねばつてみるも、結局、秀吉の云い条に抛よらざるを得なかつた。

ひる午、ひと息入れて、やがて午すぎの未ひつじこくの刻を期し、その決定が

諸将へ披露された。

配分に付せられた領地は、明智の闕国けつこくのほか、信長の直領地もふくまれている。

国分けの筆頭は、

のぶおきよう

信雄卿

びしゅう

尾州一円

のぶたかきよう

信孝卿

のうしゅう

濃州

の、ふた筆であつた。

はっしやうち

一は織田家の発祥地はっしやうちとして、一は岐阜在城の地として、共に、

適切な処置とされたが、これも秀吉の意で、勝家の初案を直して、こうさせたものだつた。

滝川一益の五万石加増、新付北伊の一部、蜂屋頼隆はちやよりたかの三万石

加増等には、何らの筆を加えなかったが、

池田勝入父子、大坂、尼ヶ崎、兵庫十二万石

丹羽長秀、若州、並びに江州二郡

の二項には、原案よりも、加封を多くした。

その代りに、秀吉は、自分への割当を削って、丹波一国を獲るにとどめ、また、勝家の取分も減らして、

——江州の内、長浜六万石

だけを彼に付与した。

長浜は現に、秀吉の城地となっている所である。

しかしそこは越前から京都へ通ずる咽喉の要地であった。

勝家はそれへ目をつけたにちがいない。強引にもこれを需めた。

そのほか三、四郡の地をも望みに加えていたが、ほかは秀吉が抹消してしまつた。そして長浜六万石だけは、きれいに彼へ渡してやつたのである。

もつとも、それにも条件が付いていた。勝家の養子、柴田勝豊へ持たすという確約の下にされたのであつた。

前晩、柴田家の家中は、勝家を囲んで、こういう屈辱的な分け前にたいし、大不服をとなえ、秀吉のやり口を、

(思ひ上がった下郎の専横沙汰、断じてお容れあるべきではない)と、いっしゅう蹴し去るべきことを励れいしていた程だつたし、勝家も

きようここへ来るまでは、家臣と同じ気もちでいたが、評議の席へ臨んでみると、おのずからまた自我のみを強調し得ない諸将の

大勢というものがここにはある。

（——自分を小さくしてはならない。我慾一点と見られてもなるまい。多数が可とする以上はやはり順応せねば却つて後に悪からう）

などと座中の空気とにらみ合わせては、自然、彼の我意もこう牽けんせい制されてしまわざるを得なかつた。——で結局、

（長浜の要地さえ、秀吉から取り上げて、わが掌中に収めておけば）

と、他日を底意に期して、とうとうその条件付にも甘んじて受諾したものであつた。

彼の狐疑鈍洩こぎどんじゆうに反して、秀吉の態度は淡々たるものに見えた。

中国以来、山崎の快捷かいしやうまで、戦政両略の主動を取つて来た筑前守こそは、必ずや誰よりも多くの獲得を欲するであろうと人々はみな予想していたに関わらず、彼が受けたのは、諸將並に丹波一国にすぎず、既得の長浜も譲つてしまい、当然取つてよいものと人皆がゆるしていた江州坂本の地も、丹羽長秀にやつて顧みなかつた。

坂本は京都の関鍵かんけんだ。

(自分には、天下をうかがう意などはない)

それを秀吉は敢えて衆に示すべく、わざと取らなかつたものか。或いは、

(いずれ帰すところに帰すしかないもの)

と、眼前の小事として、群議ぐんぎにまかせておく気であつたものか、なお未だ、彼の腹中を真に知る者はなかつた。

虎口ここう

一時は決裂のほかあるまいかのような危局を孕はらんだ清洲会議も、二つの重大懸案が、ともかく議決されたので、あとの小問題は、いっしやせんり一瀉千里に片づいた。

信長の跡目を承うけた新君三法師の食邑しょくゆうとして、近江おうみの内三
十万石をあて行う事——も異論なく決定した。

傅もりやく役には、従来どおり長谷川丹波守と前田玄以げんいの二人のほか

に、なお秀吉が輔佐ほさすること。

また、安土は焼失したので、安土に仮館ができるまで、三法師の座所は、この岐阜きふとしておく事。

信雄、信孝の二叔しゆくは、幼主三法師後見人たるべき事。

等々の事項のほかなお、施政しせい体制の面としては。

京都に織田代表の四将を置く。柴田、羽柴、丹羽、池田の四家がその任にあたり、各自、家中から役人を派して、洛中の庶政しよせいを合議裁決せしめる。

という案も即決された。ここにすべての解決は終わった。閉会の式として、

(いづれ協力一致して、幼君を奉戴ほうたい、異背いはいあるまじき事)

の誓書を納れ、これを故主信長の靈前に供え、併せて、評定の結末を直ちに報告することになった。

その日は、七月三日。

信長の月辰げっしん——月の命日は、昨日の二日であった。もし会議が順調にすすめられていたなら、このことは、きのうの命日に行われるはずだったが、勝家の保留で一夜越したため、忌日きにちつ追福いふくの営みも、ついに一日延ばされてしまったわけである。

諸将は、詰所へさがって、まる三日間の緊張から解かれると、やれやれといったげに、各、夕風に涼を入れて、家臣たちの宥いたわりに寛くつろいでいた。

多くの同朋衆は、手分けして、各詰所の小部屋で、一いっせん筧せんをそ

そぎ、茶を献じ、香を薫じて、犒いを扶けていた。

その間にもう清洲の臣が、

「御小憩がおすみに相成りましたら、酉の下刻のお土圭をあいずに、二の丸の御仏殿までおわたり下さるようにな」

と、触れあるいていた。

汗をぬぐい、喪服にあらためて、諸将は刻を待っていた。

蚊うなりのする大殿廂に、新月の影がほそい。

遠く土圭が鳴っていた。

喪服の武將たちの影が、もの静かに、二の丸へ渡っていた。

雲母襖に紅白の蓮花が描いてある仏間の裾に沿うて、勝家以

下、ひそと着席した。

次々に、一人来ては坐り、一人来ては、また加わった。

ひとり秀吉だけが見えない。

「はて……？」

と、いぶかりつつ眸をこらして正面の仏龕ぶつがんほのかな辺りを見ると、厨子ずし、位牌いはい、金壁こんぺき、供華くげ、拈香ねんこうなどの巖いわかなもの影のうちに、さきの誓書一束が供えられてあるのが一ひとしお目につく。が、より以上、衆目をそばだてしめたのは、壇下に接して、筑前守秀吉が、喪服もふくした三法師を膝にのせ、けろと、とり澄ましていることだった。

(これは——?)

と思わぬ者はなかつたらしい。

けれどよくよく考えてみると、長谷川、前田などの傳役のほか
に、秀吉も幼君の輔佐たるべしとは、昼の会議でみなが衆判の下
に認めていたことである。僭せんじょう上じょうなり——とは咎とがめられない。

そうして、臣座を超えた別格の位置に坐っている秀吉にたいし、
何ら咎める理由が見出せないだけに——勝家のおもしろくない顔
つきは非常なものだった。

「……いぎ、お順に」

二叔の信雄、信孝へむかつて、こう促うながすのさえ、頤あごのさきで、
声こそ低かったが、業腹べいばらの沸たぎりが息になって洩れたような語調
だった。

「お先に」

信雄は、信孝へ云つて、さきに立つた。これがまた、信孝には不興なこと夥おびただしい容子ようすだつた。少なくともこれだけの列将を前にして、信雄の次にされたことは、彼として、将来まで下風におかるることを無言のうちに確定づけられた気がしたのであろう。

信雄はと見れば——父信長と兄信忠の位牌にむかい、瞑めい目合もく掌して香をささげ、ふたたび厨子壇ずしだんを拝し、静かに、そのままうしろへ退さがりかけていた。

——で、すぐに自分の座へ戻りかけるかのような物腰に見えた時、秀吉は、咳がい一いっ声せいして、自分の膝に三法師君が在ることを——

（ここに新君おわすぞ）

といわぬばかり屹きつとなつて、信雄の関心を促した。

秀吉の意識的な身じろぎに、はつとしたらしく、信雄はあわてて膝を向け直した。自体、気の弱いこの人のことである。それが気の毒なほどどぎまぎと見えた。

「……………」

三法師を仰いで、信雄は、ごていねい過ぎるほど、恭うやうやしく拝礼をした。

「うむ」

うなずいたのは幼君ではない。秀吉である。

どうしたものか、秀吉の膝にあつては、駄々でおむずかりやの三法師も、人形のように端たんぜん然ぜんとしている。傅役の長谷川、前田、

乳人^{めのと}たちは、遠い末座に、ただひれ伏しているのみで、ほとんど、その人たちの手を焼かすこともない。

信孝が立つと、同じく、父信長、兄信忠の霊を拝し、これは信雄の前例を見ているので、諸將に笑われまじとするかの如く、まことに挙止^{きよし}正しく、新君三法師にも謹んで伏礼をして退った。

次が柴田勝家であつた。

彼の大きな姿が塞^{ふさ}がるように厨子壇^{ずしだん}の前に坐つたとき、障壁の紅蓮^{ぐれん}白蓮^{びやくれん}も、ゆらめく仏灯^{ぶつとう}も、悉く瞋恚^{しんご}の焰^{ほむら}のごとく、その影を赤々と隈^{くま}どつた。

会議の報告、新君擁立の誓いなど、胸中の万感^{まじ}を交えて、長々と信長の霊に告げているものか、黙拜拈^{ねんこう}香^{かう}、いと重々^{おもおも}しく、

さらに合掌久しゅうしていた。

そして退座七尺、いちど胸を正して、三法師のほうへ向い直した。

すでに、信雄と信孝すら、三礼をなしているので、彼として怠ることはできなかつた。ぜひなくではあつたらうが、そのまま、腹中いっぱいの苦情を嘸のんで拝礼をした。

秀吉は彼へもひとしく、

「ウム」

と、うなず頷くかのような眉目びもくを示した。——勝家は、ぐいと猪首いくびを横に曲げて、ばさばさと自席へもどつた。その後、唾つばでも吐きたいような顔をしていた。

丹羽、滝川、池田、蜂屋、細川、蒲生かもう、筒井など順次に拝儀は
 終つた。——そして人と席とはそのまま、この夜——故信忠卿の
 御簾中ごれんちゆうより被下くださる——とあるお齋ときの間まへ移つて酒宴となつた。
 ここには、会議後、遅ればせに着いた金森長近や、菅屋九右衛
 門尉、河尻肥前守なども、席に加わっていた。

また両日中、城外の治安や城中の守備聯絡などに助力していた
 諸侯の家臣中の一族とか老臣格の者も、各一、二名ずつ列席をゆ
 るされ、清洲直臣の側からは、前田玄以、長谷川丹波などがつら
 なつた。

信雄、信孝の在るは、もちろんのことである。配膳は四十客以
 上の多くに供えられた。すでにして杯は廻り燭しよくは夜涼やりようにさやぎ、

人々はこの二日間に初めてのかんごの歡語とくつろぎの中に各 酔いを覚えていた。

酒宴と茶会とは、この時代の戦国社会では、流行り物のはやものようであつた。陣小屋の雑器としてゐる備前壺に、一輪の野の花を生けて、物の具のまま一碗を喫し、また、陣後の往来や城中の諸会にも、昼に夜に、酒宴のひらかれるのはめずらしくない。百事の儀礼はみな酒宴の形式でされるといってもよいほどである。

これはもとより当時の世態と武門生活の要求から自然になされて来た風習であつた。信長といい、柴田、羽柴、その他、当年の先駆者や中堅はすべて皆、この世に、生れた時から世は戦国であり、長じて四十、五十となつた今でも、なお世の中は戦国である。

極言すれば、この時代の人間すべては、

（世の中とは、即、戦国のこと。戦国以外に、どんな世の中があるか）

を、まだ自分の生涯中には見てもいはず味わってもいない人たちばかりであつたといつていい。

故に、戦いは、日常であつた。

（いつかかならず身をもつて、天日うらかな平和を四海に回めぐらし、万民をして和楽の地に安んぜしめん）

とは、武門の上に立つ大将としては、誰もがいだいている理想のうちの大きなものだったし、民士一般も、その日の来ることを生涯の憧あこがれ憬としていたことはいうまでもないが、さりとして、

(いつから始まった戦い、いつ頃になれば終るか)

などと月日から割り出した^{はかな}儂い観測などに無^{むい}為な日を暮している者はなかった。——この世は戦国、戦国は日常——という通念が徹していた。生活一切もそれに^{じゆんのう}順応して、何の不自然もなく、苦しみも楽しみも、焼土も建設も、死別も生別も、涙も笑いも、^{ことごと}悉く、人生の毎日^{ことごと}にあり得る常のこととされ、しかもその中になお、この世に対する大きな希望と、苦しい日にも、愉快にあらんとすることを忘れなかった。

諸将のよくやる酒宴は、その積極性のあらわれの一つだった。

戦陣の寸暇、^{かつちゆう}甲冑を解いて、身をくつろぐと共に、心を寛^{ひろ}く

し、和楽のうちに、心身を養うことであつた。

しかしまた宴樂のあいだには、外交の詭計きけい、私交の虚実、人物の試胆したん、戦不戦の打診など、善悪あらゆる機微のものも美味声色を仮りて入り交じっている。燭は麗しよくうるわしといえどここもまた観かんずれば刃やいばなき戦場なりといえないことはない。——しかもそれは深く秘して交杯談笑こうはいのうちには各が魂の素肌まで示しあうところにまた、人と人との交わりの微妙な味も醸かもされるのであつた。

だから当時の武将はみな何か酒宴のときに振舞う芸能を持っていた。信長の幸若舞こうわかまいも有名だったが、あの真面目くさい徳川家康にしても、自然居士こじしの曲舞くせまいはおはこの芸であつたし、その家臣の酒井忠次といえは、蝦えびすくいの名人として、その珍なる踊りは、四隣にまで鳴っていた。

こよい、ここの宴は、常の場合とちがい、仏餐^{ぶつさん}を賜わつていたのであるから、誰も演舞までやり出すような大酔はしていないが、しかしここの顔ぶれの中でも、演^やればずいぶん演り得る隠し芸の持ち主はいそうである。

わけて池田勝入の槍踊りは、自他共にゆるすものだった。

まだ信長の在世中であつたが、或る折、甲府の使者を迎えて、

安土に大酒宴の催されたとき、主客の使者が列席の武将のなかに、
^{ひと}一きわ背も低く、足も跛行^{びっこ}の小男が、人からうけた大盃を乾して
それを返しに立つてゆくのを見て、

（あれよ、盃より小さい侍が、盃を漕^こいで、海をわたつて行くわ）
と、一寸法師の噺^{はなし}に事よせて、座興をいっかつつもりであろう、

遠慮のない笑いかたをした。

すると勝入は、——この頃彼はまだ髪もおろさず名も勝入と変えていかなかったが——黙って次の間へ退つたと思つたと、ふたたび現われ、携えて出た見事なる朱柄あかえの大槍を座のまん中に立てて主客の方にむかい、

(客まろうど人にももの申す。末座にまかりある者ゆえ、わざと御挨拶を

ひかえていましたがお目にとまつたようにござれば、かくは推すひかえていまして、……したが、客まろうど人の御眼には、この男、い

参いさん申してござる。……したが、客まろうど人の御眼には、この男、いたく小男のように御覧ぜられたかのようなれど、父母より賜える五体、幸いにして、五尺ほどはこれあり、今日までの戦場たけにおいても、いまだいかなる強剛に会うも、身の丈たけの不便というものは

かつて覚え候わず。……とはいえ客人は小さいと仰せられ、それがしは大きいという。いずれが是ぜやら、いずれが非とくやら、篤とくと、見ていただきとう存ずる)

云い終ると、信輝は武者ぶり作つて、りゅうりゅうと槍をふるい出した。あだかも四面鉄てつとう桶の乱軍を駆けくずし、その悉くを槍にかけて、宙に大地に、突き投げ突き伏せて熄やまざるかのような大演技を演じて見せたのである。

信長を始め安土の同僚は、手をたたいて興ひらじ入ったが、甲州の使者は、演舞の槍先がしばしば胸元近くまで閃ひらめいて来たので、酔もさめたような顔していた。

そして、その後のてれかくしに、傍らの者へ、

(今のは、誰ですか)

と訊ねたところ、

(あれこそ、御当家の池田勝三郎信輝です)

と聞かされて、ふたたびふるえ上がったということである。

以来、信輝の槍踊りは、著名になつて、折あるごとに見られたが、本当はそんな烈しい荒芸あらげいではなく、虫の居どころによりなかなかに優雅な舞い振りのものであつたという。

——が、さて。

その池田勝入も、今夜の席に、居ることは居るが、こよいは亡君のお齋ときの賜膳しぜんである。酔うには酔うても、まさか槍踊りというわけにもゆくまい。

他の諸将も、同様な行儀であつた。

しかし多少、酒氣のあがるにつれて、あなたこなた、座をくずして、よりより寄々に談笑の声はわき出している。

殊に秀吉の前には、杯と人とがかたまっていた。

そこへまたひとり出て、

「おながれを」

と、改まつて乞うた者がある。柴田勝家が自慢の臣、佐久間玄げ蕃んばのじょうもりまさ允盛政であつた。

玄蕃の驍ぎようゆう勇無双なことは、北越の戦陣で久しく鳴りとどろいているものだった。

(——佐久間玄蕃に二度出会った敵はない)

と、いうことばすらあるほどである。

勝家の愛し方は一通りでない。何かといえは、

(わが家の玄蕃は)

と、口癖にいい、

(甥おいめが、かように働いて)

とか、自慢たらたら、彼の武功を吹聴すること、他愛ないくらいであった。

勝家には、甥もたくさんいるが、彼が、「甥めが」といえば、それは玄蕃をさすことであつた。

そして、その玄蕃盛政は、まだ二十九という若さであるにかか関わらず、柴田一族の上将として加賀の尾山城に住み、ここに在る諸

大名とくらべても、何ら遜そん色しよくないほどな封地ほうちと待遇をうけていた。

「……おう、筑州どの。ひとつその男に遣つかわされい。——甥せうめが、お杯しよもうを所望と申しおる」

勝家は側から云い添えた。

それに初めて気づいたように、

「甥御とは？」

と、秀吉は見まわして、

「やあ、これは」

と、玄蕃の男振りを見まもつた。

さすがに音に聞えた偉丈夫いじょうふとは見えて、玄蕃たくまの逞たくましい筋骨は

小がらな秀吉を圧するに充分だった。しかし彼は叔父勝家のよう
 なあばたの瓶かめわり面づらとちがいに、白はく皙せきの美丈夫にして、見るから
 に虎眉豹身こびひょうしんの氣にみちている。

秀吉は、杯をあげながら、

「なるほど、匠しやうざん作さく（勝家のこと）にはよい家の子をお持ちで
 はある。……どれ、ひとつ参らそう」

すると玄蕃は、首をふって、

「いや、どうせ戴くなら、そちらの大きいのを所望申す。大杯を
 賜りたい」

「これか——？」

それにはまだ酒がたたえられていた。

秀吉は無造作に器物へあけて、

「誰ぞ、酌してやれ」

といった。

朱のさかずきの縁へ、蒔ま絵きえの銚ちようし子の注つぎぐち口が当てられた。銚子が空になつても杯はまだ余地をのこしている。酌人は、べつな銚子を取りよせて、さらに、それへ満々とついだ。

虎眉豹身の美丈夫は、眼をねむつて、盃を仰いだ。そしてなお余よてき滴まで舌なめずるごとく飲みほして、これを懐紙で一いっしき拭し、

「いざ」

と、返した。

秀吉は、笑つて、

「わしは、だめだめ。その芸はできない」

手を振られると、玄蕃げんぱは、ひと膝つめた。

「なぜ、受けて賜わらぬか」

「弱いためだよ」

「なんの、これしき」

「それは、戦いくさのときのことだよ。酒はのむが、大酒はようせぬ筑前じゃ。ゆるせ、ゆるせ」

「あはははつ。あはははつ」

腹の底から玄蕃は笑った。そして満座へ聞えよがしに、

「ひとの噂にたがわず、なるほど羽柴あやまどのは謝り上手だ。まことに、

お腰が低うていらせられる。むかし——二十余年前には、こ

の清洲のお城で、馬糞ばふんを掃き、お草履をつかむ御小人おこびとであつた時代もある。その頃をわすれぬためとか。さても殊勝なお心がけよの」

今日の羽振りをもつ秀吉を前において、これほどのことがいえる者は、この玄蕃を措おいてほかにあるまい——と、みずから誇るかのような彼の放言だつた。人もなげな哄こう笑しょうであつた。

はつとしたのであろう。

あちこちの談笑は急にやんで、人々の眼はみな玄蕃の姿にそばだてられた。

そして玄蕃の前にある秀吉の顔いろと、勝家の容子とを見くらべもして、

「すわ、また何事か起りはしないか？」

と、一瞬みな、酔いと杯を忘失していた。

秀吉はにやにやと玄蕃を見ているのみである。四十七歳の眼から、二十九歳の若さを見やっている眼であつた。

いや年齢差だけでなく、秀吉が生れて二十九年をかぞえていた頃の人生と、玄蕃盛政が経て来た二十九年の歩みとは、その境遇でも心しんてい態でも、たいへんなちがひがある。要するに、それすら思いいたらないほど、玄蕃は実世間的な苦勞は知らないお坊つちやんであつたといえよう。為に、剛勇無比の名と共に、すぐ驕き慢ようまんをも持つてしまうのであつた。当代の代表的人物が一堂に

ある今夜のような畳の上の場合のほうが、戦場以上に実は危険な

場所であるという戒心かいしんなどはまったくないかの如き彼であった。

「——だが、筑前。ひとつ玄蕃の腹にすえかねることがあるぞ。

やい、聞け筑前。……耳はないのか」

もう呼ぶにも呼び捨てである。酒くせよりは腹の虫が云つてい
るらしく見える。しかし秀吉は酔態すいたいを眺めて、むしろ愛するごとく、

「お汝こと。酔うたな」

微笑でなだめると、玄蕃は、

「なんの」

大きく首を振って、

「事は、酒興ですむような、そんな小さい問題ではない」

と、大きく構え直して、さらに云いつのつた。

「聞けばだ。——最前、お仏殿において、羽柴筑前には、信雄様
 信孝様以下の諸侯が、尊堂へ拝をなすにあたつて、本来下賤げせんの成
 上りの身をもかえりみず、三法師君をわが膝にのせて、ずんと
 上座にかまえ、しかもいちいちおのれの方へも、拝礼を執とらせた
 ということではないか」

「は、は、は」

「なにを笑う。筑州、なにがおかしいか。——三法師君を飾りも
 のに抱いて、実は羽柴筑前というつまらぬ男に、御一門や諸侯の
 辞儀を故意に強しいたる汝の奸策かんさくであつたにちがいあるまいが。

……いや、そうだ。もしこの玄蕃げんぱのじょうもりまさ允盛政がいあわせていた

らば、その座をも去らせず首のねを引きぬいてくれたであろうものを。——さてさて、わがお館やかたの匠しょうさく作さくといい、並居る歴々の衆といい、みな齒がゆいほど、お人のよい方々ばかり——」

秀吉の席から二人ほど隔てて上座にいた柴田勝家は、そのとき急に杯をほして、他の顔をも見廻しながら云った。

「これこれ、玄蕃。何でそのように人の心事を猥みだりに口にするか。いや何、筑州どの、甥めは、こういう男でな。……ははは、悪気ではないのだ。聞き流してくれい」

秀吉は、怒りもし得ない、笑いもし得ない、いわば微苦笑のほかない羽目におかれていたが、こんな場合、彼の特有な容貌はまことに都合のいいものを持つていた。

「ふ、ふ、ふ、ふ。柴田殿よ。そうお気をもまれるな。よいわさ、よいわさ。……この方^{ほう}までが間が悪うなる」

判じのつかない態度でいうのだった。感情の揺れからのぼる顔色を見ても、大人の表情のようでない。

玄蕃のために、あたまからがんと喝破^{かつぱ}されて、手痛く参つたようにも見えるし、反対に、冷眼^{れいがんいちべつ}一瞥^{いちべつ}、相手を齒牙^{しがが}にもかけていないとも見られるのである。

なおいえば、児童が爪を噛んで何かに拗^すねているような稚態^{ちたい}と、老僧が山月に嘯^{うそぶ}いて世にとぼけているかの如き狡^{ずる}いものとを、猿面郎と綽名^{あだな}されているその類の少ない顔にぼかして、巧みに微酔^{てい}の体を作っているものと思われぬこともない。

「なに、間が悪うなると。嘘をいえ。何の、猿が……猿が……あははは」

こよいの玄蕃もまた、日頃の玄蕃に輪をかけた傍若無人ぶりである。燃えない物にむりに火をつけて烈火を誘おうと努めているようなところもある。

「猿。……これは失言だった。しかし二十年来世上の通り名、いつちよう朝にしてはあらたまらぬ。——左様、その猿で思い出した。

むかし、この清洲のお城に、猿に似た御小人が、雑用にくるくる追い使われていた当時、そこにおるわが叔父も、まだ権六勝家と申されて、折々、このい宿直なども勤められていたそうだが、……或る夜、つれづれのまま、猿を招いて酒をのませ、酔い疲れて横にな

つたついでに——猿よ、すこし足腰を揉もんでおくれぬか——と申したところ、おやすいことと、猿は如じよさい才なく、権六の足腰を根気よく揉んだそうな」

「……………」

秀吉はともかく、衆はみな酒気を失つて蒼白おもてな面に生唾なまつばをのみ合つた。——事態、これはただ事でない。この宴席からいくらも隔ことごとてない壁の外、木蔭、床下など、悉く柴田の手により劍槍飛弓かくが匿かくされているのではあるまいか。そして執しつこく秀吉の怒髮どはつを誘っているのではなからうか。——そんな邪推や臆測から生じる一種の衆の鬼気が、満座にゆらぐ燭の影と、墨のごとき夜風となつて、夏ながら背すじも寒い心地に襲われ出していたからであ

った。

と、秀吉は、玄蕃のことばが終るも待たで、からからと打ち笑つていた。

「いや、北ノ庄の甥どの。それは誰に聞かれたか、めずらしい思ひ出を語られるの。——いかにも二十余年前には、権六どののお腰はおろか、猿めは、導どういん引が上手うまいとて、御一門の衆などには、わけてよう揉ませられたものじやった。そして、お菓子など賜わると、うれしくてなあ。……わははは。今はなつかし、あのお菓子この味はなつかしいものぞ」

「叔父上。聞かれたか」

と玄蕃は大げさに勝家のほうへ伝えて、

「筑前に、何かよいものをお遣りなされ。今でも、揉めといえ、揉んでくるるやも知れぬ」

「あまり座興の度をこゆるな。——お戯れだわ、のう、筑州どの」
「いやこの頃でも、折々は、ひとの足腰を揉んでおるにはおる」
「ほ。……誰の」

「ことし七十余歳に相成る老母の腰を揉むことは、この方が楽しみ
の唯一でおざる。しかしここ幾年は戦陣にある方が多く、近頃は
ほとんどその楽しみにも会い得ませぬ。……そうそう、俄かに思
い出されて来た。おさきに失礼する。各 には、まずごゆるりと
過されい」

秀吉は先に宴を辞した。

そこを立つて、大廊下へ出てゆく間も、たれも止めてはいなかった。

諸侯は、彼が席を立ったのを、むしろ賢明と思い、たえられぬ危うさを感じていた鬼氣殺気も、それによつてまず、ほつとするを得たからであつた。

「……殿つ」

「お退がりでございましたか」

大玄関に近い溜りたまの一間から、つと出て、彼のあとに従つたのは、片桐助作と石田佐吉の二小姓であつた。

城中二日の空気は或る程度この詰所つめしょからでも感知すること
ができた。が、秀吉は多くの家臣を城内に入るをゆるしていない。

——で、二人の若者は、主人の無事を仰ぐと、各うしろからこう云った。

「お疲れでございましたでしょう」

「……が、何事もなくて」

秀吉はうなずくのみで、後の二人が小走りになるほど大股な歩みであった。

そしてすでに、外へ出て、助作と佐吉が、供の家中や馬を呼びたてていると、

「羽柴どの羽柴どの」

あわただしく追いかけて来て、空に三日月の見える宵闇の広場に、彼の姿を求めている者があつた。

「ここじやよ。ここじやよ」

秀吉はもう馬上にあつた。

そこで鞍つばを叩いている音を知つて、滝川一益は駈け寄つて行つた。

「何か」

秀吉は一瞥いちべつくれている。

その容子は、主君が臣下を見るのと、同じであつた。

一益は、寄り添つて、

「察し入る、察し入る。さだめし今夜は、お腹が立ったであろう。

……が、酒のうえのこと。それに、北ノ庄の甥おいは、あのとおりま
だお若い。ゆるしておやり下さるように」

頻りしきになだめる。

そして、次に告げた。

「既定の事。おわすれあるまいが、明四日の昼、三法師君のお世よ継御披露つぎの祝事には、ぜひ御参列を欠かされることなきようにと、柴田どのが特に、あなたの立った後ですぐ案じるごとく申されておられた」

「そうか。……うム」

「必ずおわたりあるように」

「わかった」

「くれぐれも、こよいのことは、水にながされよ。——北ノ庄殿へはわしから申した。なんの、大腹な筑前どこのこと、若い者の

「いちじょう場の戯言などに気を悪うするものかと」

「叱ツ——」

馬がうごいたのである。一益が馬の後肢を避けて身を転じると、
「老人。あぶない」

秀吉は一顧して、さらに馬をぐるぐるまわし、黒々と寄つて自分を見まもっている供の人数へ、

「参るぞ」

すでに多聞たもんを出て、大手の唐橋を通っていた。

彼の宿舎は町の西端れで、小さい禅寺と隣地の一豪家を借りていた。寺坊には人数や馬匹をおき、秀吉はその農家の中二階ともいえるような所に起居していた。ここが気軽でいいというのであ

る。

簡易な彼の旅営にしても、兵員は約七、八百名も連れている。

——が、少ない方で、柴田などは出陣そのままの装備と兵力を擁して来たので、無慮一万にちかい麾下きかを清洲きよすに入れているだろうという噂であつた。

宿へ戻るやいな、秀吉は、

「煙い煙い。窓を開けい。梯子はしごぐち口も開け放しでよい」

それと、暑さきりもんとで、桐紋きりもんの式服やら長袴ながばかまやら、蹴かるよう
に脱ぎすてて、

「——風呂は」

と、早や裸体での催促だつた。

もう宵の五刻いつつだが、八百の兵員の炊煙すいえんはまだ濛々もうもうと旺さかんであつた。

ここの中二階の下の部屋には、堀尾茂助ほりおもすけ、一柳市助、木村隼はやとのすけ人のすけ佑などの近衆がつめ、身辺の世話は、小姓たちが勤めていた。

隣地の寺坊の方にはなお、年長としたけた部将たちが兵と共にいたが、その中のひとり加藤光泰みつやすがこれへ来て、

「殿は、どちらに？」
と、さがしぬいていた。

裏の風呂場と分つて、光泰は廻つて行つたが、豪家といつても、田舎家のことである。板屋根の、それも壁も羽目もない吹きぬきに桶風呂一つすえてある所に、秀吉の首が、湯気の中に浮いてい

る。

「——作内光泰にござります。何か、急に來いと仰せの由、憚はばからずに参りましたが」

湯の流れてくる垣の元にひざまずいた。

「作内か」

と、秀吉は見て、

「寺内の者どもは、今ごろ飯をくうておるらしいが、なぜおそ晩いのか」

と、訊ねた。

光泰は答えて、

「城中に万一の変もあらばと、きょう一日中、みな案じておりま

したので、殿の御無事なお帰りを知って、初めて炊煙をあげ出したわけにございまする」

「無用無用」

秀吉は湯から出て、小姓の石田佐吉に背中を洗わせながら、
「兵どもに、いらざる苦勞をさせるお汝ことらは、ちと拙つたないぞ」

「はっ」

「兵には早う飯をとらせ、馬にも充分飼糧しりょうをくれて、こよいは
早目に眠らせておけ。——火の用心ぬかるな。時ならぬ沙汰ある
も、すぐ打ち立てる心しておけや」

「かしこまりました」

「何している。蚊にくわれるぞ。……用はそれだけだ。はやく行

け」

光泰は去った。

これはごきげんがよくないらしい。——佐吉はそう思いながら、小桶にすくった湯をおそるおそる秀吉の背にながした。

が、秀吉は、湯桶の中で、あくびを一つしていた。そしてその中で四肢の筋肉でもいっぱいに伸ばしているのか、ううむ——と鼻でうめいて、

「……すこし解けた」

と、二日の凝りを啣っていた。

「蚊帳は吊ったか」

浴衣ゆかたを捧げた小姓たちが、

「吊っておきました」

「よしよし。お汝たちも、早寝せよ。——詰の者にもそう申せ」

秀吉は蚊帳の中から云った。

戸は閉てられてあるが、窓は風を呼ぶためにあいていた。宵月のほの明りが揺れてくる。——と、眠りかけたかと思われる頃、

「殿……」

「なんじゃ。茂助か」

「はい」

と、堀尾茂助の声が外からいう。

「有馬法印が見えられて、そつとお目にかかりたいと申しておりますが」

「なに、有馬法印が」

「はやお寢みと申しましたが、それでもと、強^たつて申されますので……」

しばし、返辞がない。

秀吉は蚊帳^{かや}のうちで、しばらく考えているふうだったが、やがて、

「では、梯子^{はしご}を上がった所まで通せ。秀吉、ちと疲れ気味にて、お城よりさがるやいな、薬湯を服^のんで臥^ふせておりますれば……と断つてな」

「承知仕りました」

静かに、茂助の足音が、中二階の段を降りてゆくと、間もなく、

ふたたび上がって来る人の気配が、その狭い板の間にうずくま
った様子であつた。

「筑前どのには、お寝みのようでございますが」

「才。法印か」

「……どうぞ、そのまま」

「蚊帳の中に臥ふせたままじや。無礼はゆるされよ」

「なんの。今、御近衆にうかがえば、お城より帰らるとすぐお
茶を召されてお籠こもりの由。お案じいたしました、火急、お耳へ
入ればやと、夜中を冒おかして参りましたので」

「何ぶん二日の会議で、心もいたため、体もちと無理をしたのでな。
……が、夜中、急に来たとは」

「はい。……羽柴どの」

法印は急に声をひそめ、

「明日、御城内での、三法師さまお跡目立ちの御祝宴には、お出ましのおつもりでございまするか」

「さ。……何せい、きのうもきょうも、薬を服のんでは、こらええて来たような体の調子。多分、暑気あたりかとも思われるが……さりとして、登城を欠けばまた、うるさかろうしの」

「左様に御気分のすぐれぬのは、それこそ虫の知らせというものでございましょう」

「ほう。……とは、なぜか」

「先刻、宴のなかばに、御退席なされましたが、あの後にて、柴

田党の方々ばかりなお残られ、頻りと、秘事の談合です。——解げせぬ色よと、前田げんい玄以なども案じ申し、ひそかに窺うかがいまするに……」

ふと、口をとじて、法印は秀吉が聞いているのか否かをたしかめるように蚊帳のうちを覗いた。

青い虫が、蚊帳のすそでキチキチと啼いていた。秀吉は依然、仰あおむけに寝たままである。

「法印。——それから？」

「詳しい謀たくらみはさぐり得ませぬが、あらましを察するに、柴田党の面々は、どうしても、筑前殿を生かしておけぬとしております。——で、明日の登城を機しおに、一室へ拉らっし、罪状の数々を拵こしらえ

立てて、いやおうなく腹を切らせん。切らざれば無下にも抑えて刺し殺さん。……それには、ああしてこうしてと、城内の兵のくばりから城下の抑えまで、残るくまなく、肚はらぐろ黒い密事を凝らし、しかも明日は、いとさりげなく、あなた様を清洲に待とうと致しておるものにござりまする」

「ははあ……。怖いもう」

「実は、玄以がお告げに参ろうと、気を揉んでおりましたが、玄以がお城を出ては、人目につく懼れおそもあり、かくは法印がそつとお耳に入れにまいりました。……折ふし、御発病とあれば、これも天の御庇護ごひご、どうぞ明日の御参列は、お見合わせ遊ばしますよ
うに」

「さあ。どうしたものだろう」

「ぜひにも、お取り止めなされませ」

「ほかならぬ、新君の御祝事ではあるしのう。……が、法印、好意は謝すぞ。ありがとう」

降りてゆく梯子のあしおと登音へ、秀吉は蚊帳の中から掌てを合わせていた。

離り

彼は、眠ることが上手な人であった。

眠ろうと思うときに、どこでもすぐ眠れるということはやさし

いことのように実はむずかしい。

場所を問わず、また眼前の何事にもとらわれず、まつ毛をとじさえすれば、ごろりとなつても、物に倚よりかかったままでも、すぐ寝られるのでなければならぬ。

しかも、ごくわずかな時を限つて、思いのままに、眼をひらくと、直ちに、百年の眠りから醒めたるごとく、頭脳も肉体も一いっせ洗せんされて、

いざ。

と立ちどころに、大事小事を、行く水のごとく処理してしまふというような習性は——習性というよりは、ひとつの禪ぜんである。

秀吉の絶倫な精力と健康とは、彼の「眠り上手」にもあるとい

つてもさしつかえなからう。

努めるともなく、これに慣れたのは、年少放浪の頃、家なき子として、草の上でも、荒寺の床にでも、いわゆる大地しとねを褥しとねとしていた当時の賜ものと思われる。

——が、長じて、かつ世の指導的な一方に立って、いかなる逆境や困苦の重囿わづらにも煩わづらわさるるなく、その少時の鍛練を、よく生かして、

そくすいそっかく
即睡即覚

ともいえる悟道ごどうに近い妙みょう生しょうを身にもつようになったのは、

彼自身みづかみがその戦陣軍務の多忙と健康の必要から考え出したところの、ひとつの座右銘ざうめいから得たものであった。

室町中期頃から、世上の騷乱そうらん暗澹あんたんたる半面に、心ある武門のあいだには、各がひそかに、

——われらは、これでいいのか。

という反省がよび起されて、その結果、武家の一門に、或いは、武士個々に、当時の座右銘ともいえる——家憲かけん、武士道訓、或いは、壁書かべがき——などというものが大に行われ始めて、その道義的風興は、戦国期に入つて、いよいよ磨みがかれ競きそわれているのであつた。

で、秀吉にも、何かな日常の心養に、そういう座右の師語は幾つか心にあつたであろうが、彼がひとりひそかに珍重している座右銘は、むしろ路傍で会つたつまらない旅の禅坊主からふと聞い

て忘れ得ないものとなっている——

離^り

という一字であつた。

これが、彼の座右銘ともいえる護符^{ごふ}だったのである。

離^り。はなれる——

何でもないようだが、彼の眠り上手のこつも離れ心であつた。

焦躁、妄想、執着、疑惑、早急——あらゆる事々のきずなをも、

一瞬、両の^{まぶた}瞼で断ち切つて、一切白紙の心になつて寝てしまう。

——また、瞬時にして、ぱつと醒^さめる。

これが思うままにできるようになる、醒めるも快、眠るも快、百事、この世は快ならざるものはなくなつてくる。

のみならず彼は——彼とても巧い戦や思いどおりな計画ばかりではなく——ずいぶん周囲に間の悪いような失策も度々だったのであるが、そんなときも、その失敗失戦にくよくよとらわれている風は少しもなかつた。こんな場合、彼が胸のなかで思い出していることも、

離

の一字だった。

よく人のいう臥薪嘗胆とか、一念没頭とかそんな程度の懸命は、彼にとっては、特別な心がけでなく、日々当然にしている生活だった。——故に、彼にはむしろ、一瞬でも、それから離れて、大生命を息づかせる「離」の心がけの方がはるかに必要だつ

たのである。惹ひいては、生死ももちろん「離」一字にまかせていた。

わずかな間だった。——半刻も眠つたろうか。

秀吉は起き出した。

階下の廁かわやへ降りてゆく。——と、すぐ詰つめの間の者が紙燭ししよくを掲げて板縁にひざまずいた。間もなく、彼が雪隠せつちんから出てくると、なおべつの一名は、小柄杓こびしやくに水をたたえて待ち、傍らに寄り添うて、秀吉の手へ水をかけた。

秀吉は、手を拭きながら、軒のきごしに月の位置をながめ、佐吉、助作の二小姓を顧みて、

「お汝ことらも、寝たか」

と、訊いた。

実は——眠る間などなかったのであるが、そういつては、きげんの良くないことを知っているので、

「はい。まどろみました」

と、答えると、秀吉は縁を五、六歩すすんで、その詰の部屋へ、

「権平ごんぺいも居るや」

と、直じかに声をかけた。

平野権平が、答えて出ると、秀吉は中二階のはしご段へ足をかけながら振向いて、

「寺中へ参つて、光泰に、出かけるぞと、合図して来い。——兵

の分がちよう、道々の推すい行こう（行軍のこと）などは、夕刻下城のせつ、書きものに認しためて、浅野弥兵衛に渡してあるゆえ、浅野弥兵衛について、さしずを聞けと申せ」

「はっ」

「待て待て。もう一言いいわすれた。大島雲くも八はちに、ちよつと来いといえ」

裏の雑木林から寺の方へ、権平の走つてゆくあし音おとが遠ざかつてゆく。そのまに秀吉は小姓たちに介添かいぞえされながら、手早く鎧よろいをそく着けていた。

身支度さえすめば、さつさと先に出て、他の者に猶予ゆうよしてないのが彼の性分である。自然、まごついている者は置き残されて

しまう。けれど扈從こじゆうもよく馴れていて、秀吉の身世話は、刻々に顔をかえて行われ、支度のできた者が来て代ると、前の者が退いて、忽ち、物の具を引つかつき、われおくれじと、後について来るといったふうであった。

宿の前は、伊勢路と美濃の往来になっている。秀吉は納屋なやの横を通つて、そこへ向つていた。

——と、さきに召しをうけた大島雲八光義みつよしが、よたよたと追いつがつて来て、

「光義、参りました。御用の旨うけたまわを承りまする」

と、立ちどまつた人影の前へまわつてひざまずいた。

大島雲八は七十六の老武者であつた。一子の茂兵衛光政もへえみつまさは丹羽

長秀に仕えていたが、この老父は早くから秀吉に傾倒していた。その持城が美濃の関にあつた関係もある。

「老人か。御苦労御苦労」

秀吉はその老体をいたわりながら、雲八が若い者に負けず、早くも甲冑を着けて来たのに目をとめて、

「やれやれ、物の具までには及ばなかつたものを。——頼みおく用は明朝のこと。お許は、もと後に留まつておれ」

「明朝。清洲のお城へ参りますので」

「それよ。さすがは年の功、よう察した。——筑前こと、持病に悩み、昨夜、にわかにな長浜へ帰国、残念ながら御祝事には列し難ければ、諸事よろしくと、城中へも、柴田へも申し入れておくの

だ。……いずれは、勝家、一益などがくどくど申すであろうが、お許のもうろく耄碌こそ倅しあわせ、耳の遠い顔して、何事も聞きながし、そのまま関へ立ち帰るがよい」

「お云いふくめの儀、よう分りましたでござりまする」

老齡七十六の武者大島雲八は、海老えびのように曲った腰にも、なお一筋の槍は手離さず、一礼して立つと、大鎧にかためた身を重たげに旋めくらして、そこからゆさゆさとあとへ引つ返して行つた。

山門前の往来には、寺中あらましの人数がもう出揃つていた。一旗一旗の指物さしものを目じるしとして、部隊は幾組にもわかれ、その組先には、各部将が馬を立てている。

火繩の火はチラホラしているが、一火の松たいまつ明も点じていない。

それに、その夜の月影も、いと細く。

並木つづきに、七百の兵馬は、渚なぎさの波のように、静かに、黒々と、たゆとうていた。

「弥兵衛やい。——弥兵衛やい」

秀吉は、呼ばわりながら、将士の列のすぐそばを歩いて行つた。並木の蔭なので、人影もさだかでない。わずか、六、七名をうしろに連れた背の低い小男が、竹の杖で地を叩いて通るので、小荷駄の組頭か——ぐらいにみな思っていたが——秀吉であったと気づくと、さらに肅となつた兵馬が、彼のためにみな少しずつ馬蹄を避けた。

「あ。——弥兵衛、これにおります」

あなたの石段の下で、何か、一かたまりひとの人影へ向つて、さし
 ずをしていた浅野弥兵衛は、秀吉の声に気づくと、早口にそれを
 終つて、こなたへと、駈け出して来た。

「いいのか。いいのか」

秀吉は、彼に、ひざまずかせる違いとまも与えず、こう性急に云つて、
 「——よかつたら出かけい」

「はつ。よいのです。——では光泰、先に立て」

弥兵衛は、後ろへいう。

うしろにいた加藤光泰は、

「では」

と、山門のわきに立てていた金きん瓢びょうの馬簾ばれんを預つて、列の中

へ持ちこみ、自身もすぐ馬上になつて加わつた。

秀吉はそれを離れた。そして小姓たち数名と、堀尾茂助、浅野弥兵衛、その他三十騎ほどの者に囲まれて、山門から揺ぎ出す兵列を見ていた。

貝を用うべきところであるが、貝の音も松明も戒めてあるものらしく、浅野弥兵衛が、秀吉から金采を受けて、秀吉に代つてそれを一颯、二颯、三颯——打ち振つた。それを合図として七百の兵馬は、先頭から徐々行進し始めた。

列の首端は、方向を一転、道を旋つて、秀吉の前を通つて行く。

——各隊先導の部将には、生駒甚助同三吉の父子、中村孫兵次、山内猪右衛門、木下助左衛門、弟の勘解由、小西弥九郎、一柳市

助など、いわゆる中堅の旗本のみだった。古参老練の顔があまり見えないのは、その多くが秀吉の城地たる長浜、播磨はりま、その他の占領地などに、なお残されているものと思われる。

こうして、その夜半。

秀吉の人数は、あたかも、秀吉も共に、その主隊にあるかのごとく見せて、清洲の城下を離れ、美濃本道をとって、一路、長浜へ立ってしまった。

また、当の秀吉も、その直後、同じくここを去ったが、扈從こじゆうはわずか三、四十騎にすぎなかった。しかも道はまったく別方面をとり、わざと津島を迂回して、まし江、いもらの渡りなど、人も気づかぬ田舎をいそぎ、美濃の長松で一夜を明して、やっと長

浜へ歸つたのであつた。

同夜、いや、もう翌あくる日といつてよい、払ふつぎ 暁ようだつた。

柴田勝家の宿所と、附近の玄蕃げんばもりまさ盛政の宿所などへ、どこから引き揚げて来た兵馬なのか、霧や露に濡れびたつた黧おびしい甲冑ただのなだれが、幾回となく隠れこんで、その後、市人の目を惧おそれるもののごとく、門をとぎしていた。

「ぬかつたのう、玄蕃」

「いや、ぬかりはなかつたつもりですが」

「なかつたということがあるものかよ。どこかに手抜かりがあつたればこそ、せつかくな網の魚を、むぎむぎ取り逃がしたのであ

ろが」

「だからこの玄蕃も、いわぬことではなかつたでしょう。討つなら討つと、初めから堂々と鼓こを鳴らして、彼奴きやつの宿所へ襲よせかけるならば、今頃はもう二人のあいだに、秀吉の首しゆきゆう級きゆうを置いて見ていられたものを。……それをば、叔父上が、やたらに、密ひそかに密かにとばかり仰せられ、この玄蕃の策をお用いなさらなかつたゆえ、こんな無駄骨に終つたのでござる」

「若い若い。そちは下策を取つていう。わしは計はかりの上策を思うのじゃ。——最上の策は、秀吉の登城を待つて、一室に監禁し、罪状を云いかぶせて、詰腹を切らせる。……これに如しく良計はない。ところが、夜に入つて、細さいさく作さく（密偵）どもの告ぐるを聞けば、

秀吉は急に宿を引き払って、帰国する気配あり、夜立ちよだの動き見ゆ——とのことに、これはいかぬと思ひ直し、万一、彼奴が夜のうちに清洲を離るるがごとき場合あれば、むしろ天の与え、無斷当地を離脱なさば、その罪を鳴らすにも名分の立つことと、急きゆう遽きよ、そちに伏兵の策をさずけて、途中において、彼奴を撃てといいつけたのじゃ」

「それがそもそも、叔父上の手落ちでござる」
「なんで、わしの」

「あの猿めが、こちらの思うつぼにはいって、御祝事の今日、登城するだろうなどとお考えになつていたのが、不覺のひとつ。二つには、夜に入つて、それがしに、兵を伏せて途中で撃てとおさ

しずなされたはよいが、他の者にも、手勢をさずけて、本道以外の抜け道にも充分兵を配しておくべき当然な御用意が欠けていたのではございませぬか」

「たわけめが。——それくらいなことは、そちの一存でも、抜かるはずはあるまいと信ずればこそ、そち一名に申しつけ、他の将には、玄蕃の指揮によれとのみ、いうておいたのじゃ。……しかるに、本道のみを兵を伏せて、ついに秀吉を逸したことを、まるでわしの手落ちのようにぬかしおる。すこしは、己れの不つつかも省かえりみたがい」

「……ではもうこのたびは、玄蕃の失敗として謝りますが、叔父上にも、以後は余りに、智謀を弄ろうす癖くせはお止めください。智を弄

す者は、智おぼに溺れる。またせつかくの機を逸しまする」

「なんじやと。わしが智謀もてあそを弄ぶというのか」

「いつものお癖です」

「ば、ばかな」

「いや、世間でも、よく申しおりますぞ。——柴田どののお癖が

出たといえば、又候またぞろ、底に底があることのようにみな用心して」

「……………」

白髪しらがま交じりの太い眉を重たげによせて、勝家はおし黙ってしま

った。

日頃は、主従以上、親子以上、仲睦なかむつまじい叔父甥おいであつたが、

狎なるるに過ぎて、ひとつ蹉跌さてつが生じると、ふたりの仲には、威令いれい

や尊敬を持とうとしても持てなかつた。

何しても、この朝の勝家のしゅうめん澁面しといったらない。

“複雑なる不機嫌”さである。生理的には、ゆうべは一いっすい睡もして
ていないし——それもある。

玄蕃にいいふくめて、途中に兵を埋まい伏ふくし、夜逃げの秀吉を急襲して、一挙に後の禍わざわいを絶ち、ここ腹いッぱい溜うっっている鬱うを晴らせるものと、夜明け方まで、

(今か。今に)

と、首を長くしていた吉報が、やがて戻つて来た玄蕃自身の口から、

(通つたのは、羽柴の家中だけで、秀吉のすがたはその中に見え

申さぬ。——秀吉も居ぬ行列へ、不意撃ちを仕掛けたところで、
 獲るものはなく、却つて、後日の不利と存じましたゆえ、むなし
 く引き揚げ申してござる)

とあつたので、勝家は夜来の氣づかれと共に、まったく心を腐
 らせてしまったものであつた。

その揚句は、玄蕃にまで、「いつもの癖」だとか「智を構えて
 みずから智にやぶる者——」だなどと、あげつらわれたのであ
 るから、今朝の彼が怏々おうおうとしてすぐれないのは無理もなかつた。
 しかし、そうしてはいられない。きようは三法師の承祖披露しょうそひろう
 の祝日である。朝飯後、一睡一浴して、勝家はまた暑くるしい大
 紋烏帽子いもんえぼしを身にまとつていた。そして、たてがみ飾りをした馬に

乗つて城へ向つていた。

ひとたびは気を腐らせても、腐つたままであるような柴田修理勝家ではない。きようは曇天となつて、暑さも一倍むし暑かつたが、途上の彼のすがたには、さすがに、清洲城下の何物よりも高いような威風があつたし、その面にはおもて胆汗たんじゆうしつ質特有なあぶらが光つていた。

ゆうべは——

かぶとしの甲の忍び緒おをしめ、鉄槍鉄砲を草むらに匍はわせて、秀吉の生命を道にうかがつた猛者もさどもも、きようは烏帽子して、素襖すおう、小素こす襖おう、天正てんしやう袴かみしもなどを美しく着つらね、弓は袋に、槍薙なぎなた刀もさや鞘さやに、何くわぬ行装ぎやうそうのもとにえんえん蜿蜒と城へさしてゆく。

柴田家ばかりでなく、丹羽、滝川、その他、諸家の列も、前後して登城していたことはいうまでもない。

きのうまで見えて、きょうのみ見えなかったのは、羽柴筑前の列だけであつた。

「宿老。お待ちしていた。——筑州の代人として、老臣の大島雲八が、早朝より参つて。——筑前守こと、病気のため、本日は不参とやらで、おわびの旨を三法師君へお届けに及び……柴田どのにもお目通りしたいとかいうて、最前から待つておるが」

滝川一益は、城中に勝家のすがたを迎えると、すぐそう告げた。勝家は苦にがりきつて領うなずいた。

念入りにしらばくれている秀吉よと、肚はらには怒りながら、彼も

また、とぼけた顔して、使いの大島雲八を引見いんけんした。

そして、秀吉の病気とは何病であるか——とか、急に帰国するならば、なぜ昨夜のうちにわが宿所へでも沙汰してくれぬか。さすれば自分もすぐ出向いて病状を見舞い、諸事打ちあわせも遂げたのに。……などと意地の悪い質問のみ発したが、老来、至つて耳の遠い大島雲八には、その半分もよく聞きとれないらしく、

「はい。はい。……さればで。いかにもな」

何をいつても、馬耳東風ばじとうふうである。そして独り合点を繰り返しているばかりの相手だった。

まるでのれんに腕押しである、とは思いながら、勝家は、表向き重大な使者に、こういうもうろく耄碌武者を向けて来た秀吉の底意に

たいして、何とも業腹ごうはらでならなかった。

いくらなじつても、なじりがいのない相手ではあつたが、その業腹よふんの余憤よふんをもつて、立ちがけにこう訊ねた。

「使者。——いったいおぬしは、幾歳いくつになるのか」

「さればで。……はい」

「年をきいておるのじゃよ。——おぬしの年齢を」

「御意で」

「なに」

「はははは」

まるで揶揄やゆされているような気がする。憤むツとした顔を雲八の耳のそばへつき出して、勝家は破れ鐘わがねのような声でいった。

「汝われは、今年、何歳に相成るか。——そのことを訊ねておるのじや」

すると雲八は、大きく何度もうなずいて、しかも暢のんびり答えた。

「ははあ。それがしの年をおたずね給わつてか。世に聞ゆるほどの武功もなく、お恥かしいことでおぎるが、当年七十六になり申す」

勝家は啞然あぜんとした。

きよようの多忙を目の前に、しかも一日も晏あんじよ如たるは得ない刻こつか下にあつて、こういう老人をつかまえて癩かんを尖とがらせていたことの何たる愚おろそや——と自嘲を覚えるとともに、秀吉にたいする敵意

は、俱ともに天を戴かざる者とまで誓われていた。

「立ち帰れ。もうよい」

顎あごを振つて、促うながしたが、雲八は腰へもちでもつけたように落着きすまして、

「何ぞ。御返書でもあらば」

と、勝家の顔をおつとり眺めこんでいた。

「宿老はどこにおいでか。北ノ庄殿には、どこにおわすか」

そのとき誰やら、自分をさがしている声がしたので、勝家は、それを機しおに、

「ない、ないつ。返辞など、何もなし。いずれ会うところで会おうと、筑州に伝えておけ」

云いすてて、廊下も狭しと歩いてゆく彼の太紋姿は、本丸の方へ去つてしまつた。

大島雲八も廊下へ出ていた。老いの腰に片手をあてて勝家の影へ振り向いているのである。やがて独りげたげた笑いながら、これはお表の方へ歩いて行つた。

その日、三法師の祝事は終つた。

さらに、きのうに勝る盛宴がそのあとで催された。新君たいりゆ戴

立うの披露というので、席は城中の広間三カ所でひらかれ、人はきのうに数倍していた。座間、もっぱら話題にのぼつたのは、羽柴筑前守こそ怪けしからぬということだつた。仮けびよう病をかまへこの大事な日に欠席するなど、言語道断、彼に真底からの忠なく信も

なきことは、はやくも今日に見えたり——という者などあつた。

勝家はみずからなぐさめた。

(秀吉が帰国したことは、考えようでは、却つて、この勝家に有利であつた)——と。

この紛々ふんぶんたる秀吉非難が、滝川や佐久間などの徒の作為さくゐから生じたものであることは、充分、承知していたが、勝家はなお、この空気をもつて、爾後じごの形勢を卜ぼくす上に、自己に有利なものと、強しいてひそかにほくそ笑むの小快感をむさぼっていた。

会議、月の忌き、祝日と、多事な日がつづいたあと、清洲は、毎日の大雨だった。

諸侯のうちでも、細川、蒲生、池田などは、祝日のすぐ翌日、帰国の途についたが、爾余の諸侯は、木曾川増水のため、足どめにあい、

(きようは？ 明日は？)

と、霽はれを待つて、なお無む為いな日を宿所に過ごしているほかなかつた。

が、この無為は、柴田勝家にとっては、あながち無意義でもなかつたらしい。

彼と神戸かんべ信孝との間には人目立つほど日々往ゆき来きが交まわされていた。

といつても、こう二人の頻ひん繁ばんな会合が、直ちに、政治的な意

味をふくむものとは云い切れない。——なぜならば、今は勝家の愛妻として、世にかくれないお市いちの方かたは、いうまでもなく、故信長の妹であり、信孝には、叔母にあたるひとである。

しかも。——近年のことにはなるが——そのお市の方を説き、信長にも乞い、彼女を勝家の室へ再嫁させることに運動した者も信孝であつた。こうして信孝と勝家とは、その頃からすでに単なる姻戚いんせき以上の関係にあり、いわば切つても切れぬ仲だったのである。

で、そう二者の往来が、二者のあいだに止まっているなら、世人も何らこれを疑う理由もあるまいが、ふたりの会合ごとに、必ずそこには滝川一益も加わっていることが記憶されるについて、

(また何のお顔寄せか)

と、意味ありげにそれを見、

(秀吉退治の相談が、ぼつぼつ進んでいるものとみえる)

などと早くも、不穏なうわさと、その実現が、この夏中にもあるようにいわれ出していた。

折も折、その月の十日に、滝川一益は、宿所の待月軒たいげつけんに釜をかけて、朝茶の会の招きを諸侯へ出した。

趣旨には。

頃来けいらいの長雨も霽はれ、各にも近く御帰国と思わるるが、兵家の常、またの再会はいつとも測はかり難い。先君をお偲しのびいたしながら、朝露のまに、粗茶一ぶくさしあげたいと思う。長い御滞在で

帰途もおいそぎの折ではあろうが、御来駕を待ち申しておる。

——というのであつて、至極、あたりまえな催しに過ぎなかつたが、

(さては、密々の軍議でも?)

と、その朝の出入りには、特に清洲の人の目がそばだてられた風だつた。

朝茶には、蜂屋^{はちや}、筒井、金森、河尻などが参会した。信孝、勝家のふたりは当然お正客であつたらう。——しかしこの催しが、趣旨どおりな茶事であつたか、密事であつたかは、当日の主客以外、窺^{うかが}い知るすべもない。

同日以後、これらの諸将も、やがてみな帰国した。そして柴田

勝家は、さいごの十四日夜、越前への帰国を発表し、十五日朝、清洲を立つたが、木曾川を渡つて、美濃みのに入るやいな、自己の予感と、途上の風説との一致に、愕然がくぜんたる脅威きょういにさらされた。
 (垂井たるいから不破ふわの山間の通路を扼やくして、秀吉の精兵が長浜を出て、昨夜以来、勝家ござんなれと、待ちかまえている)

と、もつぱらな噂なのだった。宿駅でも聞かしくし、旅人もいうし、物見もそう告げて来るのである。

おおもものみ
大物見

さきに、秀吉の帰国の途を襲おうと謀はかつた勝家が、きのうと立

場を逆にして、今日は自身の帰国に、薄氷でも踏むような途を、

きようきよう 悔々 と歩まねばならない羽目にいたつていた。

彼が、越前へもどるには、どうしても江州ごうしゆう長浜ながはまを通らな

ければならない。長浜には、先に帰つた秀吉がいる。秀吉がだまつて彼を通すか否か？——これは大きな疑問としなければなるまい。

(滝川一益の領地を通過し、伊勢から鈴鹿すずかを越え、江州の西を廻つて御帰国なされては……)

という意見は、清洲を立つ前からあつたが、それでは、世にたいして、みずから、秀吉を恐れるものと触れあるくようなものになろう。勝家としては忍び得ない恥だ。玄蕃盛政げんばもりまさとてもよ

り同意するはずもない。

しかし事実の問題として、美濃路に入ると、面々は一步一步、「彼方の山に、伏兵の気配はないか。彼処かしこの煙は、敵勢ではないか」

と、前後に心を疲らせたり、情報の確かめられるまで行軍を駐とどめたり、隊伍を戦闘形態に改めたりなどして、寸時も、万一の変を思ふことなくしては進めなかつたのである。

ところへ。

秀吉の麾下きからしき一軍が、不破附近に見えるといい、見たといふ噂なので、勝家以下、柴田幕下の輩が、馬上、身の毛をよだてて、

「来たか」

「——居るか」

と、ゆくてに待つ敵の量や策を想像して、忽ち、墨のごとき殺氣にまみれたのはむりもない。

にわかには、揖斐川いびがわてまえの牛牧うしまき附近に兵馬を駐とどめた。そして勝家と幕僚たちは、村社のある林の中で、

——当るか。退ひくか。

を急に軍議した。

ひとまず退いて、あくまで清洲城と三法師よを擁ようし、秀吉の非を鳴らして、諸侯を糾きゆう合ごうしてから堂々とそれに当るのも一つの対策。

また、ここにこれだけの軍勢はあり、何のがいしゅう鎧袖一触と、一
 気に蹴ちらして押し通るのも武門の快。

結果を考えると、前者は攻略戦に多く扱よることとなり、後者を
 とれば、即戦即決だ。——或いは一挙に、秀吉を挫くじき得るかもし
 れぬ代りに、味方にとつても、万一の敗れなしとはいえない。

なぜならば、関ヶ原以北の嶮けんあい隘な地形は、埋まいふく伏して待つも
 のにとつては甚だ都合がいい。加うるに、いったん長浜へ引き揚
 げた秀吉の手勢は、きのうの如き寡勢かぜいでないことはもちろん、江
 南から不破や養老地方には、小城、土豪、散在のさむらいどもま
 で、羽柴家と気脈のある者が多く、柴田家に縁故の者といつては
 稀れである。

「どう思案するも、ここで秀吉に当るのは、策を得たものではない。彼奴が、一日早く帰国したのは、この有利に立つためであったのだ。その注文に乗って戦う不利を敢えて冒すべきではない」勝家や老臣の考えはこれに傾いた。それにたいして、玄蕃盛政は、あざ笑った。

「それ程、秀吉が恐いかと、世の笑いぐさになるのもお覚悟ならば、左様になさるがよろしかろう」
いつの軍議の場合でも、退くという意見は弱い。進むという意見は強い。結果の如何をべつにして、その場の氣勢において、一方は消極に見え、一方は積極に見える。

殊に、玄蕃の意見は、幕僚を左右する力があつた。彼の比類な

き武勇、一族中の地位、それに勝家の寵ちようというようなものも言外に作用する。

「一いっし矢も交まじえず、敵を見て退くなどということは、柴田家のお名折れでしよう」

「まだ、清洲から立たぬうちなら、ともかくのこと」

「玄蕃どののいわるる通り、ここまで来て、引つ返したと聞えては、末代、世上のわらいぐさだ」

「一戦の上で、退くまでも」

「なんの、猿の手下どもが」

若い武者輩はらは、口をそろえ、玄蕃のことばのあとから玄蕃を支持した。

ひとり黙って、口を発しなかつたのは、毛受勝助めんじゆしやうすけ家照けあきぐらいなものだった。

「勝助は、どう思う」

めずらしく勝家が彼に意見を求めた。——日頃、玄蕃のようではなく、何となく主君から疎うとまれていることを知っている勝助は、常に口数を慎んでいるふうであつたが、このとき、

「されば、玄蕃どのの御意見、至極と思われます」
と、神妙に答えた。

血気はみな、戦意に燃えている中で、若いくせに、水のように冷ひややかでいる勝助の容ようす子は、勇に乏しく、ただこの場合、ぜひなくそう答えたように見えた。

「勝助までが、左様にいふなれば、玄蕃の意にしたごうて、このまま、押し進むといたそう。——が川を打ち越えたら、直ちに、大物見を出し、うかつに、道を急ぐな。足軽多くを先に立て、槍隊をすぐ続かせ、鉄砲組は、後陣ごじんの先へ置け。——伏兵の起る際は、得て、鉄砲は近すぎて、咄嗟の用にはたたぬものよ。——敵ありと、大物見の合図あらば、すぐ押太鼓を鳴らし、寸すんごう毫乱れをみせるな。組頭どもは、勝家が磨きの手もとに眼をあつめよ」

方針はきまつた。

人数は、揖いびがわ斐川を渡り出した。

何事もない。

赤坂方面へとなお進む。

敵影まだ見ず——である。

大物見（斥候隊）は、ずっと離れて、垂井たるいの宿しゆく附近まで出ていた。この辺にも何の異状も認められない。

旅人が来た。

怪しいと見、すぐ物見の一兵が駈けて、つかまえて来た。物見頭おとが脅して訊ねた。旅人は、何でもしやべった。脅したのが張り合い抜けするくらいである。

「羽柴様の御人数を途中で見たかと仰っしゃいますので。……へい、たしかにお見かけいたしました。今朝早く、不破の辺で。——それから、自分は遅れて、たった今、垂井を通つて来ましたが、垂井の宿は、先に行った羽柴様の人馬でいッぱいございました」

「人数は、どのくらい？」

「わかりませんが、何百という御同勢で」

「何百？」

物見は、顔を見合させた。その男を突つ放して、すぐこれを後方の勝家に伝令した。

案外な——と思われた。敵は余りにも小兵力だからである。為に、なおさら危惧きぐされたが、騎虎きこの勢いだ。押せと、行軍をつづけて行つた。——時に、彼方から羽柴家の使番がただ一騎でこれへ来るといふ報らせがあつた。

やがて近づくを見れば、その一騎は、甲かちちゆう胃いの武者ではなかつた。紗しやの摺すり箔はくの小袖、藤色の天てん正しょう袴かみしも、手綱よそおまで装いを

こらし、目を奪うような姿の若者であつた。

「御案内をいただきたい。それがしは羽柴はしばひでかつ秀勝様の近侍伊木半七郎です。——お使いに参りました。北ノ庄殿の御前まで」

途上、はたと出会つた大物見の武者たちへ、駒の上から会釈して、半七郎はもう駈け抜けてゆく。

大物見は、あつ氣にとられた。物見頭ひとり、何か狼狽した声をかけながら、半七郎の駒の後を転ぶように追いかけた。

柴田勝家と幕僚の一群は、

「何者か」

と、猜疑さいぎの眸めをあつめて自己の陣列にこの若者を迎えた。

眼前に、一戦は必至と、われとわが殺氣たかに昂たかぶり立っていたと

ころだけに、駒を降りて楚々そそ、慇懃いんぎんな礼をしつつ、静かに進んで来た伊木半七郎の優美な身なりが、あたりの鉄槍や火縄のにおいに比して、妖あやしいもののようにまで眼をひいた。

「丹波殿の近侍というはまことに解せぬが。——ともあれ、連れて来い、会つてみよう」

勝家は路傍の雑草をふみこえて樹蔭の下へ寄つた。そこへ床しょう几ぎを置かせ、物々しい麾下きかの——いや彼自身の硬ばつた緊張をも一先ひとまず潜ひそめて——

「何事のお使いかの」

と、さあらぬ容子を使者に示し、その使者へも、まずと、床几を与えた。

「この暑中、遙かまでの御帰国、おつかれでございましょう」

半七郎の言は、まるで平時の挨拶であった。そして、紅くれないひもの紐で、胸に懸けていた文ふぼこ笥はすをとり外し、

「筑前守からも、よろしくとお申し伝えでございます。なお、詳しくは、御書中に」

と、勝家へそれを手渡した。

勝家は疑つて、なお書面はすぐ披ひらきもせず、まじまじと半七郎を見てたずねた。

「お身は、丹波どどの近侍と申すが」

「はい」

「丹波どどのには御健固かの」

「おすこやかにいらせられまする」

「御成人なされたらうな」

「はや、十五歳にお成り遊ばされます」

「ほ。もうそうなられるか。——早いものよな。久しゅうお目にかからぬで」

「今日は、お父君のおいつけを奉じ、垂井の駅までお迎えに参られておられまする。後刻、お宿において悠々ゆるゆるお話し下されませ」

「な、なに……？」

勝家は、吃どもつた。

床几の一脚が、小石を噛み外して、彼の重い体と一しよに、心

までを、がたと驚かしたのであった。

いうまでもなく、羽柴丹波守秀勝は、信長の子の末のほうのいちなん男だったが、幼いうちに、秀吉が乞うて、養子としていた者である。

「迎えにとは、誰を？ ……。誰をな？」

勝家は訊き直した。

「もとより、あなた様を」

半七郎は扇面を顔にかざして笑った。相手のまぶたの瞼や唇が余りに複雑な痙攣けいれんをしてやまないの、微笑をこころを怵えきれなくなったものとみえる。

「わしをな？ ……この勝家を迎えにとな」

勝家は唸うめきつづけていた。

「まず、御書面を。——御一見くださいませ」

半七郎は、促うながした。

茫然たる余り、勝家はそれをすら、手にしたまま忘れていた。

「いや、そうか。……ウム、ウム」

何か、わけも分らぬ領うなずきをくり返した。勝家のひとみは、文字を辿たどり出すと、なおさら心理の変化を、露骨にまで、顔じゆうに湛たえ出した。

書面は、秀勝からではない。まぎれなき秀吉の筆だ。そして、率直に、こういつている。

——江北から越前への道すじは、度々、お通りの地で、御

不案内はなからうと存ぜられるが、このたびのみは、養子の秀勝を、御案内にさしむけた。

とるに足らない世間のうわさであるが、わが長浜が、尊公の御帰国の足もとを取るに絶好な要地にあるため、世上とかくの臆測おくそくが撒かれておるらしい。そういう卑劣ひれつな風説を打ち消すために、養子秀勝を、お迎えに上げたが、これを取つて、質子ちしと召され、安心して、御通過をねがいたい。

一夕、長浜で酒茶でもあげたいが、あれ以来、筑前事なお病中にござれば、御道中のおつつがなきのみを、蔭ながら祈り申しておる。

使者のことばといい、またこの書面といい、勝家は自分の猜疑さいぎ

や小心をかえりみずにいられなかった。何か、あんどりと、秀吉の腹のなかへ呑まれたようなこちもする。——が、ほつとした。正直、ほつとした思いである。彼は以前から策略家と観^みられて、何かやるとすぐ「また、柴田どののお癖が出た」といわれるほど陰謀に富むかの如く定評されているが、今、こんなときの感情をさりげなくつつむことすらないほど事實は正直者であった。——

—こういう性情は、死んだ信長がよく見ぬいていて、その勇も、その謀^{はかりごと}も、その正直さも、みな勝家の特徴として巧みに使いこなして、北陸探題の重任をも、多くの将士をも、また宏大な領土をも授けて、もつて、充分な信頼をもちかけていたものなのである。——

—最もよく己れを知ってくれていたその主君も今はなしと思う彼

の心事には、もはや本当に信をつなぎ得る者はたれもないような
気持でもあつた。

ところが、今ふと、秀吉の書面にふれて、彼は、この日までの、
秀吉に抱いていた感情を、一瞬、まったく覆くつがえされた。すべては自
分の邪視じゃしと、小心によるものだったと、正直に反省した。そして、
(故君のないこの後は筑前守こそ、信じあつてゆける男だ)

と、偽りなく考え直した。

この考えは、その夜、垂井の駅で、親しく秀勝に会つて、楽し
く語り、また翌日、秀勝とともに、相あいたずさ携たづえて、不破を越え、
長浜の城下を通るまでも変らなかつた。

——が、その長浜で、自己の重臣たちを添えて、秀吉の城門ま

で、秀勝を送り返してからすぐ後になると、ふたたびぐらつき出していた。

というのは、秀吉はもうとく長浜にはいないことが分つたからである。秀吉はあれ以来、京都へ上つて、中央の枢機すうきで大いにごいっている。また、山城の宝たから寺でらの城をも大改築にかかつているなど、勝家の耳には毒のような取り沙汰が、頻ひん々びん、聞えて来たからであつた。

(かくては、またも秀吉にしてやられん)

と、彼は忽ち元の焦しょう躁そうに返つて、さらに帰路を急いでいた。

大五だいごと書かけ

七月の下旬。

秀吉はかねての約束を履^ふんで、長浜の城地を、柴田側へ明け渡した。

柴田側でも、その際、秀吉から付せられた条件を履^{りこう}行して、秀吉の希望による勝家の養子——柴田勝豊をそれへ入れることにした。

勝豊は、養父の命によつて、越前坂井の城から、長浜へ移つた。
なぜ秀吉が、

(勝豊を入れるならば、長浜を譲つてもよい)

と、清洲会議のときに言明したかを、愚かにも勝家は、まだ気

づかずにいたのである。

いや、勝家ばかりでなく、その周囲も、世間一般も、何らこれを異として、ふかく秀吉の心事を窺^{うかが}つてみる者はなかった。

そのくせ、次の事實は、およそ柴田家の一族で、心ある者どもは、みな憂いていることだった。

(御養父と御養子とのお仲が、あのようにお冷たくては、柴田家の末も案じられる)

勝家には、もうひとり、ことし十六になる養子があつた。

柴田権六勝敏だった。

情愛にも、日常の感情にも、とかく偏^{へん}しやすい性格の勝家は、

(勝豊は因^{いんじゆん}循^{じゆん}で、はきはきせぬやつじゃ。子のような気心が

せぬ。それにひきかえ勝敏は、邪気もなく、飽くまでわしを父としてよう馴なつきおる）

これを、口にもいうのである。

けれどなお、その気に入りの勝敏にも増してもっと偏愛へんあいしていたのは、甥おいの玄蕃盛政げんぱだった。

玄蕃を愛することは、甥とか子とかいうものを越えて、

「甥めは、わが家の至宝じやて——」

と、その凡情ぼんに溺るるような傾きさえあつた。

従つて、玄蕃につながる弟の久右衛門安政や三左衛門勝政などまで、よく目をかけて、まだみな二十五、六の若さであるのに、各へ要地の一城一城を持たせていた。

これらのお覚えめでたいしようあい鍾愛の親臣中にあつて、ひとり養子の勝豊のみは、養父からも忌いまれていたし、佐久間兄弟からも冷ひややかに視みられていた。

或る年の正月のごとき、親臣の輩が揃つて勝家の前に年頭の祝いをのべに出た際、勝家から最初の盃がさされたので、勝豊は、当然、自分に向けられたものと思ひ、

「お盃、めでたく戴きまする」

と、謹んで膝を進めかけると、勝家は膠にべなく手を逸そらして、

「そちではない。——玄蕃、受けい」

と、彼へ先に与えて故意に、勝豊を後にさし措おいたりなどしたこともある。

このことは、勝豊の不平として、外部へまで洩れていたから、他国の隠密なども耳にしたろうし、従つて、秀吉なども這般しやはんの消息には通じていたにちがいない。

その柴田勝豊へ、長浜を譲り渡すためには、秀吉は事前に、従来ここに住ませておいた家族たちを——老母や寧子ねねなどを主とする家庭の老幼を——他へ移さなければならなかつた。

「冬も暖かいし、内海の魚もある。しばらくは、姫路ひめじがよかろう」と、秀吉のさしずくに、老母や彼の妻は一家をあげて、播磨はりまの持城ちじろへと引き移つた。が、秀吉は行かなかつた。この間、寸暇もなかつたのだ。

山さん州しゅう 宝寺の城を彼はしきりに改築していた。山崎合戦の際

には、光秀が牙城がしやうとしていたところである。ここへ母や妻を入
れなかつたのも、彼には深慮のあることだった。

山崎の宝寺城から、彼は隔日のように京都へ出向いた。帰つて
は、工事を督し、出ては中央に政務を見ていた。

皇城の守護も、市政も、地方の経綸けいりんも、彼はみずから身をも
つて任じていた。

本来、清洲会議での決議では、ここの京都政まつりごと治とど所の閣かくし
臣んは、柴田、丹羽、池田、羽柴の四人がひとしく庶政しよせいを宰さいす
ることになっていて、決して、秀吉のみの中央舞台ではあり得な
いのであるが、柴田は遠く越前にあつて、もっぱら地方的勢力の
結集と、岐阜や伊勢やまた、神戸信孝などと何やらの暗躍あんやくにせ

わしく、丹羽は坂本の近くにあつても、これはすでに秀吉に一切を一任のかたちでいるし、池田勝入は軍議ならともかく、庶政とか、公卿づきあいなどは、

(本来、わが才に非ず)

として、名目はあつても、関^{かか}わらざるを潔^{いさぎよ}しとしているような風であつた。

その点では、秀吉は実に器^{うっわ}であつた。

生れながらの彼の能は、何よりも経綸にあつたのである。今なお世人は彼を目するに武将として観^みていなかつた。

本来、戦^{いくさ}は彼の本技ではない。しかし戦は経綸の車軸であることを知っている。いかなる大理想をかぎそうと、戦にやぶれては、

その大経大綸も一尺として進み出さないことをよく知るところから、彼は、戦に絶対を賭し、ひとたび戦陣を展げば、権化となつて、戦いを戦い切るのであつた。

京都は盆地の小山水に過ぎない地だが、政治的には、全日本を俯瞰するに足る所だし、思想的には、草莽の心の根という根は悉くここにつながっており、ここを根としていない家々なく華々なしである。

なおまだ、一介の奉公人にすぎなかつたが、秀吉は、京都政治所でする日々の時務が実に楽しかつた。忙しければ忙しいほど楽しまれた。その頃、彼が左右の者に、

(この筑前にも、時来つて、ようやくほんとうのお勤めが与えら

れて来たようであるぞ。お汝ことらも心せよや。

と、本ほん懐かいのほどを洩らし、同時に側臣たちへも精勤をうながしたとのことであるが、春潮み盈ちて船出を想うような彼の心事は、まさに、成るも成らぬも、われ世に会せりとして、時代に結ばれたる身のいのちを、今さらのごとく驚歎の眼で省かえりみていたにちがいない。

従つて彼の部下も京都にあつては著しく人品を磨いていた。いやしくも恥あるを行わなかつた。時務は私心なくきびきび決裁した。箇々が小秀吉のごとく明朗だった。わけて皇城の守護には、誇りをもつて任に當つた。

朝廷は、彼の武勲を賞して、右近衛中将たるべしと御沙汰あら

せられた。彼は寸功すんこうを顧みて拝辞した。が、かさねて優渥ゆうあくなお沙汰を賜うて、従五位下、左近衛少将に叙任じょにんせられた。

よいことをする人間と見ると何か悪いけちをつけたがる。正しく働く者にたいし、卑屈な働かぬ者が何のかのとあげつらう。

いつの世にもあることだ。大きく世の変動しているときは特に清濁せいだくの飛沫しぶきもはげしい。

「秀吉は早や専横せんおうを現わしおる。部下どもまでが、権をとつて」
「柴田どのをさし措おき、他の奉公人など、有るか無しじや」

「きようこの頃の羽振を見れば、まるで、信長の相続者は、筑前にて候といわぬばかりな……」

翁きゆうぜん然として、非難は彼を中心に喧ましい。——が、誰かと

いう、火元の弾劾者だんがいしやの知れないのも、こういう場合の常である。聞えても、聞えなくても、秀吉には頓着がない。そういう陰性の声は彼の多忙な心はおろか茶間さかんの耳を傾けさすにも足りなかつた。

何しても忙しいのである。

六月、信長逝き、中旬、山崎に戦い、七月、清洲に会し、下旬、長浜を撤去てつきよし、家族を姫路に移し、八月、宝寺城の工を起し——この間、京都政治所と山崎とのあいだを隔日に往来しつつ、朝あしたに禁闕きんけつに伏し、昼に市井を巡察し、夕べに庶政しよせいを見、答使とうしを発し、賓客を迎え、夜半の燈下に遠国の文書を閲し、払暁、部下の訴えに裁決を与えて、飯を噛み噛み一鞭またどこかへ出かけて

ゆくといふような毎日だった。

行く先も頻りと多い。

公卿の第宅、ていたく会合、視察、そして近來は、
紫野むらさきのへと度々

出向く。

そこでも尨ぼうだい大な工事をやらせていた。寺である。大徳寺の地域のうちに、新たにもう一寺を興おこしているのだった。

「十月の七日までぞ。八日には掃除片づけを終り、九日には式事一切の調えをととのすませ、十日の朝方には何もすることないようになしておけや」

蜂須賀彦右衛門と弟の羽柴秀長にはかたくこういつてある。何の工につけ、期限は二言とないものだった。

やれ、といわれたら、否といえず。はい、と受けたら、爾後じごの云い訳はゆるされない。

秀吉のすがたが見えても、ここの奉行や督とくれい励いしている侍たちは、彼をふり返る者もない。また、何千の木工、土工、左官、石い工しく、あらゆる工匠たくみや人夫たちも、一顧いっこしているすきもなかった。

秀吉は、かんな屑を、足にからませながら、そこここと、木の香のあいだを一巡し、

「できる。できる」

独りつぶやきつつ上機嫌に馬へ移つて立ち帰つてゆく。帰るや否、そこにも訪客や政務や——また、今とりかかっている総見院こんりゆう建けん立りゆうと、故信長の葬儀準備の用向きが山積して待っている有

様だった。

「由己ゆうこ。はようせい」

「はい」

「認めしたたたらすぐ、使いを走らすのじゃ。文言はざつとでよい。は

やく書け」

「はっ」

祐筆ゆうひつの大村由己は、今、秀吉の口述をうけて、一書を代筆し

ていたが、ふと、醍醐だいにという文字をどわすれして、頻りと、筆の穂を噛みつつ思い出そうとしていた。

秀吉は焦じれたそうに急せいでいたが、横せからのぞいて、それと知ると、

「由己っ。何しているか」

と、寝ている者でもよび起すように、

「大五と書けやい」

と、呶鳴りながら、手をもって、虚空こくうへ大きく、大の字と、五

の字を書いて見せた。

大村由己は、驚いた。

醍醐と、大五では、まるで字がちがう。

宛字あてじにしても、ひどすぎる。醍醐を——大五と書いたのでは、

てんで意味をなさないではないか。そう思った。

「……は。恐縮にござります。……がそんな文字ではございませぬ。どわすれいたしましたのは」

「何をまだ。……これ由己。そちが先程から眉をしかめて思い出そうとしているのは、だいごと申す文字であろうが」

「御意で」

「じゃからよ——」

と、秀吉は、ふたたび指をもつて、空間へ手習いするように大きく書いた。

「大五と書け。それで分るではないか」

「……はっ、はい」

ぜひなく、急せかれるまま、由己はそう書いて、代筆の書翰を終り、秀吉はすぐ、それを小姓の手から、使番に持たせて、公卿の邸へ走らせてやってしまったが——由己は何とも後味が悪くて、

(さだめし、あの手紙をうけた人は、無学にも程があると、嗤わらつ
ているだろう)

とか、

(祐筆ともある自分が、いかにも物を知らないようで、末代まで
恥かしい。何とかして、あの手紙をもらい戻して、焼いて捨てた
いものだ)

とか、いつまでも、恋れんれん々々とこだわって、気にかかる顔をして

いた。秀吉はたくさんな客に会い、また以来不沙汰の毛利家へ、
その夕、使いを出したりしていたが、煩はんじ事一掃のあと、やっと由
己をあいてに一いちわん盃の茶をのみながら、

「どうした？ 由己」

と彼のすぐれない顔つきを質ただした。由己も、こういう時ならと、彼の気色を察して、先刻の、無茶な宛字の愚痴を述懐すると、秀吉は、途方もない声して、いつまでもおかしがつた。

「なんじゃあ？ 祐筆の身として、あのような無学な書面が残つては恥になると。……はははは。由己よ、そちでも、自分の筆蹟が、千年も世に残つてゆくと思うておるのか。安心せい、お汝ことあたりの筆では、まず百年も世にあるまい。おまえが生きている間だけでもどうかかな？ ……よくしたものぞ、世は滔とうとう々と、無用の文字は塵ちりに流して余しはせぬよ」

そしてまた、云つた。

「お汝ことらのように、醍醐こととは、こう書いたやら、ああ書いたやら

……などと首をひねったり、筆の穂をなめたりして、この多忙な一日を暮しては、何と、今日のように、日月も世情も、車輪のごとく早く移り変りゆく時勢にあつて人^{じんじゅいちだい}寿一代の限りある身をもち、いったいどれほどな業ができると思ひおるぞ。秀吉には到底、そんな暇はない。——醍醐と書くべきところを、大五といたしても、たいがい、書面をうける方^{かた}の者には、読み心があるゆえ、用向きの見当はつくであろう。……それでいいのだ。今の世はな」

「なるほど。承れば、まことにごもつともで」

「苦しゆうない。あれでいい。——見ろ、もう最前の使いが、どうやら返辞を持って帰つて来たらしいぞ」

こんな日常の心事だった。大村由己はまもなく、故信長の葬儀を紫野に執行のため、織田有縁うえんの近親や諸州の遺臣に、その期日参列の場を報ずる会状の代筆に多忙を極めた。

むらさき野の

何か盛儀が行われれば洛中洛外は賑わい立つ。そして労銀が下層にまでゆき渡るほど、町々の灯や炊煙けむりにも、庶民の謳歌おうかがあらわれてくる。

この秋。紫野において執とり行われるという故信長の葬儀と十七日の大法事は、どれほど貧しい者たちに、事前の布施ふせとなつたか

しれなかつた。

六月以来、本能寺、山崎と打ちつづいた戦乱に、家を失い、職に離れ、なお屋根も壁も持たない人がたくさんいた。

討ち洩らされた明智部下のうちには、領主の代つた丹波へ逃げ帰るよしもなく、すがたを変えて、市の裏や橋の下に、日の目も見ず、流民となつて潜んでゐる者もなお少なからずあつた。

捕え尽すはいとやすいが、秀吉はそこまでの詮議せんぎだてはしなかつた。光秀の首級ひとつに一切の解決を負わせ、時の彼方に投げやつていた。のみならず、戦後の窮民とそれらの者をひつくるめて、これに、更生の仕事を与えた。

そうけんいんこんりゆう
総見院建立と、信長の葬儀とが、それだつた。

「これも、御供養ごくようのひとつ」

と、彼はひとり呟つぶやいた。

信長の攻めるところは草木も枯れる——と恐れられたその人の冥福の営みをいまなそうとするに当って、秀吉はみずから、故主信長と自分との性格には、戦いくさをするにも、経綸を行うにも、必然な相違があつたことを、あらためて思いみずにいられない。

近頃、世人はややもすると、秀吉のやり口を評してこういう。

（筑前は、何事にも、信長の手口を真似、信長の行き方を、師として習まなんで、やがてその相続者となろうとしている）——と。

これは、秀吉の耳に、おかしかった。

信長があるうちは、信長は主君である。どこまでもその性格に

副^そい、指揮に従い、日常も呼^い吸^きをあわせて、大道一貫の歩をそろえていたのは当りまえである。——が、すでにその人亡き今日、何ぞ先人の規^き矩^くにとらわるるの要あろうや——である。秀吉にはおのずから秀吉の資質がある。信長の長所に習^まぶ^なところあつたにしても、それすら彼というべつな器^{うつわ}に入つて新たな経綸として現われてくるものは、まったく信長的な戦法や施政とはその趣^{おもむき}を一変^いしていた。どこまでも秀吉独自のものだった。

(まず窮民に仕事を)

と考えたことも、秀吉が、かつては、その窮民の子であつた思いが、すぐ施策にも出たのであるし、なおまた、みすみす旧明智党の組子と知れている流離の者をも、大法事の工事に使うなどと

いう寛度は、到底、信長には見られなかったところである。

かくて、紫野の工はすすみ、準備もほぼ調い、祐筆大村由己の手から、同日の招き状は、諸国へ発せられていた。

故信長の近親者はもちろん、清洲に会した日の宿老以下諸大名への招きも漏れるところなかった。そのほかおよそ有縁にして主なる公卿くげ、武門、町人、諸職にまで、案内状はゆきとどいた。

が、秀吉は、近親であり宿老であるからとて、特に、鄭重なか、或いは執拗しつような書状などは出さなかった。それらの人々には、来るもよし、来らざるもよし、としている風に見えた。

果たして、風当りは強い。

不参か参列かの返辞もない代りに、柴田勝家からは長文の抗議

が来た。神戸信孝からも嫌味たっぷりな書面が来た。共に、大不満なのである。

秀吉には、要意がある。こんどのことも、柴田や信孝へたいして、決して、唐突に参列の通知を出したわけではない。

事前に、養子の秀勝の名をもって、書面で相談はしてあった。

けれど、勝家も信孝も、

(於次おつきごときが、何の小才な)

と、返辞もせずにしたのである。——於次丸とは、秀勝がまだ信長の第四子としていた頃の幼名である。功労を経た宿老勝家の眼からも、ずっと兄の信孝の眼からも、秀勝はまだ乳くさく見えな。おかしくて——と、それに真面目な返書もせずに打ち捨てて

おいたのもあながち無理でない点もある。

殊にまた。

この九月から十月にかけては、勝家にとっては、多忙な吉事があつた。そのよろこびにも取り紛とまぎれていたのである。

お市御料人いちごりようにんは、かねてからもう甥の信孝の斡旋で、北ノ庄へ再嫁することに内輪はきまつていたが、先夫浅井長政とのあいだに生なじていた三人の子もあるので、身がらはなお織田家のうちにおいていた。

ところがここ四囲の情勢は、勝家と信孝との、両者の緊密を急速に強化するの必要にも迫られ、かつは、世上にたいしても、この際、公然と、

(柴田殿こそ、故信長様も、生前よりゆるされていた妹いとむこ 聶こで
ある)

ことを一度盛大な華かしよく燭くをもつて披露するも急務なりと考えられて来た。その結果、曠はれて輿こしいれ入をとにわかにな、お市御料人の北ノ庄入りの盛儀が運ばれ出していたのである。

おだに小谷の城の落ちた年からすでに十年になるが、お市の方はまだまだほんとうに美しかった。年も三十四、五でしかない。まだ信長の生きていた頃から、世間では、しきりと、その人を、勝家と秀吉とが恋い争っているなどと、あらぬ噂をもしたものだ。が、それほど彼女の容ようしよく色しじんが時人じじんに記憶されていたのは事実である。

けれど、当のお市御料人の胸としては、何としても、気がすすまなかつたはなしであつたにちがいない。それをしも拒こばみきれない環境の中にある彼女でもあつた。兄の信長のない後はなおさら自分の意志は口にもいえなかつた。信孝は初めから勝家のために運動していたが、今では自己の将来の計として叔母を用いる氣になつていた。清洲会同の以後、彼や勝家も、策謀連れんけい携の往来に寧ねいじつ日なく、勝豊を長浜へ入れたり、滝川ともしばしば会つたり、何かと心忙せわしかつたが、信孝はその中で、同族のことばや四囲の事情を措おいて、どしどし事を運んでしまつた。十六になる長女の茶ちやちや々々をかしらに女の子のみ三人を連れたお市御料人は、それこそ、王昭君おうしょうくんの遠きへ行く日にも似るかなしき綾羅錦繡りょうらきんしゅうに

つつまれて、五彩の傘輿さんよは列をなして北越の山をこえ、九月には、すでに北ノ庄の館に入っていたのである。

老木に花が咲いたように、五十三歳の智殿むこは、国中の被官ひかんを連日招いて、披露の祝宴に満悦を見せていた。——こういう折に、羽柴家の一養子たる於次秀勝から、紫野に一寺の建立と、故右府の法事の相談が書面で来たのである。つい怠ったまま打ち過ぎてしまったのもむりはない。

しかし、十月に入り、重ねて今度は、秀吉が名をうたつての正式の招き状に接してみると、

(これは黙視できぬ)

と、彼は事の重大と、瞋怒しんどの焰ほむらにわなないて、烈しい抗議の一

書を、秀吉へぶつけたのであった。

歳月は人間を対象として流れてはいない。

が、人は往々、歳月をあてにして歩む。

あだかもいつも歳月は味方のような片思いを抱いて。

雲無心。歳月の光輪こうりん響輪きょうりんもまた、大虚たいきよの車に過ぎない。

だが、同じ歳月を同じ時代のもとに持つて、これを、どう用いるかは、人々の意志によるのである。ここに生態の分野が生じ、人間社会の隔差ができ、興おこる国、亡ぶ国、——千載までの歴史も、天地間一瞬のまに、決定づけられてゆく。

とかくして、十月だった。

勝家がそれまでに用いた日数と、秀吉が費やして来た日数と、天は同じ運行のもとに施与せよしていた。本能寺の日から指折つても、まる四カ月。——清洲の会合からすれば、まだわずか百日たらずの歲月でしかない。

しかも両者が、その歲月をもつて、自己の上へ具顕ぐげんして来たところの差は、今日——十月半ば——余りにも大きな差を結果していた。

即ち。秀吉が主唱し、また全力を傾けて実行した信長の大法だいはう要ようは、やがて、全日本の耳目をあつめ、

(彼こそ、右府の遺業を継ぐ人と見ゆる)

という印象を与えたばかりでなく、ひいては中央の庶政も、秀

吉を措おいては行われぬような感じを民心の中にふかく植えこんでいた。

この点、勝家がその権翼の拡大を、以後、同列の宿将や、織田家との婚姻による緊密化などに恃たのんでいたのとは、雲泥のちがいであつた。秀吉が対象としていたものは、丹羽長秀でもないし、池田、細川、筒井の輩やからでもない。いわんや織田信雄や女子供の遺族達でもなかつた。実に民衆であつた。彼は百姓の子だ。土と熱を知りぬいている。

その月、十一日から十七日にわたつて行われた紫野大徳寺の法要が、言語に絶す大規模なものであつて、莊嚴そうごん万華ばんげの大光演を極めたのも、単に、彼の大氣や亡主を慕う真情の溢ればかりでは

なく、民衆をも会葬者とみなし、民衆にも親しく見せ、この善奉行を、衆と共にするという彼の**大布施心**によるものであつた。

——十一日より御わぎ始まり、様々に尊き限り尽し給ふ。

十刹の僧ども経を捧げ**諷経**をなせり。十五日には野辺の

送りの御わぎ始まり、**蓮台野**には火屋れいがん堂など**厳め**

しく作り、竹垣をゆへり。大徳寺より道の警固きびしく、武

士どもかためたり、弟美濃守秀長奉行をなせり、**棺** **槨**の

よそほひ**金繡**をかざり、玉の**瑤珞**をかがやかせり。**轅**の

さきは、池田古新（**輝政**）あとをば次丸（**羽柴秀勝**）これを

昇く。

「**豊鑑**」の筆者はその日の模様をこう記している。

「これとうたいじき惟任退治記」にも、

羽柴小一郎、警固ノ大将トシテ、大徳寺ヨリ千五百軒ノ間、侍三万バカリ、道ノ左右ヲ護リ、弓箠エビラ、槍鉄砲ヲ立テ、葬礼ノ場ニハ秀吉分国ノ徒党ハ云フニ及バズ、諸侍、悉ク馳セ集リ、見物ノ輩、貴賤ウンカ雲霞ノ如シ——

と、叙しじよ、輿こしながえの轅は輝政と秀勝。信長の位牌は、秀吉自身が、それを持ったことを明らかにしている。

正親町おおぎまち天皇には、この機会に、臣信長へ、従一位太政大臣を、贈位贈官あらせられた。

また、宣命を賜うた。

即ち、おくりな諡して

そうけんいんでんだいそうこくいつぽん
 総見院殿大相国一品、泰嚴大居士

という宣名せんめいのうちには、故信長にたいして、

“惟朝いちようの重臣、中興の良士なり”

との勿体ない詔旨が宣のらせ給うてあつた。これを拝し、泉下の信長は、望外の光栄と身の本分に泣いたであらう。

善不善、凡非凡、人間としての信長はどういわれようと、彼の弓矢は、まさしく九重ここのえの御階みはしに立ち匂い、彼の臣子一片の忠誠は、はしなくもこのありがたい宣のりに浴して、千載せんざい、国土とともにあるものとなつた。

あわせて彼は、父織田信秀の、皇室中心の祖承そしやうをも完まうしたものとえよう。まぎれなく、忠誠と臣道において、織田父子も、

二代をかけた。信長は父逝く日まで、父にひとかたならぬ心こころあ案あんじをにかけていた不孝の子であつたが、今日、その父へも、大孝の子となつたのである。

四十九年ノ夢一場

威イミヨウ名ウイ什イカン カ存亡ヲ説カン

請フ看ヨ火裡カの烏曇鉢ウドンハツ

吹イテ海花ト作ナツテ遍ヘンカイ界ニ香カンバシ

これは笑しょうれい嶺れい和尚の偈げである。

大葬礼の式場は、百二間の火屋靈堂のうちに執とり行われた。五

色の天蓋は目にきらめき、千万の燈明は星に似、沈木のけむりは、幢旛の翻るあいだから流れひろがって、数万人の会者のうえに、むらさきの雲を作していた。

僧侶だけでも、五岳の碩学、洛中洛外の禅律、八宗の沙門、余す者なく集会して、九品の浄土、五百阿羅漢、三千

の仏弟子、目前にあるがごとし——と当時の目撃者はその状況を誌している。

諷經、散華などの式のあと、さらに禅門各大和尚たちの、起龕、念誦、奠湯、奠茶、拾骨、——などこもごもな礼

拝が行われ、さいごに宗訶笑嶺和尚の、偈辞が読まれ、笑嶺が満身から、発した——喝つ——の大声に一瞬、寂とし——また仏

音楽の奏せられるあいだに、蓮華降り、香木薫^{くん}じ、会者は還^{めぐ}り巡りつつ、順次、焼香をささげていた。

が、その会者の中に、ぜひいなくてはならないはずの、織田近親者の半分は来ていない。第一に、三法師も見えなかつた。信孝も列していない。柴田、滝川、その他、彼も見えぬ、誰も見えぬ、
と思ひ出される当然な顔がたくさんに欠けていた。

それらは悉^{ことごと}く、無視と黙殺をもつて、すでに秀吉へむかつて、
抗争の布陣をあきらかにしたものと誰にもすぐ感じられた。

(このままでは治まるまい)

という思ひは、期せずして、大法要の十七日がすんだ直後の人心に残されていた。

近畿きんぎの諸將はあらかた会し、毛利輝元も代参のぼを上せているが、柴田勝家翼下よっかの前田、佐々、金森、徳山の諸將、また神戸信孝一類の滝川以下、みな云いあわせたように、上洛もしなかつた。とりわけ無気味なのは、徳川家康の存在であつた。いや彼の意中である。本能寺以来、まったく特殊な位置に拠よつて、この時流奔々たる外にあつた彼の意志ばかりは、白眼、今日をどう観ているのか、誰にも皆目、推し測る材料がなかつた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年7月11日第1刷発行

2009（平成21）年2月2日第20刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第八分冊

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>